

第 章 歴史的・地理的環境

第1節 遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部に位置する岡山大学鹿田地区（岡山市鹿田町2丁目5番1号）のほぼ全域にわたって広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。岡山県中部を流れる旭川が形成した岡山平野のほぼ南端部に当たる沖積地上に位置している。現在の旭川は本遺跡の東方約1km弱を南流し、岡山市江並で児島湾に流入しているが、かつては岡山市街地の北東から南西にかけて幾筋かの河道となって網流していたと考えられ、岡山平野の各所では、旭川の旧河道やそれに伴う自然堤防などの微高地が確認されている。鹿田遺跡は、旭川によって形成された沖積平野の南辺部、河口近くの三角州帶上に立地している。また、現在、鹿田遺跡は海岸線から北に遠く隔たっているが、中世以前には、遺跡の南まで瀬戸内海が入りこんでいた。

遺跡周辺における人間の生活は旧石器時代にまでさかのぼり、旭川を挟んで対岸の操山ではナイフ型石器が採集されている⁽¹⁾。また、半田山丘陵南端に位置する朝寝鼻貝塚では、縄文時代前期の貝塚が確認されている⁽²⁾。しかし、平野部における生活痕跡が確認されるのは、縄文時代中期頃より後のことと、津島岡大遺跡⁽³⁾、百間川沢田遺跡⁽⁴⁾などで、縄文時代後期を中心とする生活址や遺物が検出されている。鹿田遺跡でもわずかであるが、縄文時代中期前半～晚期の土器が確認されている。

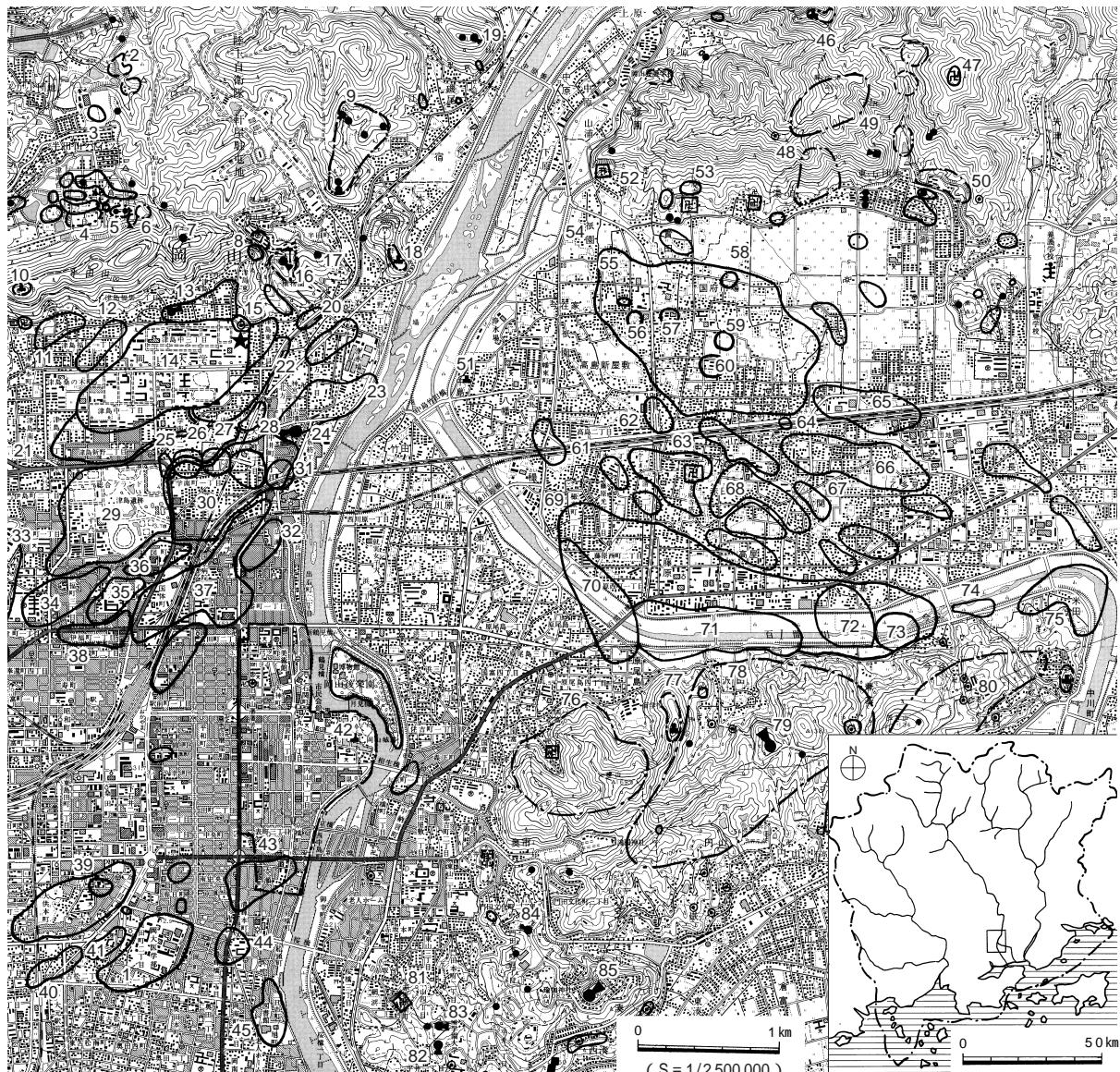
弥生時代に入ると、早期とされる津島江道遺跡⁽⁵⁾、前期の津島遺跡一帯⁽⁶⁾や百間川遺跡群などで水田遺構が確認されており、稻作農耕についての情報が瀬戸内地域にかなり早い段階でもたらされ、弥生時代前期から微高地の縁辺部において一定の広がりを有する水田の経営が行なわれたことが明らかとなっている。弥生中期以降には、平野部各地の微高地上に新たな集落が出現し、展開していく。津島遺跡や津島岡大遺跡に加えて、主な遺跡として前期後半頃に出現する南方遺跡群⁽⁷⁾や天瀬遺跡⁽⁸⁾、中期以降の絵図遺跡⁽⁹⁾や上伊福遺跡⁽¹⁰⁾などをあげることができよう。

鹿田遺跡でも、これまでの調査で弥生時代中期末～古墳時代前期にかけての竪穴式住居や井戸、土坑、土器溜まりなどの遺構が濃密に検出され、安定した生活拠点が形成されていたことが明らかとなっている。また、その基盤となった水田の様相についても遺跡の南半部を中心に明らかになりつつある。さらに土錘、石錘、製塩土器などが出土しており、海岸に近い立地を生かして生活していたことが推定できる。

一方で弥生時代末から古墳時代前期には、岡山平野やその周囲の山塊に弥生墳丘墓や前方後円(方)墳が数多く築かれ、複数の首長系列を読み取ることができる。鹿田遺跡のある旭川河口付近の古墳時代の首長系列としては、遺跡を見下ろす操山山塊の尾根上に位置する操山109号墳、網浜茶臼山古墳という系列を当てることができる⁽¹¹⁾。造墓活動は古墳時代前期後半頃に最盛期を迎える、神宮寺山古墳⁽¹²⁾、金蔵山古墳⁽¹³⁾、湊茶臼山古墳⁽¹⁴⁾という全長150m級の前方後円墳を生み出す。それらを最後に、前方後円墳の建造は急速に衰退するが、古墳時代後期に入ると周囲の山塊に中小の横穴式石室墳が群集して築かれるようになる。

古墳時代における集落遺跡は、かなり広範囲に展開しており、旭川東岸の百間川遺跡群⁽¹⁵⁾で一定の広がりを持って、旭川西岸においても津島遺跡から南方遺跡の一帯でそれぞれ確認されている。ただ、旭川河口付近においてはいまだ不明な部分も多い。鹿田遺跡においては、古墳時代前期まで安定した生活拠点であったと推察される集落が、古墳時代中期以降、その規模を縮小することが明らかとなっており、古墳にみる首長系列の消長と軌を一にする状況をみてとれる。

古代国家完成期の政治状況を反映する国府や寺院については、近年、旭川東岸において発掘調査が進展している。主な遺跡として、備前国府の関連官衙と考えられるハガ遺跡⁽¹⁶⁾、創建期が飛鳥時代にさかのぼり平城宮式瓦



1. 鹿田遺跡（縄文～近世）
 2. 白壁奥遺跡（古墳後期）製鉄
 3. 津高住宅団地内遺跡群（古墳他）
 製鉄遺跡含む
 4. 佐良池古墳群（古墳後期）
 5. 櫛鉢池古墳群（古墳後期）
 6. 奥池古墳群（古墳後期）
 7. ダイミ山古墳（古墳中期？）
 8. 津島東3丁目第1地点（弥生・古墳）
 9. 宿古墳群（古墳前期・後期）
 10. 半田山城（戦国）
 11. 津島福居遺跡（古墳・室町）
 12. お塚（様）古墳（古墳中期）
 13. 津島東遺跡（縄文・室町）
 14. 津島岡大遺跡（縄文中期～近世）
 15. 朝寝鼻貝塚（縄文前～後期）
 16. 一本松古墳（古墳中期）
 17. 不動堂古墳（古墳時代）
 18. 妙見山城跡（戦国）
 19. 片山古墳群（古墳前期）
 20. 釜田遺跡（弥生他）
 21. 津島新野遺跡（弥生）
 22. 津島江道遺跡（縄文～近世）
 23. 北方長田遺跡（弥生～近世）
 24. 神宮寺山古墳（古墳前期）
 25. 北方下沼遺跡（弥生～室町）
 26. 北方横田遺跡（弥生～室町）
 27. 北方中溝遺跡（弥生～室町）
 28. 北方地蔵遺跡（弥生～室町）
 29. 津島遺跡（弥生～近世）
 30. 北方上沼遺跡他（弥生～近世）
 31. 北方藪ノ内遺跡（弥生～近世）
 32. 広瀬遺跡（弥生）
 33. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡
 （弥生～平安）
 34. 上伊福遺跡・伊福定國前遺跡（弥生～室町）
 35. 上伊福遺跡（弥生・古墳）
 36. 絵図遺跡（弥生～平安）
 37. 南方遺跡他（弥生～近世）
 38. 上伊福（立花）遺跡（弥生～室町）
 39. 敷布地
 40. 敷布地
 41. 鹿田（県立岡山病院）遺跡（平安
 ~鎌倉）
 42. 岡山城跡（室町～近世）
 43. 天瀬遺跡（弥生～近世）
 44. 新道遺跡（奈良～近世）
 45. 二日市遺跡（弥生～近世）
 46. 竜ノ口山頂古墳群（古墳後期）
 47. 竜ノ口東山頂廐寺（奈良～室町）
 48. 湯迫古墳群（古墳前期）
 49. 備前車塚古墳（古墳前期）
 50. 稲荷山1号遺跡（鎌倉～室町）
 51. 中島城跡（室町）
 52. 唐人塚古墳（古墳後期）
 53. 賀田廐寺（飛鳥～室町）
 54. 備前國府閑連遺跡
 55. 備前國府跡（奈良～平安）
 56. 備前國府推定地（南国長）遺跡
 （弥生～鎌倉）
 57. 南古市場遺跡（奈良～平安）
 58. 北口遺跡（弥生～室町）
 59. 八才（高島小）遺跡（奈良～室町）
 60. 中井・南三反田遺跡・古墳群（弥
 生～室町）
 61. 原尾島遺跡（弥生～室町）
 62. 赤田西遺跡（弥生～室町）
 63. 幡多廐寺（飛鳥～平安）
 64. 雄町遺跡（縄文晩期～平安）
 65. 雄町遺跡（縄文晩期～平安）
 66. 乙多見遺跡（弥生）
 67. 閑遺跡（弥生）
 68. 赤田東遺跡・閑遺跡（弥生～室町）
 69. 百間川遺跡群（縄文～近世）
 70. 百間川原尾島遺跡（縄文中期未
 ~近世）
 71. 百間川沢田遺跡（縄文中期～近世）
 72. 百間川兼基遺跡（弥生～室町）
 73. 百間川今谷遺跡（弥生～古墳）
 74. 百間川長谷遺跡（平安～室町）
 75. 百間川米田遺跡（平安～室町）
 76. 操山古墳群（古墳後期）
 77. 妙禪寺城跡（戦国）
 78. 操山219号遺跡（旧石器）
 79. 金蔵山古墳（古墳中期）
 80. 操山古墳群（古墳後期）
 81. 網浜廐寺（飛鳥～平安）
 82. 操山109号墳（古墳前期）
 83. 網浜茶臼山古墳（古墳前期）
 84. 操山103号墳（古墳前期）
 85. 清茶臼山古墳（古墳前期）

図1 周辺遺跡分布図

も出土した賞田廃寺¹⁷、総柱建物や「市」が墨書きされた土器が出土した百間川米田遺跡¹⁸などがある。旭川河口付近においても、平城宮式瓦が確認されている網浜廃寺¹⁹などが知られ、旭川西岸の新道遺跡²⁰でも8世紀頃と考えられている火葬遺構やピットが確認されている。平城宮式瓦や導入初期の火葬遺構の存在から、旭川河口を介した人々の交流がうかがえ、後に平安時代における鹿田庄の成立の重要な要因となったと想定できる。

古代から中世にかけて、岡山平野南半においていくつかの荘園が成立したが、具体的な荘園の位置を考古学的に比定するのは未だ難しい。その中で、鹿田遺跡の位置する旭川河口付近の西岸は、建物群、井戸などの遺構の検出から、藤原摂関家殿下渡領であった鹿田庄に比定されている²¹。また、近隣の新道遺跡でも12世紀後半頃の大型井戸から「御庄久延弁」と書かれた木簡が出土しており、鹿田庄の荘園域であったと考えられている²²。旭川河口西岸の二日市遺跡でも、古代末～中世の井戸や柱穴が確認されている²³。その他に、旭川東岸の百間川遺跡群²⁴においても該期の集落遺跡が知られている。

おおよそ室町時代頃を境にして、鹿田遺跡一帯では集落の分布や立地状況に大きな変動が生じたらしく、以後江戸時代に至るまで、集落その他の具体的な様相ははっきりとしない。江戸時代以降、岡山平野南部は大規模な干拓が進められ、海岸線は南へと後退する。そして、岡山城や城下町の建設による開発も急激に進められていった。鹿田遺跡周辺は岡山城下町の南辺に当たり、江戸時代以後は耕地が広がる農村地帯になっていたらしく、畦畔や野壠などの遺構がしばしば検出される。一方で、近隣の新道遺跡は、絵図などによって城下町の南辺に位置していたことがわかる。

その後、1921（大正10）年に、岡山大学医学部および同附属病院の前身である岡山医学専門学校や岡山県立病院が建設された。これに伴って、遺跡地は厚さ0.6～1m内外の造成土に覆われた。近隣も、しだいに都市開発が進行し、現在、遺跡周辺は市街地となっている。

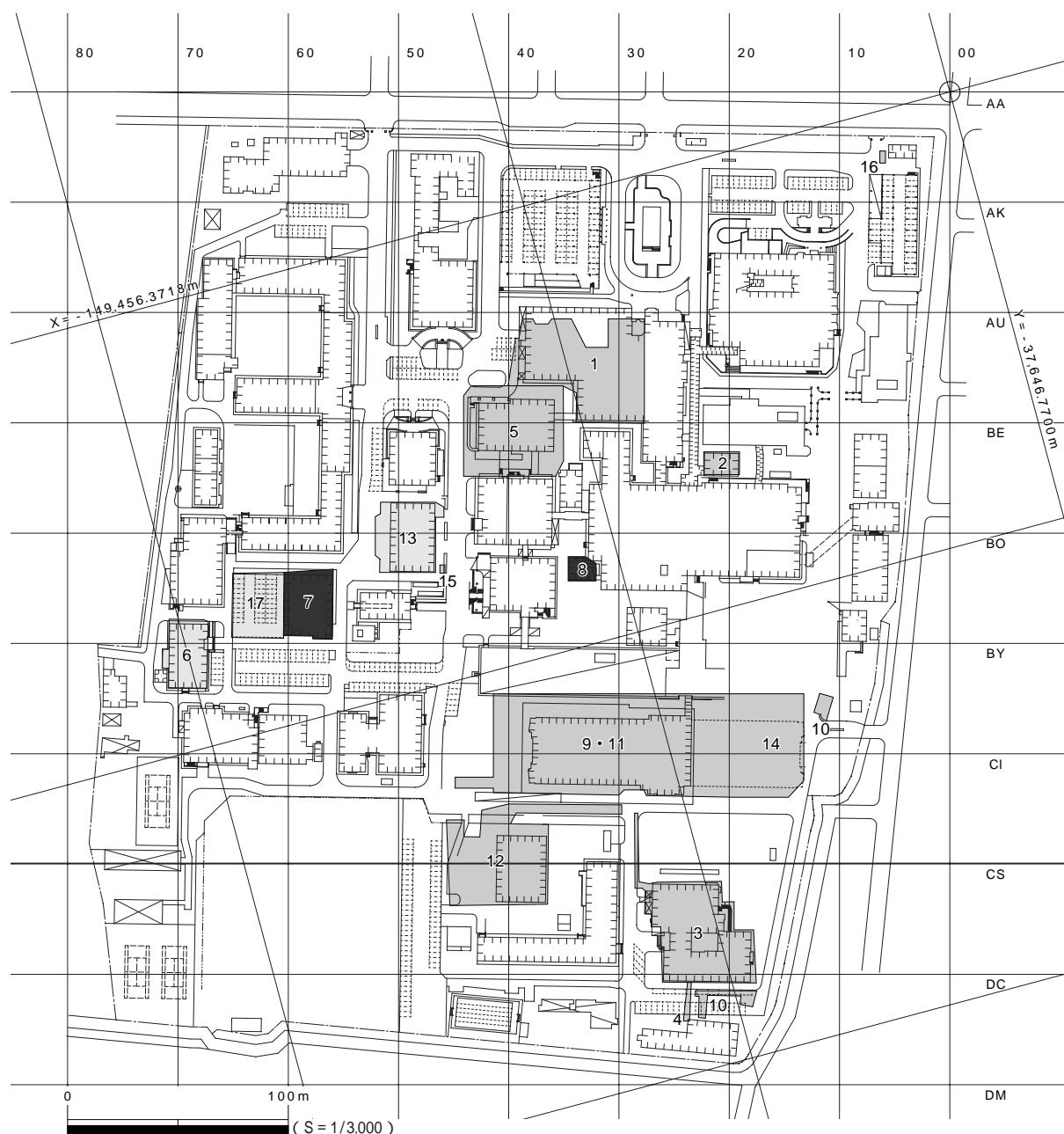
第2節 鹿田遺跡

1. 構内座標の設定

鹿田遺跡が広がる岡山大学鹿田地区構内において、本センターでは、周囲の市街地および構内建物の主軸に合わせた構内座標を設置している²⁵（図2）。この構内座標は、2002年度までは、日本測地系による国土座標第V座標系に基づいたものであり、発掘調査時点においては、南北・東西軸座標値（X = -149,800m、Y = -37,400m）を原点とし、同座標軸から南北軸をN - 15° - Eに振ったものを使用していた。その後、2004年4月1日に改正された測量法の施行に伴い、2003年度以降に刊行する報告書では世界測地系へ変更することとした。その結果、構内座標の原点は、X = -149,456.3718、Y = -37,646.7700mの数値にあたることとなった。

構内には、この座標軸を基準に、一辺5mの正方形の区割りがあり、これまでの鹿田遺跡の調査は、すべてこの区割りに基づいた位置関係の上に記録されている。

この区割りの呼称については、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとの東西ラインをAB、AC、……AZ、BA、BB……、のごとく付番し、また原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとの南北ラインを01、02、03……、と付番していく。これらのラインによって形成される5m四方の区画名は、その東北コーナーで交わる2方向のライン名を組み合わせて、A 00区、AB 01区、AC 02区……、というように呼称する。



- | | | |
|---------------------|---------------------|-----------------------|
| 1 第1次調査：外来診療棟 | 8 第8次調査：RI治療室 | 15 第15次調査：総合教育研究棟【外構】 |
| 2 第2次調査：NMR - CT室 | 9 第9次調査：病棟 | 16 第16次調査：立体駐車場エレベーター |
| 3 第3次調査：医療短期大学部【校舎】 | 10 第10次調査：共同溝関連 | 17 第17次調査：基礎研究棟 |
| 4 第4次調査：医療短期大学部【配管】 | 11 第11次調査：病棟 | |
| 5 第5次調査：管理棟 | 12 第12次調査：エネルギーセンター | 建物名称は調査時の呼称による。 |
| 6 第6次調査：アイソトープセンター | 13 第13次調査：総合教育研究棟 | |
| 7 第7次調査：基礎研究棟 | 14 第14次調査：病棟 | |

AA 00は、日本測地系によるX = -149,800,0000m、Y = -37,400,0000mの交点を原点として設定したものである。
2003年から世界測地系による座標に移行したため、現在の表記となっている。

図2 発掘調査地点と構内座標

2. 遺跡の概要

鹿田遺跡では、2005年度までに、16回にわたる発掘調査が行なわれている。遺跡の範囲は、岡山大学鹿田地区のほぼ全域にわたると推定されている。遺跡南には瀬戸内海が迫り、旭川も幾筋かの河道となって岡山市街地の北東から南西にかけて網流していたと考えられている。遺跡は、旭川によって形成された沖積平野の南辺部、河口近くの三角州帶上に立地しており、いわゆる自然堤防帶に立地する津島遺跡や百間川遺跡などのやや内陸の遺跡とは異なり、臨海性の高い集落遺跡とみることができる。

鹿田遺跡において最も古い遺物は、第1次調査で確認された縄文時代中期末～後期の縄文土器片である²⁶。ただ、その時期に対応する遺構は確認されておらず、該期の人間活動の痕跡は希薄であったようである。

遺跡の中心に当たるとみられる微高地は、岡山大学鹿田地区の中央やや北よりの、附属病院外来診療棟付近と考えられる。この地点において、第1次発掘調査が行なわれ、弥生時代中期末・後期前半～古墳時代初頭、古墳時代後期、奈良時代末～平安時代前半、平安時代後半～鎌倉時代の各時期を主とする遺構・遺物が濃密に確認された²⁷。弥生時代以降、長期にわたって、しばしば居住域の中核になっていたことが判明している。他の調査地点の状況も、この第1次調査地点の時期とおおよそ対応しており、ここでは、それにしたがって遺跡の概要を述べてみたい。

弥生時代中期末・後期前半～古墳時代初頭には、外来診療棟付近の微高地が居住域の中核となっていたと考えられる。その南西に隣接する附属病院管理棟付近では第5次発掘調査によって該期の遺構、遺物が確認されているが、その密度は外来診療棟付近よりは相対的に低く、集落の南西側端部付近と考えられる²⁸。また、この微高地の東南側にあたる中央診療棟北側で行なわれた第2次発掘調査でも、微高地にのる生活域の縁辺に近い状況が明らかとなっている。一方で、外来診療棟・管理棟地点の北～北東側についてみると、構内の北東隅付近を発掘調査した第16次調査地点をはじめとして、低湿で河道が走っていた状況が明らかとなっており、該期の遺構が前面に広がる可能性はさほど高くはない²⁹。

ただ、外来診療棟・管理棟付近を中心とする微高地にのみ、当時の生活域が限定されていたというわけではない。特に古墳時代初頭においては、今回報告する基礎研究棟付近（第7次発掘調査地点）でも微高地が確認されており、竪穴住居、建物、井戸などがセットをなして確認された。該期の居住域と判断できる。この基礎研究棟地点の居住域と外来診療棟付近の居住域の間に位置する、総合研究棟地点（第13、15次発掘調査地点³⁰）では、溝や窪地、そして土器溜りが確認され、「居住域の中間地帯ないしは縁辺部に相当する」³¹と判断されている。また、エネルギーセンター（第12次発掘調査地点³²）や構内南辺の保健学科棟（第3次発掘調査地点³³）でも、該期の遺物や遺構が確認されている。おそらく、当時の人々が新たな居住域を広げ活用していたことを示すものと評価できよう。

そして、生活の基盤となった水田の様相についても、遺跡の南半部にあたる病棟（第9、11、14次発掘調査地点³⁴）やエネルギーセンター（第12次発掘調査地点）などで畦畔や溝が確認され、その状況が次第に明らかとなりつつある。特に病棟地点では、北西から南東方向を主軸とする大畦畔とこれに直行する小畦畔と小溝、そして畦畔の交差地点に土器を集中廃棄した遺構が確認された。

一方で古墳時代後期に入ると、居住域は縮小するようである。これまで住居址が確認されたのは、外来診療棟付近（第1次発掘調査地点）のみであり、エネルギーセンター（第12次発掘調査地点）では、用水路的機能が考えられる溝群が確認されているが、遺構密度はそれほど高くなかった。集落規模の縮小あるいは移動が予想され、その具体的な状況の解明が今後の課題である。

次に奈良時代末～平安時代前半の様相を概観しよう。この時期においても、居住域の中核は外来診療棟・管理棟付近（第1、2、5次発掘調査地点）と考えられ、掘立柱建物群や井戸、土坑、溝などが確認されている。特

に大型井戸を中心に大小の掘立柱建物群が立ち並ぶ状況が推定されており、遺物についても墨書き土器、転用硯、木簡などが出土している。居住域の中核としての性格を付与することは許されよう。その点で古くから比定されている藤原摂関家の殿下渡領たる鹿田庄との関連性が注意される。

鹿田庄の成立時期については不明な点もあるが、『興福寺縁起』によれば、弘仁4(817)年に興福寺南円堂で行なわれた法華会の料米72石を「鹿田地子」で当てたとされている。少なくとも平安時代初期には荘園として機能していたのであろう。外来診療棟付近(第1次発掘調査地点)で確認された、上述の建物群と大型井戸は、およそ8世紀後半から9世紀代と考えられ、鹿田庄成立期の遺構と判断できそうである。庄家の可能性もある。

また、外来診療棟付近(第1次発掘調査地点)から250m程南に位置する、保健学科棟の南辺(第3、4、10次調査地点、2000年度立会調査47地点)³⁴では東西方向に流路を取る河道やそれに架かる橋脚、杭による護岸が確認されている。径30cm程という橋脚の太さや代替の状況から、堅固な基礎構造を持つ橋が、人通りの多い交通の要所に構築されていたと判断でき、鹿田遺跡が水陸交通の要所として機能していたことを端的に示している。

しかし、他の発掘調査地点においては該期の遺構は確認されておらず、当時の生活域がどの程度広がるのかについては、今後具体的に検討していく必要があろう。少なくとも、後の平安時代後半～鎌倉時代と比べれば、居住域は限定されていたようである。

その後、鹿田庄は紆余曲折を経つつも、室町時代まで殿下渡領として機能したようであり、鹿田遺跡で確認される平安時代末～鎌倉時代の遺構は、当時の状況を反映しているといえる。同時期には、外来診療棟・管理棟付近(第1・5次発掘調査地点)、保健学科棟付近(第3次発掘調査地点)、病棟付近(第9、11、14次発掘調査地点)、エネルギーセンター付近(第12次発掘調査地点)、総合研究棟付近(第13、15次発掘調査地点)、アイソトープ総合センター付近(第6次発掘調査地点)³⁵、そして今回報告する基礎研究棟付近(第7次発掘調査地点)と、遺跡の中央～南半部にかけて集落が形成されるようになる。

該期の集落構成は、数棟の建物群と井戸、そして区画溝が一つのパターンとして一般的に存在しており³⁶、今回報告する基礎研究棟付近(第7次発掘調査地点)でも、その状況が確認されている。また、遺跡の西辺部に位置するアイソトープ総合センターの西側(第6次発掘調査地点)では、13～14世紀代に大溝が数度にわたって北北東～南南西方向に掘られた状況が明らかとなっている。医学部附属病院RI治療室付近(第8次発掘調査地点)³⁷においても、東南東～西北西方向に溝が数度にわたって掘削された状況が明らかとなっている。このような溝は、数度にわたる掘削、鹿田地区周辺の地割とも一致する方向などを考え合わせると、鹿田集落の空間構造を規定するような性格のものであったと考えられる。そして、基礎研究棟付近(第7次発掘調査地点)でもL字形に走る大溝が確認されている。一方で、遺跡北側の様相については、未だ本格的な発掘調査が行なわれておらず、今後の課題とせざるを得ないであろう。ただし、遺跡北東部の立体駐車場付近における小規模な発掘調査(第16次発掘調査地点)では、建物や井戸は確認されず耕作地が広がっていた状況が明らかとなっている。

以上のように、平安時代末～鎌倉時代には広い範囲にわたって生活域が拡大していた状況を推測でき、また北側には耕作地が広がっていたようであり、集落の盛行期を迎えていたことがうかがえる。その背景を殿下渡領たる鹿田庄の展開と関連づけることは許されよう。

室町時代以降の状況については不明な部分が多い。ただ、各地点において近世の畦畔や野壠などが認められており、おそらく鹿田集落は衰退し、遅くとも江戸時代から大正年間にかけて遺跡のほとんどの範囲は耕地化されたようである³⁸。現在の岡山市街地南方の干拓と新田開発が本格化し、海岸線が大きく南へ遠ざかる17世紀前半頃(寛永年間)に耕地化の画期があったと想定しておきたい。

今回報告を行なう第7次調査地点は、鹿田地区内の南西部に位置しており、古墳時代初頭の住居址、建物、井戸が確認され、当時の人々が新たな居住域を広げ活用していたことを示すものである。また、平安時代末～鎌倉時代の建物、井戸、区画溝、さらには鎌倉時代以降近現代まで踏襲されたL字形に走る大溝などが確認され、当

時の集落の主要な一部をなすに至った場所と考えられる。さらには、近世の土坑群も確認されている。鹿田遺跡の集落構造とその変遷を考える上で、貴重な資料を提供した調査地点と評価できよう。

註

- (1) 鎌木義昌 1962「第一編 原始時代」『岡山市史（古代編）』
- (2) 富岡直人 1998『朝霞貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (3)
 - a 山本悦世編 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊
 - b 阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊
 - c 岩崎志保編 2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊 ほか
- (4)
 - a 二宮治夫 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
 - b 平井 勝編 1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
- (5)
 - a 高畠知功 1988『津島江道遺跡』『岡山県埋蔵文化財報告』18
 - b 草原孝典 1999『津島江道（岡北中）遺跡』『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1997（平成9）年度』
- (6) 註3a文献
 - a 津島遺跡調査団 1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』
 - b 岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』
 - c 島崎 東ほか 1999『津島遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
 - d 平井 勝 2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
 - e 島崎 東ほか 2003『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
 - f 岡本泰典 2004『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
 - g 山本悦世編 2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊
 - h 岡田 博 1998『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
- (7)
 - a 岡山市遺跡調査団 1971『南方遺跡発掘調査概報』
 - b 岡山市遺跡調査団 1981『南方（国立病院）遺跡発掘調査概報』
 - c 岡山県教育委員会 1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
 - d 日本考古学協会静岡大会実行委員会 1988『南方釜田遺跡』『日本における稻作農耕の起源と展開 資料集』
 - e 内藤善史 1996『絵図遺跡 南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- (8) 出宮徳尚 1986『天瀬遺跡』『岡山県史』考古資料
- (9) 註7e文献
- (10) 中野雅美 1984『上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡』『岡山県埋蔵文化財報告』14
- (11) 宇垣匡雅 1990『網浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査 吉備の前期古墳』『古代吉備』第12集
- (12) 鎌木義昌 1986『神宮寺山古墳』『岡山県史』考古資料
- (13) 西谷真治・鎌木義昌 1959『金蔵山古墳』倉敷考古館
- (14) 近藤義郎 1986『湊茶臼山古墳』『岡山県史』考古資料
- (15) 註4文献
 - a 正岡睦夫ほか 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
 - b 高畠知功ほか 1982『百間川兼基遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
- (16) 草原孝典 2004『八ガ遺跡』岡山市教育委員会
- (17) 高橋伸二・扇崎 由 2005『史跡賞田廃寺跡』岡山市教育委員会
- (18)
 - a 岡山県教育委員会 1981『百間川長谷遺跡 当麻遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告46
 - b 井上 弘ほか 1982『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
 - c 岡本寛久 1989『百間川米田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74
- (19)
 - a 中野雅美 1977『吉備における平城宮式瓦について』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16
 - b 草原孝典 2002『鹿田庄の設定背景』『新道遺跡』岡山市教育委員会
- (20) 草原孝典 2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
- (21)
 - a 藤井 駿 1971『殿下渡領の備前国鹿田庄』『吉備地方史の研究』法藏官
 - b 中野栄夫 1990『第六章第三節 備前国鹿田荘事件』『岡山県史』古代 ほか
- (22) 註20文献
- (23) 出宮徳尚 1985『岡山県二日市遺跡』『日本考古学年報』35
- (24) 註15a文献
 - 柳瀬昭彦 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
- (25) 光本 順 2004『日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

- (26) 吉留秀敏・山本悦世編 1988『鹿田遺跡』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1冊
- (27) 註25文献
- (28) 松木武彦編 1993『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第6冊
- (29) 高田貴太 2006「鹿田遺跡第16次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要』2004』
- (30) a 光本 順 2004「鹿田遺跡第13次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要』2002』
b 野崎貴博 2004「鹿田遺跡第15次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要』2003』
- (31) 光本 順 2004「鹿田遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭の集落について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要』2002』 pp.33
- (32) 山本悦世 2001「鹿田遺跡第12次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』18
- (33) 山本悦世編 1990『鹿田遺跡』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊
- (34) a 小林青樹 2000「鹿田遺跡第9次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』16
b 喜田 敏・岩崎志保 2000「鹿田遺跡第9次調査・鹿田遺跡第11次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17
c 岩崎志保 2004「鹿田遺跡第14次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要』2003』
- (35) 註32文献
- a 豊島直博 2000「鹿田遺跡第10次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17
b 横田美香 2001「第4節 立会調査 鹿田地区」岡山大学構内遺跡調査研究年報』18
- (36) 松木武彦・山本悦世編 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第11冊
- (37) 山本悦世 1990「鹿田遺跡における古代末～中世集落について」註30文献
- (38) 横田美香 2000「鹿田遺跡第8次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』16
- (39) 岡山河川工事事務所 1977『地域社会と河川の歴史 旭』

第 章 第 7 次調査(医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査)

第 1 節 調査経過と概要

1. 調査に至る経緯

1997年度に、老朽化の進む医学部校舎(基礎研究棟)の新営が、既存施設の南側に広がる駐車場に計画された(図8)。同予定地の面積は845m²程度であったが、同地点が鹿田遺跡内にあたることから、まずは対象地に確認調査を行い、その状況を探すこととなった。

1ヶ所行った確認調査結果に加え、予定地周辺では既に鹿田遺跡第6次調査が本地点の西側で行われており、それらの調査成果を参考とし、本地点には比較的遺構密度の高い中世包含層とやや希薄な状態を示す弥生時代～古墳時代の包含層との存在が予想されることとなった。

こうした状況を踏まえて、全面的な発掘調査の実施が決定された。調査対象面積は、最終的には829m²となり、調査員2名が担当することとなった。調査期間は約5ヶ月を予定し、表土掘削を1998年2月から開始した。

2. 調査体制

調査主体	岡山大学	学長	小坂二度見
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	稻田 孝司
調査研究員：調査主任	"	助手	山本 悅世(2月～8月)
調査研究員	"	"	野崎 貴博(2月～3月)
"	"	"	小林 青樹(4月～8月)
"	"	"	豊島 直博(6月～8月)

管理委員会(発掘調査年度：1997年度～1998年度8月)

【委員】

学長	小坂二度見	工学部長	大崎 紘一 1998年度
文学部長	成田 常雄	農学部長	内田 仙二
教育学部長	松畑 熙一 1997年度	環境理工学部長	河野伊一郎
"	森川 直 1998年度	文化科学研究科長	岩間 一雄
法学部長	植松 秀雄 1997年度	自然科学研究科長	岩見 基弘
"	石島 弘 1998年度	資源生物科学研究所長	青山 黙 1997年度
経済学部長	坂本 忠次 1997年度	"	本吉 総男 1998年度
"	建部 和弘 1998年度	附属図書館長	神立 春樹
理学部長	佐藤 公行	医学部附属病院長	大森 弘之 1997年度
医学部長	産賀 敏彦	"	荒田 次郎 1998年度
歯学部長	松村 智弘	歯学部附属病院長	村上 洋二 1997年度
薬学部長	篠田 純男 1997年度	"	佐藤 隆志 1998年度
"	原山 尚 1998年度	固体地球研究センター長	久城 育夫
工学部長	中島 利勝 1997年度	医療技術短期大学部長	遠藤 浩

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

学生部長

伊澤 秀而

事務局長

諸橋 輝雄 1998年7月～

事務局長

藤井 武 ~1998年6月

埋蔵文化財調査研究センター長

稻田 孝司

【幹事】

庶務部長

厚谷 彰雄

施設部長

井内 敏雄 1997年度

経理部長

黄揚川英了

"

遠藤 久男 1998年度

運営委員会

【委員】発掘調査年度（19987年度～1998年度）

センター長（文学部教授） 稲田 孝司

文学部教授 狩野 久

経済学部教授 建部 和広

理学部教授 柴田 次夫

医学部教授 村上 宅郎

農学部教授（調査研究専門委員） 千葉 喬三

文学部助教授（調査研究室長） 新納 泉

施設部長 井内 敏雄 1997年度

" 遠藤 久男 1998年度

【委員】報告書刊行年度（2006年度）

センター長（事務局長） 梶原 憲次

副センター長 稲田 孝司

（大学院文化科学研究所科教授）

文学部教授 新納 泉

" 久野 修義

大学院医歯学総合研究科教授 大塚 愛二

大学院自然科学研究科教授 柴田 次夫

環境理工学部教授（調査研究専門委員） 沖 陽子

埋蔵文化財調査研究センター助教授
(調査研究室長) 山本 悅世

施設企画部長 入江 良広

3. 調査の経過

1998年2月16日から重機による表土掘削を開始した。掘削の対象とした造成土下部の堆積土（2層）は、大量の砂がラミナ状に混入し、日常雑器や木材などが一帯に含まれる状況を呈しており、洪水による堆積を思わせるものであった。従来の調査では確認されていない土層であり、その堆積時期（近代）が注目された。

また、表土除去の作業が進行するに従って、旧建物の基礎が予想以上に残っていることが判明した。この建物基礎は、調査区の北半と南半に広く広がり、調査区の西側へと延びていた。当初見つかったものは北側の建物であり、その基礎に関しては、堅固な作りで地下に深く入り込んでいることから、撤去に伴う遺跡破壊をおそれて、ある程度残した状態で発掘を進め、調査終了後に解体・撤去して下部を確認する方針で掘削を進めた。ところが、さらに南側でも同様の基礎の存在が判明されるに至り、これ以上、基礎部分を残しての発掘は効率が悪く、遺構確認にも支障が出るとの判断から、南側に関しては撤去する方向で対応した。一方、北側に関しては、その段階で表土除去が終了していたことから、基礎の撤去は無理となり、北側のみは残した状態で発掘を進めることとなった。その後、この基礎は調査の進行に伴って約0.8m程度まで高さを増していくこととなり、調査にとって大きな支障になったことは言うまでもない。

本格的な発掘調査に入ったのは2月26日からである。ただし、南側基礎の撤去については、遺構破壊を最小限にとどめるための慎重な作業が求められたことから、撤去時期と発掘調査の進行との関係などに関して改めて計画を練り直し、当面は、作業上危険のない範囲で調査を進めることとした。最終的に、基礎が全て撤去されたのは3月中旬である。こうした2棟の建物の存在によって、調査区内は広い範囲にわたって深い攪乱を受けることとなった。

調査区南側の基礎撤去作業を行っている間に、調査区北半部において、近代～近世耕作土における水田畦畔・溝の調査を進めた。その結果、攪乱などの片付けが終了した段階で、岡山大学の前身となる岡山医科大学

が当地に建設された大正期の耕作面（3層）が姿を現した。この耕作面は、表土掘削において除去した2層（洪水堆積層の可能性が想定される）に覆われた状況であったため、調査対象地域の中央に灌漑用水路として重要な溝が配され、畦畔・水口によって構成された水田域の状況が良好に残存することとなった。北半部では、続いて、耕作土にあたる3層の除去に作業を移行した。一方、南側の調査域は、依然として調査に入れない状態であった。調査区南半部の基礎の撤去ならびに造成土を除去できたのは3月18日である。その後、同地域において3層上面の遺構検出を行い、3月23日には同層の除去を終了した後、遺構全体写真を3月24日に撮影した。

こうした経緯を経て、3層下面における調査からは全面的な調査が可能となった。

3層除去後、その下面では、調査区南端付近には中世前半に属する多数の遺構が検出される一方で、中央部に近世土坑が集中する以外に、北半部ではほとんど遺構は検出できないという状態となった。これは、

4層が本来は近世の土層であり、調査区南端部付近では、近世土層（4層）が3層によって削平された結果、3層直下に中世土層（6層）が露出した状態にあったためであるが、調査段階においては、その確認を明確にすることが出来なかった。それは、調査区に広がる多くの攪乱による土層の分断に加え、近世～中世土層の類似性の高さなどから、調査区内の土層の対応関係を直接的に把握することが非常に困難であったためである。

近世～中世土層（4層～8層）の調査では、近世の土坑・溝と中世の井戸・土坑・ピット群・溝などを検出した。中でも、調査区中央部をL字形に走る大形の溝は、撤去を控えた旧建物基礎の下部に潜り込んでいたことから、詳細な部分の確認はやや困難な状況にあったが、結果的には、数条の溝が重なり合って中世～近代に継続することが判明した。その他に、調査区の南側では、完形に近い土器や礎石らしき石を内包する大形の柱穴の存在が注目され、中世段階の屋敷地を念頭においていた調査を進めるなかで、柱穴の土層断面などの記録を積極的に行つた。

近世～中世土層における調査の進行は、中央部を走



a. 溝21コーナー(南から) c. 現地説明会(北西から)
b. 井戸3(北から) d. 建物基礎下調査状況(東から)

図3 調査風景

る大形の溝を境に、北側では遺構密度の低さから、掘り下げは比較的順調に進んだ。ただし、遺構の確定については、攪乱による変色あるいは上部破壊の影響もあり、古墳時代の遺構検出段階（9層）まで、その存在が把握できない場合も一部では生じることとなった。一方、近世段階に属する土坑群の検出から始まった南側の調査では、井戸やピットあるいは大小の溝がなど多数の遺構の重複が広がるなかに攪乱の影響も加わり、遺構の検出は難しさを増した。

こうした近世・中世の調査を6月中旬に終了した後、7月1日からは古墳時代初頭段階の土層（9層）の調査に入った。すでに、各所における壁面観察では、調査区中央部周辺での遺物集中や同北西部での竪穴住居の断面確認などがなされていたことから、9層上面では、上層とは異なり北半部に遺構が集中する傾向を想定していた。そうした中で、井戸・竪穴住居・掘立柱建物・土器溜まりなどの集落を構成する遺構群が検出されることとなった。遺構密度は、南半部では極端に希薄であった。その他に、中世遺構の掘り残しなども、調査区東壁付近の狭小な範囲内や攪乱内で見いだすことができた。続いて、基盤層（10層）上面において掘り残しの遺構を調査し終了した。ただし、遺構が極めて希薄となっていた南半部に関しては、最終的な確認の範囲は必要な部分に限定した。

全体的な調査は8月3日に終了した。最後に、全体的調査終了後、北側建物の基礎を8月5日に撤去し、6日には基礎の下部に残っていた竪穴住居の一部あるいは中世段階の大溝について完掘ならびに記録を行い、全ての調査を終えた。

調査終了前の7月25日に現地説明会を開いた。約50名の見学者があった。

4. 調査の概要

本調査においては、古墳時代初頭・古代末～中世・近世・近代の遺構が確認された。以下に、各時代ごとにそれぞれの概要を述べたい。

古墳時代初頭（図4）

検出した遺構は、竪穴住居4棟・掘立柱建物2棟・杭列1列・井戸1基・土坑7基・土器溜まり1箇所・溝4条・ピット数基の他に焼土分布域が1箇所である。遺構分布は、調査区の北西部から中央部にかけて集中的に認められ、基盤土層が高い地域に対応する。一方、地形が低い傾向を強める東南側に向けては、遺構密度はかなり低下しており、遺構の立地が地形と密接な関係を有しながら求められている。

遺構の配置は、調査区北西部に立地する竪穴住居を中心に見ると、掘立柱建物はその南東側に、そして井戸はさらにその南東側で地形がやや下降し始める位置にある。土坑・溝に関しては、形状・包含物などから機能的に分類されるが、その中で焼土を包含する土坑・溝（長さは短い）は住居の南側に集中的に分布する傾向が顕著に見られる。同地域には土器溜まりも重複しており、何らかの作業空間の存在が想定される。その他に、粘土を包含する土坑は、遺構密度の極めて低い調査区の南側に点在する。こうした状況から集落内での空間利用形態を知ることが出来る。また、遺構の相互関係も注意されるところである。調査区を南北に貫く溝・方形住居・掘立柱建物に認められる軸の方向がほぼ近い状態からは、それらの関連性が求められよう。また、方形住居を挿むように途切れる溝との位置関係、あるいは建物と溝そして焼土包含遺構群との重複関係などを考慮すると、住居を中心に、その周辺で比較的短期間の中で複数回の遺構形成が行われたと考えられる。

集落の継続期間は、遺構の重複関係あるいは形態的特徴の比較から、少なくとも2段階程度の変遷を想定することは可能であろう。出土遺物からも一部に新旧の差を見いだすことが可能である。ただし、遺構・遺物の状態から、その幅は比較的短期間であると判断される。

本調査地点に広がる集落は、調査区の西側にどの程度広がるかは未知数であるが、現段階の資料からは、竪穴

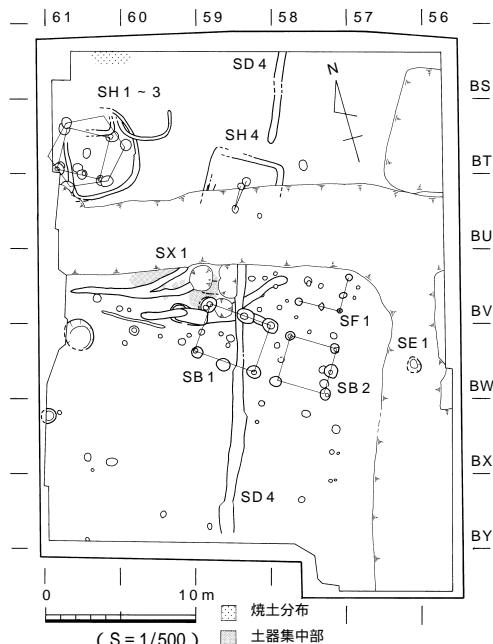


図4 古墳時代初頭遺構全体図

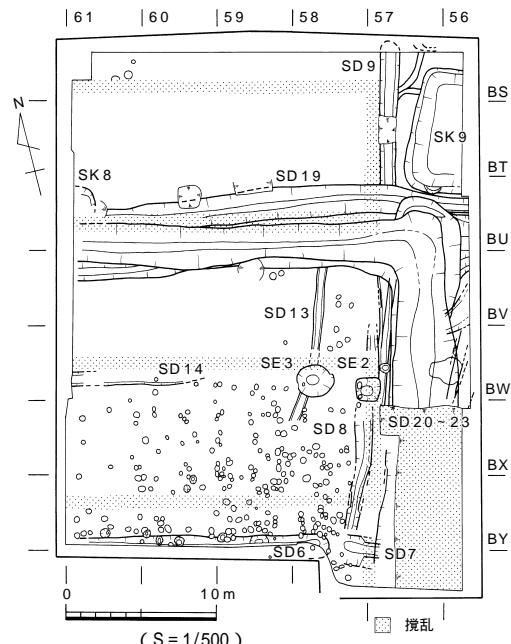


図5 古代末～中世遺構全体図

住居・掘立柱建物・井戸を中心とし、周囲に作業空間を有する比較的小規模なまとまりをもつ単位であり、ある時期には、区画された可能性を有する集落と評価しておきたい。

古代末～中世前半（図5）

本時期に属する遺構として、井戸2基・土坑2基・溝19条のほかに柱穴が多数が検出された。実年代では、12世紀後半～14世紀前半を目安としておきたい。遺構の推移を、以下にまとめよう。

古代末には、BYライン上を概ね東西方向に走る溝が確認される。非常に明確なSD6にSD7が続き、一連の区画が成されていることが想定される。それ以外では、南北方向の溝（SD8・9）が伴う可能性も位置的に求められる。同時期の柱穴は確認されない。次の段階には同溝は埋没し、やや北側に新たな溝の形成が予想される。検出された遺構は井戸2基と柱穴群である。井戸は柱穴群の分布域に対して端部となる位置に連続的に形成される。

続いて中世前半は、溝11条と土坑2基そして柱穴群が検出されている。その特徴から大きくは二段階に分けられる。

まずは、13世紀前半～中頃を中心とする時期である。溝1条が、BTラインとBUラインの間を、概ね東西方向に走る（SD19）。古代末の溝のように途切れる状態は示さず、調査区を横切る。

一方、13世紀後葉～14世紀前半では、東西方向の溝4条（SD20～23）の位置は前段階と一部で重複するような近接した状態を示すが、その規模は、幅2m程度から4m前後へと飛躍的な拡大を見せる。さらに、56ラインと57ラインの位置で南北方向に折れ曲がってL字形の溝を形成する。また、平面形では一部が張り出すよう

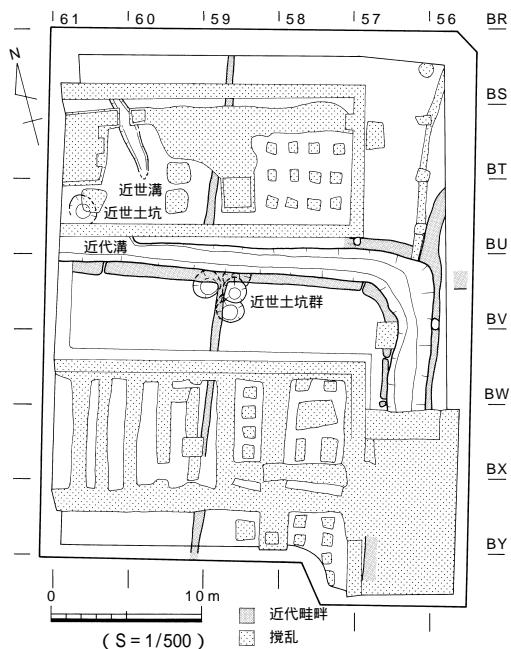


図6 近世・近代遺構全体図

な箇所が付随しており、その機能については、それまでの溝とはやや異なった性格を併せ持つ可能性も窺われる。土坑は、14世紀前葉に1基・14世紀前半に1基が東西溝の北側に検出される。それぞれ、調査区西端と東端に位置しており、溝との強い関連性を示す。

柱穴は調査区の南半部に集中する。地形としては高い地域に一致する。その中でも南端部付近の柱穴群のなかには、規模が非常に大形のものや、礎石状の石あるいは完形に近い椀・皿を含む場合が多く認められる。溝で区画された敷地内に建物が配され、その端に井戸が設置されるという、地形の高い位置に配された屋敷地の状況が復元される。出土遺物からは、12世紀末～14世紀初頭の時期が確認される。

以上のように、本時期は、区画溝に囲まれた屋敷地の存在が特徴である。古代末には、その位置はやや移動し、中世集落としての区画が新たに設定されている。さらに、その溝は、遅くとも13世紀末以降には、非常な大形化を示し、屋敷地としての飛躍を見せる。また、同溝からは、猿形木製品が出土している。

近世（図6）

遺構は、中世から踏襲されるL字形の大形溝が重複して2条（SD23・26）検出されるほか、土坑8基とごく小規模な溝1条があげられる。溝は溝23（16世紀末～17世紀初頭）に続いて、溝26が形成され、近代まで連綿と継続する。

土坑は、L字形溝に隣接する位置にあり、南側の6基と北側の2基の二群に分けられる。前者は大形の掘り方を有する。瓦敷きあるいは曲物が遺存し、18世紀代（江戸時代中期）を中心とした遺物を包含する。一方、後者はやや小形の掘り方で曲物が遺存する。前者よりはやや新しい遺物が出土する。遺物は陶磁器が多い中で、瓦の出土量が全体的に多い点が特徴的である。

本地点は、古代～中世前半に屋敷地としての利用されていた状態が大きく転換し、近世初頭には、耕作地として利用されるようになる。

近代（図6）

遺構は、溝1条・畦畔・水口があげられる。溝は近世に形成されたL字形の溝（溝26）が継続的に使用される。その両側にやや幅広の畦畔が付随しており、そこから南北方向に走る畦畔を3条検出した。また、水口は7箇所に認められる。大正期の水田景観を良好に残す。

表1 第7次調査検出遺構一覧表

a. 積穴住居

番号	時 期	上 面 形	長 辺 / 短 边 (m)	残存柱穴本数[復元数]	壁 溝	重 複
1	古墳時代初頭	隅丸方形	最大6.5 / 6	0 4 4[6]	有 無 無	3回
2	古墳時代初頭	隅丸方形	-		有	不明
3	古墳時代初頭	円	2.55 / ?		有	無
4	古墳時代初頭	方	5 / ?	2	有	2回

b. 掘立柱建物

番号	時 期	間×間	桁(m)	梁(m)	柱 間(m)
1	古墳時代初頭	2×1	北面：4.25 / 南面：4.25	西面：3.3 / 東面：3.4	北面：2.27・1.98 / 南面：2.27・1.98
2	古墳時代初頭	2×1	西面：3.15 / 東面：3.16	北面：3.2 / 南面：3.34	西面：1.68・1.47 / 東面：1.62・1.54

c. 杠列

番号	時 期	柱穴数	東 西(m)	南 北(m)	東西杭間(m)	南北杭間(m)
1	古墳時代初頭	5	2.8	2.3	1.5・1.3	1.2・1.1

d. 井戸

番号	時 期	上 面 形	長辺 / 短辺(m) [復元値]	底面高(標高m)	深さ(m)	断 面 形
1	古墳初頭	不整円形	残0.95 / 0.75[1.1 / 0.95]	- 0.99	1.52	逆台形 ~ 箱形
2	古代末	隅丸方形	1.57 / 1.55	- 0.97	1.9	逆台形
3	古代末	円形	2.45 / 2.1	- 1.27	2.5	Y字形

e. 土坑

番号	時 期	上 面 形	長辺 / 短辺(m) [復元値]	底面高(標高m)	深さ(m) [復元値]	断 面 形
1	古墳初頭	円形	2.17 / 1.81	0.85	0.17	皿状
2	古墳初頭	円形	1.0 / [1.0]	0.33	0.6	U字状
3	古墳初頭	楕円	0.8 / 0.56	0.75	0.27	ボウル状
4	古墳初頭	楕円	0.58 / 0.47	0.79	0.19	ボウル状
5	古墳初頭	楕円	0.7 / 0.53	0.63	0.23	逆台形状
6	古墳初頭	円形	1.0 / 0.9	0.77	0.15	皿状
7	古墳初頭	長方形	2.1 / 0.85 ~ 1.01	0.76	0.24[0.35以上]	逆台形
8	中世前半	隅丸方形	残1.9 / 残1.02	0.38	約0.65	逆台形?
9	中世前半	方形	8.2 / 残3.7	0.23	0.8	逆台形
10	近世	円形	1.9 / 1.8[1.6 / 1.5]	0.53	0.72	箱形
11	近世	円形	1.7[1.9]	0.17	1.06	Y字形
12	近世	円形	1.14 / 1.14	0.68	0.55	箱形?
13	近世	楕円形	1.56 / 1.5	0.61	0.55	逆台形 ~ 箱形
14	近世	円形	残1.4	0.84	0.41	箱形?
15	近世	円形	1.81 / 1.5	0.72	0.53	箱形
16	近世	円形	1.3 / 1.2	0.67	0.55	箱形
17	近世	楕円形	2.2	0.77	不明	すり鉢状

f. 溝

番号	時 期	長さ(m)	幅(m) [復元値]	底面高(標高m)	深 さ(m)	断 面 状	方 向
1	古墳初頭	8.55 ~ 9.05	1.05(西) 0.5 ~ 0.55(東)	0.67	0.25(西) 0.12(東)	ボウル状	東西(分岐)
2	古墳初頭	9.0	0.35 ~ 0.5	1.01(西) 0.99(東)	0.07 ~ 0.1	皿状	東西(分岐)
3	古墳初頭	3.0	0.45 ~ 0.55	1.03	0.06	皿状	東西
4	古墳初頭	7.5(北) 18.0(南)	0.57(北) 0.7(南)	0.8(北) 0.76(南)	0.18(北) 0.16(南)	逆台形	南北
5	古墳初頭	4.3	0.15	0.88	0.46	ボウル状	東西
6	古代末	18.0	0.5 ~ 0.9[1.7 ~ 2.0]	0.62(西) 0.24(東)	0.78(西) 0.95(東)	逆台形	東西
7	古代末	2.5	1.68[約2.0]	0.83	0.45	すり鉢状	東西
8	古代末	14.0	0.7 ~ 1.2[約0.9 ~ 1.1]	0.81(北) 0.85(南)	0.4(北) 0.36(南)	ボウル状	南北
9	古代末	24.0	0.6 ~ 1.2	0.91 ~ 0.88(北) 0.7(南)	0.08 ~ 0.22	すり鉢状	南北
10	古代末?	3.6	不明	0.97(西) 1.03(東)	0.1 ~ 0.2	不明	東西
11	古代末	3.0	0.3 ~ 0.38	0.91	0.12	ボウル状	北東 - 南西
12	古代末	1.4	0.3	0.92	0.07	ボウル状	東西
13	古代末	10.0	0.5 ~ 0.7	0.94前後(北) 1.0(南)	0.15前後(北) 0.09(南)	皿状	南北
14	中世前半	9.5	[0.8]	0.93 ~ 0.96	0.17	逆台形	東西
15	中世前半	4.0	0.55 [0.7]	0.55 ~ 0.58	0.55 ~ 0.58	U字形	北東 - 南西
16	中世前半	1.5	[1.0]	0.68	0.45	逆台形	北東 - 南西
17	中世前半	不明	[1.2]	0.78	0.33	ボウル状?	北東 - 南西
18	中世前半	2.0	約1.4[1.7]	0.53	0.55	皿状	北東 - 南西
19	中世前半	27.5	1.8 ~ 1.9	0.31(西) 0.47(東)	0.55 ~ 0.78	Y字形 ~ 逆台形	東西
20	中世前半	15.5	4.6	- 0.32(北) - 0.15(南)	1.36 ~ 1.5	すり鉢状	東西 + 南北
21	中世前半	14.0	2.0 ~ 3.2[4.0]	- 0.05(北) - 0.1(南)	1.3	すり鉢状	南北
22	中世前半	48.0	1.5 ~ 1.55[2.0 ~ 2.2]	0.3 ~ 0.42	0.85	逆台形 + 箱形	東西 + 南北
23	中世前半 ~ 近世	48.0	2.0前後[約3.0 (東西) 3.2 ~ 4.3(南北)]	0.1(西) 0.21(東) 0.18(南)	1.0m前後	逆台形 + 箱形(東西) すり鉢状(南北)	東西 + 南北
24	中世前半	1.8	1.0 ~ 1.8	0.13 ~ 0.15	1.0	階段状	東西
25	近世	5.0	0.8 ~ 1.0	1.06 ~ 1.15	0.06 ~ 0.16	皿状	東西 + 南北
26	近世 ~ 近代	48.0	2.0前後	0.69	0.8	Y字形(すり鉢状 + 箱形)	東西 + 南北

第2節 調査の記録

1. 調査地点の位置

本調査地点は、岡山大学鹿田地区の中では、中央やや西よりの場所にある（図2）。既存施設との位置関係をみると、医学部基礎医学棟、RI研究センター、附属動物実験施設、アイソトープ総合センターなどの建物に囲まれた駐車場の北東部の一角にあたり、基礎医学棟に隣接する位置となる（図7・8）。

これらの施設の中で、アイソトープ総合センターは、本センターが1990～1991（平成3）年度に発掘調査を実施している（第6次調査）ほか、附属動物実験施設では1981年度に岡山市教育委員会が立会調査を行っており、中世の遺構・遺物が確認されている。その他に、鹿田遺跡の中で弥生時代～中世の集落が継続的に営まれ、遺構・遺物の質量ともに中心的位置を占める外来診療棟・管理棟地点（第1次・5次調査地点）からは、南西に150～200mの距離にあたる。こうした環境から、中世集落の存在はいうまでもなく、弥生時代～古墳時代に遡る遺跡の状況について注目される地点であった。

発掘調査前は、良好な保存状況が予想されたが、昭和初期の図面から、東西方向の木造建物が南北に並ぶ様子が確認され、一定の破壊が危惧されることとなった。

本発掘調査域は鹿田地区構内座標BR～BY 55～61区の範囲を占める（図8）。



図7 調査地点遠景

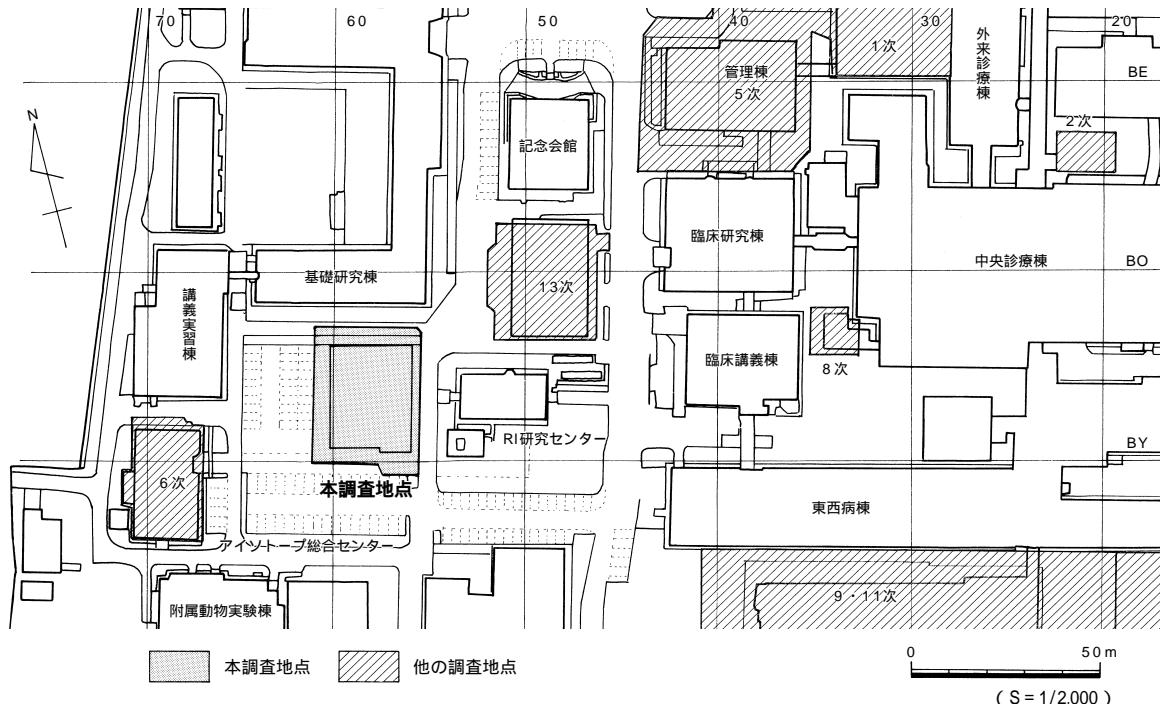


図8 調査地点位置図

2. 層序と地形

(1) 層序

調査対象地区内には、昭和期に建設された建物の基礎に伴う深い攢乱を中心に、大小の破壊が広範囲におよんでいる。さらに、中世から近世に形成される大形の遺構によって、基本土層を連続的に観察できる部分はほとんど残されていなかった。調査区壁面についても例外ではなく、北壁面以外については調査区全体を通した断面を記録することはできない状況であった。そのため、分断された土層を対応させつつ、基本土層の説明を行うこととする。なお、本調査報告書内では基本土層の表記については を付けて表す。

1層（大正期以降の造成土）：上面は現地表面にあたる。ほぼ平坦であり、高さは標高約2.69～2.73mを示す。土層の厚さは約1m前後を測る。その多くが岡山医科大学建設時における造成土にあたる。

2層（近代）：灰色系の粘土層であるが、場所によって暗灰色粘土、青灰色粘土、黄灰色粘土、黄灰白色粘土などの変化が認められる。また、粗砂や砂利が混在する傾向が強く、ラミナ状堆積が認められる部分も多い。部分的には細分が可能であるが、その間に時期差が求められるような違いとは言い難い。

上面は、部分的には削平で低い数値も示すが、標高1.6m前後～1.75m前後を中心とし、南壁方向に高い傾向が認められる。土層の厚さは20cm前後を測る。**3層** 上面に形成された畦畔・溝などの遺構を覆い尽くしている状況から、洪水に係わる堆積土の可能性が想定される。ただし、その後、上面において耕作が行われたことを否定するものではない。

包含される遺物量はコンテナ1箱（1箱28ℓ：以下略）程度が出土した。近代の陶磁器類を中心とする。

3層（近代）：灰色土を基調とする。他と比べると比較的粘性は弱い土であり、淡い灰色の色調が特徴である。

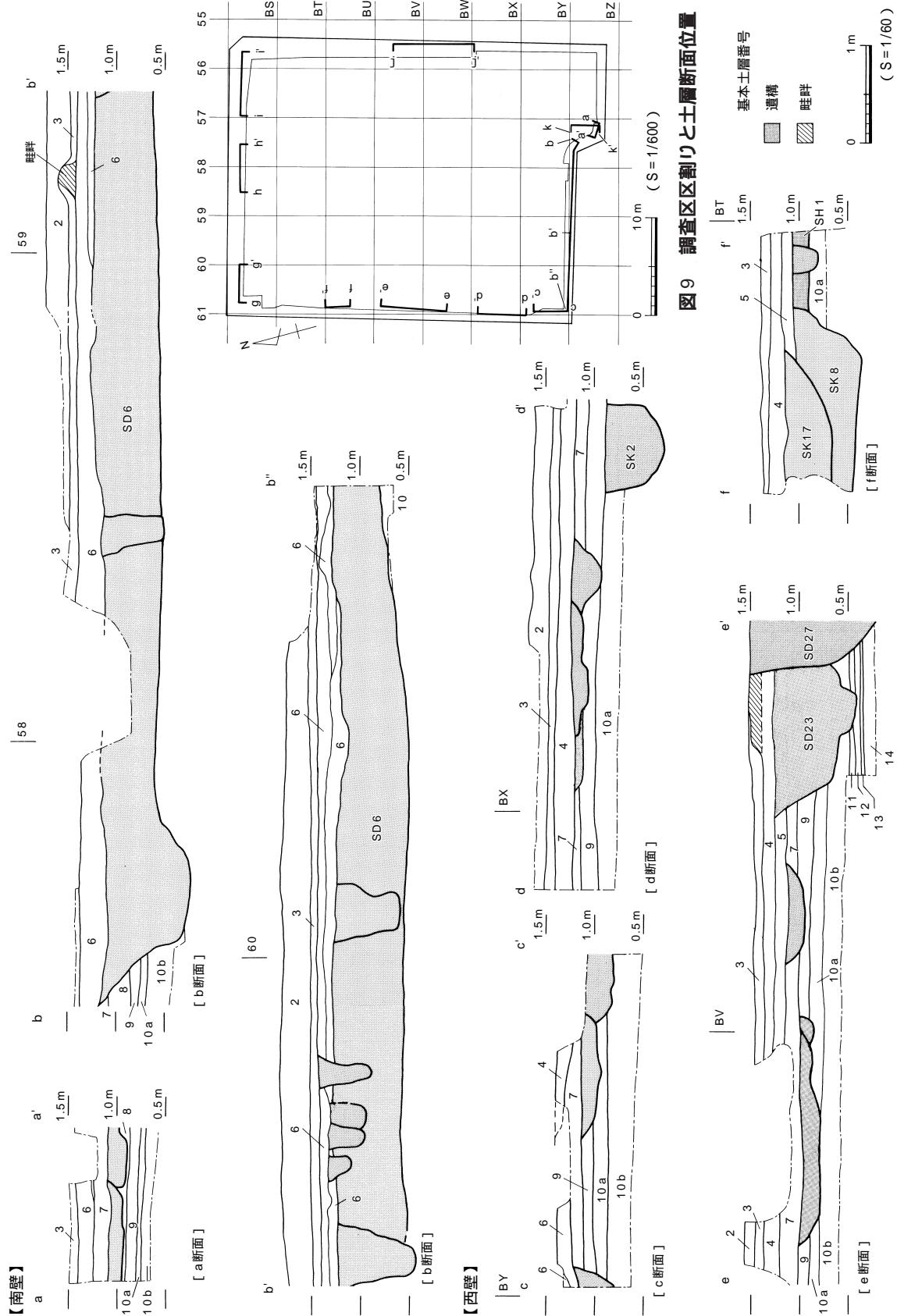
2層 と同様に小礫を多少含む。堆積範囲は調査区全域に及ぶ。上面は、その多くで標高1.45～1.5m前後の高さに広がりを見せるが、調査区北西部については同1.4m前後まで下がる。また、下部に溝などの遺構が存在する地点ではやや低い数値となる。比高差は15cmである。土層の厚さは全体に約10cm程度で安定している。

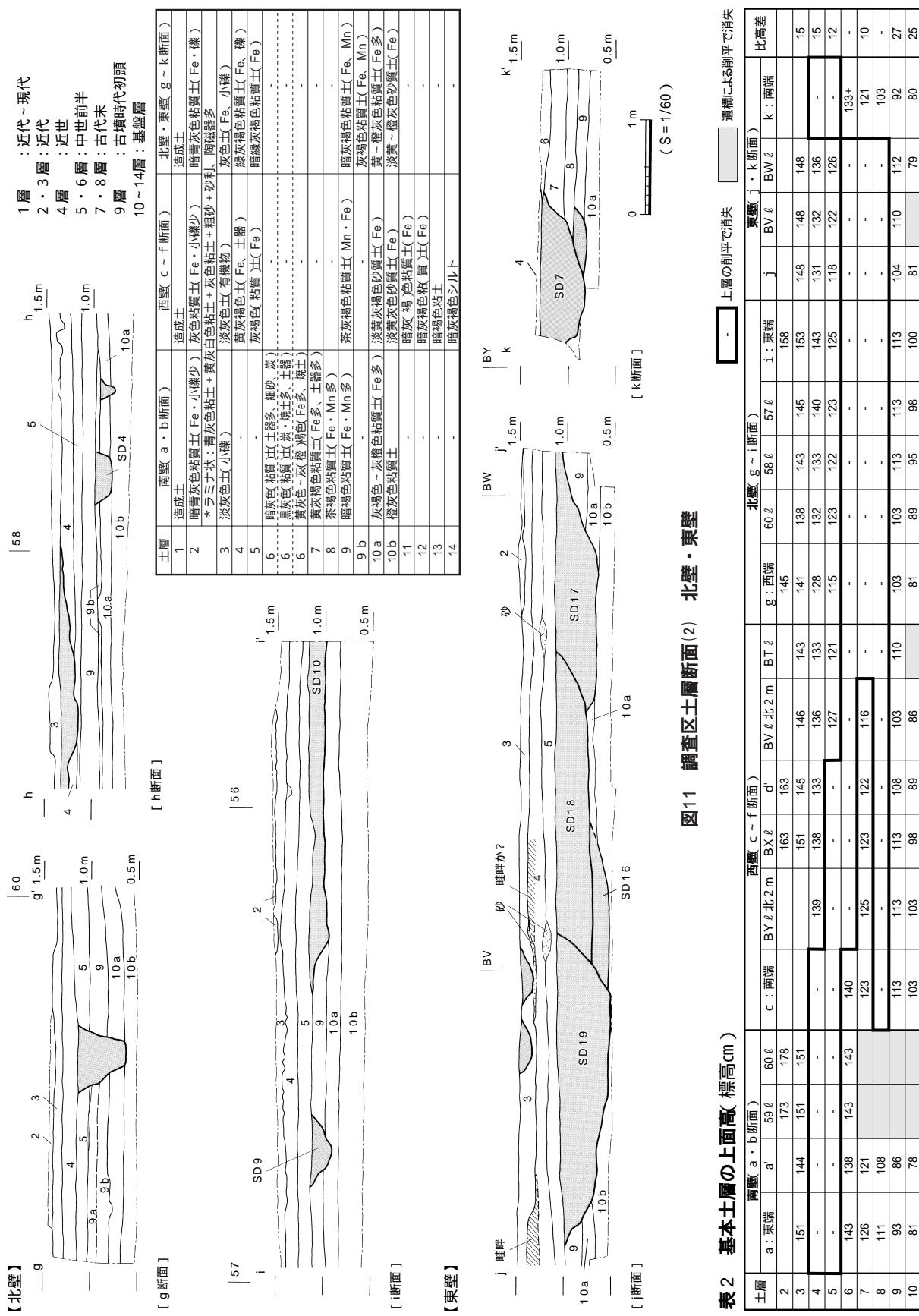
上面では、溝・水田畦畔などが検出された。遺物はコンテナ2/3箱程度の量が出土している。その内容は本土層を覆う**2層** と共に、近代の陶磁器を含む。以上の点から、近代の耕作関連遺構群が形成された耕作土層と評価され、地形にみる高低差は田面の高さを示すものといえよう。

また、広い範囲で下面是**4層** に接するが、南端部周辺では時期が断絶する**6層** に到達しており、本土層形成段階において、下層への削平が行われたことを窺うことができる。

4層（近世）：緑灰褐色粘質土を中心とするが、西壁側では黄色を強め粘性がやや弱まる。全体的に鉄分の沈着が認められる。**2層**・**3層** と同様に小礫を多少含む場合が多いが、全体には均質な土質である。堆積範囲は調査区内に広く認められるが、南端付近（BXラインとBYライン間以南）は、**3層** による削平によって失われている。消失した範囲においても、本来は**6層** 上の高い位置に本土層が形成されていたことは十分に予想される。現状は、そこから北側に一段下がって形成された部分が、安定的に残された状態といえる。土層の厚さは10～20cm程度である。

上面は、全体的には標高1.35m前後～1.4m前後の高さに安定した広がりを見せるが、調査区北西隅においては標高1.28mまで下がる。比高差は15cmを示す。こうした高低差は、前述したように上面が**3層** 形成段階に削平されたものとすると、本来の地形を直接的に現しているわけではない。しかし、調査区北西部における上面レベルの下降については、**5層**～**10層**においてもその傾向を見いだすことができることから、本土層面でも田面が本来的に下がる地形であったと判断される。一方、下面について検討すると、前述したように**5層** のほかに**7層** に到達する部分も確認されており、下層への削平が行われたことは明らかである。





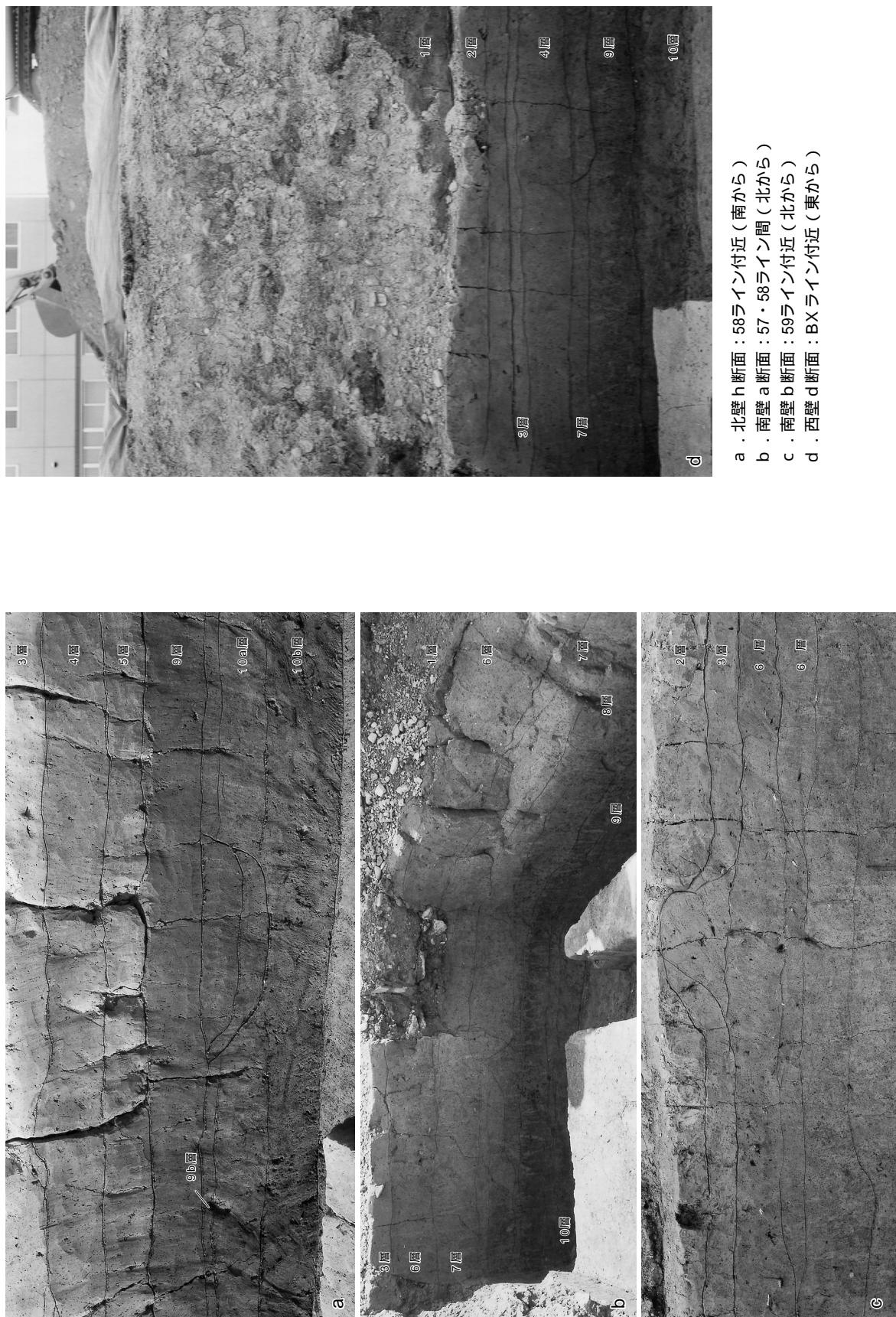


図12 調査区土層断面(3)

遺物はコンテナ3箱の量が出土しているが、近代の陶磁器を含んでおり、本土層は同時期の耕作関連土層と評価される。

5層（中世前半）：暗緑灰褐色粘質土～黄緑灰褐色粘質土を中心とする。西壁面ではやや粘性が弱い灰褐色土となる。鉄分の沈着が特徴的であるが、一部でマンガンの沈着も認められる。北壁では小礫を含む。全体的に均質な土質である。4層との類似性から不明瞭な部分もあるが、同土層よりはやや暗い色調として区別した。

上面の高さは、全体的には標高1.2～1.27mの安定した広がりを見せるとともに、調査区北西部では標高1.15mまで低下する。高低差は約12cmである。土層の厚さは10～15cmが中心となる。

本土層は、4層形成による削平の影響で一部の範囲で堆積を確認することができない。堆積する範囲を平面的に確定することはできなかったが、調査区壁面あるいは遺構検出面などの検討から、中央部をL字形に走る溝の北側～東側の範囲を中心とし、溝の南側ではBVライン以北の範囲に堆積が予想される。このように4層によって一部が削平される一方で、下層に向けての削平も顕著であり、下面レベルは調査区南半に残る7層上面レベルよりも低く、時代の断絶する9層上面にまで到達する範囲も広く認められる。

また、6層が残る調査区南端付近では、本土層の上面は本来標高1.4m以上にあったことになり、残存する5層の上面高（標高1.2～1.28m）とは大きな差が生じる。本来は、その間に段差に近い比高差があつた可能性が考えられる。

上面で検出される遺構は、近世に属する土坑群と中央部をL字形に走る溝群のみである。遺物は、コンテナ2箱の量が出土している。14世紀代までの遺物を中心とし、近世陶磁器類は含まれない。こうした遺物の出土状況や上面が4層（近世土層）によって削平されている点から、上面に残された近世の土坑は上層に由来する遺構と判断され、本土層は中世前半に形成されたと考えられる。実年代の目安としては14世紀を前後する時期が求められる。

6層（中世前半）：灰色系の砂質土～粘質土をベースとする土層である。炭化物・焼土・土器などの包含物が顕著に認められる場合が多く、そうした包含物の差によって細分が可能である点も、他の土層とは異なる特徴である。

上面の高さは標高1.4m～1.43mが中心である。一部に数値が低い部分もあるが、下部に深い遺構があることが影響していると考えられる。こうした数値は4層上面のレベル（標高1.35前後～1.4m前後）に近く、上部に堆積する3層の形成によって4層上面と連続した一連の面を成すことがわかる。さらに、4層あるいは5層による削平も上面レベルの比較から明らかである。こうした上層の削平のために本土層の堆積が残存する範囲は狭く、BYラインのやや北側から以南の調査区南壁周辺においてのみである。

土層の厚さは、下部に溝（東西方向に走る溝6）が存在しない部分では17cm、溝6の上部においては20～30cmを測る。土層形成初期において、同溝の上部を埋めるような経過をたどりつつ堆積していることがわかる。

細分される土層について、もう少し詳細に説明しておこう。その堆積が明瞭に観察できる南壁面の様相からは、～層の3群に大別される。層は、炭化物・焼土・土器などの包含物を含み、黒色化する特徴を示す。層は、黒灰色砂質土～暗灰色（粘質）土を呈し、特に土器の包含が多い傾向を示す。また、細砂の包含も認められ、砂質を強める結果となっている。群は黒灰色（粘質）土である。特に、炭化物と焼土の包含が顕著であり、炭層の様相を呈する。層は、黄灰色～灰褐色あるいは灰橙色の粘質土で鉄分の沈着が顕著である。炭化物の顕著な包含がない点で層とは異なるが、一部で焼土や細砂の包含が認められる。この点は上層の影響を窺わせる。上面レベルは、層で標高1.4m前後～1.43m、層では同1.33～1.42m、層は同1.31m程度を測り、全体的に上下関係を示す。

以上の特徴から、層と層は堆積順序には先後関係を持つにしても一連の堆積であり、その性格としては、例えば火災などのような被熱後の整地に伴って生じた土層の可能性が考えられる。それに対して、層は、土質

の違いに加えて、上面において確認されるピットの存在を積極的に考慮すると、**5層**とは時期的に区別されるべきであるが、ピットの存在は南壁面のみであり平面的な検出ができない点は問題として残る。現時点では、**5層・6層**と近い時期のものではあるが、それ以上の考察は今後の資料の増加と分析に委ねたい。

上面では中世前半期のピットが数多く検出される。出土遺物は、堆積範囲の狭小さから多くはないが、13世紀代に属するものを中心としており、同時期に形成された土層と考えられる。土地利用としては、集落内の屋敷地としての利用が想定される。

7層（古代末）：灰褐色系の粘質土を主体とする土層であるが、南東部では鉄分の沈着から黄灰褐色粘質土、南西部ではやや暗色化が進み暗灰褐色粘質土となる。上面の高さは標高1.16～1.26mを示すが、標高1.22～1.26mが中心的である。比高差は10cmである。上面の数値は**5層** 上面（標高1.2～1.26m程度）と近似しており、**4層** 形成段階における削平の影響を示す。土層の厚さは10～15cmである。

堆積範囲を平面的に確認することはできなかったが、調査区壁面あるいは遺構の検出面などの検討から、調査区の中央部を走るL字形溝で囲まれた南西側と予想される。同溝の北側～東側については**5層**による削平が深く達しており、本土層は完全に消失している。

上面では、溝の他に多数のピットが検出される。いくつかの遺構からは中世前半の遺物が出土しているが、上層からの掘削の可能性も考えられる。出土遺物は、12世紀末～13世紀の特徴を示し、その分離は判然としない。溝6との関係から古代末の土層と考えたい。集落内の屋敷地としての利用が想定される。

8層：茶褐色を強めた灰褐色系の粘質土である。鉄分あるいはマンガンが比較的多く沈着する。下層の**9層**と類似する傾向が指摘される。上層による削平や遺構による破壊などから、堆積が確認された範囲は調査区の南西部のみであり、厚さ10cm程度の堆積を見せる。

上層の高さは標高1.03～1.11mで、比高差は7cm程度であるが、極めて狭い堆積域を考えると、この数値が全体の状況を示しているかどうかは疑問である。下面レベルは標高0.9m前後である。これは直下層を形成する**9層**の中で最も低い数値であり、同層の中で最も低い地形が広がる地域に本土層が残されていることとなる。やや低い地形にあたっていたため、上層の削平がおよばなかつたと理解される。

本土層に伴う遺構・遺物を確認することはできないため堆積時期の決め手に欠ける。上層との関係から古代までに形成されていたことは確かであろう。

9層（古墳時代初頭）：褐色を強める暗褐色系の粘質土で、暗褐色粘質土あるいは暗灰褐色～茶灰褐色粘質土を呈する。鉄分の他にマンガンが多く沈着する傾向が特徴である。北壁断面では灰色を強め、上層がやや暗い灰（褐）色粘質土、下層（9b層）は灰褐色粘質土に細分される。

調査区全域に堆積が確認されるが、上面に堆積する**5層**によって上部は削平される。上面の高さは、標高0.86～1.13mを示す中で、同1m～1.13mが中心をなし、比較的安定した数値の広がりを見せる。ただし、この数値が本来の地形を直接示すかどうかについては、**5層** 形成段階の削平を考えると注意する必要がある。やや数値が低い地域は、やはり北西隅（標高1.03m）あるいは東壁中央部付近（同1.0～1.04m）であるが、その他に、特に低い数値を示すのが南東部である（同0.86～0.93m）。この点は上層と異なる。この範囲では本土層の上部に直接堆積するのは**8層**である。両土層が接するラインの状況を分析するには十分な面積が確保できないため、**8層**による削平の有無は不明であるが、**7層・8層**の存在を考えると、少なくとも同地域に低い地形が広がっている可能性は高い。

調査区全体での比高差は27cmを測り、上層には見られない高低差の存在が際だつ。また、**5層**による削平を考えると、本来の高まりは、こうした数値以上であり、その差はさらに大きかった可能性も考えられる。つまり、全体としては西壁側および北壁側が高く（平均値：標高1.1m前後）その中で調査区の中央部を北東から南西に向かって高まりが広がり、南東側に向けて低い地形（平均値：標高0.89m）へと移り行く状況が復元される。

微高地部と低位部の区別が比較的明瞭な地形が想定される。

本土層では、上層に由来する中世の遺構に加えて、古墳時代初頭に属する豊穴住居・掘立柱建物・井戸などの遺構群を検出した。主要な遺構は地形的に高い地域に集中している。遺物はコンテナ3箱程度の量が出土した。いずれも古墳時代初頭に属する遺物であり、本土層は同時期の堆積土と判断される。

10層：やや淡い灰色系の粘質土あるいは砂質土を基調とする。鉄分の沈着が顕著であり、橙色あるいは黄色を強く帯びる。粘性の違いあるいは橙色化の度合いなどから上下層（10a層・10b層）に細分が可能な場合が多い。10a層は粘性が強い傾向があり鉄分の沈着の影響から橙色化が進む。10b層は10a層よりは粘性が弱く砂質傾向を強める。全体に人工的な包含物などを含まない土層であるが、10a層上部では9層の影響からやや汚れが認められる。

上面の高さは、10a層では標高0.78～1.03m、10b層では同0.65～0.85mを測る。比高差は25cm・20cm程度である。10a層では西壁あるいは北壁側の数値（同0.9～1m）が高く、北西隅あるいは東壁～南壁（同0.8m前後）が低い。北東部から西壁に向けての高まりが想定される。10b層についても北東部から西壁へのラインが高い数値（標高0.85m）を示し、北西部および東壁で同0.65m前後、南壁では同0.75m前後と低い数値となり、高い部分の面積はさらに狭まる。

9層と比較すると、地形は北東部から西壁側が高い点は共通するが、微高地部の範囲は狭いものとなり、10a層からさらに10b層ではその傾向を強める。また、微高地と低位部のレベル差は際だつものではなく、その境は曖昧な状態であろう。全体的に、低位部の範囲が比較的広く起伏に富んだ地形が予想される。安定した微高地が発達していない段階といえよう。

10a層上面では、古墳時代初頭の遺構が検出された。これらは上層に由来するものと判断される。包含される遺物量は極めて少ない。本土層は古墳時代初頭までに形成された堆積土であり、同時期の基盤土層となっていると判断される。

以下の土層は、基盤層の堆積状況を観察するために、西壁の一部で確認した土層である。

11層：やや褐色を帯びる暗灰色粘質土で鉄分が沈着する。遺物は含まない。上面は標高0.49mに位置する。

12層：暗灰褐色粘質土で、鉄分が沈着する。粘性がやや強いが、10層に類似する。上面の高さは標高0.43mである。

13層：暗褐色粘土層であり、他の土層と明瞭に区別される。上面は標高0.38mに位置する。

14層：暗灰褐色のシルト層である。褐色の砂を含む。上面の高さは標高0.35mを測る。

（2）地形の推移

古墳時代初頭以前（14～10層）

古墳時代初頭までに堆積したと考えられる土層は、14層～10層である。その中で、13層は粘性の高い土層で黒色を強める。有機物が未分解の状態のような土層であり、湿地的環境がひろがっていた可能性が考えられる。また、12層は10層に共通性が求められるため、近似した環境であったことが予想される。

10層段階では、調査区の北東部から南西部に向けて高まりが存在する。微高地部の範囲は狭く馬の背状の様相を示す。微高地と低位部との比高差もさほど大きくないう状態から、微高地の形成は不十分な状態が予想される。

古墳時代初頭段階（9層）

9層段階に入ると微高地の形成が進行する。10層段階の狭い微高地が北東から南西に走る地形を踏襲しつつ、東西方向にその微高地部を拡大することで安定した広がりが形成される。一方、低位部にあたる調査区の

南東部においては地形の下降が顕著に認められ、微高地と低位部の差が明瞭な地形が復元される。

こうした地形復元に関して、上層の削平を考慮しなければならないが、中世以降の地形と比較すると、全体的に比高差が際だって大きい点に加え、復元した微高地部に主要な遺構が集中する状況から、ある程度本来の地形を反映していることが予想される。

古代末～中世前半（8～5層）

本時期の地形は、対象となる土層の多くが上層形成時の削平によって消失しているため復元は困難である。

ただし、6層について確認すると、その分布範囲は限定的ではあるが、遺構の集中域にあたること、遺物量が多く炭化物や焼土の包含も顕著であることから、調査区の南半部に集落の屋敷が広がっていたと評価されており、この状況は南東部に低位部が広がる地形を呈する9層段階の状況とは大きく異なっている。9層段階以降、微高地部の広がりが拡大し、主要遺構分布の中心位置が南側に変化していったことが想定される。

近世・近代（4～3層）

4層・3層は、地形的な高低分布・上面の比高差・層厚について共通性が高い。地形は、段差はあったとしても全体としては平坦な状態が復元される。平坦化への進行は、前段階以降急速に進むと考えられ、造成に伴う削平が、5層上面にもその影響を刻んでいる。4層段階にみられた北西部のやや低い状態も3層段階では姿を消し、平坦化が一面に進行していく状況が認められる。いずれの土層でも、比高差は15cm程度、層厚は10cm程度が確認されており、その形成過程が一連のものであったことを窺わせる。また、耕作関連遺構の存在や時期幅が大きい包含遺物からも耕作地としての土地利用が窺われる。耕作地として、3層に至るまで、下層への削平を繰り返しながら、継続的に利用される状況が復元される。

3. 古墳時代初頭の遺構・遺物

遺構は、竪穴住居4棟・掘立柱建物2棟・杭列1列・井戸1基・土坑7基・土器溜まり1ヶ所、溝5条・ピット52基が、9層～10層において検出された（図13・14）。その他に、焼土分布が1ヶ所で見られる。こうした遺構は、調査区の北西部から中央部にかけて、偏在的に分布する。その範囲は基盤土層が高い地域に一致する。一方、地形が低い傾向を強める東南側に向けて、遺構密度は極端に低下しており、地形と集落立地の関係に強い関連性を示す。

遺構の配置は、調査区北西部に竪穴住居、調査区中央部東端に井戸が位置し、その間に主要な遺構が分布する。竪穴住居を中心みると、南東側へ約10mの場所に建物、その5m東に井戸が位置する。そして、住居から南へ5～10mのあたりには、焼土を包含する不整形の遺構（土坑・溝）と土器溜まりが集中的に分布しており、何らかの作業空間の存在が想定される。さらに、その周囲には焼土を包含するが小規模で単独の遺構、あるいは粘土を包含する土坑などが点在する。このように、住居を中心に、多様な遺構が種類ごとに配され、外側に向かって希薄になる状況が抽出される。また、南北方向に走る溝の存在も注目される。同時性の問題は残るが、いずれかの住居と関連を持つことは十分に想定され、集落の区画を意識した機能を有した可能性を考えられる。このような遺構配置からは集落内での空間利用形態を見ることが出来る。

竪穴住居の平面形は隅丸方形あるいは円形のものと方形がある。掘立柱建物2棟は主軸方向は共通するが、両棟が接する位置にあることから同時性は考えにくい。杭列については、攢乱によって確認できないが、掘立柱建物になる可能性も残る。その他の柱穴で、建物・杭列としてまとめられなかったものは多くはない。住居・建物などの遺構数に大きな変更はないと判断される。

集落の継続時期幅は、遺構の重複関係や建物の位置関係などから複数の段階が想定されるが、その中でも、作業域での小形遺構の切り合い関係の頻度の多さは、他の遺構と比較して顕著である。これは、その利用形態

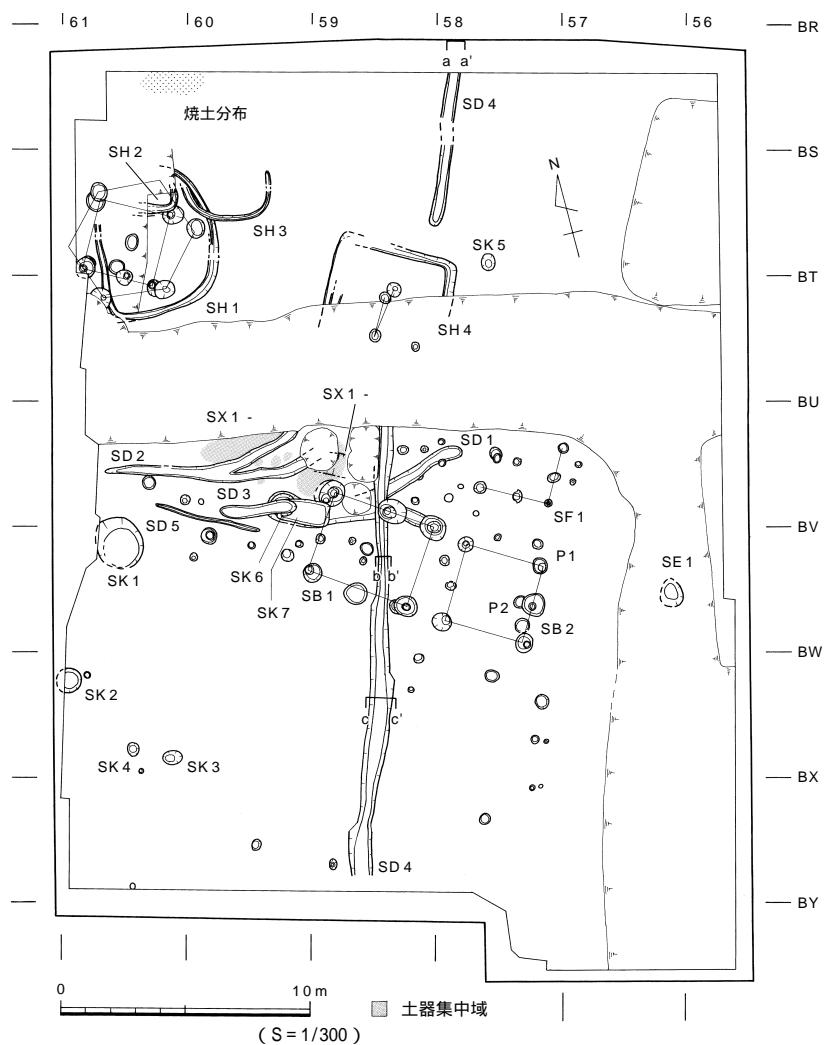


図13 古墳時代初頭遺構全体図



図14 古墳時代初頭遺構全景

の違いを示すものであろう。一方、出土遺物からは、特に甕の特徴に少なくとも新旧2時期の差を認めることができる。ただし、それ以外では明確な違いを抽出し段階を確立できるほどの差を示さない。こうした状況から、集落としての継続期間は比較的短期間であったと考えられる。

本調査地点に広がる集落は、遺構分布が調査区より西側にどの程度広がるかは未知数であるが、現段階の資料からは、集落としては最少の一単位を構成していると評価される。

a. 竪穴住居

竪穴住居1（図15～18、図版8）

調査区の北西部BS～BT 59～60区に位置する。検出面は標高1.05～1.08m、9層であったが、調査開始段階から、西側半分以上が後世の攪乱によって大きく破壊されており、その断面（c断面）に姿を現していた。また、一部には竪穴住居2・3が重複する。

完掘の結果、下部に古い住居の痕跡を確認することとなり、複数回の建て替えが行われた住居であることが判明した。小形の住居から大形化した隅丸方形の住居へ、そしてさらに後者においては4本柱から6本柱への建て替えがなされたと理解される。完掘段階での深さは0.45～0.5mである。以下、古い段階の住居から説明をしていく。

古段階にあたるのは、不整形な方形に近い形状をなして壁溝がめぐると判断される遺構である。同溝は新段階の住居下面で検出された。検出レベルは標高約0.8mである。南半において一部が確認されたのみであるが、長辺（南北方向）が4.7m、短辺（東西方向）は4m程度の規模が予想される。溝の幅は20～25cmで深さは5cm前後が残る。古段階に伴う土層は6・7層であり、壁溝は6層にあたる灰色粘質土で埋まる。床面は明瞭ではなく、7層がその一部となる可能性はあるが、残存率が低く床面となるような特徴も示さないため確定的とは言い難い。床面の高さは残存部分で標高0.86～0.89mを示す。共伴する柱穴は確認されない。

新段階にあたる住居は、標高1.05～1.08m、9層で検出された。西半部が大きく破壊されているため、正確な形状は確定できないが、平面の残存状況から長辺6.5m、短辺6m程度の隅丸方形の形態が推定される。古段階の住居との位置関係は、南東部の壁面を踏襲し、西側と北側に拡張されていることが、断面観察から読み取れる。本段階を構成する埋土は1～5層である。その中で床面と判断される土層は2～4層であり、少なくとも1回の建て替えが想定される。1段階の埋土が4・5層であり、2段階が1～3層にあたる。壁溝はいずれの段階でも明瞭ではない。柱穴に関しては、大きく2段階にわたる形成を見るため、新1段階と新2段階として、床面・柱穴の状況を説明しよう。

新1段階では、床面（4層）は標高0.93～0.95mの位置にある。古段階の住居上を、やや汚れのある灰褐色粘質土層（5層）で埋めた後に灰色粘質土で床を形成している。マンガンの沈着が顕著である。柱穴は、床面除去後に、標高0.8～0.85m前後で検出したP1～4の4本が対応する（図17）。断面観察から、P3では床面を形成する4層上面に掘削面を確認することができる。直径は、P2が0.6×0.65mとやや小形であるが、他は0.8m前後を測る。P1～3は深さ0.5～0.55m、底面の高さは標高0.3m前後を示し、いずれも直径0.2～0.25mの柱痕跡を残しており、深くしっかりした形態を有する。それに対して、P4は深さが0.44m、底面高が標高0.4mと他よりは浅く柱痕跡も確認できなかったが、同地点が後世の杭などの影響でグライ化が顕著である点が、その違いの背景にあると判断される。柱間の距離は各2.8mを測る。これら4本の柱穴のほぼ中心に、P9が位置する。検出面は、他の柱穴よりは低く標高0.65mである。規模は直径0.53mであるが、深さが0.2mで底面は標高0.53mに位置する。非常に浅い形態という点で他とは異なる。また、埋土についても、柱痕はなく、他には見られない炭層が顕著に堆積している点も他と区別される。こうした特徴を有するP9が、本住居に共伴するかどうかは明確ではないが、住居内以外に他のピットの分布が極めて少ないと想定される。P1～4の柱穴との位置関係から、住居の中央穴にあたる可能性が高いと判断している。

新2段階では、床面は2層と3層にあたる。2層は標高1.01mを中心に、中央部では同1.03m（c・d断面）、周縁部では同0.96m（b断面）の数値を示し、中央部が高い傾向が認められる。土質は灰色粘質土である。また、量的な差はあるが全体的に焼土の包含が指摘できるほか、鉄分の沈着が顕著である。レベルが高い傾向を示す中央部において、炭化物および焼土の包含量が増加するなかで細分が可能であり（a・b断面）、同位置の周辺で床の細かな作り替えが繰り返されていることが想定される。3層に関しても同様の状況が現れており（c・d断面）。

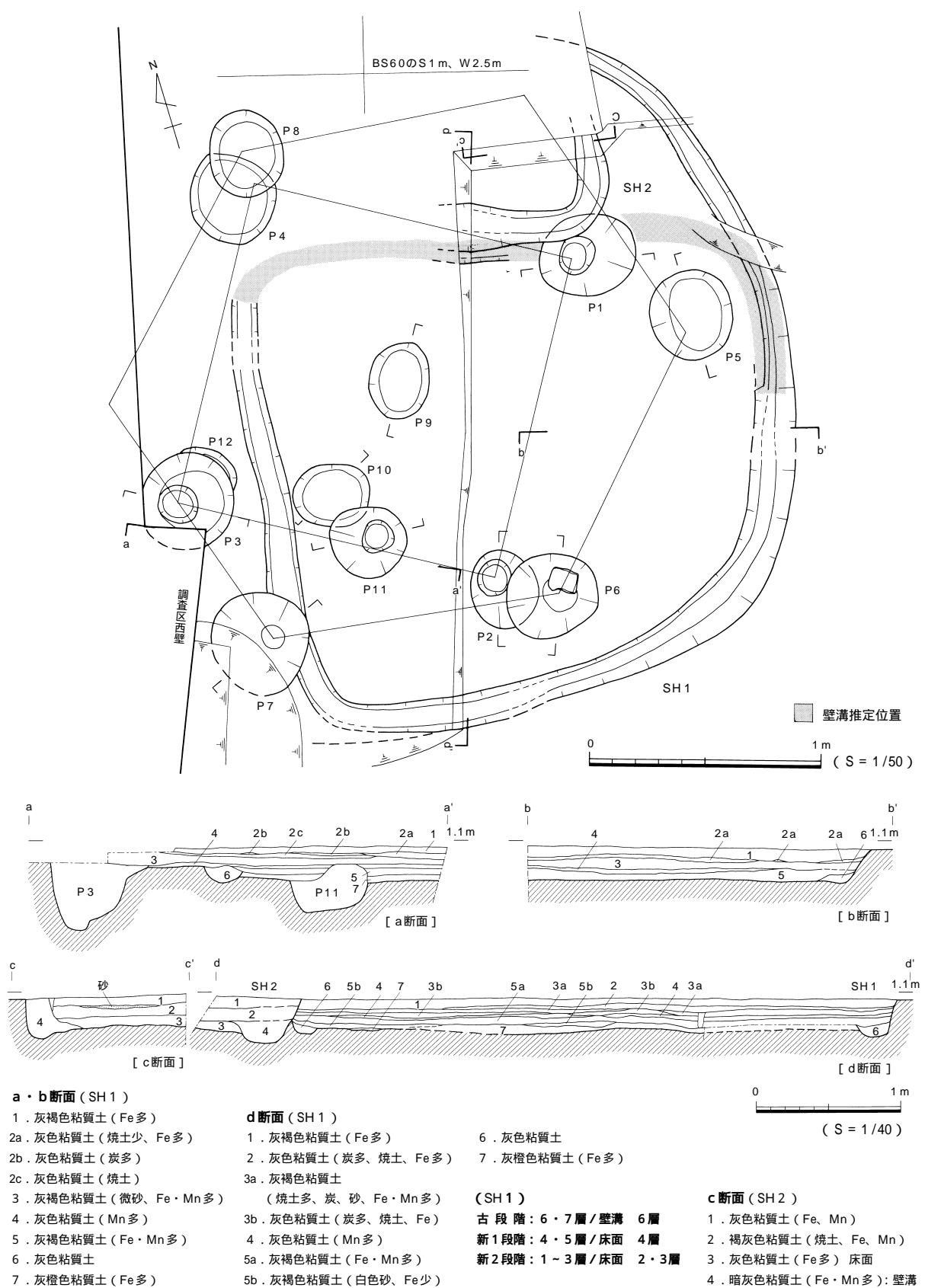


図15 壇穴住居1・2

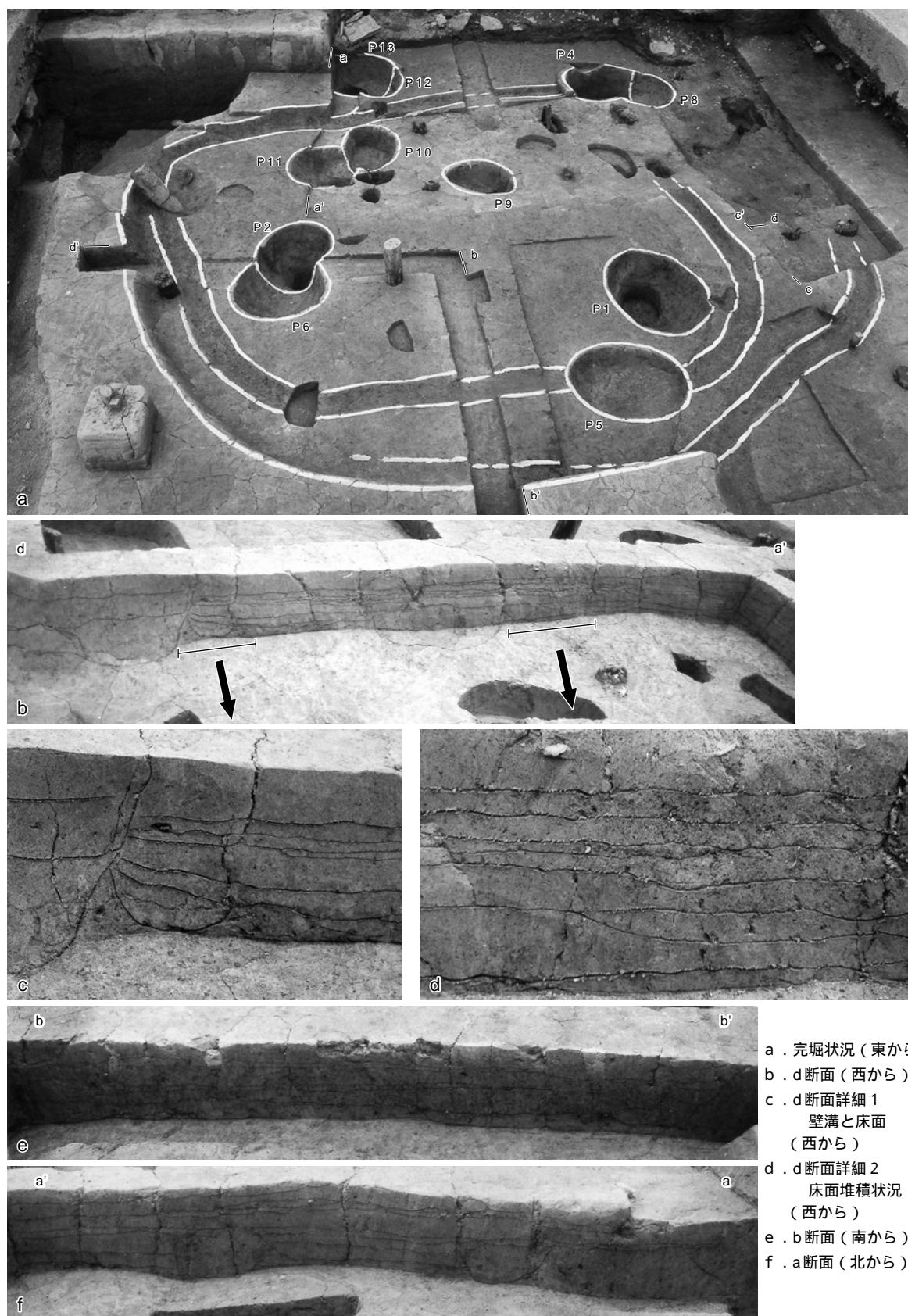
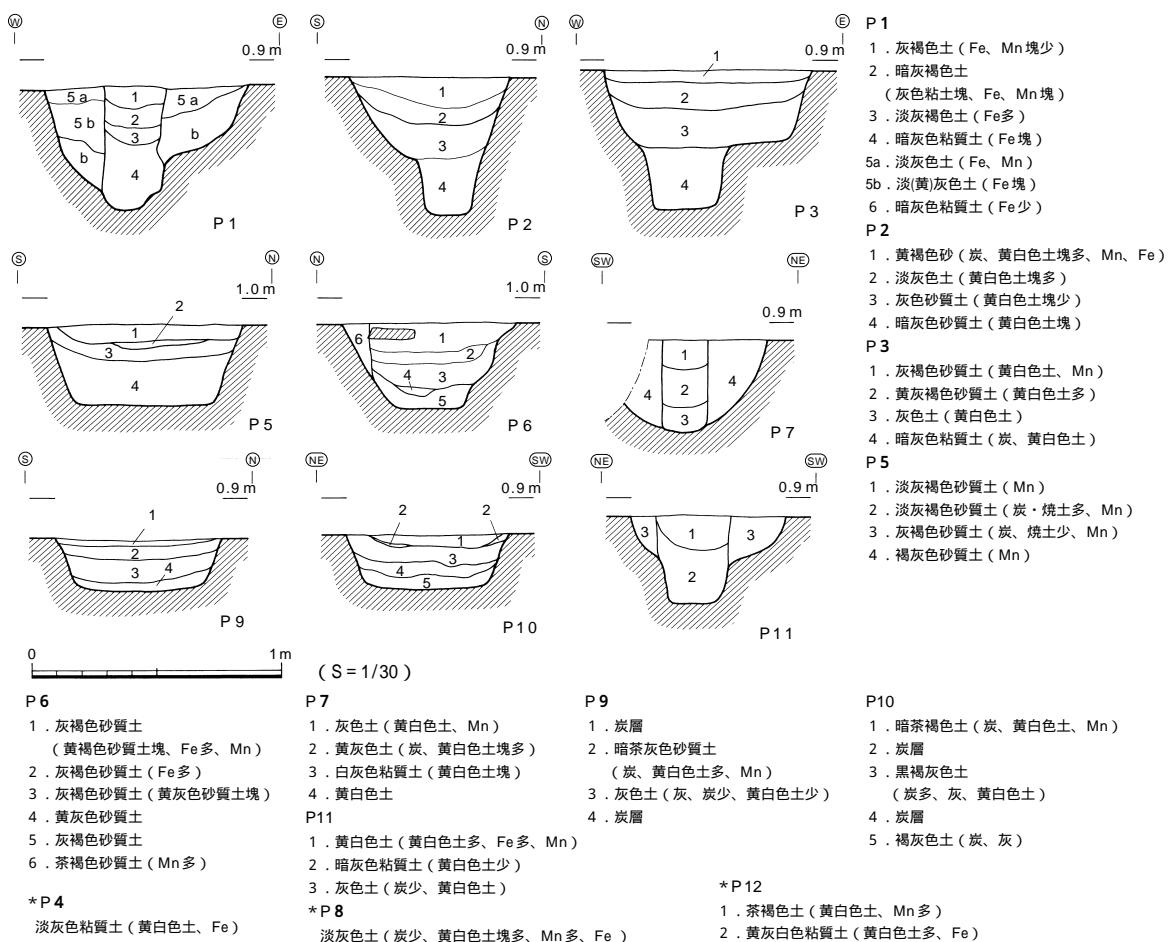


図16 穫穴住居1



柱穴一覧

住居番号	本数 (復元数)	柱穴番号	検出高 (標高m)	直径(m)	深さ (m)	底面高 (標高m)	柱痕径 (m)
新	4	1	0.78	0.8×0.7	0.5	0.31	0.2
		2	0.81	0.65×0.6	0.55	0.26	0.2
		3	0.85	0.83×0.8	0.56	0.295	0.25
		4	0.88 - 0.78	0.75	0.44	0.407	-
		9	0.65	0.53	0.2	0.53	-
新	4[6]	5	0.88	0.78×0.7	0.32	0.57	-
		6	0.88	0.8×0.7	0.34	0.56	-
		7	0.8	0.85	0.36	0.43	0.17
		8	0.78	0.75×0.6	0.2	0.57	-
		10	0.75	0.65×0.55	0.22	0.53	-
		11	0.83	0.62	0.35	0.48	-

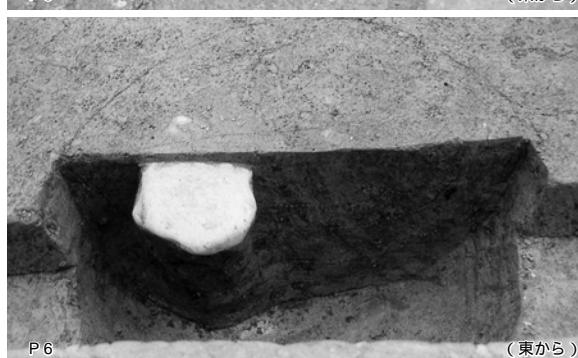
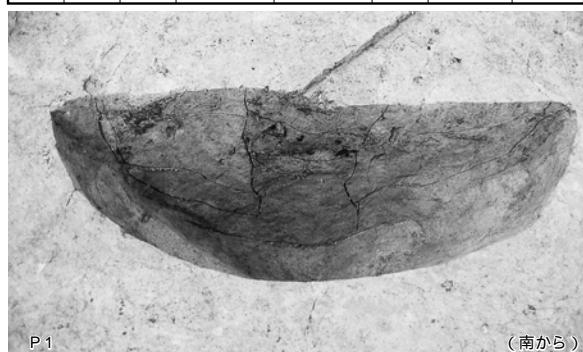
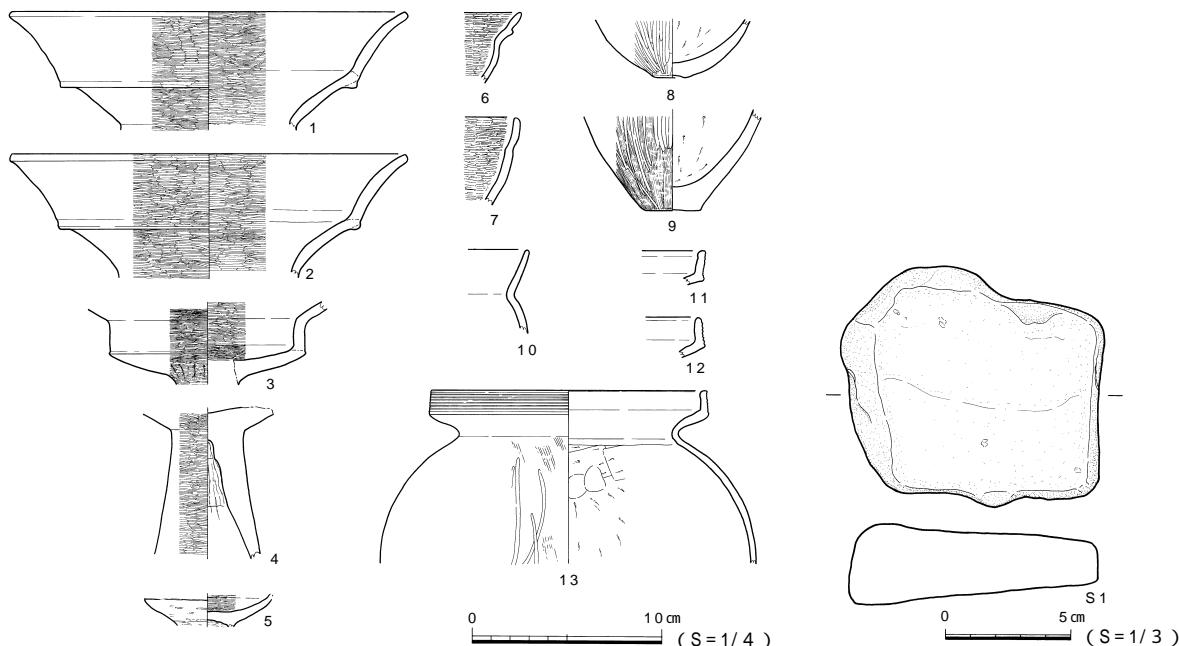


図17 堅穴住居1 柱穴

その特徴は2層以上に際立つ。標高0.96～0.99mに位置する3層（a・b断面）では炭化物などの包含物が認められないのに対して、中央部では細かな堆積を繰り返して3a・3b層を形成する、その堆積は標高0.97～1.03mに盛り上がる。炭化物・焼土を非常に多く含む点も特徴的で3層との違いを見せる。ただし、土層の連続性からは対応する土層であり、住居の中央部あたりで加熱作業がなされ、盛んに床面の修復が行われたと想定される。この段階に伴う柱穴はP5～8の4本が確認される。検出レベルは標高約0.8m～0.88mである。床面除去後の検出ではあるが、その位置関係から住居との関連が求められる。全体的には、直径は0.7～0.85m、深さは0.32～0.36mで、底面の高さは標高0.43～0.57mを測る。新1段階と比較すると、平面形態は共通するが、深さが浅く断面形態に大きな違いを示す（図17）。柱痕についても、P7で若干見られるが、新1段階の状況ほど際だつものではない。P8に関しては新1段階に見られたP4と同様にグライ化の影響が指摘される。以上のように、柱穴は4本のみが確認されたが、P5・6・7の距離からは柱間が2.5mを示すこととなり、そういう点も考慮して復元すると、調査区外と攪乱部にそれぞれ1本の柱穴が想定され、合計6本で構成されることとなる。柱間は2.48～2.5mとなる。P6からは扁平な石が出土しており（図17・18）礎石の機能が想定される。

以上の他に、住居内にはP10・11・12が検出された。位置関係からは、P12はP3の下に重複することから、新2段階に伴う可能性を有する。P10は新1段階との関係を求めたP9と非常に共通した特徴を示す。P11はa断面の観察や形態から新1段階の柱穴に共通性が求められる。しかし、位置的な問題から、それ以上の性格につ



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師器・高杯	*21.0	-	-	密な箇磨き・丁寧な作り（内）黒斑、1/6残存	精良、砂粒極少	黒褐/明橙褐
2	土師器・高杯	*20.6	-	-	密な箇磨き・丁寧な作り（外）光沢、二次的な被熱によって暗褐色化、1/6残存	精良、砂粒極少	暗褐/橙褐
3	土師器・高杯	-	-	-	密な箇磨き・丁寧な作り（外）光沢、炭化物付着（外）受部箇削り後箇磨き、1/2残存	精良、砂粒極少	明橙褐/薄橙褐
4	土師器・高杯	-	-	-	（内）絞り目・ナデ（外）密な箇磨き・摩滅	精良、砂粒極少	明橙/橙褐
5	土師器・器台	-	-	-	（内）密な箇磨き・黒斑？（外）箇磨き・摩滅	精良、赤色粒	黒褐/薄橙灰
6	土師器・鉢	-	-	-	密な箇磨き・摩滅	精良、砂粒少	薄黄褐/橙褐
7	土師器・鉢	-	-	-	（内）密で単位が狭短な箇磨き（外）器壁剥落	微砂、均質	明橙
8	土師器・鉢	-	1.5	-	（内）箇削り（外）密な箇磨き、底部外面に凹部・摩滅	微～細砂、均質	橙褐
9	土師器・鉢	-	*3.0	-	丁寧な作り（内）器壁平滑・箇削り後ナデ（外）縦ハケ後箇磨き、底部箇磨き、1/3残存	微～細砂、角閃石	薄黄褐/橙褐
10	土師器・鉢	-	-	-	器壁剥落顯著、口縁部は丸く收める	微～細砂、赤色粒	黃褐/橙褐
11	土師器・甕	-	-	-	口縁櫛描沈線8条、横ナデ、口縁端部は丸み（外）頸部煤付着	微砂、精良	暗橙褐～茶褐
12	土師器・甕	-	-	-	口縁櫛描沈線7条、横ナデ、口縁端部は丸み（外）頸部煤付着	細砂、赤色粒、角閃石	明褐～茶褐
13	土師器・甕	*14.3	-	-	口縁櫛描沈線8条（内）肩部押圧（外）肩～胴部縫ハケ後に箇磨き・煤付着、1/5残存	微～細砂、角閃石	黄灰褐/暗褐

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S 1	礎石	194.2	208.4	64.5	3572.4	流紋岩	表裏面が平坦な蝶を礎石として利用

図18 壁穴住居1・2出土遺物

いっては決めがたい。

遺物はコンテナ 1 / 3 箱 (1 箱 28ℓ) 程度の量が出土した。埋土あるいは柱穴 5・6 から出土した土器片、柱穴 6 から出土した石が含まれる。土器はいずれも細～小片である。

時期は、出土遺物から古墳時代初頭の範疇として捉えられる。

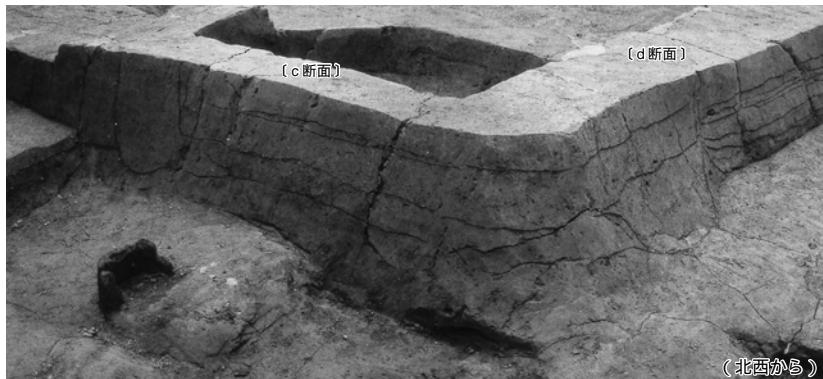


図19 壁穴住居 2 土層断面

壁穴住居 2 (図15・18・19)

調査区の北西部、壁穴住居 1 に重複する状態で検出された。検出面は 9 層 で、標高 1.08m を測る。その多くが攪乱によって破壊されており、住居の南東部コーナーの一角が残存するに過ぎない。そのため、規模などの詳細は不明であるが、隅丸方形に近い平面形が推定される。深さは $0.2\sim0.24\text{m}$ が残る。

埋土は灰色系の粘質土が水平堆積する。2層で焼土が含まれる以外は特徴的な要素は認めがたく、床面の特定は困難である。壁溝は幅 $0.2\sim0.3\text{m}$ で深さ $5\sim15\text{cm}$ 程度が確認される。埋土は暗灰色粘質土 (4 層) で、鉄分・マンガンが顕著に沈着する。

出土遺物は僅か 16 片の甕・高杯片が認められるが、いずれも細片であるため詳細は不明確であるが、壁穴住居 1 と時期的な違いを見いだすことはできなかった。古墳時代初頭の時期に属すると考えられる。

壁穴住居 3 (図20・21、図版 7)

調査区の北西部、壁穴住居 1 の東側に位置する。BS 59～60 区にあたる。壁穴住居 1 の北東部コーナー上にわずかに重複する。また、本遺構の北半部についても、後世の攪乱で大きく破壊されている。検出面は標高 1.04m で、9 層 である。

平面規模は直径 2.55m の円形が復元される。壁溝 (図21 - 4 層) は幅 0.2m 前後、深さは $5\sim8\text{cm}$ を測る。床面は、土層の堆積関係から 3 層上面 (図21) に求められる。標高 $0.83\sim0.85\text{m}$ の高さである。柱穴の有無に関しては、少なくとも、壁穴住居 1 の古段階に見るような深いものを持うことではないが、それより浅いものであれば攪乱による消失も考えられる。いずれにしても、壁穴住居 1・4 と比べると全体的に小規模な形態を示す。

遺物は、埋土中から数片の土器と叩き石 1 点 (図21) が出土した。土器片は細片である。

所属時期は、古墳時代初頭と考えられる。



図20 壁穴住居 3 完掘状況

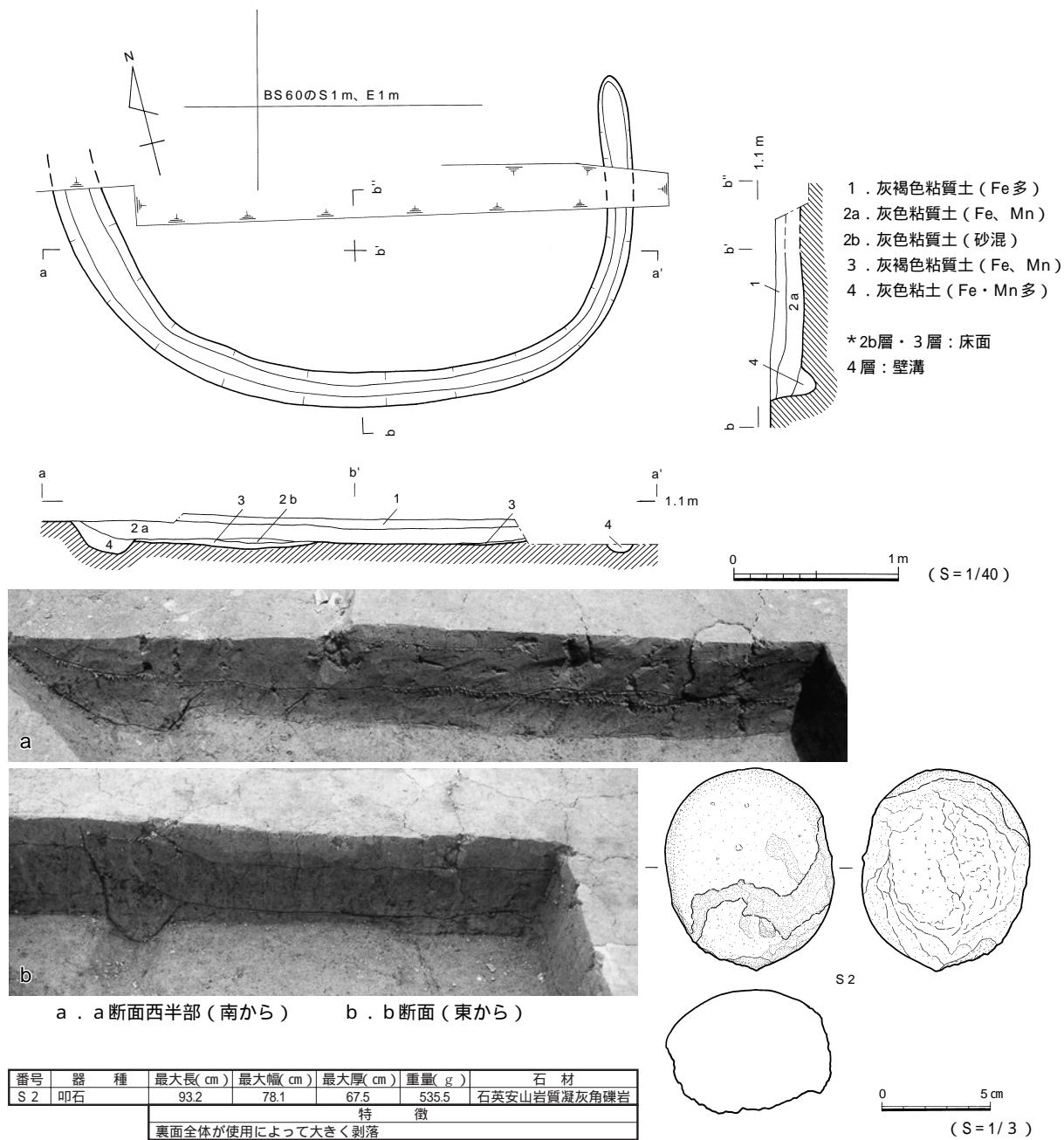


図21 穫穴住居3・出土遺物

豊穴住居4（図22～24、図版7）

調査区の北側ほぼ中央部、BS～BT 57～58区に位置する。豊穴住居1から東に11m（中心間）端部では4.5mの間隔を保つ。遺構の南半部は、中世溝あるいは近代の建物基礎によって大きく破壊される。検出面は標高0.85m、10a層である。また、建物の基礎除去後、10b層内にあたる標高0.4～0.61mの面において柱穴2基（図22-P2・3）を検出した。

平面形態は一辺5mの方形住居が復元される。主軸方向（N 30°E）は後述する建物とほぼ棟をそろえる。深さは約0.2mが残る。床面と考えられるのは3層・5層であり、いずれも灰褐色砂質土で砂粒が細かい特徴は一致している。炭化物などの汚れは認められない。壁溝は2層と4層に求められ、2条が復元される。柱穴は3基が検出されたが、その位置関係からP1とP2によって構成される2本柱の構造であったと判断される。この

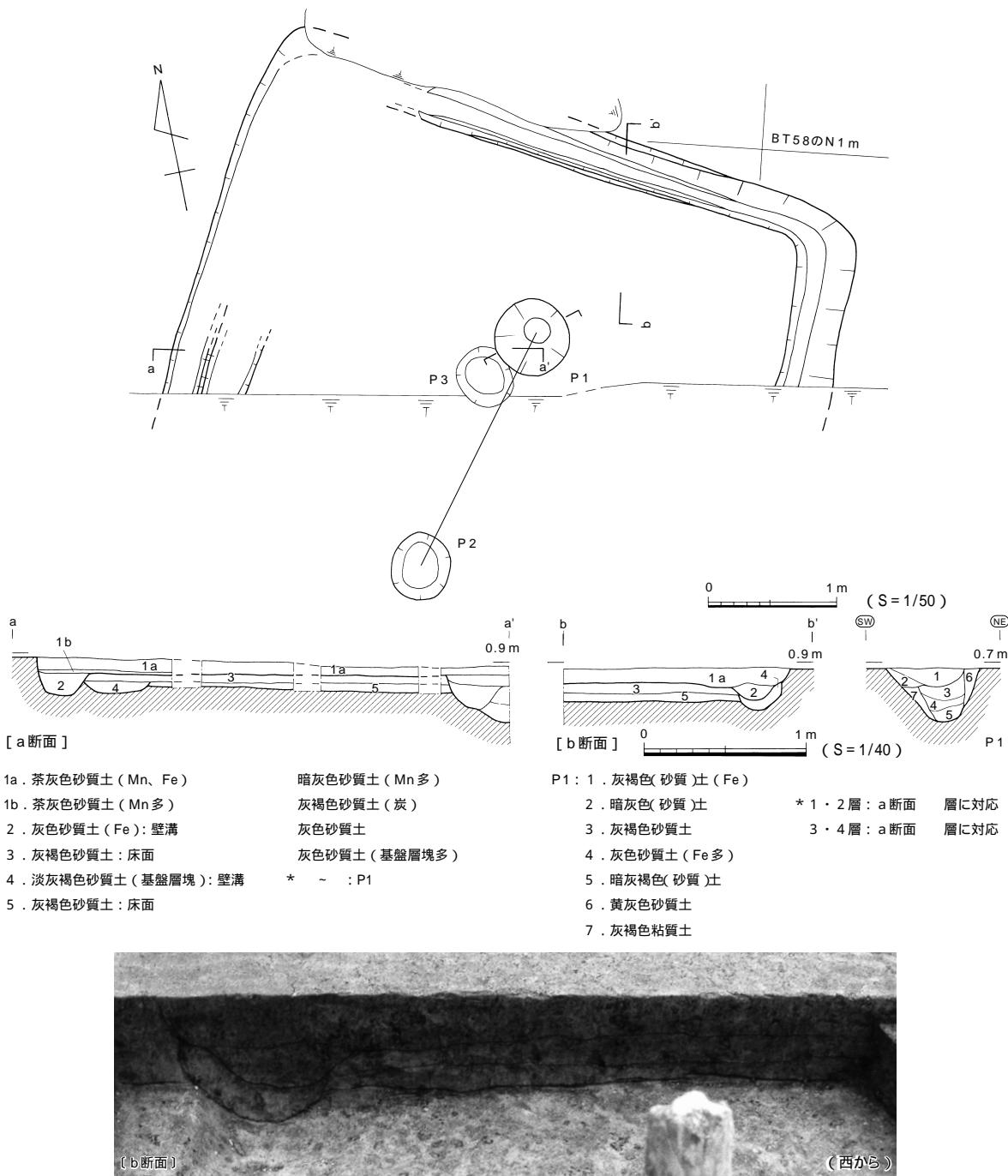


図22 穫穴住居4

のような床面・壁溝・柱穴の状況から、少なくとも1回の建て替えが想定される。古段階と新段階に分けて説明しよう。

古段階には4・5層が含まれる。床面を構成する5層上面は標高0.71～0.73mを測る。壁溝（4層）は、東側では新段階と重複するが、西側では新段階よりもやや東よりに位置することが断面観察で判明した。平面的には同溝を確認できなかったが、一辺4.7m程度の方形住居が復元される。壁溝は幅0.28～0.4m、深さ8～10cmを測る。

新段階には1～3層が含まれる。床面を構成する3層上面は標高0.78mを測る。壁溝（2層）は、東側では古



図23 竪穴住居4 完掘状況

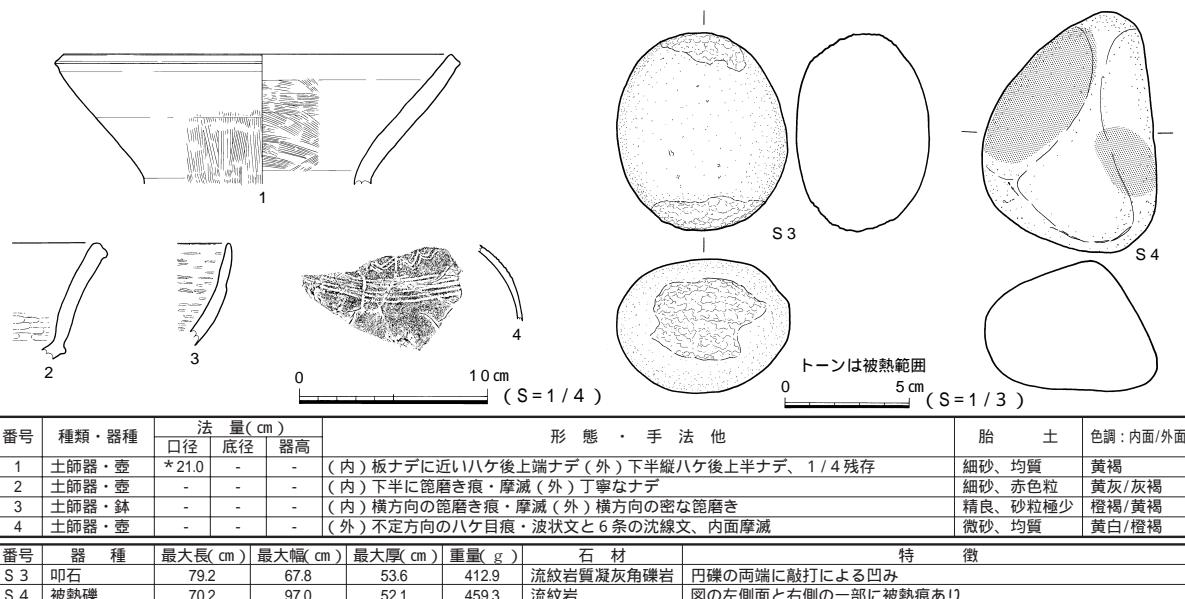


図24 竪穴住居4 出土遺物

段階の溝上に作り直されながら、西側では溝幅（約30cm程度）分が拡張され、一辺5mの方形住居に建て替えられている。

ピットは3基が確認された。それぞれの位置関係などから対応関係が想定されるのはP1とP2である。住居の中央に位置する両柱穴は直径0.5m～0.57m、底面は標高0.1～0.33mを測り、柱間は2mを保つ。P2は基礎除去後に確認されたもので詳細は不明な部分が多いが、P1では掘削面が2層上面に求められ、新段階に伴うことが判る。一方、P3は底面が0.6mと非常に浅いため他とは区別したが、住居外においてピットは極めて希薄であることを考慮すると、同住居に何らかの形で係わっている可能性は高い。

以上のように、壁溝や柱穴あるいは床面の点から建て替えがなされ、その建て替えの規模は住居を大きく改変するものではなく、古段階の状況を踏襲する形で新段階の住居が再建されたことが窺われる。一辆 5 m 程度、2 本柱の方形の竪穴住居である。

遺物は土器が約60片（13号ポリ袋 1/3 袋）・叩き石 1 点・被熱礫 1 点が出土した（図24）。土器の大半は細～小片である。壺の中には、畿内系の土器（図24 - 4）が認められる。

所属する時期は古墳時代初頭である。

b . 掘立柱建物

掘立柱建物 1（図25・26）

調査区の中央部、BU ~ BV 58・59区において検出した。竪穴住居 4 の南 4 ~ 5 m の位置にあたる。検出面は標高0.88 ~ 0.93 m、10層まで下がるが、本来は 9 層 中からの掘削と判断される。

柱穴 6 本で構成され、桁行は北側および南側とも4.25 m、梁行は東側で3.4 m、西側ではやや短くて3.3 m を測る 2 間 × 1 間の建物である。短軸の方位では N 33°E を示し、竪穴住居 4 の主軸とほぼ一致する。柱間は桁側では西側（P 1 - 2、P 4 - 5）で2.27 m、東側（P 2 - 3、P 5 - 6）で1.98 m を示す。

柱穴は、北側に並ぶ P 1 ~ 3 と南側の P 4 ~ 6 の間に、規模などに多少の違いを見せる。前者の規模は、直径 0.95 ~ 1.25 m（中心は1.05 m 前後）、深さ 0.63 ~ 0.84 m（底面レベル：標高 0.09 ~ 0.25 m）を測り、いずれも明瞭な柱痕を残す。大形の掘り方を有し柱が深くしっかりと設置された様相を示す。一方、後者の規模は、直径 0.73 ~ 0.95 m（中心は0.85 m 前後）、深さ 0.43 ~ 0.57 m（底面レベル：標高 0.35 ~ 0.46 m）を測る。柱痕をかろうじて残しているが、規模の大きさが特徴的な前者との違いは明瞭である。

遺物は P 2 ・ 3 ・ 4 から甕あるいは高杯の細片が数片出土した。古墳時代初頭の時期に含まれており、本遺構の時期を示すと考える。

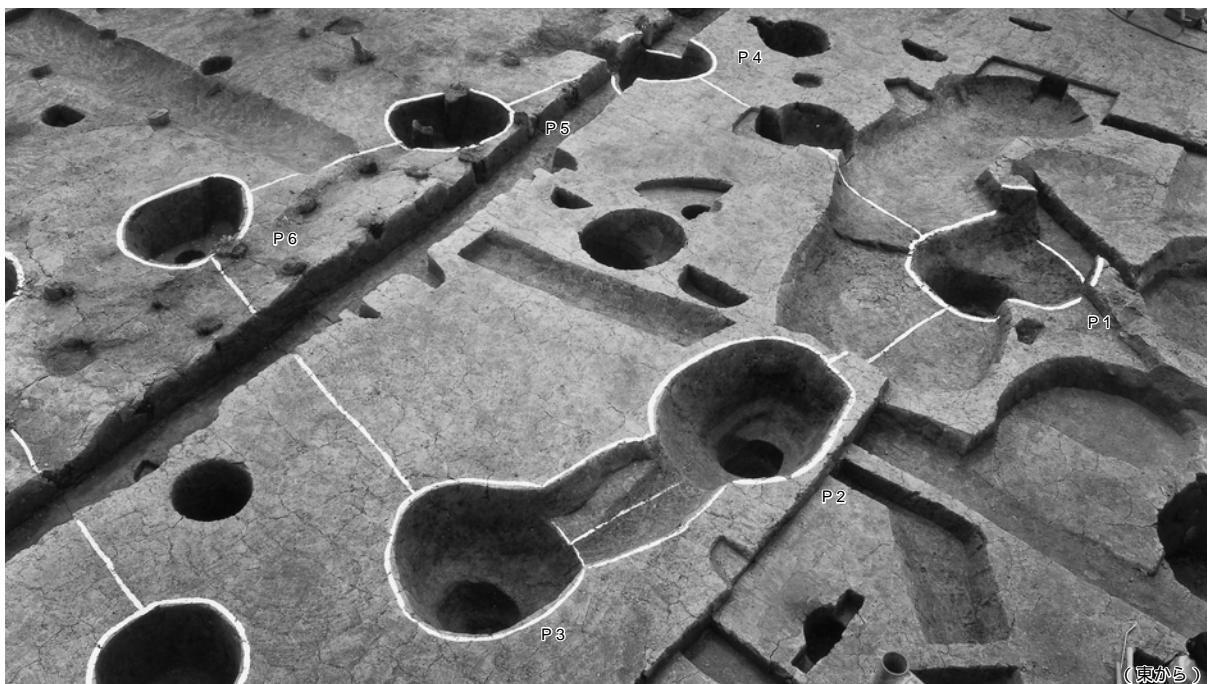


図25 掘立柱建物 1 完掘状況

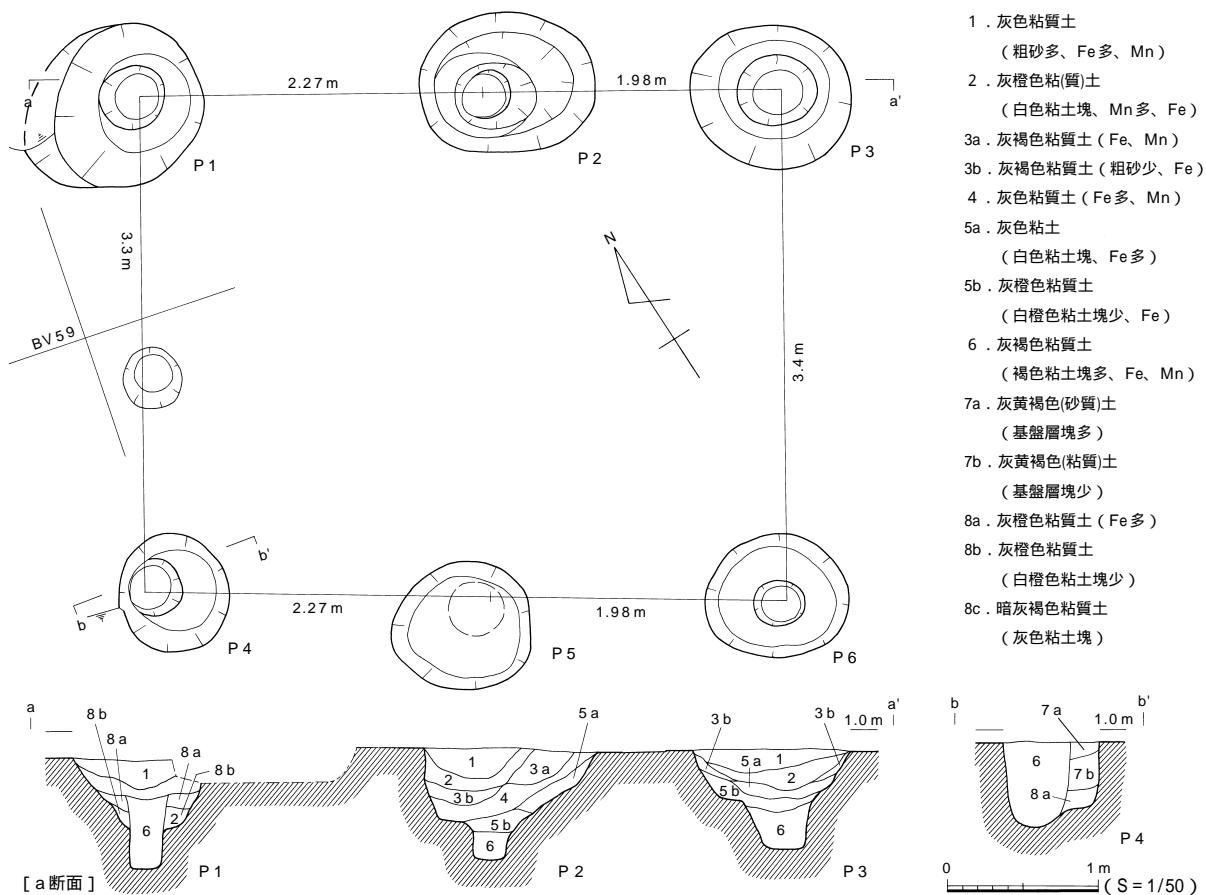


図26 掘立柱建物1

掘立柱建物2(図27)

調査区の中央部やや東、BV 57区で検出した。掘立柱建物1の東側に隣接する。両建物の柱穴間の距離はわずか0.8m前後である。検出面は標高0.86～0.89m(中心は0.88m)で、10層にあたるが、本来は9層中からの掘削と考えられる。

建物の規模は、柱穴が6本の可能性を考えて2間×1間の建物を想定した。主軸方向はN 31°Eである。建物1とは数度の違いはあるが、ほぼ共通すると評価される。桁行は西側(P1～3)で3.15m、東側(P4～6)で3.16m、梁行は北側(P1～4)で3.2m、南側(P3～6)で3.34mを測る。柱間は西側(P1～2・P2～3)で1.68m・1.57m、東側(P4～5・P5～6)で1.62m・1.54mとなる。

柱穴は、直徑0.6m～0.8m前後、深さ0.4～0.6m前後(底面レベル: 0.3m～0.45m)を中心とする。大半の柱穴(P1・3～6)では柱痕を残し、埋土には基盤土層がブロック状に包含される傾向も共通する。全体的な特徴は、建物1における南側柱穴列(P4～6)との類似性が高い。その中で、P2のみは、直徑0.4m前後、底面のレベルは標高0.55mの数値が表しているように、小形で浅い貧弱な形態を呈しており、検出面の低さ(標高0.74m)・規模・埋土などの点で、他の柱穴と異なる。埋土は、基盤土層塊も含まない単一層で柱痕も残さない。また、P1からP3へのラインからも、若干ずれる点も気にかかる。本遺構の柱穴と共に持つP5との位置関係から、本遺構を構成する柱穴の可能性を考えたが、後述する杭列1および周辺に数基点在する柱穴との形態的特徴に意味を求めるに、本柱穴を含めて杭列1を南側に延長させることも可能かもしれない。

掘立柱建物1 柱穴一覧

柱穴番号	検出高 (標高m)	直 径 (m)	深 さ (m)	底面高 (m)	柱痕径 (m)
1	0.93	108×125	0.84	0.09	0.21
2	0.88	117×0.95	0.73	0.15	0.23
3	0.88	105×0.95	0.63	0.25	0.3
4	0.93	0.78×0.73	0.57	0.35	0.4
5	0.89	0.93×0.85	0.43	0.46	0.35?
6	0.88	0.95×0.83	0.455	0.42	0.33

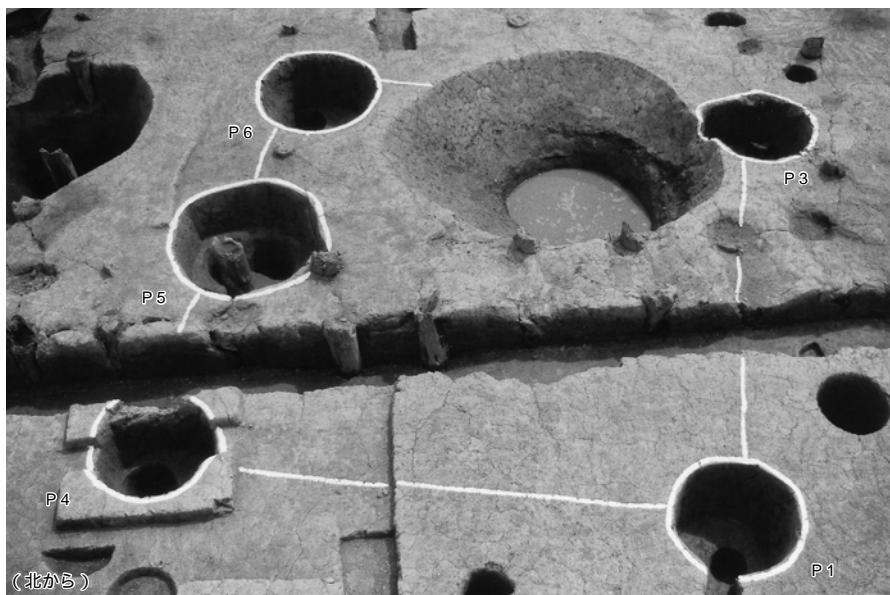
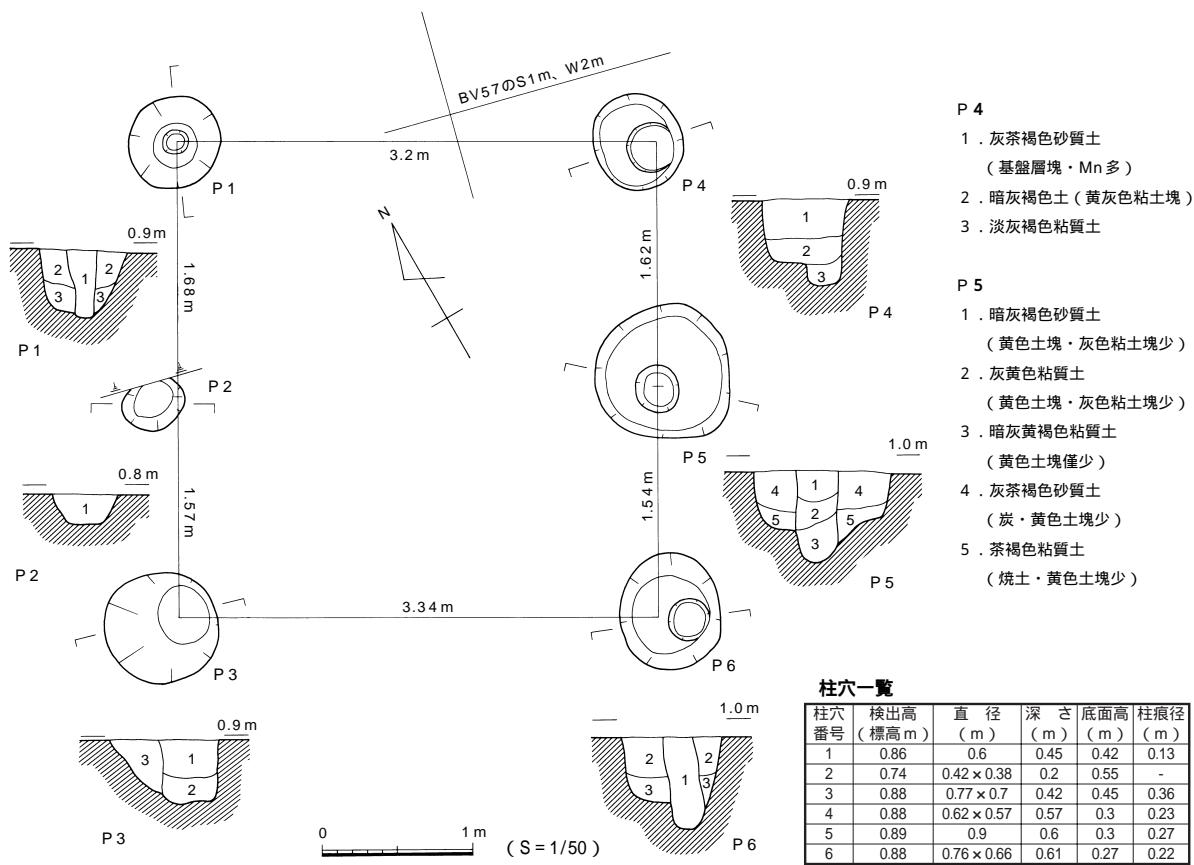


図27 掘立柱建物 2

掘立柱建物 1 との関係は建物間の距離が近すぎる点から、その存在時期に先後関係が考えられる。しかし、全体的特徴は類似しており、その差は近接した連続的なものであろう。

本遺構の時期は出土遺物がないため不明確であるが、遺構の諸関係から古墳時代初頭に属すると判断される。

c. 杣列

杭列1（図28）

調査区の中央部やや東より、BU 57区に位置する。掘立柱建物2の北側に隣接する。両遺構の柱穴間の距離は1.5m前後である。検出面は標高0.76~0.93m（中心は0.86m前後）でレベル的には10層にあたるが、本来は9層中からの掘削と考えられる。北側は中世の大形溝23による攪乱が深く及ぶ。

P3をコーナーにおき、北方向と西方向に直交した列という位置関係を示す柱穴5本（P1~5）によって構成される杭列が考えられる。南北軸の方向は、N29°Eを示し、掘立柱建物1とほぼ一致する。

規模は、P1~3によって構成される南側列で2.8m、P3~5によって構成される東側列で2.3mを測る。杭の間隔は、前者は西から1.5m・1.3m、後者は南から1.1m・1.25mの距離を保つ。

柱穴規模は、直径0.3m~0.5m前後、深さ0.15~0.42m（底面レベル：0.4m~0.6m前後）を示す。また、柱痕が明瞭ではなく、認められないものもある。前述した掘立柱建物の柱穴に比べると、全体的に小形で貧弱な傾向は否めない。

位置関係から確実性の高い5本の柱穴を取り上げたが、その他にも同一遺構となる可能性を示す柱穴が点在する。本遺構の南側では、BV区P1・同P2が約2mの間隔で東側の南北列のライン上に位置する（図13）。建物2のP2もBVP2から東へ90°振ったライン上にあたっており、本遺構と結びついても矛盾はない。北側では攪乱の存在を考慮すると、本遺構の北端がさらに北側に伸びることも否定できない。このように本遺構は南北に広がる可能性を含む。

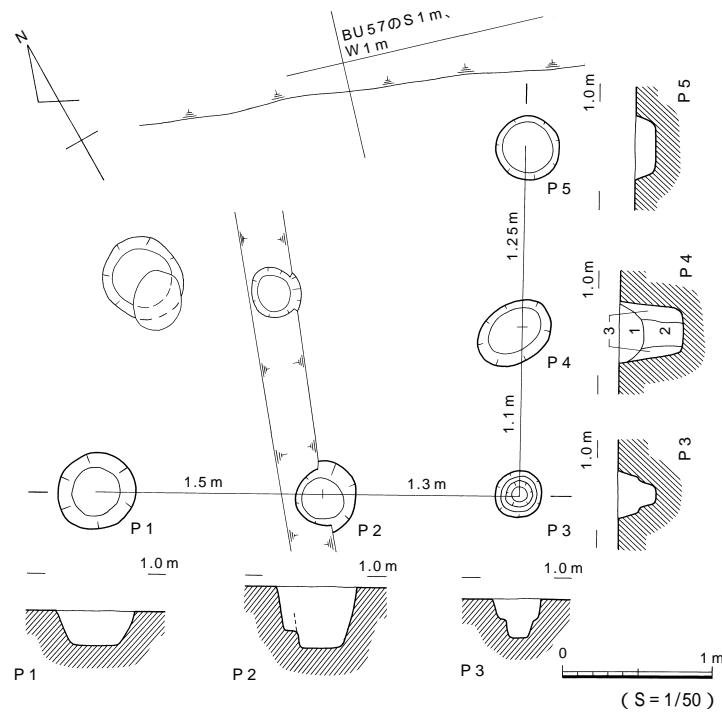
遺物は出土していないため詳細は不明であるが、所属時期は検出面や周囲の遺構などから古墳時代初頭と判断される。

d. 井戸

井戸1（図29~34、図版1・10）

調査区東端の中央付近、BU 56区で検出された。西半部は溝21~23によって破壊された上、南半部には溝24が重複するなど、西半部~南半上部を大きくえぐり取られているが、深く掘り込まれた下半部は本来の状況をとどめていた。検出面は、中世遺構の完掘壁面において確認したため、9層に予想される本来の掘削面からはかなり下がる10b層、標高0.23~0.53mとなった。

上面形は、南北0.95m・東西0.75mを測る不整円形が残されているが、本来は少なくとも1.1m×0.95m程度の



柱穴一覧

柱穴番号	検出高 (標高m)	直 径 (m)	深 さ (m)	底面高 (m)	柱痕径 (m)
1	0.84	0.5	0.22	0.53	-
2	0.93	0.47	0.4	0.53	0.18
3	0.86	0.3	0.26	0.6	0.18
4	0.89	0.52×0.38	0.42	0.43	0.18
5	0.76	0.43	0.15	0.63	-

図28 杭列1

- P1 : 灰色土 (Fe多)
- P2 : 灰褐色砂質土 (基盤層塊)
- P3 : 暗灰褐色土
(青灰色土塊多、Mn多)
- P4 : 1. 暗青灰色土 (焼土・炭少)
2. 暗青灰色粘質土
3. 灰茶褐色土 (Mn)
- P5 : 灰色土 (炭、黄白色土塊)

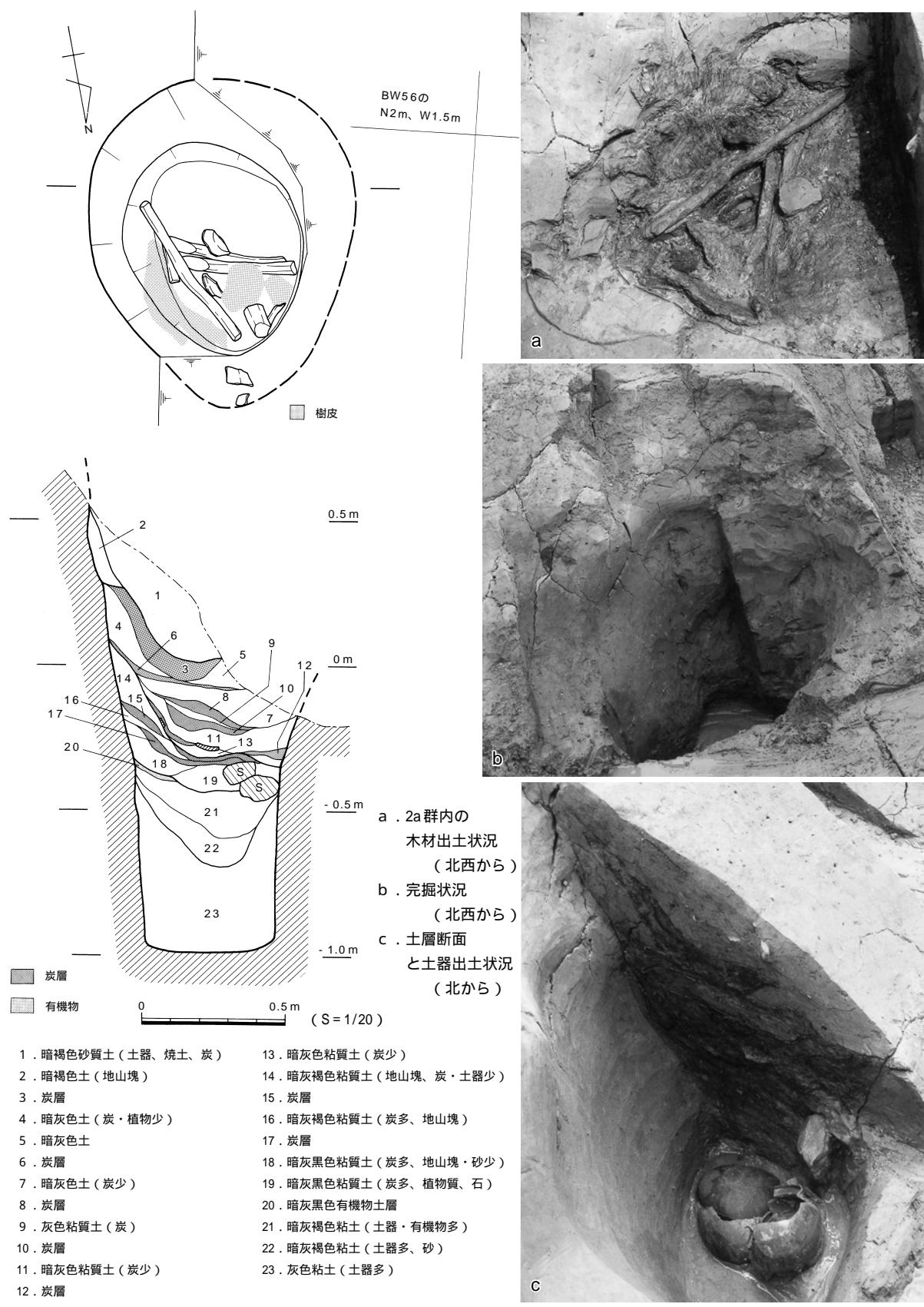


図29 井戸1

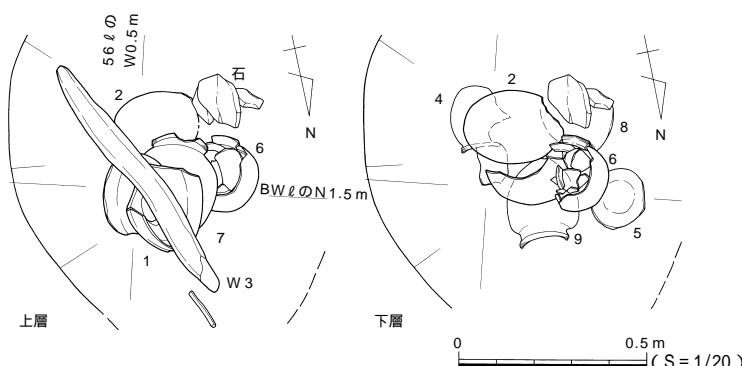


図30 井戸1遺物出土状況

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	特徴
W 1	板材	(8.75)	5.0	1.15	サカキ	柾目、断面台形状に側縁、下縁を加工
W 2	加工木	(14.8)	3.9	3.4	-	全体に湾曲、何かの把手か?
W 3	杭	(43.9)	3.2	3.2	-	自然木の先端を加工して利用、全体に樹皮残存

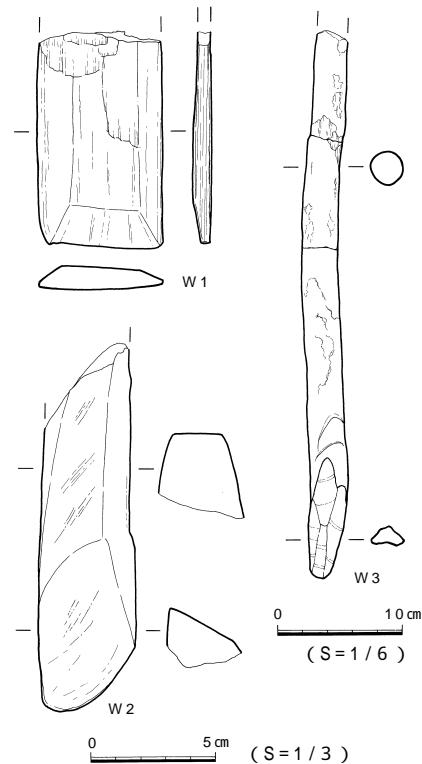
図31 井戸1出土遺物(1) 木製品

円形の形態が復元される。底面は標高 - 0.99 m に位置し、 0.65×0.5 m の不整円形を呈する。上面からの深さは 1.52 m を残す。断面形は筒状の逆台形を呈する。

埋土は、23層に細分したが、その包含物などの内容から四群に大別される。

1群は 1 ~ 2 層である。暗褐色土で砂質が強い。土器・焼土・炭化物を包含する。土器は小片が多く、炭化物も分散的であるが、焼土の包含は他の土層には認められない。底面は標高 3 cm 付近にある。

2群は 3 ~ 19 層である。炭化物を包含する土層あるいは炭化物土層の存在が特徴であり、それに加えて、非常に薄い土層が互層構造を持ちながら堆積する点も注目される。それらは、炭化物層に挟まれる形で堆積する土層が、炭化物をほとんど含まない(暗)灰色土あるいは粘質土



である2a群(3~14層)と、炭化物を多く含む暗灰褐色あるいは暗黒灰色粘質土である2b群(15~19層)の上下にまとめられる。2a群は35cm程度の厚みを有し、下面是標高-0.3m付近に求められる。木の枝や加工材

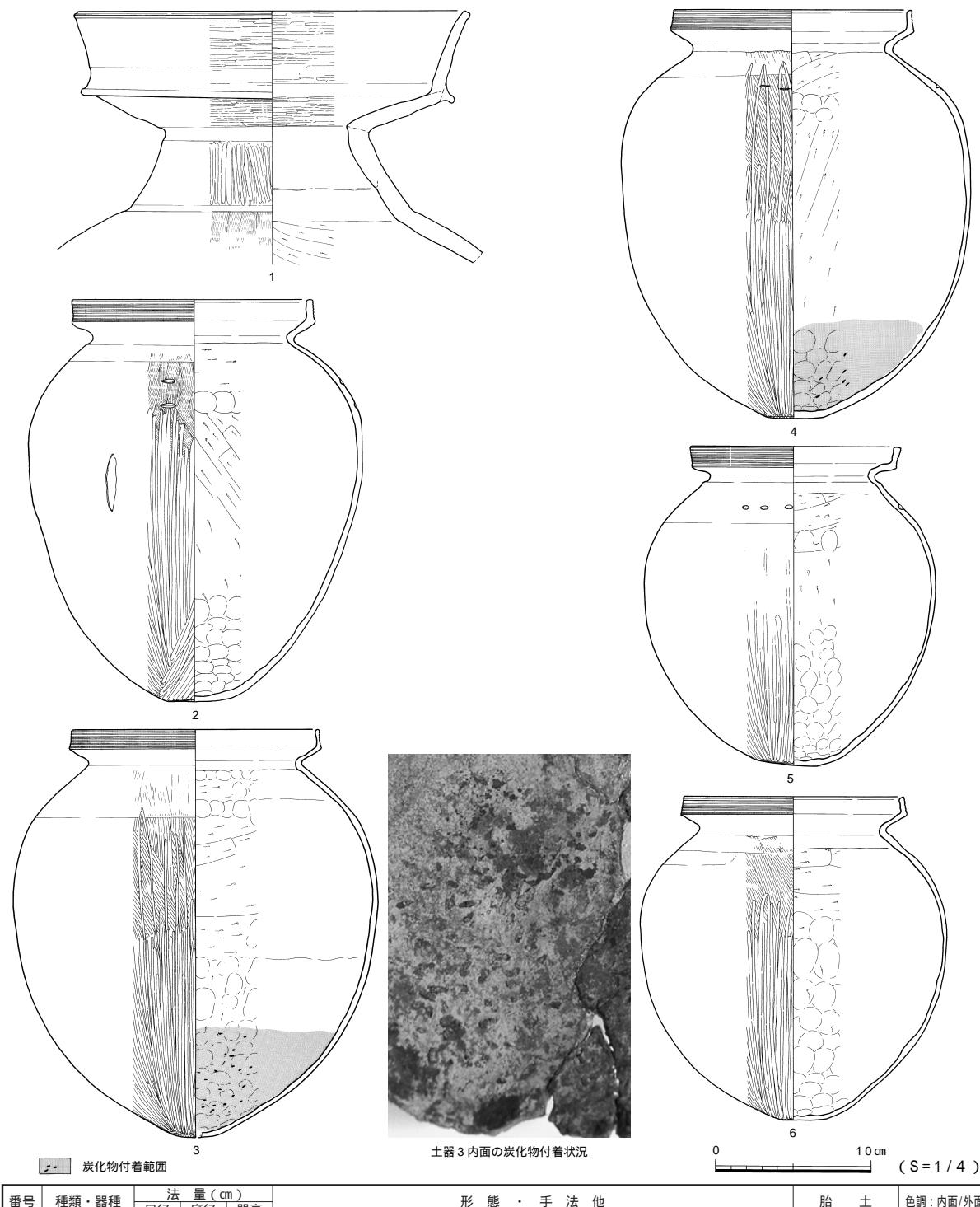


図32 井戸1出土遺物(2)

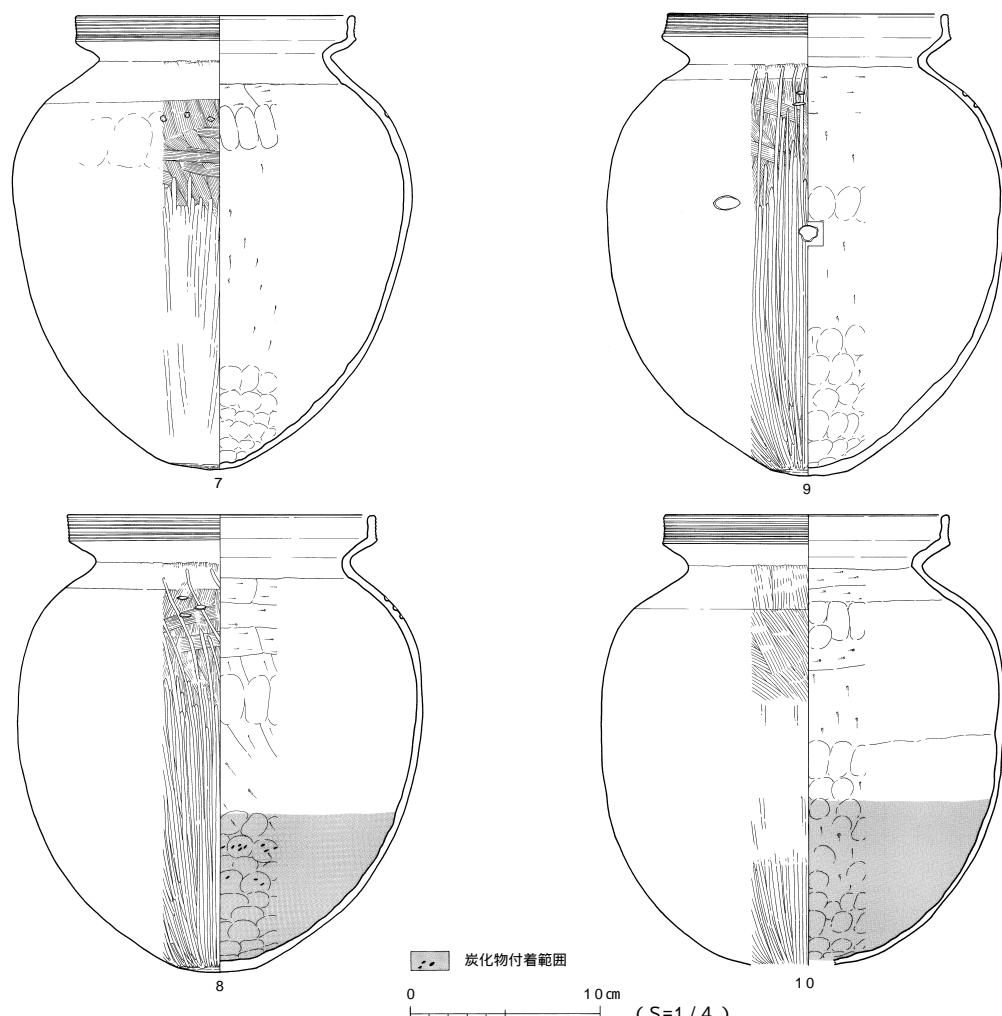
番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師器・壺	24.8	-	-	(口)ナデ後密な箇磨き(頸外)縦ハケ後箇磨き(頸内)横ナデ(胴外)ハケ、やや摩滅 口縁櫛描沈線7条(外)ハケ後箇磨き・煤付着、縦3.7cm横0.6cmの穿孔、横1.0cm縦0.3cmの刺突2ヶ所	微砂、均質、角閃石	薄黄灰/明橙褐
2	土師器・甕	15.5	4.6	25.7	口縁櫛描沈線7条(外)ハケ後箇磨き・煤付着、縦3.7cm横0.6cmの穿孔、横1.0cm縦0.3cmの刺突2ヶ所	微砂、均質、角閃石	暗褐/薄黄灰
3	土師器・甕	*16.0	*3.1	*26.1	口縁櫛描沈線8~9条(内)底部炭化穀物(外)煤・肩部に吹きこぼれ痕、3/5~1/8残存	微~細砂、均質	鈍い黄褐/黒
4	土師器・甕	15.4	3.6	26.6	口縁櫛描沈線8~9条(内)底部炭化穀物・煤付着(外)肩部にタタキ面、横0.7cm縦0.1cmの刺突2ヶ所	微~細砂、赤色粒	暗褐/灰
5	土師器・甕	13.5	4.0	20.4	口縁櫛描沈線9~10条(外)肩部にタタキ面・煤付着・上半摩滅、横0.5cm縦0.2cmの刺突3ヶ所	細砂、均質	暗灰褐/黄灰
6	土師器・甕	14.0	2.8	20.7	口縁櫛描沈線7~8条(内)箇削り後押圧(外)ハケ後密な箇磨き・煤付着、口縁1/6欠	微~細砂、均質	茶褐/黒褐

のほかに土器の小片が散布し、さらに、周辺に広がる樹皮によって井戸の全面が覆われるような状況が確認された（図29-a）。2b群では15cm弱の厚みが認められる。下面是標高 - 0.44 m付近にある。2a群下面から出土した遺物に続いて、2b群では一辺10~15 cmの角礫・壺の口縁（図32-1）さらに3群以下に続く甕群の上部が姿を現す。2群の最下層にあたる19層では3群の特徴となる植物遺体の包含が残る。

3群は20・21層で、植物遺体の包含が特徴である。1群と2群の境と同様に、中央部において4群に向かって深く落ち込むような堆積を示し、土層の厚さは15 cm程度となる。同位置での下面レベルは標高 - 59 mを測る。また、上面つまり2群との境には植物遺体が層状に堆積する（20層）。遺物は完形の甕あるいは大形の甕片が4群から連続的に認められる。

4群は22・23層である。灰色系の粘土層の堆積で、大形破片あるいは完形の土器が含まれる以外に際だった包含物を有さない点が特徴である。土器は底面から重なり合って上層に続く。

以上の状況から、埋没過程を復元してみよう。井戸廃棄段階において、数個体の甕が底部におさめられ、さらにその上にも甕が重ねられていく。その過程においては4群の堆積を伴う。一定の土器を納めた段階に大量の植



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
7	土師器・甕	14.4	3.8	24.0	口縁櫛描沈線7条（内）箇削り痕少・炭化物（外）ハケ・煤多、径0.3cm程の刺突3ヶ所、器壁厚手	微～細砂、均質	暗褐
8	土師器・甕	16.2	4.1	24.2	口縁櫛描沈線7条（内）底部に炭化穀物（外）ハケ後箇磨き、横0.6cm縦0.2cmの刺突3ヶ所・煤多	微～細砂	暗褐
9	土師器・甕	14.8	3.9	24.4	口縁櫛描沈線6条（内）箇削り後板ナデ（外）穿孔（1.5×0.8cm）2ヶ所・刺突2ヶ所、底部器壁厚、煤	微砂、均質	暗褐
10	土師器・甕	15.0	-	-	口縁櫛描沈線8~9条、器壁薄い（内）炭化穀物（外）ハケ後箇磨き・煤多、2/3残存	細砂、均質	黄橙～黒/黄褐

図33 井戸1出土遺物(3)

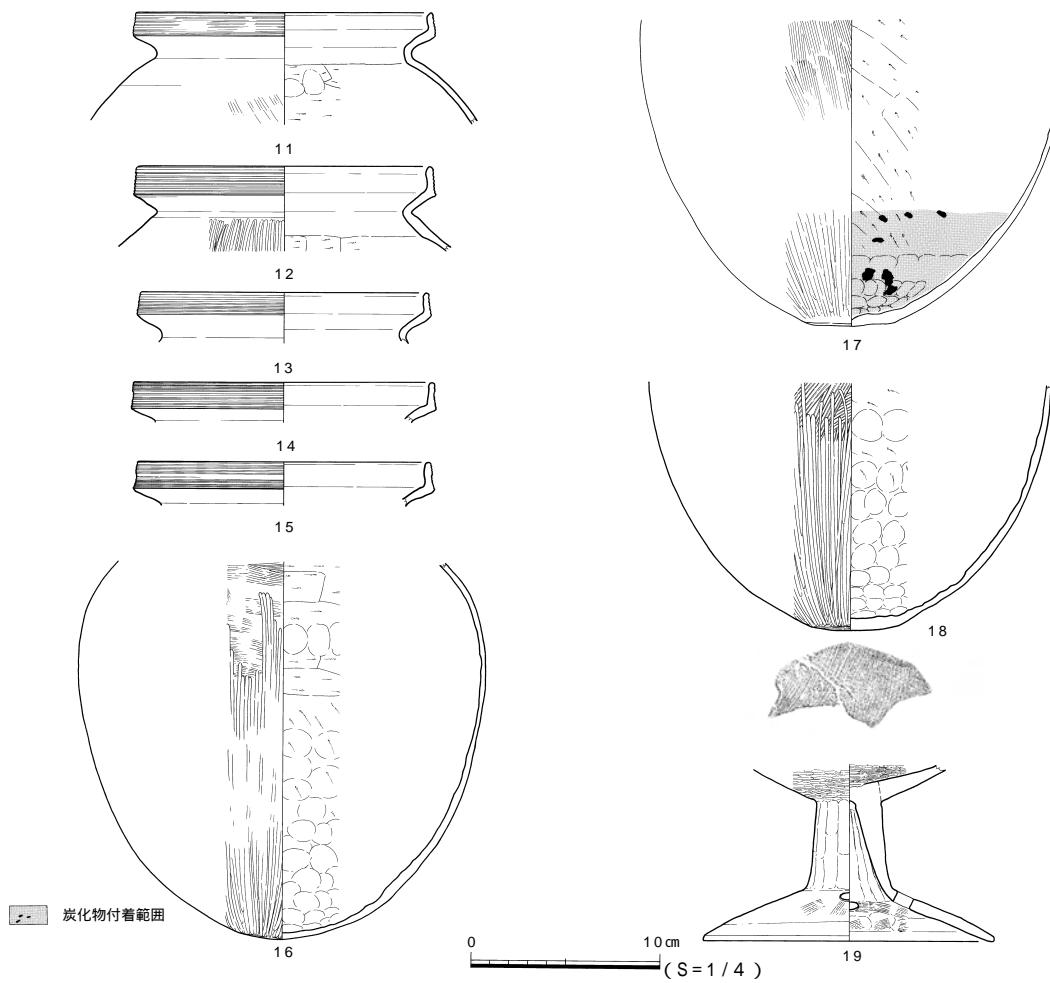


図34 井戸1出土遺物(4)

物が井戸に投棄され、3群の形成が進む。そして最終段階に角礫が置かれ、2b群の堆積が始まる。この段階に土器はまだ姿を見せており、その後、炭化物の大量投棄が始まる。最後に炭化物層を形成するような行為で遺物の埋納は終了する。2b層の形成である。その上面では、木材や樹皮によって全面が覆われる。その後は、炭層と比較的汚れのない土層を交互に埋めていき、最後に大量の炭層で覆うことによって2a群が形成される。さらに炭化物よりは焼土を伴う行為へと変化し1群を形成し、最終的な埋没へと進む。

このように、井戸廃棄において、祭祀的な行為がいくつかの段階を追って、内容を少しづつ違えながら行われていることが想定される。

遺物は壺1点・甕17点・高杯1点があげられる。完形あるいはそれに近い甕は9点にのぼり、その多さが際立つ。甕の内部に炭化物の付着を残すものが多く、穀物粒が確認されるものを含む。壺は頸部～口縁部のみで、頸部以下の破片は確認されない。頸部下端も整っており、この形状で使用されたことも十分考えられる。

所属時期は、出土遺物から古墳時代初頭が想定される。

e. 土坑

土坑1（図35）

調査区の西端中央部にあたるBU・BV60区に位置する。竪穴住居1の南約8m付近である。標高1m、9層で検出された。西側あるいは南側の一部は調査時の側溝によって破壊される。

平面形は2.17m×1.81mを測る円形である。底面は標高0.85mに位置し、直径1.5m前後の円形を示す。深さは検出面から0.17m程度であり、全体に広くて浅い形態である。断面形はやや凹凸のある皿状を呈する。

埋土は三分しているが、その大半はマンガンの沈着が顕著で、その差によって細分した1・2層で占められる。一方、底部には基盤土層に類似した砂質土の3層が上層とは区別される堆積を見せる。しかし、土坑の性格を考える上で特徴的なものは見いだせない。

出土遺物は少なく、細～小片である。壺・甕・高杯・鉢・ヰなど多種にわたる破片が40片程度含まれる。

所属する時期は古墳時代初頭である。

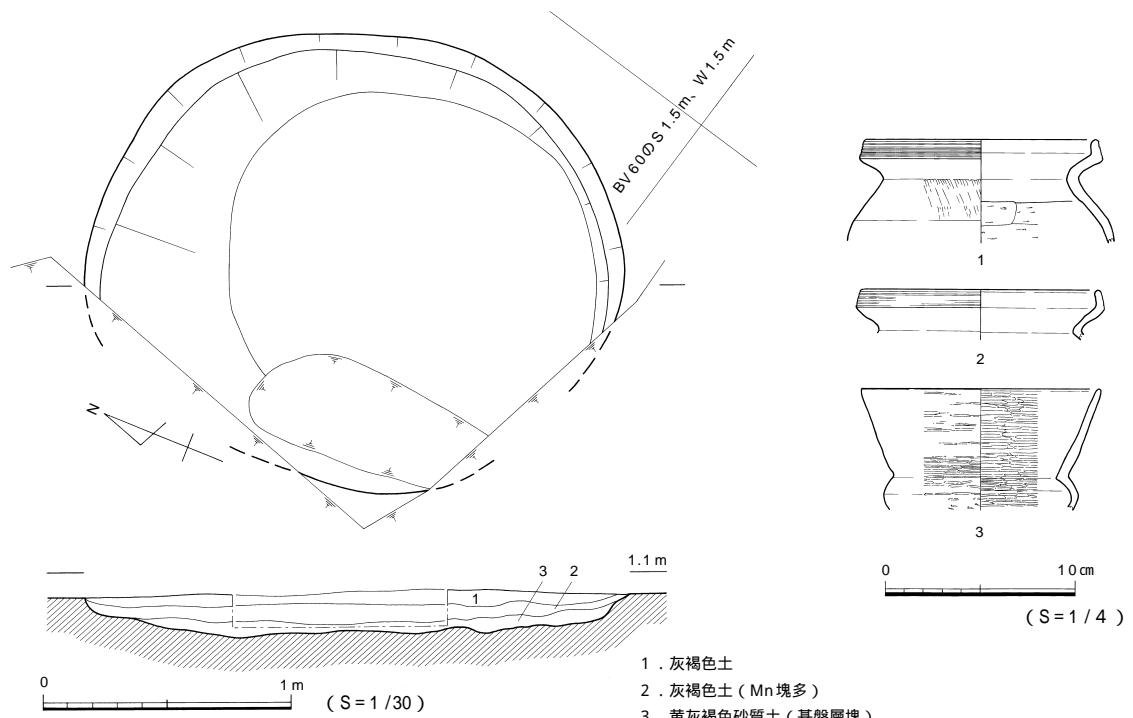


図35 土坑1・出土遺物

土坑2（図36）

調査区の西端部、やや南よりにあたるBW60・61区に位置する。検出面は10a層、標高0.85mであるが、西壁面の土層では同0.9m前後まで上昇する。西半分は調査区外に伸びるため確認できない。

平面形は直径1mの円形が復元される。底面についても、標高0.33mにおいて直径0.65～0.7mの円形が求められる。深さは検出面から0.6mであり、U字形に掘り込まれた深めの形態を示す。

埋土は六分しているが、それぞれの特徴は以下のようになる。1層は上層である7層に類似する。2・3層は鉄分の沈着度合いの差による細分であり、一連の堆積土層と言える。4層は炭化物が薄層状に堆積している土層であり粘性がやや強い。5層は粘土がブロック状に含まれる。6層は明瞭な包含物が認められない比較的均

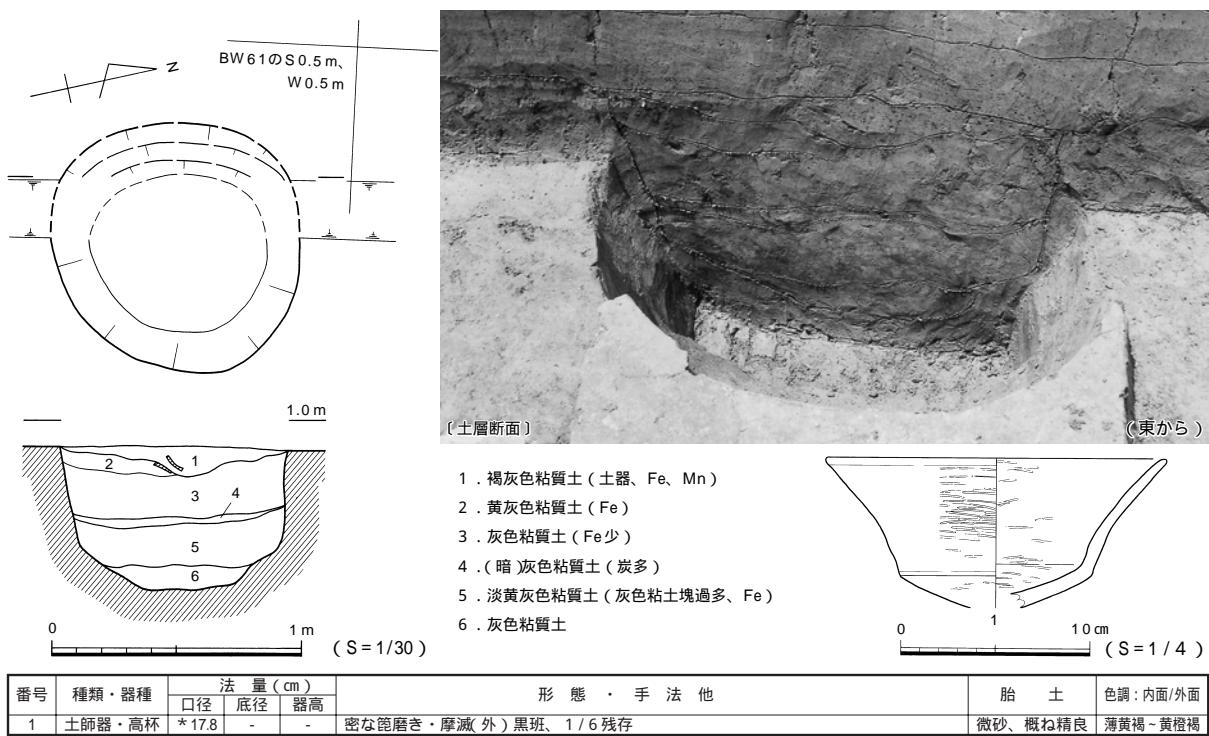


図36 土坑2・出土遺物

質な土層である。こうした特徴から、6層は使用段階の堆積土の可能性が考えられるほか、埋め土と評価される5層が堆積後、やや湿地的な状況を経て最後に1層の流入土で覆われるという埋没過程が復元される。

出土遺物は小片3片のみである。図化した高杯片や検出面から、本遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

土坑3(図37)

調査区の南西部にあたるBW 60区に位置する。土坑2の南東約4m付近である。検出面は標高1.02m、9層下半であったが、検出時に中心的な埋土である粘土を削り込んでいたことから、本来の掘削面が9層上面にあがることは十分予想される。

平面形は東西0.8m・南北0.56mを測る楕円形である。底面は標高0.75mに位置し、深さは検出面から0.27mであり、掘り方断面はボウル状を呈する。埋土で特徴的なのが1層の粘土層である。鉄分の沈着が多少認められるが、白色の強い灰色の粘土は比較的純度が高い。下層(2層)では、粘土の包含はわずかであり、鉄分の多さや焼土ブロックが特徴である。粘土の存在が土坑の性格を考える上で重要となろう。

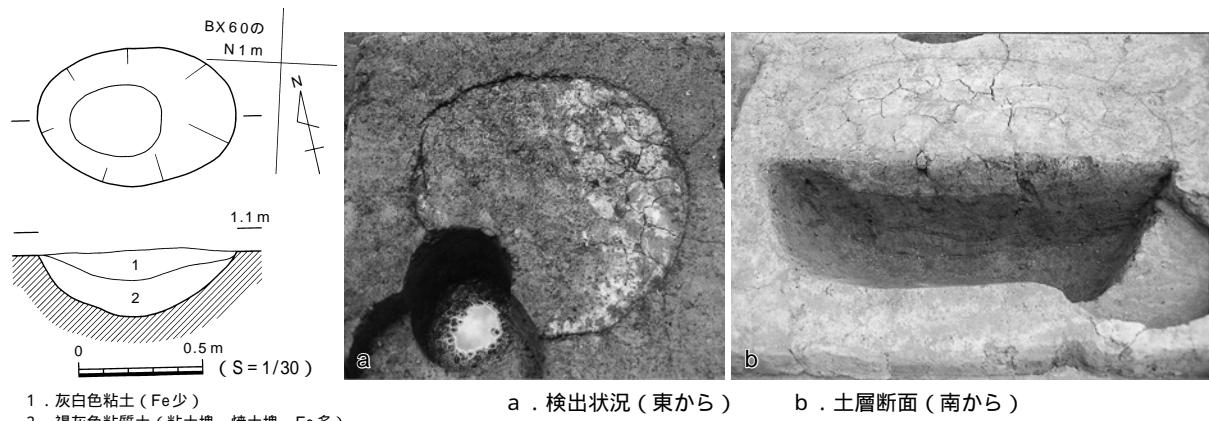


図37 土坑3

出土遺物は皆無であるが、検出面から本遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

土坑4（図38）

調査区の南西部にあたるBW60区に位置する。土坑3の西側約0.8mにあたり、近接している。検出面は標高0.99m、9層下半であったが、検出時に中心的な埋土である粘土を削り込んでいたことから、本来の掘削面は9層上面にあがると予想される。

平面形は南北0.58m・東西0.47mを測る円形あるいは橢円形を呈する。底面は標高0.79mに位置し、深さは0.19mである。掘り方断面はボウル状を呈す。

埋土で特徴的なのが1層の粘土層である。白色を強めた灰色粘土で、鉄分の沈着が多少認められるが、比較的純度の高い粘土の堆積である。2層・3層は、鉄分の沈着度合いと粘性の問題で細分したが、粘土ブロックを多少包含する点では共通する。土坑3の2層に類似する。

以上のように、本土坑は形態面あるいは埋土などほとんどの特徴において土坑3と共に通しており、同様の機能を有した土坑といえる。本地点周辺において、粘土を利用した何らかの作業が行われていた可能性を示唆するものである。

出土遺物は認められないが、検出面などから、所属する時期は古墳時代初頭と判断される。

土坑5（図39）

調査区の北東部にあたるBS57区に位置する。竪穴住居4の北東コーナーから東へ0.6m程度の距離である。検出面は標高0.88m、10a層である。

平面形は南北0.7m・東西0.53mを測る橢円形を呈する。底面は標高0.63mに位置し、直径0.26~0.3mの円形を示す。深さは検出面から0.23mであり、掘り方断面形は緩やかな逆台形である。検出面では、炭化物と焼土の分布が 0.8×0.6 mの範囲に顕著に認められ、さらに、その北東側周縁部では炭化物のみが分布しており、全体としては $1m \times 0.8m$ 程度の広がりを確認することができる。

埋土は5層に細分しているが、堆積状況や土層の特徴から1~3層と4・5層に大別される。

前者は1・2層と3層に分けられる。1・2層は黒灰色の粘性が強い土層であり、炭・焼土の包含が顕著である。炭層あるいは焼土層といえるほどの量が認められる。両土層の細分は炭化物と焼土の包含率の差によるもので、1層では焼土の方が、2層では炭化物の方が、それぞれ優位にある。一方、3層は、包含される炭化物は際だって多いわけではなく、むしろ基盤土層がブロック状に包含されている点に特徴がある。炭化物の包含とその影響による暗色化を除くと、下層の4・5層との類似性が指摘される。

後者(4・5層)は砂質の強い黄色系の土層であり、両土層ともに基盤土層が粒状に包含される点で類似する。全体には汚れは少なく基盤土層に近い。また、1~3層が4・5層の堆積を切り込んだラインを示している点から、両土層が本土坑の使用に直接関わるとするならば、1回の掘り返しがあったこととなるが、もう一つの解釈として、4・5層は基盤層へのしみこみ的な作用で形成された土層という可能性も残る。

以上の状況から、本土坑は加熱作業に係わる遺構であることが窺われる。そして作業に伴う土層が1・2層さらには上面を覆う炭化物・焼土の分布を形成したと評価される。

出土遺物は小~細片の数点が含まれる。図化可能な土師器鉢(図39-1)あるいは検出面などから、本遺構の所属時期は古墳時代初頭と考えられる。

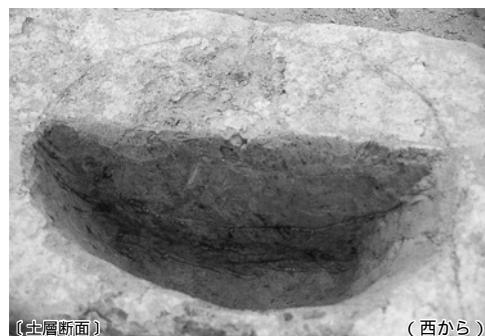
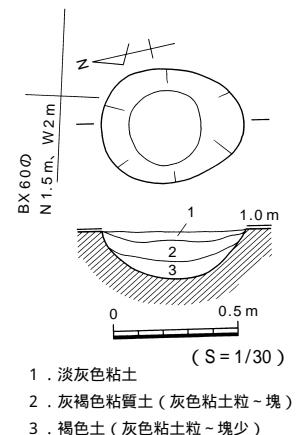


図38 土坑4

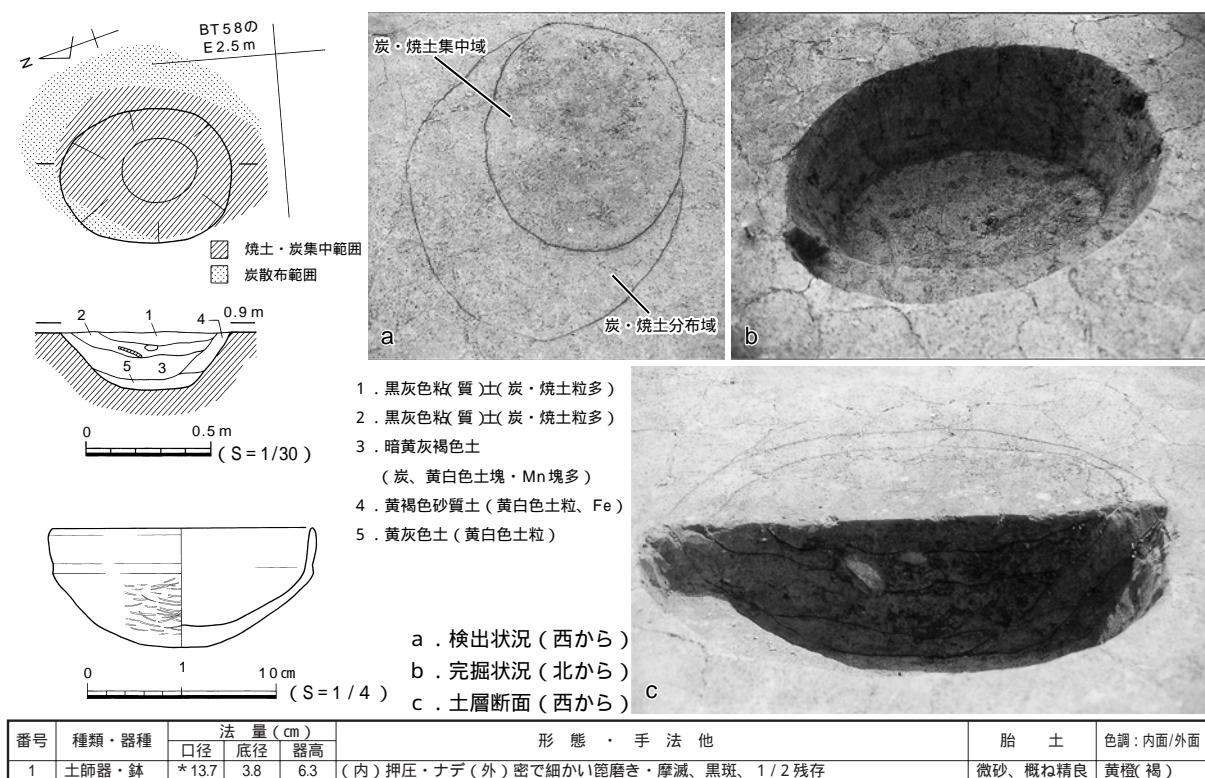


図39 土坑5・出土遺物

土坑6(図40)

調査区の中央部やや西よりにあたるBU 59区に位置する。溝1の西端部に重複し、土坑7・溝3の下部にあたる。竪穴住居4の南約5m付近である。検出面は標高0.93m、10a層である。

平面形は直径1~0.9mの円形を呈する。底面は標高0.77mに位置し、深さは検出面から0.15mを測る。掘り方断面形は皿状に近い。4分される埋土は上・下層に大別される。上層は暗灰色系の土層で、1層に焼土塊が集中する点が特徴である。下層は黒灰色土であり、3層に炭化物を多く含む。こうした堆積状況から、炭化物が堆積した後、焼土塊が上層に投棄されるという過程が復元され、本土坑が加熱作業に係わる遺構であることが窺われる。

本土坑と溝1の関係は、両遺構の位置関係や同溝においても焼土の集中が認められる点から、同一遺構の可能性も残す。ここでは、本遺構が平面的に完結する可能性が高いことから別遺構としたが、両遺構間の関連性の高さを指摘しておきたい。

出土遺物は皆無であるが、本遺構は、検出面から古墳時代初頭に属すると考えられる。

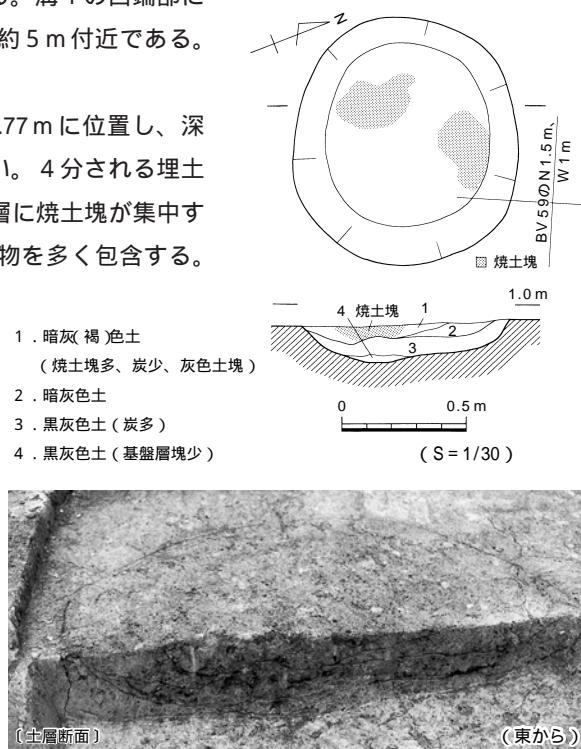


図40 土坑6

土坑7（図41）

調査区の中央部やや西よりのBU 58・59区に位置する。豊穴住居4の南側である。遺構の重複が顕著に認められる場所にあたる。本土坑の上部には溝3、下部には溝1が位置し、さらに西端部は既述した土坑6が下部に重複する（図42）。

検出面は標高0.99m、9層 下半である。平面形は東西2.1m、南北0.85～1.01mを測る長方形を呈する。底面は標高0.76mに位置し、1.87×0.68～0.82mの長方形を示す。深さは検出面から0.24m（一部では0.35m）であり、掘り方断面形は逆台形である。

埋土は四分しているが、淡灰色系の上層（1・2層）と暗灰色系の下層（3・4層）に大別される。鉄分あるいはマンガンの沈着差などによる細分が可能である。全体に特徴的な包含物などは確認されておらず、溝1あるいは土坑6の埋土とは違いを見せる。土層はいずれも水平堆積を示す。

出土遺物は僅かに高杯・鉢の小片を数点含むが、口径を復元できて図化できるものはない。

本土坑の時期は、遺物あるいは検出面から古墳時代初頭と考えられる。

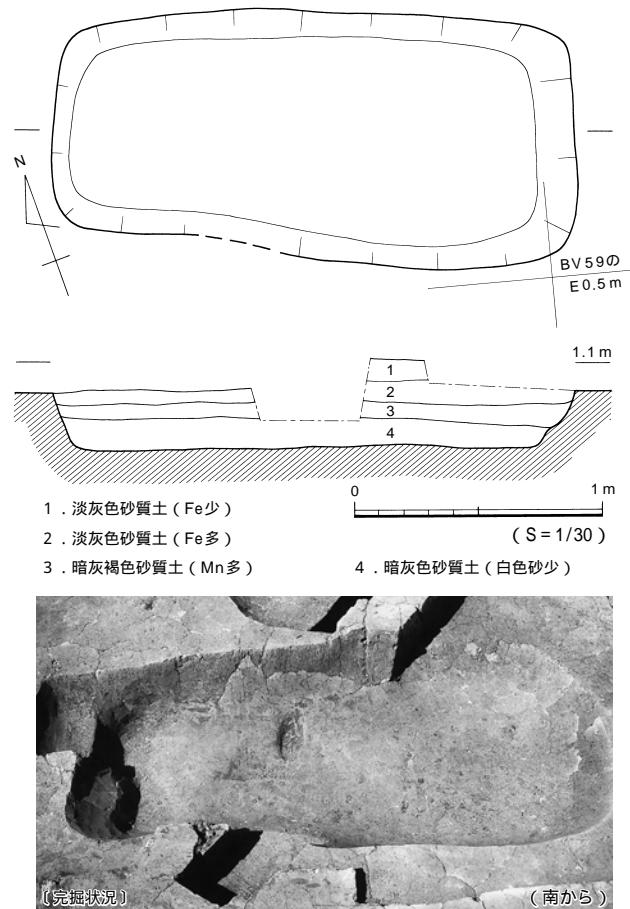


図41 土坑7

f. 溝

溝は 9層 10層において5条を検出した。1条（溝4）は調査区中央部を南北に走る。他の4条（溝1～3・5）は両端部が収束する短いものであり、その内3条（溝1～3）は浅い不整形な形態を有し、土坑に近い点で前者とは明瞭に区別される。また、その分布は集中する傾向もあり、共通した形成要因が予想される。

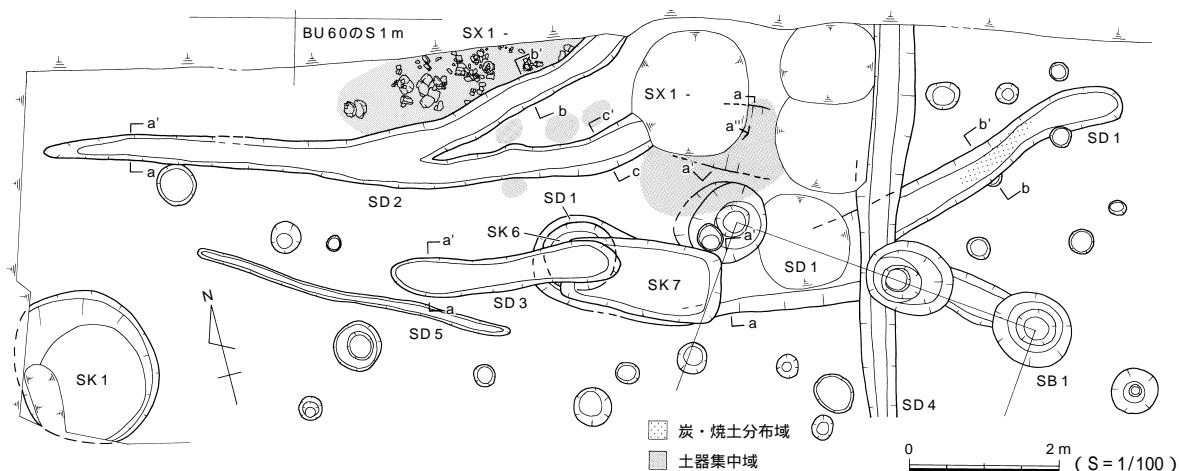


図42 BU 59区周辺遺構分布図

溝1(図42・43)

調査区の中央部、BU 57~59区に位置する。土坑6・7、溝3・4、それに加えて掘立柱建物1の柱穴が上部に重複する。検出面は西側では標高0.91~0.93m、東側では同0.79mで、いずれも10a層にあたる。

平面形態は、東西方向にやや弓なり状を呈しながら伸びる。東半分では二股（北側と南側）に分岐する可能性がある。長さは、東西約8m、幅は、分岐部を挿んで、西半部が1.05m、東側が0.5~0.55mを測る。分岐部の状態は、溝4によって破壊されているため不明である。底面は標高0.67mに位置し高低差は認められないが、検出面からの深さは西半部で0.25m、東側で0.12mとなる。これは検出面の高低差が影響したものである。ボウル状の断面形を呈す。

埋土は灰褐色系の土層であるが、1層に炭化物・焼土を含む点が特徴である。b断面の位置では、その包含が顕著であり焼土層を形成する。平面的にもそうした分布状況を確認することができる。

本溝は形態的特徴が溝2と共通する。また、焼土・炭化物の分布からは加熱作業の存在を想定することもできる。それは、重複する土坑6との関係を窺わせる。こうした状況から、本地点、つまり竪穴住居4の南側周辺において加熱作業が行われていた可能性が考えられ、溝2あるいは本溝のような不規則な溝状遺構は、水路というよりはそうした作業に伴う遺構と評価できそうである。

遺物は出土していないため、本遺構の詳細な時期は不明であるが、遺構の重複関係などから、古墳時代初頭に属すると想定される。

溝2(図42・44)

調査区の中央部西よりにあたり、BU 59~60区で検出された。検出面は標高1.08~1.10m、9層である。土器溜まり1の上部に位置する。東端部の状態は、中世溝群あるいは近世土坑による破壊で不明である。

平面形態は東半部が二股に分岐する。全長は、東端部が溝4以東には確認されないことから、9m程度と推定される。幅は0.35~0.5mで、底面は西半部で標高1.01m、東半部で同0.99mを測り、東へ若干の下がりを示す。深さは0.07~0.1mである。断面形は皿状といえよう。全体に小形で不規則な溝状遺構と評価される。

埋土は灰色系の粘性の強い粘質土であり、一部では黄色を帯びる色調も認められる。埋土中には遺物が含まれるが、下部に位置する土器溜まり1に由来する遺物の混入と考えられる。

所属時期は、遺構の重複関係や出土遺物などから古墳時代初頭と想定される。

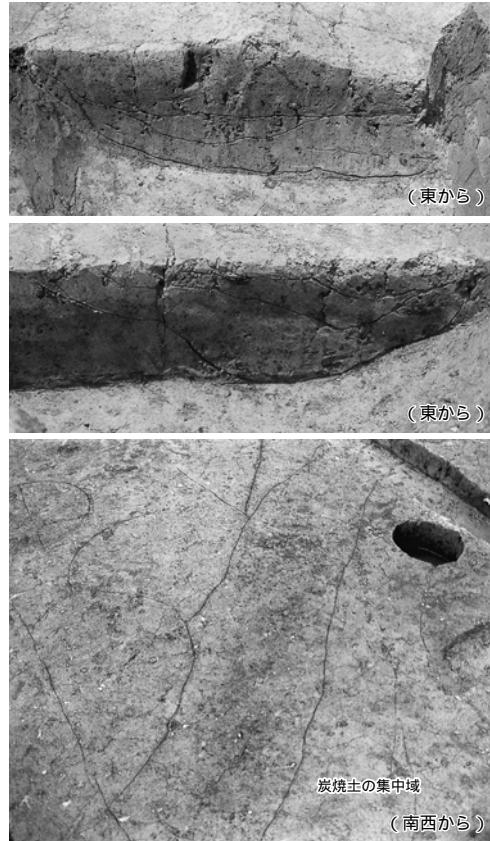
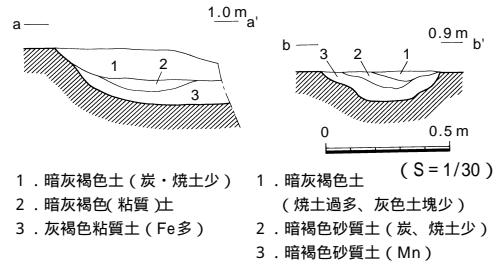


図43 溝1

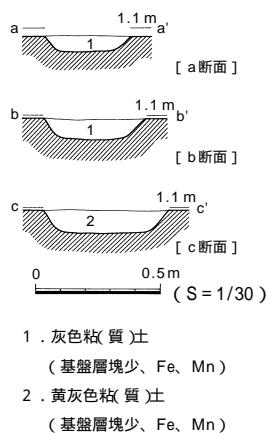


図44 溝2 土層断面

溝3（図42・45）

調査区中央部やや西よりの位置で検出した。BU 59区である。東半は溝1・土坑6・7に重複する。検出面は標高1.09mで、9層にあたる。全体的には東西方向を示し、長さは3.03m、幅は0.45~0.55mを測る。底面は標高1.03mに位置し、検出面からの深さは0.06mと非常に浅い。断面形は皿状を呈する。

埋土は黄灰色の粘性がやや強い粘質土である。際だった包含物は認めがたいが、全体的形態の特徴や位置関係から、溝1と同様の機能を有する可能性が指摘される。

遺物は甕・鉢片が約50片出土しているが、いずれも細~小片である。

本遺構は遺物の時期などから古墳時代初頭に属すると想定される。

番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師器・甕	-	-	-	口縁櫛描沈線9条：浅い、横ナデ	細砂、石英・角閃石	鈍い橙
2	土師器・甕	-	-	-	口縁2条の沈線が残存、横ナデ	細砂、均質	薄黄橙~橙

図45 溝3 土層断面・出土遺物

溝4（図13・46）

調査区中央部、58区を概ね南北方向に走る溝であるが、北側と南側に分かれて検出された。別遺構の可能性もあるが、検出レベルや位置関係、規模あるいは底面レベルなどの状況から一連の溝と捉えて報告する。検出面は標高0.85~0.88mで、10a層にあたる。

北溝は、調査区の北壁面から南に約7.5mの位置まで伸びて収束する。BR~BS 57~58区である。北壁面において、幅は0.57m、底面は標高0.8mに位置する。

9層下面、つまり10a層上面に確認される掘削面は標高約0.9mに位置しており、深さは0.18mを測る。断面形は逆台形を示す。埋土は二分される。上層がやや暗い色調であるのに対して、下層は鉄分の沈着が顕著である。全体に粘性が強い。また、こうした両土層の層界ラインの状況からは、溝の掘り返しが行われた可能性も考えられる（図46-a断面）。

一方、南溝は、調査区の中央付近から調査区の南壁へと伸びる。BU~BX 58区である。北端部は中世溝などによる破壊で不明であるが、竪穴住居4の位置では確認されないことから、底面レベルから考えてBUライン付近で収束する可能性が高い。

残存する長さは約18mである。幅は0.7m、底面は標高0.76mに位置し、検出面からは0.16mの深さを有する。断面形は、やや緩やかな逆台形を呈する。埋土は淡い灰褐色の砂質土であり、基盤土層がブロック状に含まれる。

北溝と南溝は、規模や形態面については共通するが、埋土の点でやや違いを見せる。粘性の違いについては、南東側に向かって地形が下降する傾向があることが影響している可能性が高く、機能面の違いとは考えにくい。ただし、北溝で見られた上下層の関係が南側では確認されていない点は、管理面での違いを示しているのかもしれない。

両溝の間隔は7m程度で、その間には竪穴住居4が位置する。同住居の検出面は、他の住居が9層であるのに対して、本溝と同じ10層である。また、住居の主軸方向と溝の走行方向（北溝：N22°E、南溝：

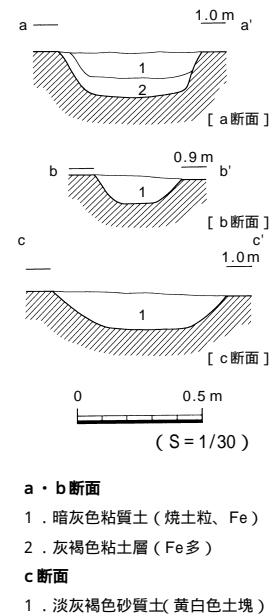
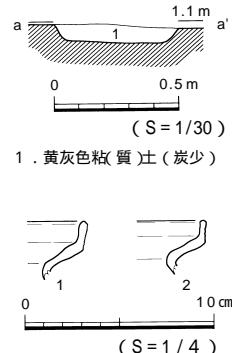


図46 溝4 土層断面

N 19°E) が概ね近い方向である点も注目されるが、両遺構の関連性については断定できない。本溝の機能を考えると、区画を意識した役割も一つの可能性として想定しておきたい。

遺物は土師器の細片が8点あるのみである。本溝の時期は古墳時代初頭と想定される。

溝5(図42)

調査区の中央部西よりの、BU 59~60区に位置する。本遺構の北側には土坑・溝・ピットが集中する。

検出面は標高0.93m、10a層にあたるレベルである。W 62°Nの方向に走る。両端部は緩やかなカーブを描きながら収束しており、全長は4.3mを残すのみである。幅は0.15m、底面の高さは標高0.88mにあり、深さは0.46mである。断面形はボウル状を示す。埋土は、黄灰色粘質土で炭化物が僅かに含まれる单一土層である。

非常に小規模な溝であるという特徴に加えて、その走行方向が掘立柱建物1・2あるいは竪穴住居4の東西方向の軸とほぼ一致している点や、同時期の土坑・溝・ピットなどの遺構が集中する地域の中でも南端部付近に位置している点は、本遺構の性格を考える上で参考になる。こうした周囲の遺構との位置関係から、何らかの区画に関連するような機能が考えられる。

遺物は出土していない。所属時期は、検出面や周辺遺構の関係などから判断して、古墳時代初頭と想定される。

g. 土器溜まり

土器溜まり1(図42・47~52、図版2・7・9)

調査区の中央部西半、BU 58~59区に広がる。溝4以西において、BU ラインから BV ラインの間で、東西方向に遺物の集中的な分布が認められた。上部には、溝2のほか大形の中世溝あるいは近世土坑など多数の遺構が重複しているため、分布域の北側あるいは東側の端部は確認できない。また、分布範囲内においても遺物の分布が分断された状況にあることから、それらが一連のものであるか、あるいは別遺構によるものかの判別を直接的に行うことはできなかった。

遺物は、標高約1.1m前後で検出された。溝2の検出段階にはすでに姿を見せていた。同溝は、本遺構の分布域と主軸を一致させるように上部に形成されている。

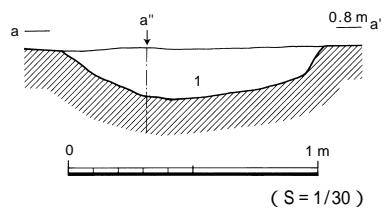
遺物の分布は、溝2が重複することで分断された範囲(土器溜まり1-)と溝1と溝2の間(土器溜まり1-)の2ヶ所に大別される。両範囲の間は近世土坑による破壊で分断されているため、両集中域の関係を明確にすることは出来なかった。

土器溜まり1-では、遺物の堆積は標高1.11m~1.03mの間に確認される。ほぼ同一面に揃った状態で、幅1m程度の帯状の広がりを見せる。掘り込みについては、完掘段階に、若干北側に地形が下がる傾向を見いだすことはできたが、遺物出土レベルにおいて、それに伴うラインを検出することはできなかった。

土器溜まり1-は、土器溜まり1-の分布域に接するが、帯状のラインからは、やや南にはみ出すような分布域となる。同範囲には掘立柱建物1の柱穴(P1)が下部に位置し、本遺構上部を覆う点から、同遺構との関連も考えられる。また、分布範囲内にある近世土坑の壁面では、標高0.93mから0.2mの深さを有する掘り方が確認される。幅は約1m、底面は標高0.73mに位置し、断面形は浅い皿状を呈する。埋土中には土器が多く含まれる。遺物の分布は連続的である。単独の遺構かどうかについては、平面的に残存部分が狭小であるために、断定的な判断は困難である。土器溜まり1-についても、土器溜まり1-と同様に明確な掘り方は確定できない。

遺物は、土器溜まり1-全体でコンテナ9箱分(1箱28ℓ)の量が出土している。

土器溜まり1-に包含される器種は、壺・甕・高杯・鉢・大形鉢・



1. 灰褐色粘質土(土器・Fe・Mn多)

図47 土器溜まり1- 土層断面

小形器台・埴・脚台部のほか、土錐1点と石錐1点があげられる（図49～51）。

壺は、大形器種では破片が1点（図49-5）含まれるのみで、その比率は低い。掲載以外の土器には、壺あるいは大形鉢の破片が10点程度含まれる。甕は、在地に特徴的なもの（同-5～17）が大半を占めるが、他に、くの字口縁の甕（同-18・19）が数点含まれる。いずれも外面に叩き調整が施される。前者の甕では、口縁端部の幅あるいは沈線の状態・胎土・内面調整などの特徴から多少の分類も可能であり、多様性が存在することを窺わせる。甕の量は、掲載遺物以外の破片がコンテナ1箱分（1箱18ℓ）程度認められる。高杯は、二重口縁のものが2点確認される（図50-23・24）。その他の未掲載分の破片はコンテナ1箱（1箱18ℓ）程度である。鉢は、椀形態と甕形態に分けられる上、その中でも形態的なバラツキを見せる。搬入土器としては、壺（図49-3）あるいは甕（同-18～20）が指摘される。

土器溜まり1-では、土器溜まり1-よりも遺物量は少なく、図化可能な大きさに復元される遺物も少ない。器種は壺・甕・高杯・鉢・大形鉢・蓋、そして砥石1点である（図51・52）。掲載遺物以外には、壺の破片

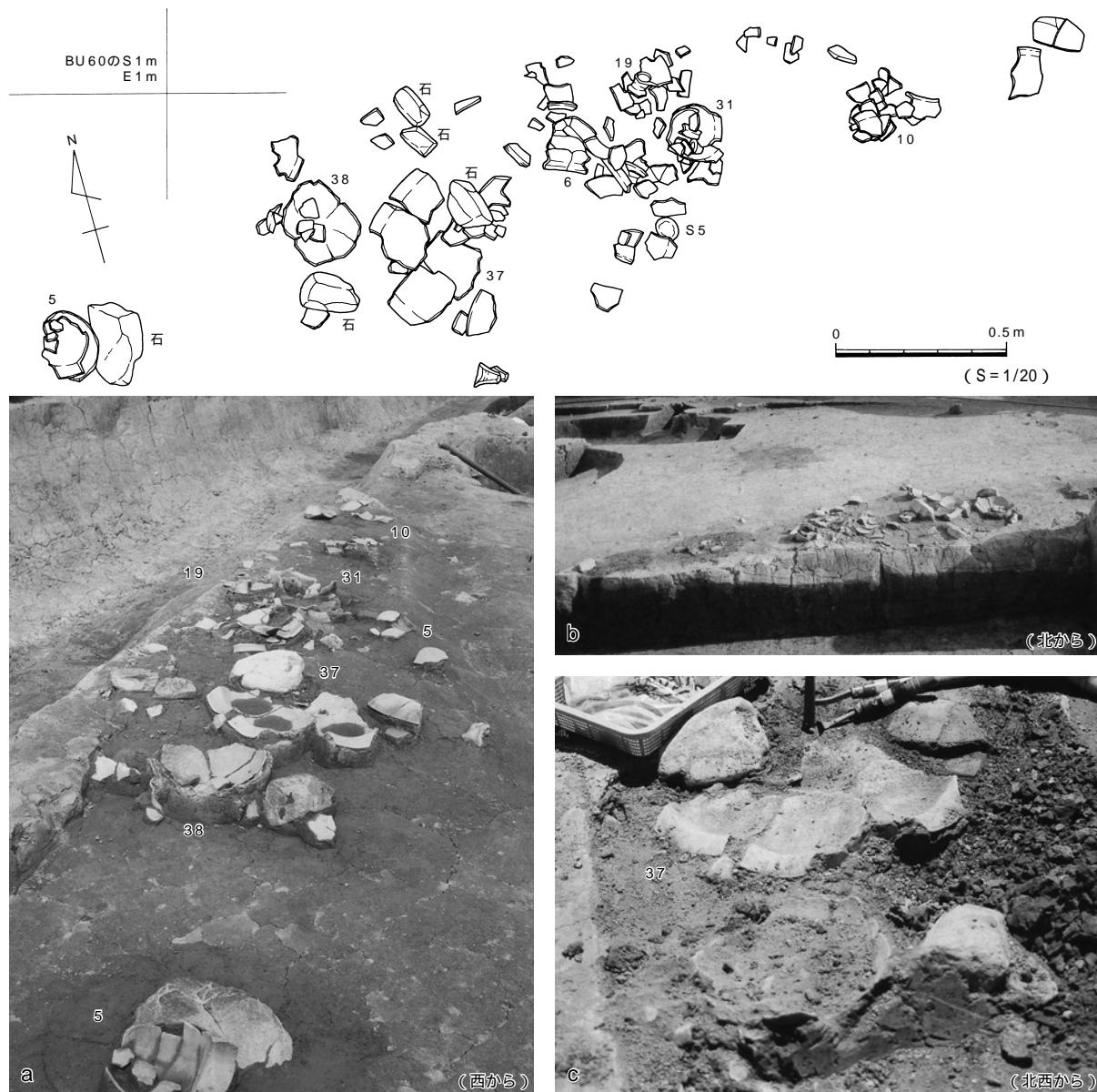


図48 土器溜まり1- 遺物出土状況

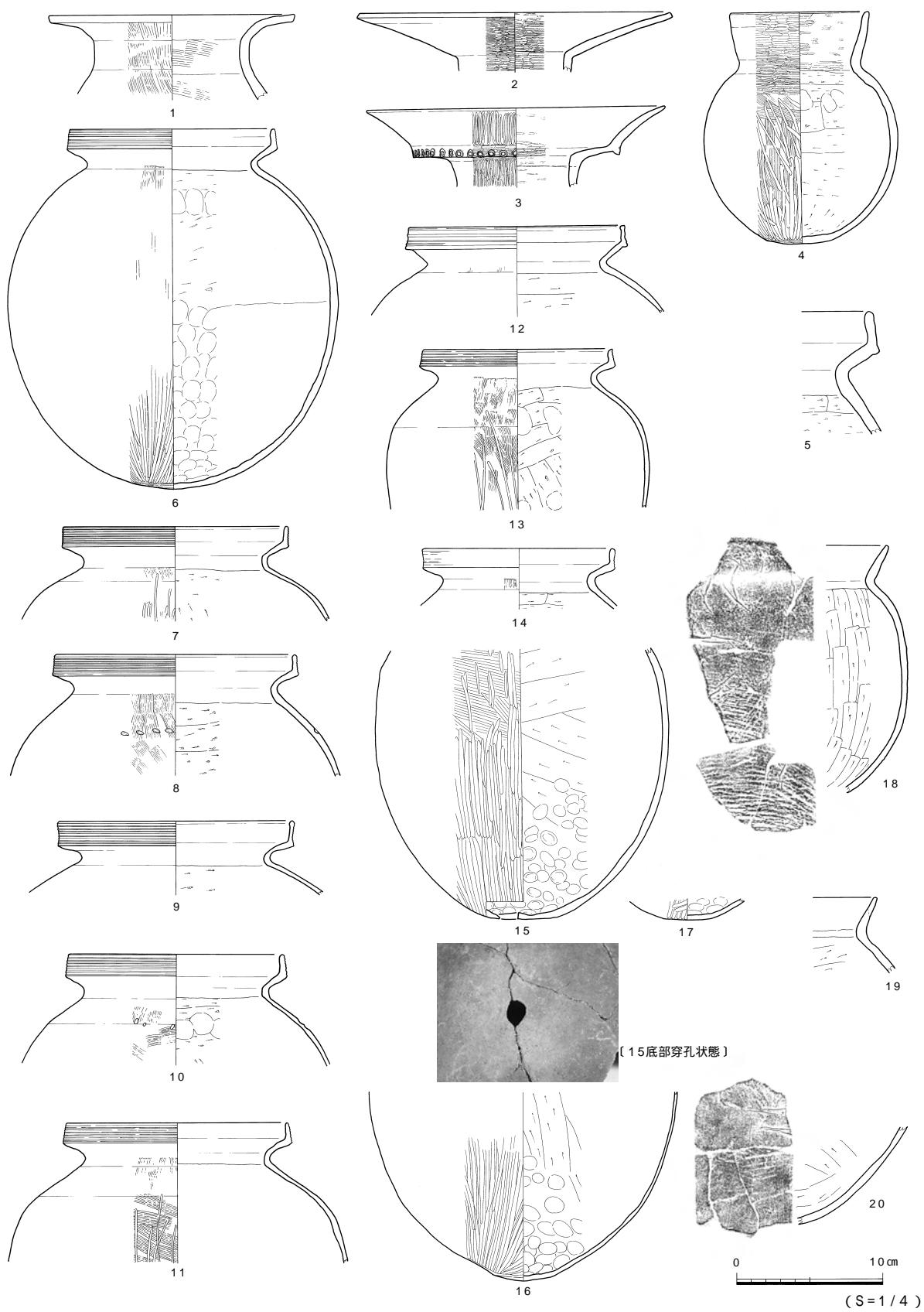


図49 土器溜まり1-1 出土遺物(1)

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

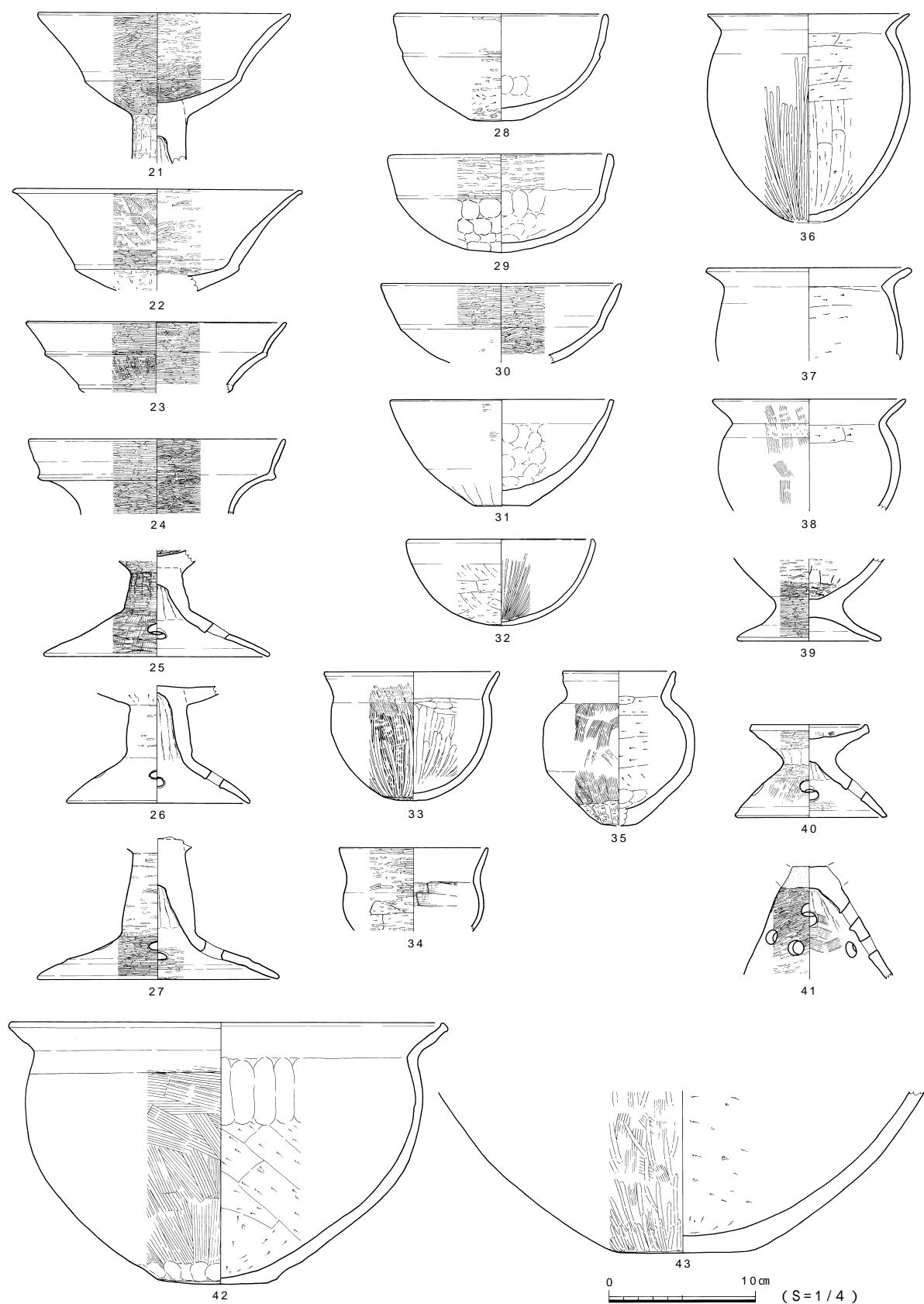
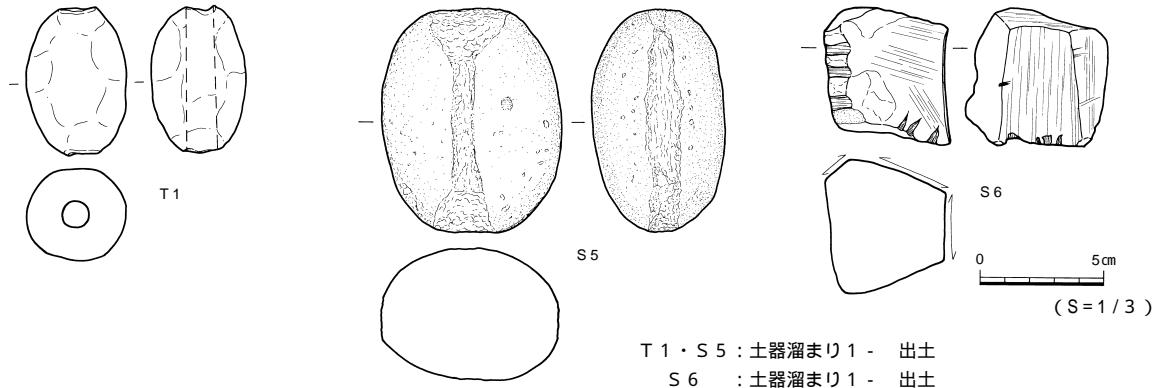


図50 土器溜まり1 - 出土遺物(2)



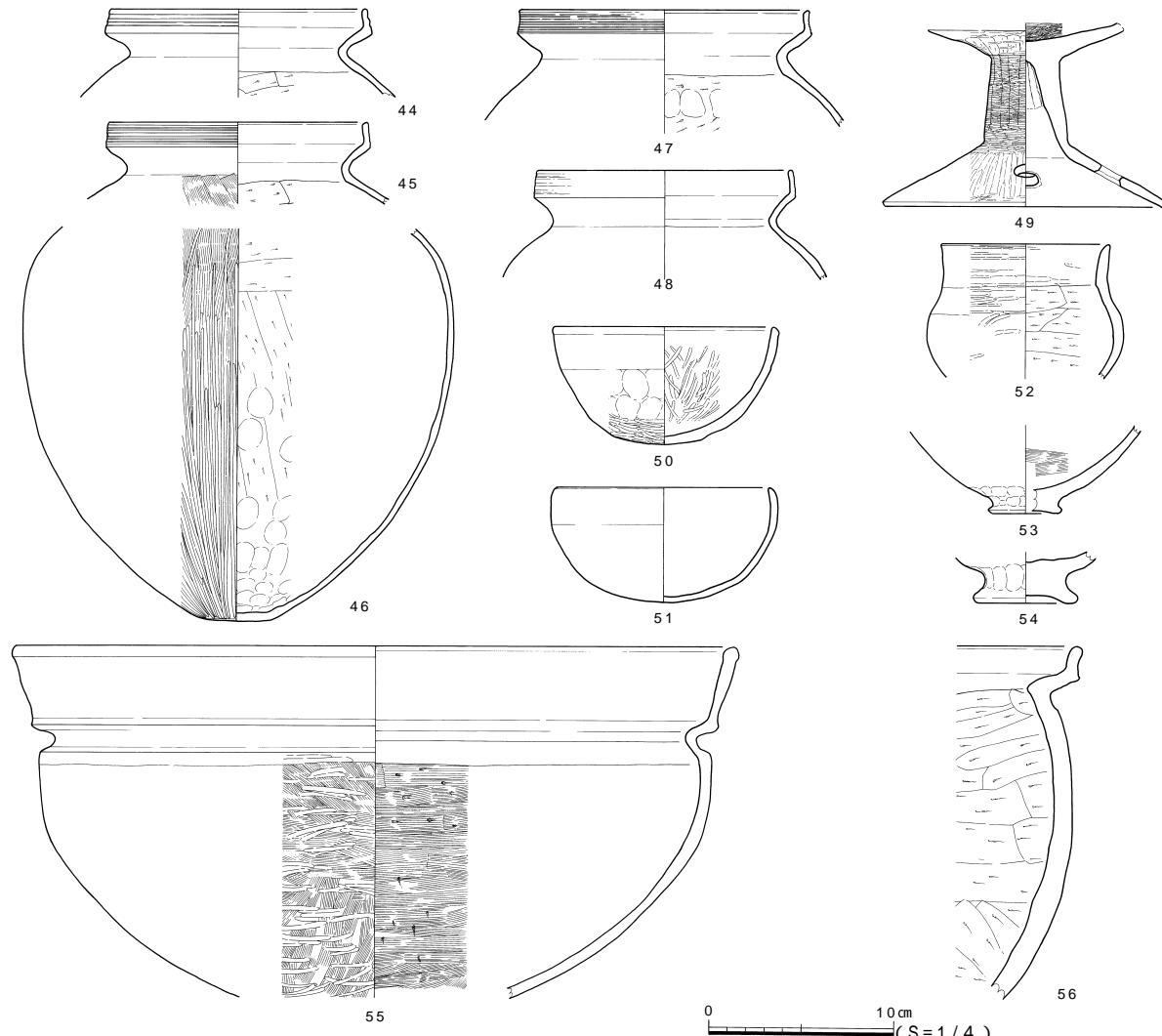
番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師器・壺	* 16.6	-	-	(内)深い横ハケ・器壁剥落(外)縦ハケ後粗いナデ、1/3残存	粗砂、石英粒	橙褐～暗褐
2	土師器・壺	* 21.2	-	-	密で細かく丁寧な箇磨き、口縁端部は面を持ちシャープな作り、2/5残存	微砂、精良	黄褐～黄橙褐
3	土師器・壺	* 20.3	-	-	(内)細かい箇磨き・摩滅・粘土接合痕(外)密で細かい箇磨き、口縁下端に竹管文、1/4残存	精良	薄黄褐～暗橙褐
4	土師器・壺	* 9.6	* 4.3	15.8	(内)口縁箇磨き後ナデ・胴部箇削り(外)口～頸部と底部箇磨き・胴部ハケ後磨き、1/2残存	微砂、砂粒多	薄黄褐～明橙褐
5	土師器・甕	-	-	-	(口)横ナデ(内)箇削り後ナデ(外)胴部箇削り後ナデ	細砂、均質	薄黄茶灰
6	土師器・甕	* 14.0	* 5.6	* 24.6	口縁櫛描沈線7条(内)箇削り後押圧(外)ハケ後箇磨き・摩滅・煤付着、1/4残存	微～細砂、均質	薄黄白灰～暗褐
7	土師器・甕	* 15.4	-	-	口縁櫛描沈線8条(内)箇削り(外)ハケ・箇磨き・煤付着、1/3残存	微～細砂、赤色粒	薄灰褐～薄黄灰
8	土師器・甕	* 16.2	-	-	口縁櫛描沈線7条刺突4ヶ所、煤付着、二次的被熱、1/3残存	微～細砂、均質	薄灰褐～暗褐
9	土師器・甕	* 16.2	-	-	口縁櫛描沈線9条(内)箇削り後ナデ、器壁剥落、1/4残存	微～細砂、均質	薄黄灰褐
10	土師器・甕	* 14.5	-	-	口縁櫛描沈線6条(内)箇削り後押圧(外)ハケ・刺突3ヶ所・摩滅、1/3残存	細砂、均質	薄橙褐
11	土師器・甕	* 15.0	-	-	口縁櫛描沈線8条(内)箇削り後押圧(外)ハケ後箇磨き・頸部は後ナデ、1/3残存	細砂、赤色粒	黄灰褐～橙褐
12	土師器・甕	* 14.8	-	-	口縁沈線4条(内)箇削り(外)ハケ目？・摩滅頭者、1/5残存	微～細砂	暗黃褐/暗黃褐
13	土師器・甕	* 13.0	-	-	口縁櫛描沈線6条(内)箇削り後押圧(外)ハケ後箇磨き、2/5残存	細砂、均質	橙褐
14	土師器・甕	* 13.2	-	-	口縁櫛描沈線6～7条(内)箇削り後押圧(外)ハケ・器壁剥落、口縁端部は平坦、1/5残存	微～細砂、赤色粒	黄橙褐
15	土師器・甕	-	5.2	-	(内)胴部削り後底部付近押圧(外)胴部ハケ後箇磨き、底部に焼成後穿孔(径1.3cm)	細砂	暗褐～暗橙褐
16	土師器・甕	-	4.0	-	(内)胴部削り後底部付近押圧(外)ハケ・箇磨き・黒斑(底外)押圧後横方向箇磨き	細砂	灰褐～暗褐
17	土師器・甕	-	3.0	-	(内)押圧(外)箇磨き・黒斑	微～細砂	灰褐/暗褐
18	土師器・甕	-	-	-	(内)箇削り(外)下半平行タタキ・上半ナデ	細砂、砂粒やや多	灰褐～暗灰
19	土師器・甕	-	-	-	(内)箇削り(外)口縁の押圧痕明晰・粘土接合痕	微砂	淡褐/黑褐～暗褐
20	土師器・甕	-	-	-	(内)箇削り(外)ナデ・タタキ・黒斑、19個同一個体	微～細砂	淡褐/暗褐
21	土師器・高杯	* 17.3	-	-	密な箇磨き(脚内)絞り目(脚外)縦方向の箇削り、丹塗り、1/3残存	微砂、均質	赤橙・丹塗、乳白
22	土師器・高杯	* 19.7	-	-	ハケ後箇磨き(内)口縁部はハケ無し(外受部)箇削り痕・摩滅、丹塗り、1/3残存	微差、精良	赤褐・丹塗、薄橙
23	土師器・高杯	* 17.7	-	-	(内)密な箇磨き(外)粗い縦ハケ後密な箇磨き・摩滅、丹塗り？、1/7残存	微差、精良	黄橙褐
24	土師器・高杯	* 17.3	-	-	細かい横箇磨き、二次的変色、1/2残存	微砂、精良	橙茶褐/暗茶褐
25	土師器・高杯	-	* 15.1	-	(内)箇磨き・脚部絞り目(外)箇削り・ハケ後箇磨き、円孔2ヶ所(径0.9cm)残存、1/3残存	微～細砂、赤色粒	暗褐～黄橙褐
26	土師器・高杯	-	12.3	-	(外)箇削りと箇磨き痕跡(脚内)絞り目、器壁剥落顯著、円孔4ヶ所(径0.7cm)	微～細砂、均質	明橙褐
27	土師器・高杯	-	* 16.2	-	裾部に段が廻る、(裾部)箇磨き(脚柱内)絞り目、二次的変色、円孔(径13cm)3ヶ所、1/3残存	細砂、均質	薄黄灰褐
28	土師器・鉢	* 14.1	3.5	7.3	(内)押圧(外)箇削り後細かい磨き、口縁端部はやや平坦・摩滅顯著、1/4残存	微～細砂、均質	橙褐
29	土師器・鉢	14.7	-	6.7	(口)密な箇磨き(胸)整形時の叩出しによる面・押圧痕、二次的な変色	微～細砂、黒色粒	薄黄灰/暗褐/変色
30	土師器・鉢	* 16.3	-	-	緻密で丁寧な箇磨き・摩滅、1/8残存	微砂、均質、精良	橙褐
31	土師器・鉢	* 15.2	* 3.9	7.1	(内)押圧・ナデ(外)箇削り・ハケ・ナデ痕・黒斑・摩滅、1/4残存	細砂、均質	黄褐～暗褐
32	土師器・鉢	* 12.5	-	5.8	(内)細かい箇磨き(外)箇削り後ナデ・摩滅・器壁薄く丁寧な仕上げ、1/8残存	微砂、概ね精良	黄橙
33	土師器・鉢	* 11.8	3.1	8.8	(内)放射状の箇磨き・ナデ・底部摩滅(外)ハケ後箇磨き・底部に黒斑、口縁部5/6欠	細砂、砂粒やや多	明橙褐/暗褐/変色
35	土師器・鉢	* 7.5	* 2.3	10.5	(内)箇削り(外)縦ハケ・下端部箇削り・器壁厚手、口～頸部3/4欠	微～細砂	薄黄灰～橙褐
34	土師器・鉢	* 10.0	-	-	(内)板ナデ(外)箇削り箇磨き・摩滅、二次的変色、1/3残存	微～細砂、均質	薄黄灰/暗褐
36	土師器・鉢	* 13.7	-	14.2	(内)箇削り(外)ナデ後箇磨き・下半に黒斑、二次的変色、1/3残存	微～細砂、均質	薄黄灰
37	土師器・鉢	* 13.6	-	-	(内)箇削り(外)ナデ・摩滅、1/6残存	微～細砂、角閃石	薄黄灰
38	土師器・鉢	* 12.4	-	-	(内)箇削り(外)ハケ・摩滅顯著、1/5残存	微～細砂、均質	明橙褐～橙褐
39	土師器・台付鉢	-	* 9.2	-	(内)密な箇磨き(下に工具痕)・脚部ナデ(外)細密な箇磨き・摩滅、二次的変色、1/3残存	微～細砂、均質	薄橙褐/暗褐/変色
40	土師器・台付鉢	7.8	* 9.8	6.3	(内)ハケ・ナデ・絞り目(外)ハケ・箇磨き、円孔(径1.2cm)4ヶ所、脚1/2欠	微～細砂、精良	橙褐/暗褐/変色
41	土師器・器台	-	-	-	(内)杯部箇磨き・脚部絞り目後ハケ(外)箇磨き・円孔(上段4ヶ所・下段8ヶ所)	微～細砂、均質	明橙褐/暗褐/変色
42	土師器・鉢	* 29.3	* 7.2	17.8	(内)箇削り・ナデ(外)ハケ・下端押圧、1/3残存	微～細砂、均質	薄橙灰
43	土師器・壺	-	* 9.0	-	(内)箇削り(外)縦ハケ後粗い箇磨き(底外)横位のハケ・摩滅、黒斑、1/5残存	細砂、均質	薄橙茶灰～黄灰
T 1	土錐	長5.9、幅4.0、厚3.8	管状土錐・押圧とナデによって形成	形、黒斑、重量82.4g	微～細砂、均質	薄橙褐	

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S 5	石錐	89.5	71.5	52.2	532.1	流紋岩	表裏面と側縁に加工痕
S 6	砥石	60.5	50.5	58.5	220.3	流紋岩	各面に研磨による摩滅、溝状の擦痕

図51 土器溜まり 1 - 出土遺物

が1点、大形壺あるいは鉢が10片程度、甕は胴部片がコンテナ1/2箱分(1箱18ℓ)、高杯・鉢が小片で80片程度含まれる。

両土器溜まりの時期は、出土遺物の比較から、土器溜まり1-1に関しては甕のバラツキから時期幅を見ることもできるが、全体的には古墳時代初頭の範囲内におさまると考える。



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
44	土師器・甕	*13.6	-	-	口縁沈線2条(内)箇削り(外)ナデ、摩滅、1/15残存	細砂・均質、砂粒多	薄黄褐
45	土師器・甕	*13.9	-	-	口縁櫛描沈線8条(内)箇削り(外)ハケ、口縁端部は平坦、1/15残存	細砂・均質、砂粒多	薄黄褐～褐
46	土師器・甕	-	3.4	-	(内)押圧・箇削り(外)縦ハケ・箇磨き(底外)箇磨き、黒斑、煤付着	細砂・均質	黄褐～暗褐
47	土師器・甕	*15.6	-	-	口縁櫛描沈線8条(内)箇削り後一部押圧(外)ナデ、器壁剥落、1/2残存	細砂・均質	黒褐
48	土師器・甕	*14.0	-	-	口縁櫛描沈線6条口縁端部は丸み、摩滅著しく調整不明、1/3残存	細砂・砂粒多	薄橙褐
49	土師器・高杯	10.1	15.0	10.0	密な箇磨き(受部外)箇削り痕(脚内)絞り目・ナデ、二次的変色、円孔(径1.2cm)4ヶ所	微砂・均質	薄橙褐・暗褐・変色
50	土師器・鉢	11.7	-	6.4	(内)押圧・箇磨き(外)整形時の押圧後下半箇磨き、口縁端部に平坦面	細砂・均質	黄褐～暗褐
51	土師器・鉢	*11.3	-	6.2	器壁平滑・摩滅顯著	微砂・均質	薄黄～灰褐
52	土師器・鉢	*9.0	-	-	(内)箇削り(外)箇磨き、1/3残存	細砂・均質	褐～黒褐
53	土師器・鉢	-	*3.4	-	(内)ナデ・横ハケ(外)押圧・ナデ・摩滅、黒斑、底部上げ底、1/4残存	微砂・均質	明橙褐
54	土師器・鉢	-	*5.3	-	押圧・ナデ、底部上げ底、摩滅1/3残存	微砂・均質	橙褐～暗褐
55	土師器・鉢	*38.7	-	-	(内)ハケ(外)ハケ後粗い箇磨き(口)横ナデ、丹塗り、1/5残存	細砂・均質	暗褐・明橙赤褐・丹塗
56	土師器・鉢	-	-	-	(内)箇削り(外)斜～縦位のハケ(口)横ナデ、黒斑	細砂・均質	黒灰～黄褐

図52 土器溜まり1 - 出土遺物

4. 古代末～中世の遺構・遺物

本時期に属する遺構として、井戸2基・土坑2基・溝19条のほかに柱穴約250基があげられる。実年代では、12世紀後半～14世紀前半を目安としておきたい。

古代末には、BYライン上を概ね東西方向に溝6が走る。さらに、東には溝7が続き、一連の区画が設定され

ていることが窺われる。両溝の端部はそれぞれ収束する。ただし、同時期の柱穴は確認されない。次の段階に同溝は埋没し、やや北側に新たな溝の形成が予想される。検出された遺構は井戸 2・3 と柱穴群である。井戸は柱穴群の分布域に対して端部となる位置に連続的に形成される。

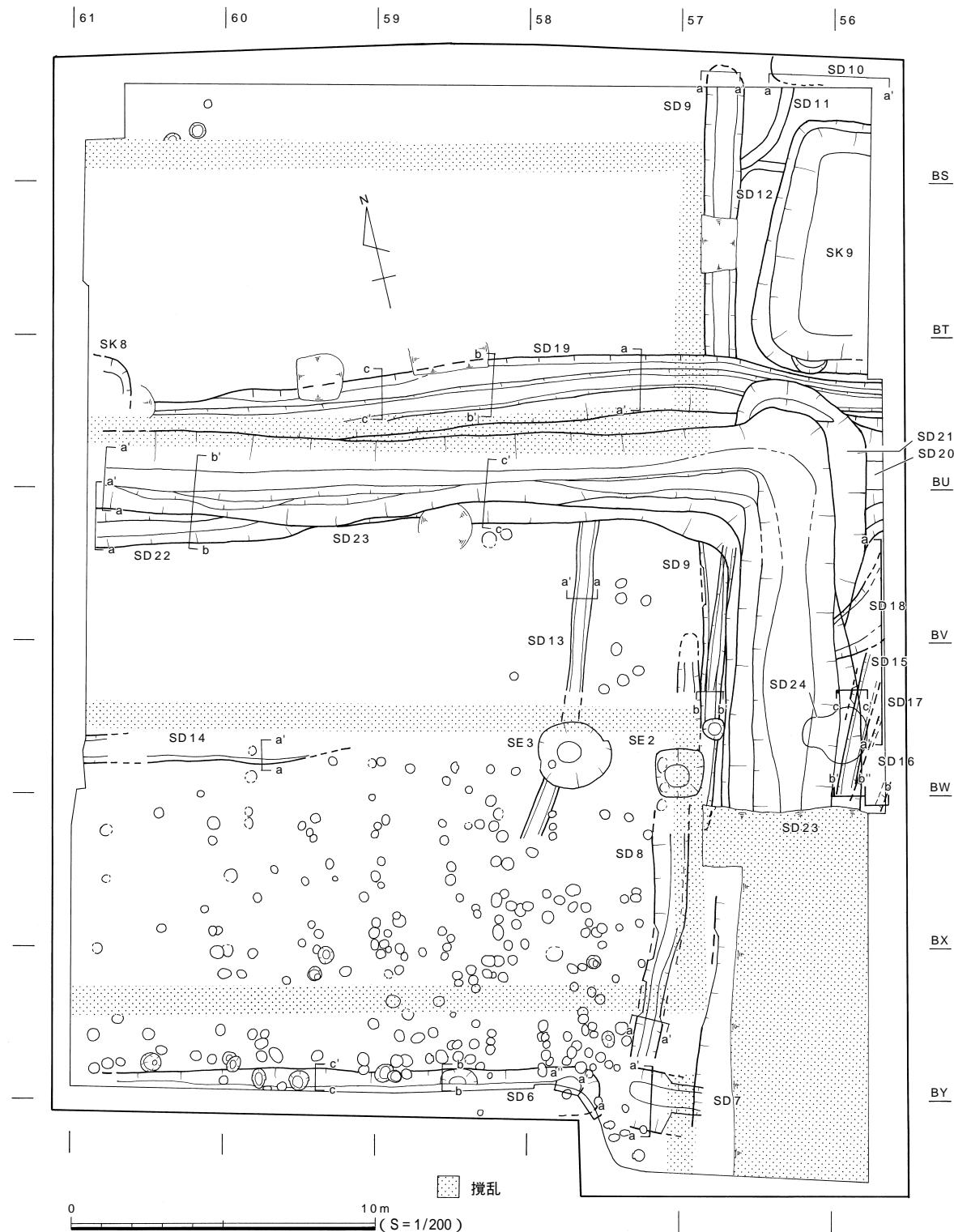


図53 古代末～中世遺構全体図

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

中世前半には、中央部を概ね東西方向に走る溝（溝19）が特徴となる。さらには、その溝はL字形に形態を変化させて大形の溝（溝20～23）へと変貌し、閉鎖性の高い屋敷を創出する。同溝では、一部が張り出すような部分が付随しており、溝の機能について、それまでの溝とはやや異なった性格を併せ持つ可能性も窺われる。土坑は、14世紀前葉と14世紀前半にそれぞれ1基が東西溝北側の脇に併設される。特に、後者は大形である。両土坑の機能は、水の管理との関連も考えられ、溝の一部となる可能性も高い。

調査区の南半部に集中する柱穴には、規模が非常に大形のもの、礎石状の石あるいは完形に近い椀・皿を含むものが多い。出土遺物からは、12世紀末～14世紀初頭の時期が確認される。

以上のように、本時期は、区画溝に囲まれた屋敷地の存在が特徴である。古代末にその位置はやや移動し、中世集落としての区画が新たに設定される。さらに、その溝は、遅くとも13世紀末以降には、非常な大形化も示しつつ、屋敷地を大きく囲むように閉鎖性を強めるなど、溝としても屋敷地としても飛躍を見せる。また、同溝からは猿形木製品が出土しており、流通拠点の存在を窺わせる。

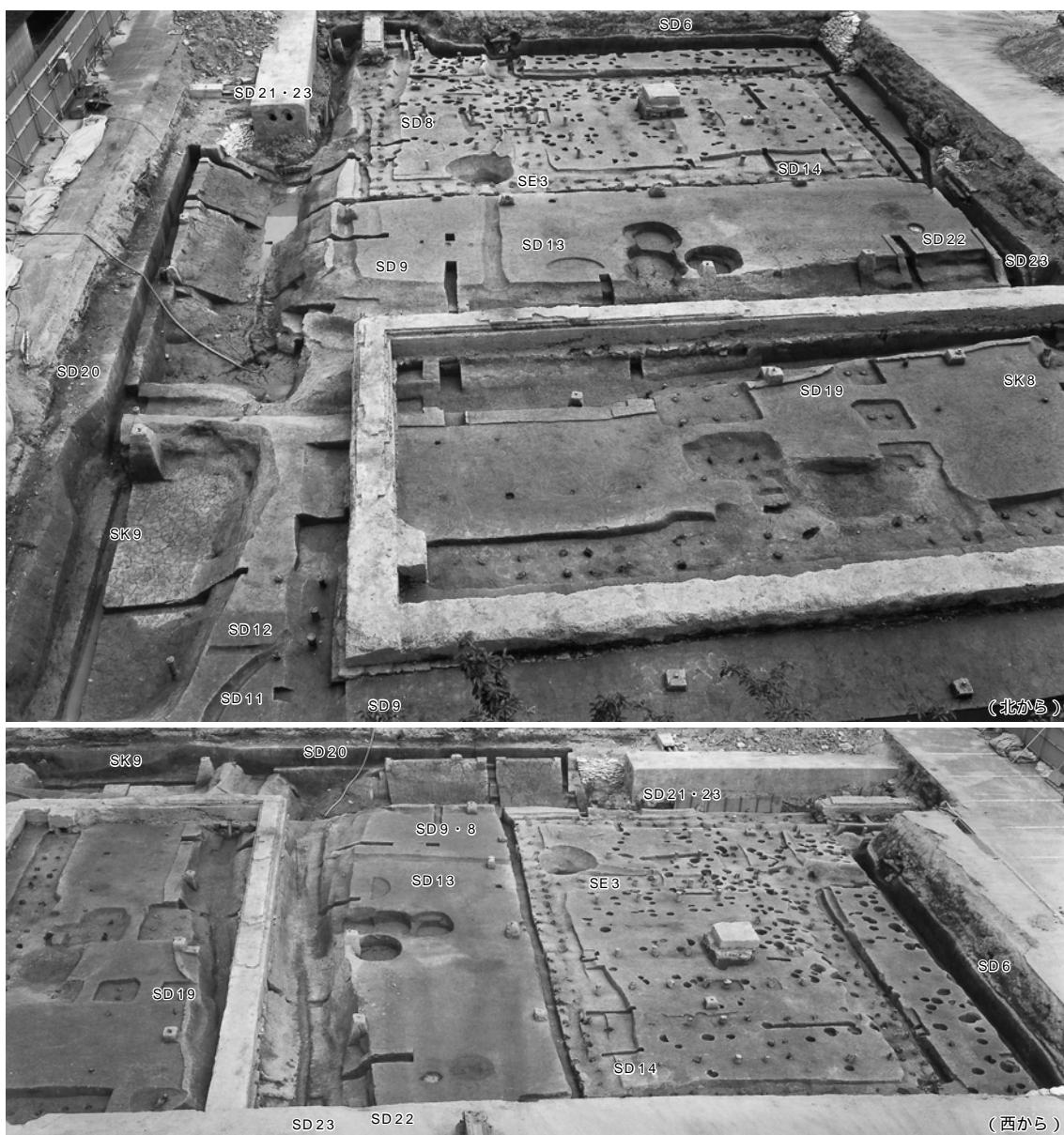


図54 古代末～中世遺構完掘状況

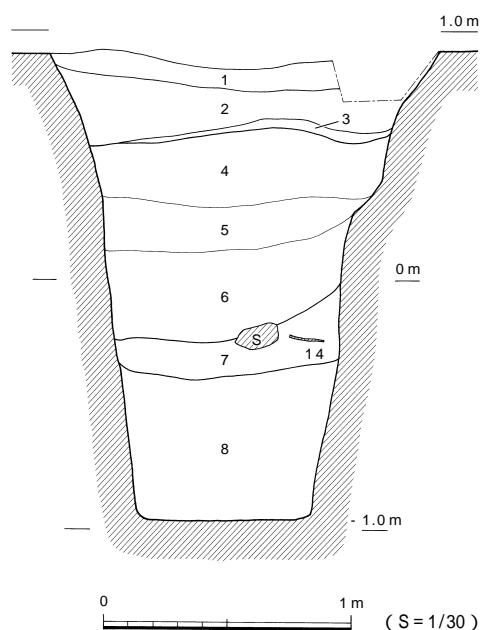
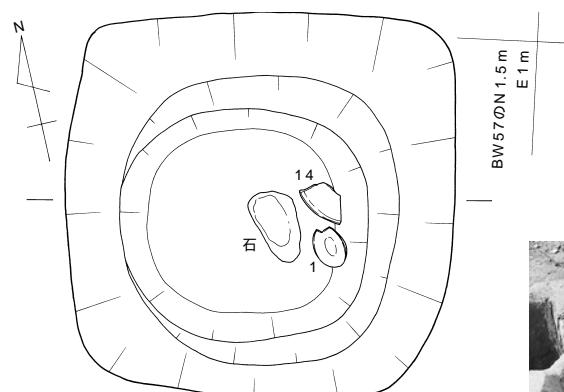
a. 井戸

井戸2 (図55~57、図版3・4・8)

調査区の中央から南東より、BV 56・57区で検出した。攪乱あるいは溝8が上部に重複する。検出面は9層下半、標高0.9m付近であるが、本来の掘削面は、重複遺構や基本土層との関係を考慮すると6層である可能性が高い。

上面形は1.57m × 1.55mの隅丸方形を呈する。底面は標高 -0.97mに位置し、0.76 × 0.74mの円形を呈する。上面からの深さは1.9mを残す。断面形は、標高0.33m付近から上方にやや広がりを有する逆台形である。

埋土は8層に分層したが、その特徴から三群に大別される。1群(1~3層)では、1・2層の類似性が高く焼土を含む。2群(4~6層)は色調の濃淡によって細分したが、基本的には灰褐色系の粘質土として共通する。3群(7・8層)は粘性の強い一群である。7層は焼土の他に炭化物が多く含まれ、出土遺物も大形である。同層上面付近には全体が煤で覆われた焼け石(図57-S7)・ほぼ完形の土師質土器碗(図57-1)・すり鉢(同-14)片がそれぞれ1点出土した(図56)。標高 -0.27m付近である。包含物が際だって多いわけではないが、本井戸の中で、何らかの祭祀的行為を考えさせる土層といえよう。最下層の8層は、粘土の中に砂が混在しており、使用段階の堆積土の可能性を有す。



- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1. 青灰褐色砂質土(焼土、土器) | 7. 暗灰黒色粘質土 |
| 2. 青灰色土(焼土、土器) | (炭化物多、焼土、
大形土器片、焼石) |
| 3. 暗褐色土(土器) | |
| 4~6. 暗灰褐色粘質土 | 8. 暗黒灰色粘土(砂多) |

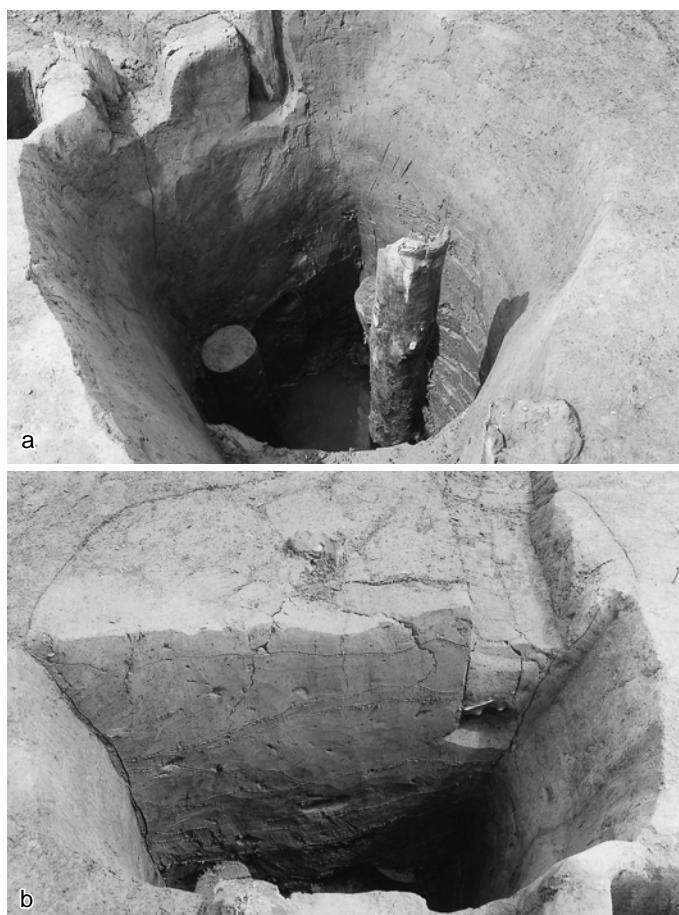


図55 井戸2

出土遺物はコンテナ1箱(28ℓ)の量がある。吉備系土師質土器碗、土師質土器杯・皿・鍋・壺片、瓦器碗の底部あるいは白磁碗の小片が含まれる。その中で、吉備系土師質土器碗1点、皿3点、東播系須恵器鉢1点は、いずれも7層から出土している。出土量は、1群(上層)で最も多いが小~細片であり、2群(中層)では量も少なく細片である。それに対して、3群(下層)からは、点数はやや少ないが比較的大形の遺物が多い。焼け石2点も確認される(図57-S7)。

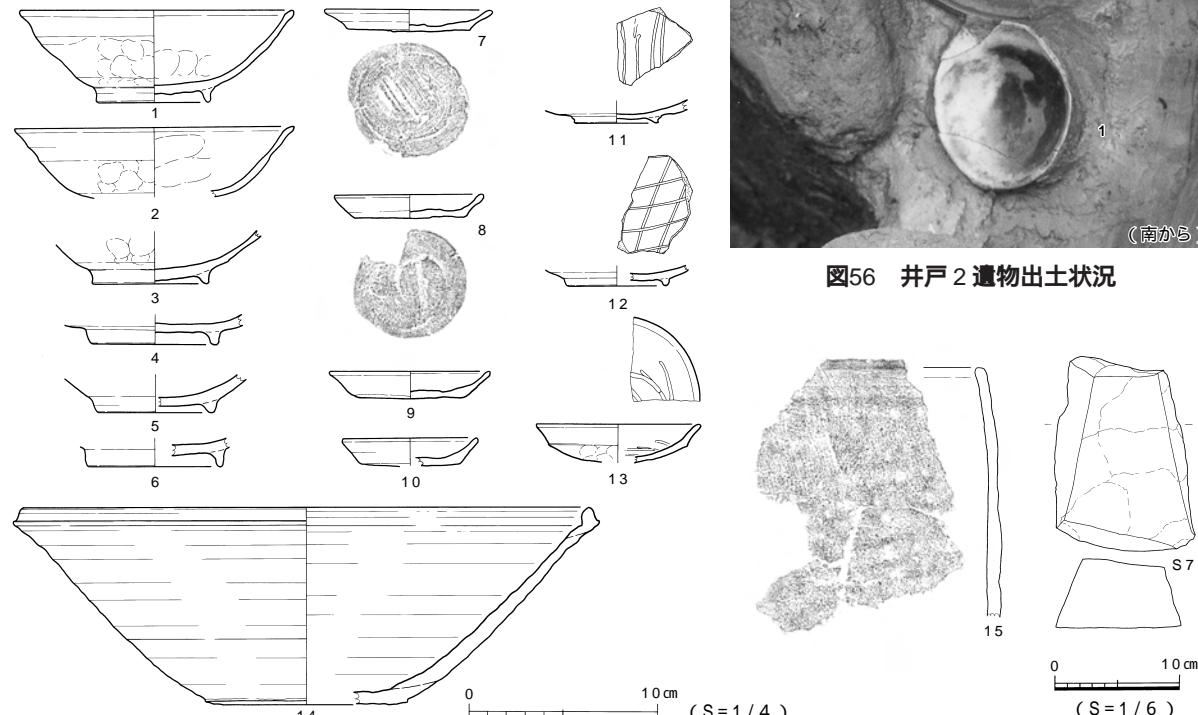
本遺構の時期は、古代末~中世初頭(12世紀末)にあたる。



(南から)



図56 井戸2 遺物出土状況



番号	種類・器種	法 量(cm)			形 態・手 法 他	胎 土	色 調: 内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・碗	14.4	5.8	4.9	(口)横ナデ(内)ナデ・下半押圧・炭素吸着(外)押圧・被熱(高台内)ひび割れ、口縁1/4欠	微砂、均質、石英	薄黄灰白
2	土師質・碗	*14.7	-	-	(口)横ナデ(内)ナデ(外)押圧、1/3残存	微砂、均質、赤色粒	薄黄灰白~灰白
3	土師質・碗	-	6.0	-	(内)ナデ(外)押圧・ナデ(底)厚く下方にたわむ	微砂、均質	薄黄灰白~灰白
4	土師質・碗	-	6.4	-	(内)ナデ・重ね焼き痕(外)ナデ・底部仕上げナデ	微砂、石英粒顯著	薄黄灰白
5	土師質・碗	-	*5.9	-	(内)ナデ・窓焼き痕?(外)ナデ・器壁厚め、1/3残存	微砂、均質	薄灰白
6	土師質・碗	-	*6.9	-	ナデ、1/3残存	細砂、均質	薄黄灰白
7	土師質・皿	*8.9	6.4	1.2	横ナデ(底)内面仕上げナデ・外面籠切り後板目痕、口縁部1/4残存	細砂、均質	薄橙茶灰
8	土師質・皿	7.8	5.8	1.3	横ナデ(内)底部仕上げナデ(外)籠切り後板目痕	微砂、均質	薄灰白
9	土師質・皿	*8.4	*5.6	1.5	横ナデ(内)底部仕上げナデ(外)籠切り未調整、1/3残存	微砂、概ね精良	灰白~薄黄灰白
10	土師質・皿	*7.2	*5.2	1.5	横ナデ(内)底部仕上げナデ(外)籠切り後ナデ、1/3残存	微砂、概ね精良	薄褐~黄灰
11	瓦 器・碗	-	*4.2	-	(内)ナデ・平行の暗文(外)ナデ(高台)低く一部つぶれる・端部は平坦、1/3残存	微砂、精良	暗灰~灰黒
12	瓦 器・碗	-	*5.0	-	(内)ナデ・格子目の暗文(外)ナデ(高台)低く断面台形状・端部は平坦、1/4残存	微砂、精良	灰~黒灰
13	瓦 器・皿	*8.6	*7.3	-	(内)ナデ・同心円状の暗文(外)押圧(口)横ナデ、1/4残存	微砂、均質	暗褐~黒灰
14	須恵器・鉢	*29.0	*10.7	*10.5	横ナデ(底外)ナデ(内下半)自然釉、口縁端部やや肥厚、1/5残存、「東播系」	細砂多	灰~青灰
15	土師質・壺	-	-	-	縦方向の板ナデ・押圧・煤付着・摩滅	細~粗砂、赤色粒	橙褐~暗褐

番号	器 種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	特 徴
S 7	加工痕のある石材	15.5	11.6	5.4	1247.7	流紋岩	全面を打ち欠き整形、被熱、全面煤が付着

図57 井戸2 出土遺物

井戸3（図58～62、図版3・4・10）

調査区のほぼ中央部、BV57区で検出した。検出面は標高1.23m、4層下面であるが、本地点では7層にあたる可能性が高い。

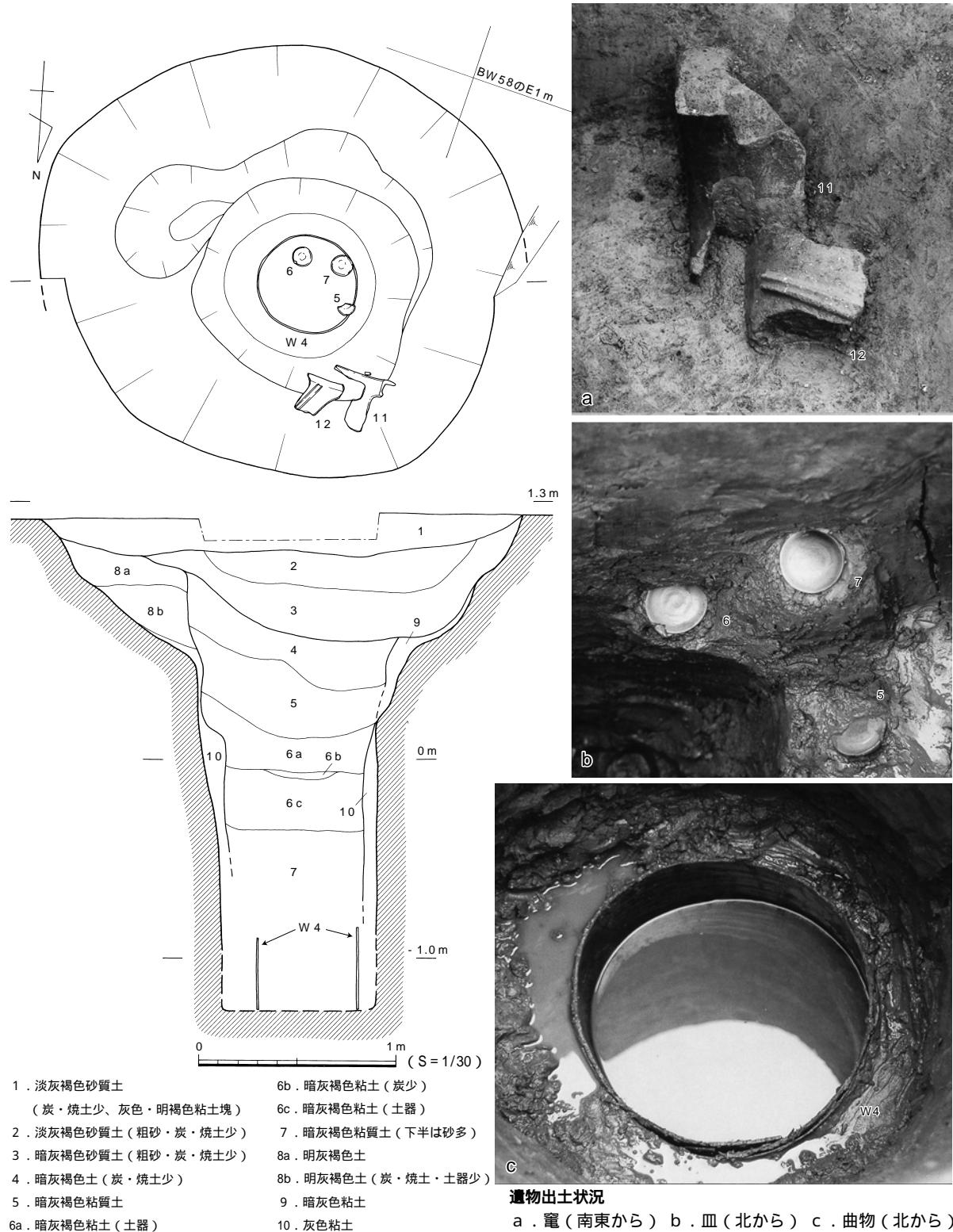


図58 井戸3

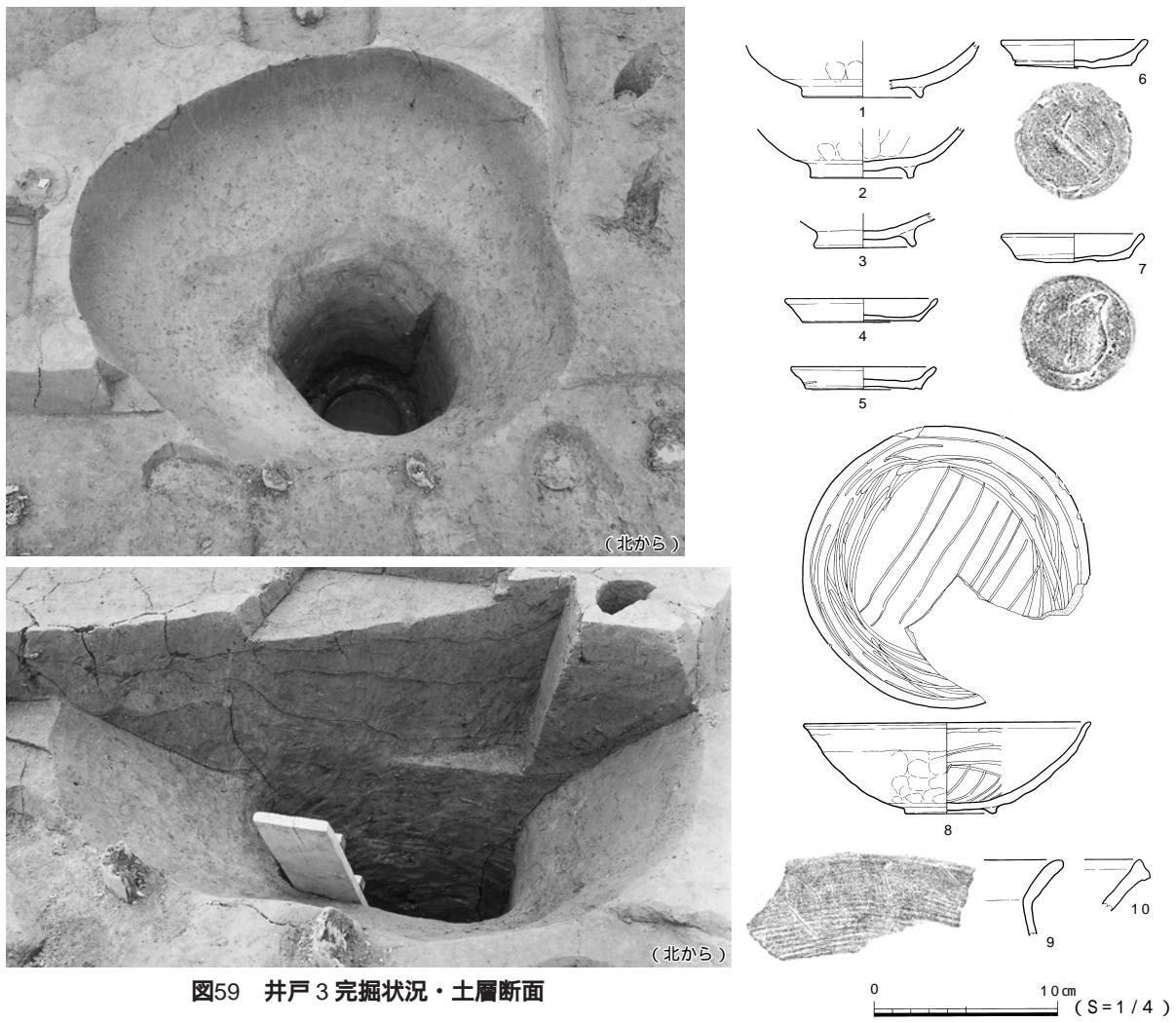


図59 井戸3 完掘状況・土層断面

番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	-	*6.3	-	(内)ナデ(外)押圧・ナデ(高台)低く断面三角形状、器壁厚い、摩滅、1/5残存	微砂、均質	薄黄白～白灰
2	土師質・椀	-	5.2	-	押圧・丁寧なナデ、重ね焼き痕(高台)断面乳頭状	微砂、均質	黄灰白
3	土師質・椀	-	5.3	-	押圧・ナデ(高台)断面三角形状(底部)下方にたわむ	微砂、均質	黄白
4	土師質・皿	8.2	6.2	1.3	横ナデ(底外)箇切り後板目痕、器壁薄い、摩滅	微砂、砂粒少	薄黄白
5	土師質・皿	*7.8	*6.3	1.2	横ナデ(底外)箇切り後板目痕、1/3残存	微砂、均質	薄黄灰
6	土師質・皿	8.0	6.4	1.7	横ナデ(底外)箇切り後板目痕	微砂、均質	黄橙灰
7	土師質・皿	7.8	6.0	1.6	横ナデ(底外)箇切り未調整、ロクロ左回転	微砂、赤色粒	黄橙白
8	瓦 器・椀	15.6	4.8	5.0	(内)ナデ・平行と同心円状の暗文(外)押圧(口)横ナデ、重ね焼き痕、4/5残存	精良	淡黒灰 断面灰
9	土師質・鍋	-	-	-	(内)横八ヶ(外)縦八ヶ・煤付着(口)横ナデ	細砂、角閃石	黄褐～暗褐
10	須恵器・鉢	-	-	-	横ナデ、内面に黄緑色自然釉が飛沫状に付着、「東播系」	微～細砂、均質	青灰

図60 井戸3出土遺物(1)

上面形は東西2.45m・南北2.1mを残すが、北半部が攪乱で破壊されていることから、本来は直径2.5m前後の円形が復元される。底面は標高 - 1.27mに位置し、0.77 × 0.72mの円形を呈する。上面からの深さは2.5mを測る。断面形は、下半部の筒状部が標高0.18m付近から上方に向かって大きく広がるY字形を示す。底面には、直径約0.5mの曲物(W4)が据えられている。埋土の観察から、井戸側の存在を窺うことができる(図58)。底面は湧水砂層を深く掘り下げており、現在、豊かな湧水が見られる。

埋土は、12層に分層しているが、その特徴から3群に大別される。

1群(1～3層)は、井戸廃棄時の最終段階に上部を埋めた土層群である。比較的明るめの灰褐色を示し、砂質が強く、炭化物・焼土・土器などを散在的に含む点に特徴がある。さらに1層と2・3層に細分され、1層では包含物に粘土塊が加わるのに対して、2・3層では粗砂の包含が少量認められる。また、堆積ラインは2～5

層がレンズ状にくぼむのに対して、1層下面是水平ラインを形成している点も2・3層との違いである。1層は埋没後の流入土的な性格が想定される。3層下面是標高0.63mを測る。3層からは比較的大形の竈片が出土した。標高0.68m付近の位置である。掘り方が上方に広がる肩部付近に乗るような状態であった（図58）。

2群（4～7層）は井戸側内を埋める堆積土である。いずれも暗灰褐色の土層で、粘性や包含物から細分される。4・5層はやや粘性が弱く下面ラインは3層と共通した特徴を見せる。6層は粘性が強い土層である。6a・6c層はいずれも土器を包含するが、特に標高-0.14～-0.35mの位置で完形あるいは大形破片の皿3点がまとまって出土した点は注目される（図58）。同位置は6c層下面～下半にあたり、同層の形成初期に置かれたことが窺われる。6層は炭化物の包含が特徴的な6b層の存在で細分したが、基本的には同一の性格を有する土層群と判断され、この2群（6層）段階に、祭祀的行為が行われたと考えられる。7層は、特に下半において砂の混入があることから粘性がやや弱く軟質となる。底面では扁平な円礫が1点出土した。

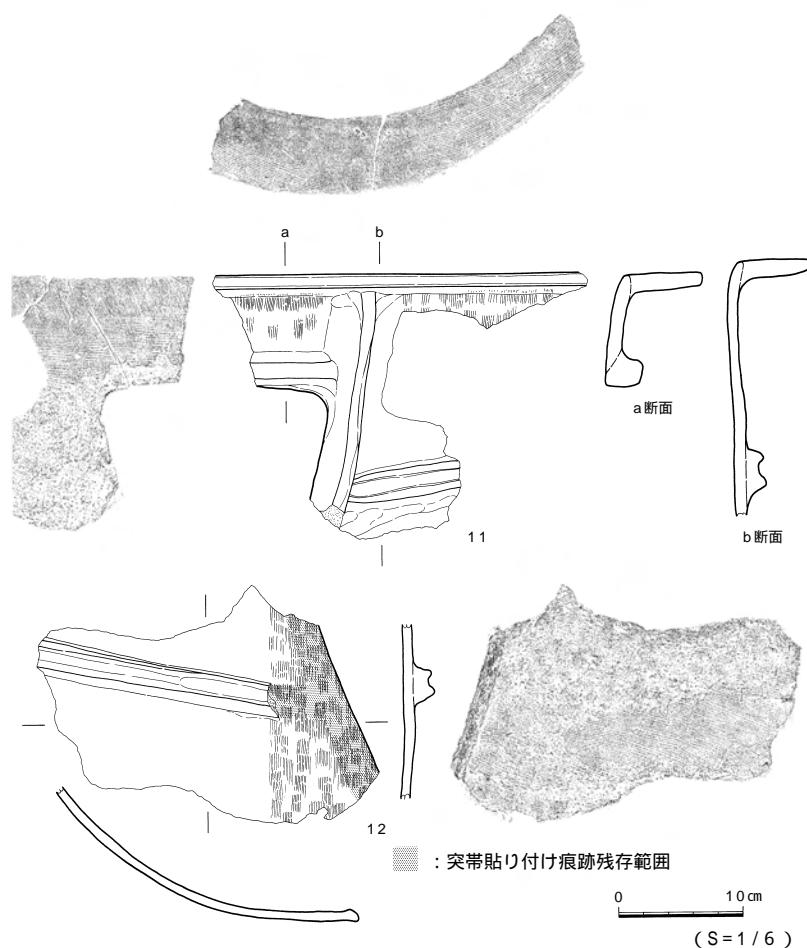
3群（8～10層）は井戸形成時における井戸側の裏ごめ土あるいは井戸側を示す土層の可能性をもつ。上部の開放部に堆積する8層は粘性が弱く、8b層では炭化物などの包含物が少量認められる。一方、下半の筒部に堆積する9層・10層は粘性が強い粘土層となる。10層は掘り方との幅が6cm程度であり、曲物に接する部分も確認されることから、井戸側の木質痕跡の可能性も考えられるかもしれない。

以上のように、本遺構は円形の井戸側を有し、底面に曲物を設置した井戸であり、廃棄過程において、底部付近で皿を使った祭祀的行為を行った様子が残されている。ただ、最終段階に入る竈についてはその評価は、断定しがたい。

出土遺物はコンテナ1箱（28ℓ）の量がある。土師質土器碗・杯・皿・鍋・竈の他、瓦器碗・東播系すり鉢を含む。皿・瓦器碗は保存率が高いが、それ以外は細～小片である。

木器は、完形の曲物と、別個体の曲物側板片が2点出土した。前者ではその付属品として添え木4点・楔2点が組み合わされる。添え木は底部の木釘穴が側板と合わせて通っていることから、底板をはずして転用する以前から付属していたことがわかる。

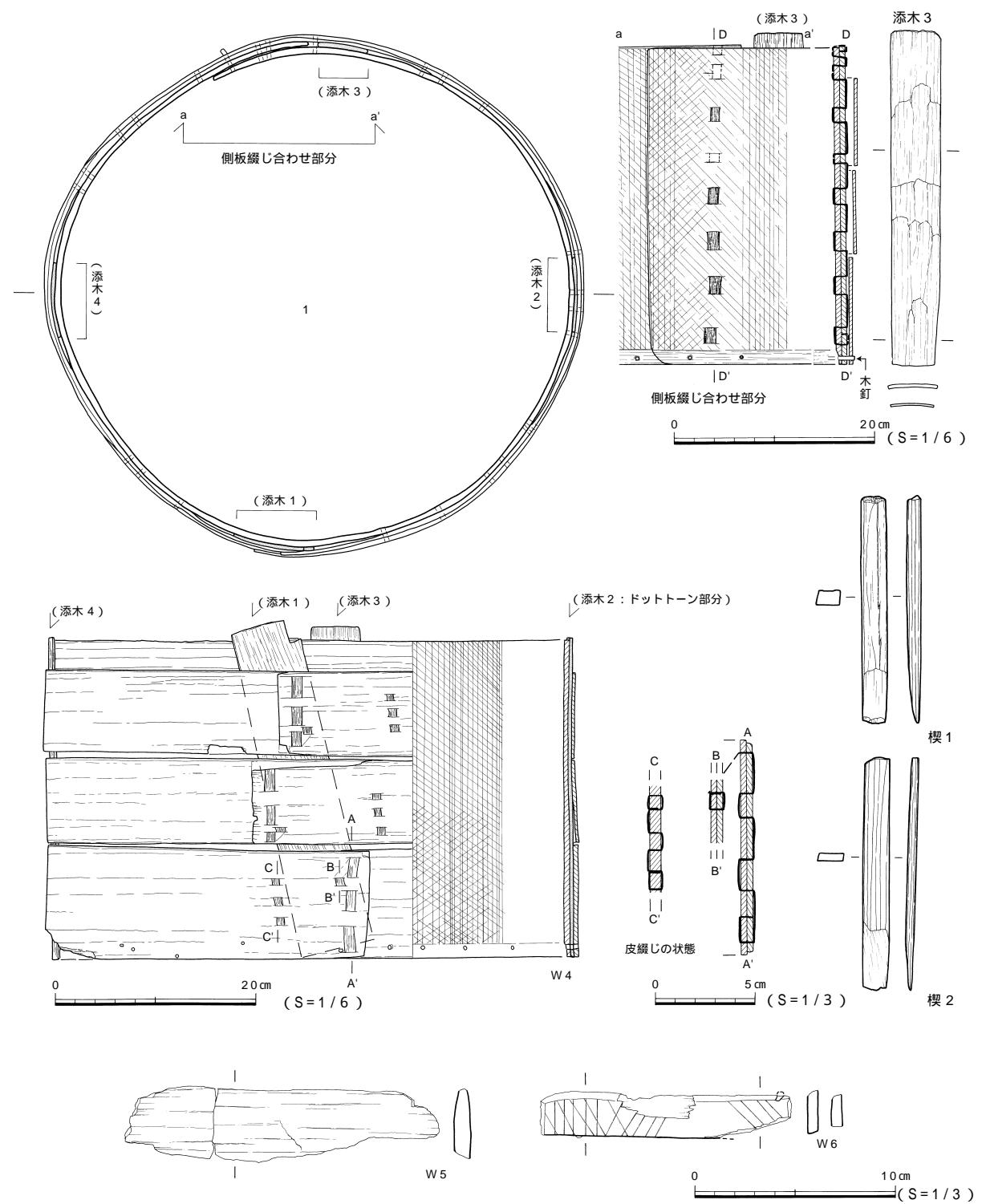
本遺構の埋没時期は、古代末～中世初頭（12世紀末～13世紀代初頭）と判断される。



番号	種類・器種	法量(cm)	形態・手法他	胎土	色調：内面/外
11	土師質・竈	-	(内) 横ハケ・中段部は二次的被熱で器壁剥落のためハケ消失・上半に煤付着、焚口側縁はナデ(外) 縦ハケ・焚口や胴中位に貼付突帯・突帯剥落痕明瞭、胴口に幅広の貼り付け庇、上面はハケ仕上げ	細～粗砂、斜長石・石英	黄褐/暗褐
12	土師質・竈	-	(内) 被熱により器面剥落、一部で縦ハケ確認(外)縦ハケ・貼付突帯はナデ	細～粗砂	茶褐～黒褐/黄茶

図61 井戸3出土遺物(2)

第7次調査(医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	特徴
W 4	曲物	50.8	31.6	側板 0.6 タガ 0.4	ヒノキ	側板は1枚、3段のタガで補強、側板とタガの間の4ヶ所に板の添木を挿入、添木2の長さ33.5cm、幅4.8cm、厚さ0.3cmである、最下段のタガに現状で30箇所の釘孔、保存処理時に楔2点を検出、楔1は長さ11.3cm、幅1.3cm、厚さ0.7cm、板目材、楔2は長さ11.6cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、征目材
W 5	曲物	(12.2)	(2.1)	0.6	スギ	格子目のケビキ線
W 6	板材	(15.7)	(3.6)	0.85	マツ属	柾目板

図62 井戸3出土遺物(3) 木製品

b . 土坑

土坑 8 (図63)

調査区北西部、西壁に接した位置に検出された。BT 60区である。南側部分は近世土坑16・17によって大きく破壊され、西側部分は調査区外に続く。調査を行うことができた部分はわずかであったため、調査区西壁の断面観察が中心となった。平面的な検出は標高1.03m、5層 下面で行った。同地点では 9 層 上面にあたる。平面形態は南北1.9m・東西1.02mの残存が確認された。丸みを見せるラインから隅丸方形が予想されるが、確定的ではない。底面は標高0.38mに位置し、南北1.4m・東西0.65mが残存する。広くて平坦な底面が想定される。深さは約0.65mである。掘り方の立ち上がりは急峻で比較的直線的である

埋土は大きくは四分されるが、全体的に水平堆積に近い状態を示し、際だった包含物は認められない。上層(1・2層)は明るく色調を示す黄褐色系の土層である。下層(3・4層)は、粘性が強い暗めの色調を示す点で上層とは区別される。最下層の4層には鉄分の沈着が顕著である。

遺物は20片程度が出土している。内訳は、吉備系土師質土器椀の破片が10数点と、土師質土器台付き皿1点、鍋片1点、白磁碗片1点、亀山焼きを含む須恵器甕片2点程度である。全体に細~小片であり、量も少なく、本土坑の機能に直接かかわるような状況とは言い難い。

本土坑の機能については、急峻な掘り方断面形態・水平堆積で汚れがなく下層が粘性を強める埋土の状況、遺物の少なさなどの点で、土坑9との共通性を示す。一つの解釈として水の管理に関連する土坑と考えることもできるが、残存部が少ないため、大形溝の端部を示す可能性も視野に入れておかなければならないであろう。

所属する時期は古い遺物(図63-3)も含まれるが、吉備系土師質土器椀の形態から、おそらくとも14世紀前葉までに埋没した遺構と判断される。

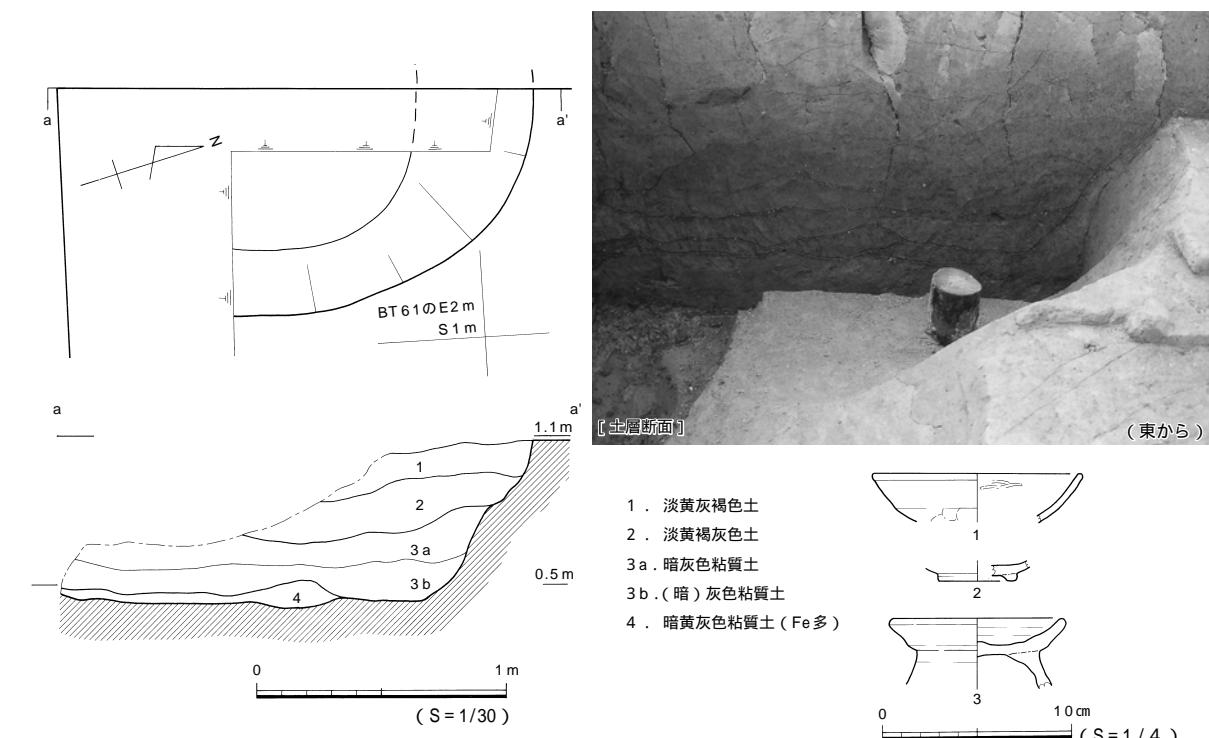


図63 土坑8・出土遺物

土坑9(図64・65、図版3・9)

調査区の北東部、BR～BT 55～56区に位置する。検出面は標高1.02m付近、5層下面である。同地点では、9層上面にあたる。本遺構は調査区東壁外に向かって続いているため、全体を確定することはできない。残

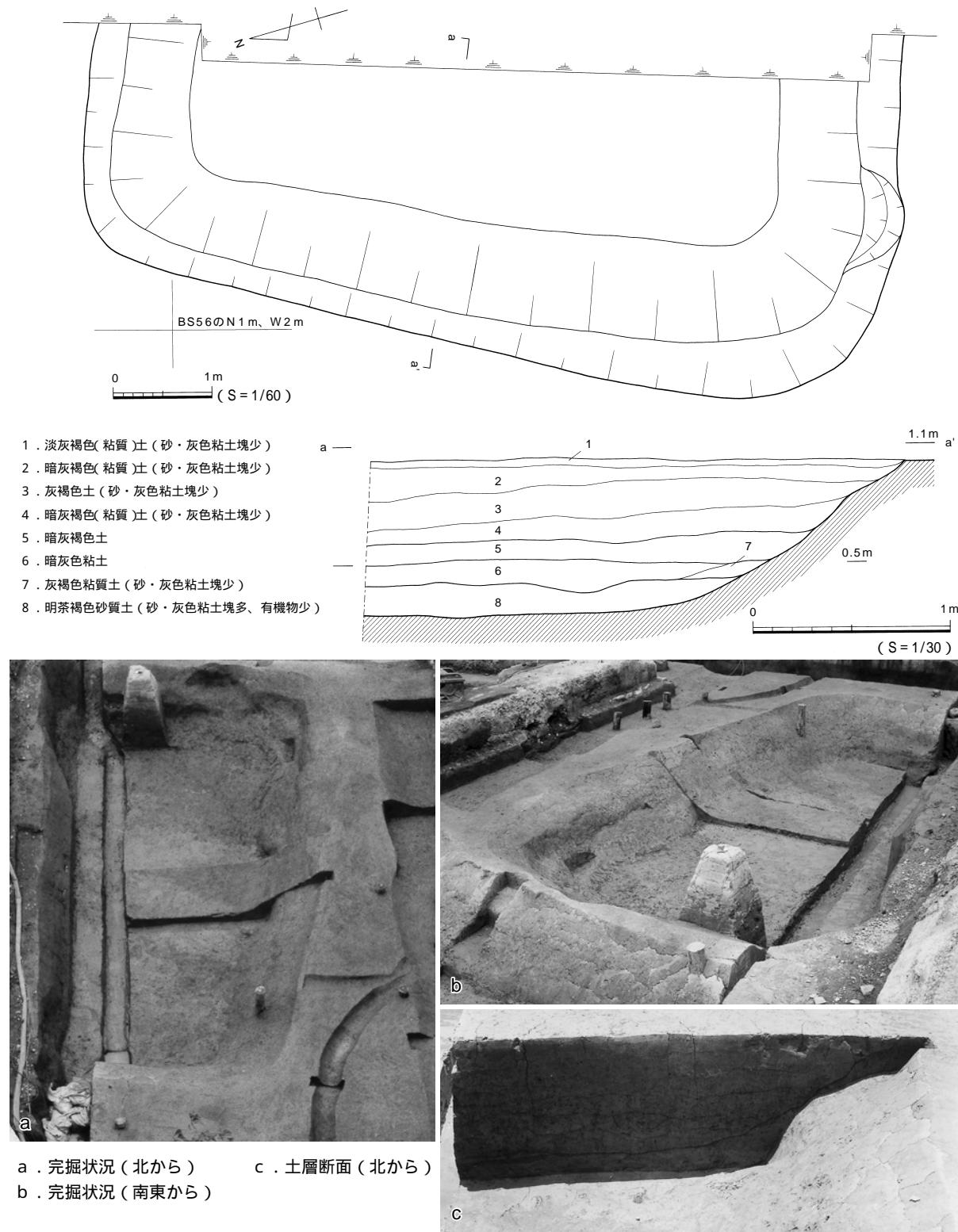
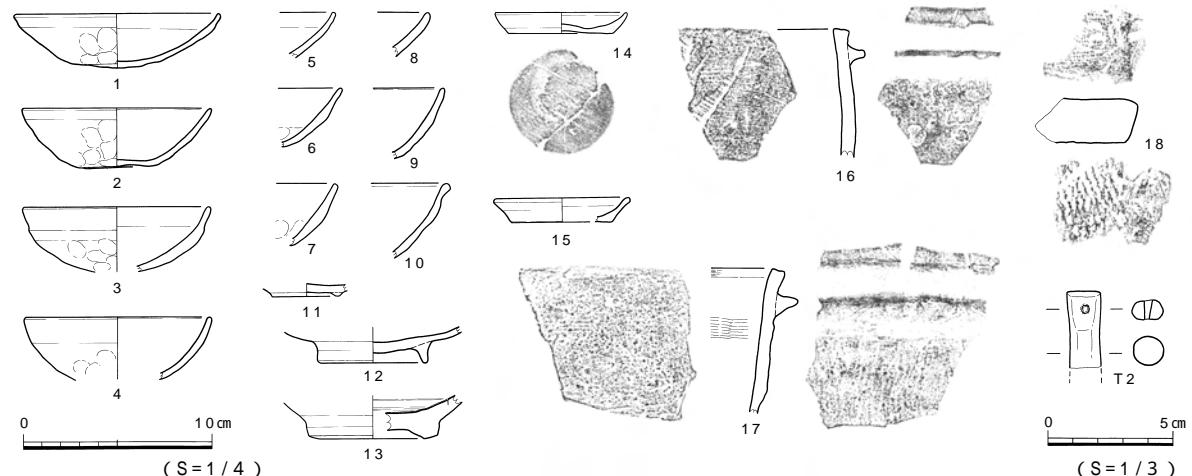


図64 土坑9

存形状からは、南北8.2mの直線的なラインを有する方形の形態が想定される。東西方向は3.7mを残すのみで、本来の長さは不明である。底面は標高0.23mに位置し、南北5.9m、東西2mの平坦面を呈す。深さは検出面から0.8mを測る。掘り方断面形は、概ね緩やかな逆台形といえる。

埋土はいずれも水平堆積を示す。それらは、やや砂質を帶びて灰色粘土をブロック状に含む灰褐色系の1~4層、特別な包含物を見ない5層・6層、砂を多く含み砂質が強く灰色粘土をブロック状に含む茶褐色系の8層の3群にまとめられる。8層は他の土層とは明瞭に区別される土層であり使用段階の堆積土層、そして、壁際の一部にのみ堆積する7層は崩落土のような一時的な堆積土と捉えられる。5・6層は、粘性あるいは色調面で差を見せるが、地下水によるグライ化などの影響を考慮すると、その差に形成上の違いを見いだすことはできない。6層以上に関しては、徐々に埋まっていく過程での堆積土と判断されるが、5・6層形成段階と1~4層形成段階では、包含物の違いからその環境に差があった可能性が考えられる。

以上のように、本遺構の特徴は、規模・形態面では深く大形で直線的な形状である点、水平堆積の埋土、最終的な堆積土以外では際だった包含物を含まない点・最下層で砂や有機物を含む点などがあげられる。こうした状況から、貯水のような水の管理にかかわる機能を窺うことができる。また、本土坑設置地点は、溝で区画された屋敷地の外側にあたっており、決して地形の高い位置とは言い難い。こうした配置も水利との関係を考慮する上で矛盾しない。他の遺構との関係をみると、出土遺物から同時期の溝と考えられる溝20・21とは接するような位置関係を保つ。同位置付近には、本土坑の肩部に、幅50cm程度の幅で、南側から土坑コーナーに向けての傾斜を作り出したような状態にある窪みが1ヶ所確認されており、具体的な機能について論じるには材料が不足しているが、南側に接するような溝との関連を考える上で注目される。いずれにしても、本土坑が水利関連の機能を



番号	種類・器種	法量(cm)		形態・手法他	胎土	色調(内面/外面)
		口径	底径			
1	土師質・椀	10.9	3.6	2.4 (内) 丁寧なナデ(外)押圧・ナデ(底外)押圧・ナデ、2/3残存	微砂、精良	乳白/淡茶白
2	土師質・椀	*9.9	4.3	3.2 (内) 丁寧なナデ(外)押圧・ナデ(底外)やや凹む、1/3残存	微砂、均質	乳白~灰白
3	土師質・椀	*10.0	-	(内) 丁寧なナデ: 工具痕(外)押圧・ナデ、1/6残存	微砂、均質	黄白
4	土師質・椀	*9.9	-	(内) 丁寧なナデ(外)押圧・ナデ、全体的に摩滅、二次的被熱?、1/8残存	微砂、均質	乳白~暗褐
5	土師質・椀	-	-	(内) 丁寧なナデ(外)押圧・ナデ・指紋付着	精良	薄黄白
6	土師質・椀	-	-	押圧・ナデ	微砂、均質	薄黄白
7	土師質・椀	-	-	(内) 丁寧なナデ・全面に煤(外)ナデ・器壁厚手	精良	灰褐~黒
8	土師質・椀	-	-	(内) 押圧・ナデ(外)丁寧なナデ・平滑・器壁厚手	精良	灰白
9	土師質・椀	-	-	押圧・ナデ(内)一部箇磨き?、器壁や厚手	微砂、砂粒や多	灰白
10	土師質・椀	-	-	(内) ナデ(外)押圧・ナデ・部分的に箇磨き	微砂、砂粒や多	乳白~黄白
11	土師質・椀	-	3.1	(内) 丁寧なナデ(高台)低短で一部つぶれる	微砂、概ね精良	薄黄白~灰白
12	土師質・椀	-	6.4	-	微砂、石英粒	乳白
13	白磁・碗	-	5.5	(内) 見込みに沈線・施釉(釉)透明度高い(高台)露胎・斜めに削り出し	精緻	灰白(釉)薄灰綠
14	土師質・皿	6.9	5.5	1.1 横ナデ、(底外)箇切り後板目痕	微砂、均質	浅黄橙
15	土師質・皿	*6.9	*5.3	*1.3 (外) 横ナデ(底外)箇切り後ナデ?、器壁摩滅、1/8残存	微砂、赤色粒	橙
16	瓦質・羽釜	-	-	(内) 横八ケ(外)ナデ・押圧・煤付着	細砂、砂粒や多	黄褐~黒褐
17	瓦質・羽釜	-	-	(口) 横ナデ(内) 横八ケ(外)縦八ケ・羽部下面煤	微砂、赤色粒	茶褐~黒褐
18	須恵質・平瓦	-	-	(内) 平行タタキ(外)布目(側縁部)切り離し後ナデ	粗砂	灰白
T 2	土錘	長(3.1)	幅1.4、厚1.2	棒状土錘、上端付近に穿孔、全体ナデ、重量5.3g	微砂、精良	黄橙

図65 土坑9出土遺物

有していた可能性は高いと判断されよう。また、前述した土坑8との類似性も指摘しておきたい。

中世の遺物としては、数点の完形に近い大形破片と120片程度の小～細片が出土した。遺物の内訳は、約半数（約60片）が吉備系土師質土器碗の破片である。一部に13世紀代（図65-9・10・12）の遺物を含むがいずれも小片であり、中心は14世紀前半に属する。その他に、土師質土器皿15片・鍋約10片・竈10数片、白磁碗2片、龜山焼きと備前焼約10片、瓦1片、土錐1点（図65-T2）などが認められる。完形に近い大きさの遺物は吉備系土師質土器碗2点（図65-1・2）と皿1点（同-14）がある。これらの碗は出土位置が他の遺物とは離れており、それらとは異なる要因で埋没した可能性も窺われる。

こうした遺物の状況から、本土坑の時期は14世紀前半、遅くとも中頃までに埋没したと考えられる。

c. 柱穴（図66～70、表3・4、図版3・7～9）

3層 あるいは 4層 除去後、多数の柱穴が検出された。6層 あるいは 7層 にあたる面である。全体で249基を記録した。その分布は、BR60区の3基を除くと、全て溝に区画された調査区南西部に限定されるが（図53）。その中でも粗密が存在することが顕著に表れている（表4）。特に柱穴が集中するのはBW～BX区である（図66）。一方、BVラインとBWライン間を東西方向に走る溝14以北から57ラインと58ライン間を南北に走る溝13の西側では、全く分布しない空間が認められる。このように柱穴の分布は、溝との密接な関連を示すものであり、溝の区画が建物の配置と強く結びついていることを窺わせる。そして、後世の攪乱の影響を考慮しても、溝14と同一ライン上に並ぶ井戸2・3から南側、BWライン以南に数を増していくことは明瞭である。

柱穴の規模は、その多くが直径30cmを中心とした23～40cmの幅におさまるが、それを超える直径40～60cmの

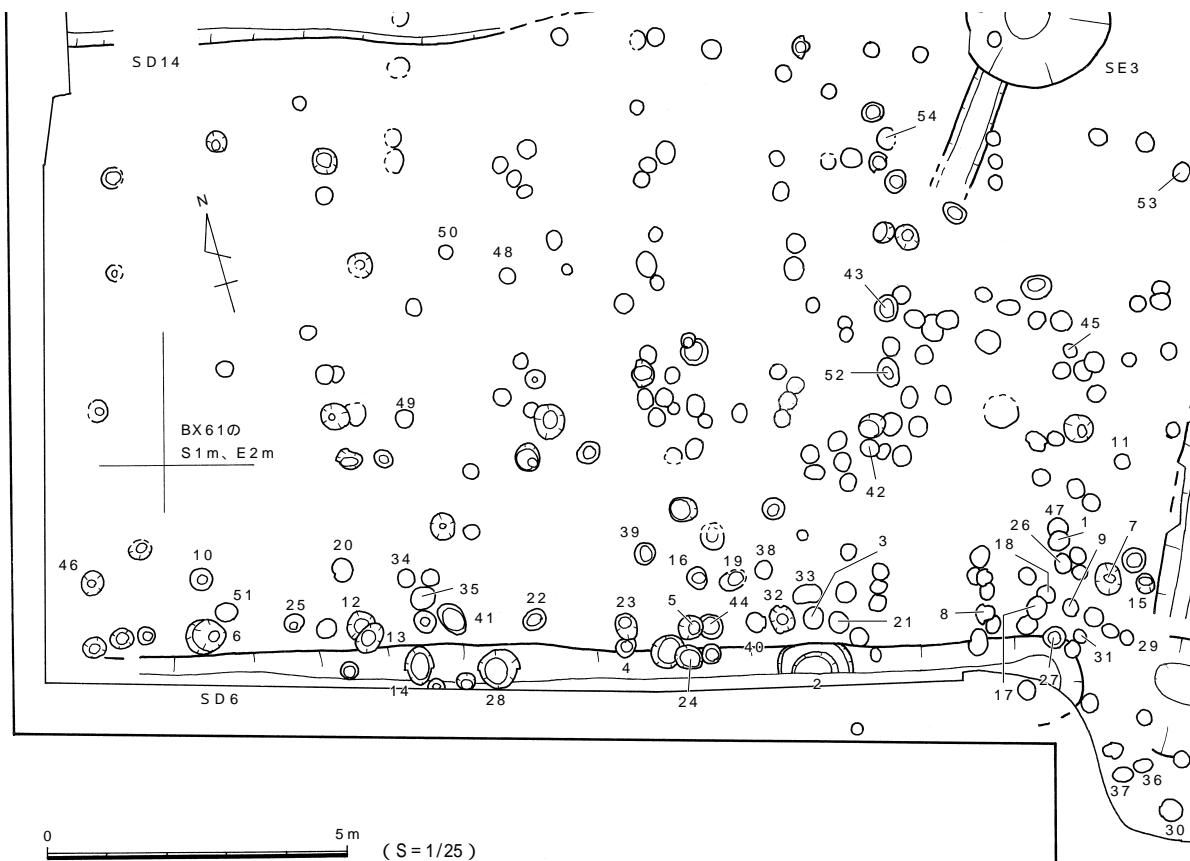


図66 古代末～中世の柱穴群分布状況

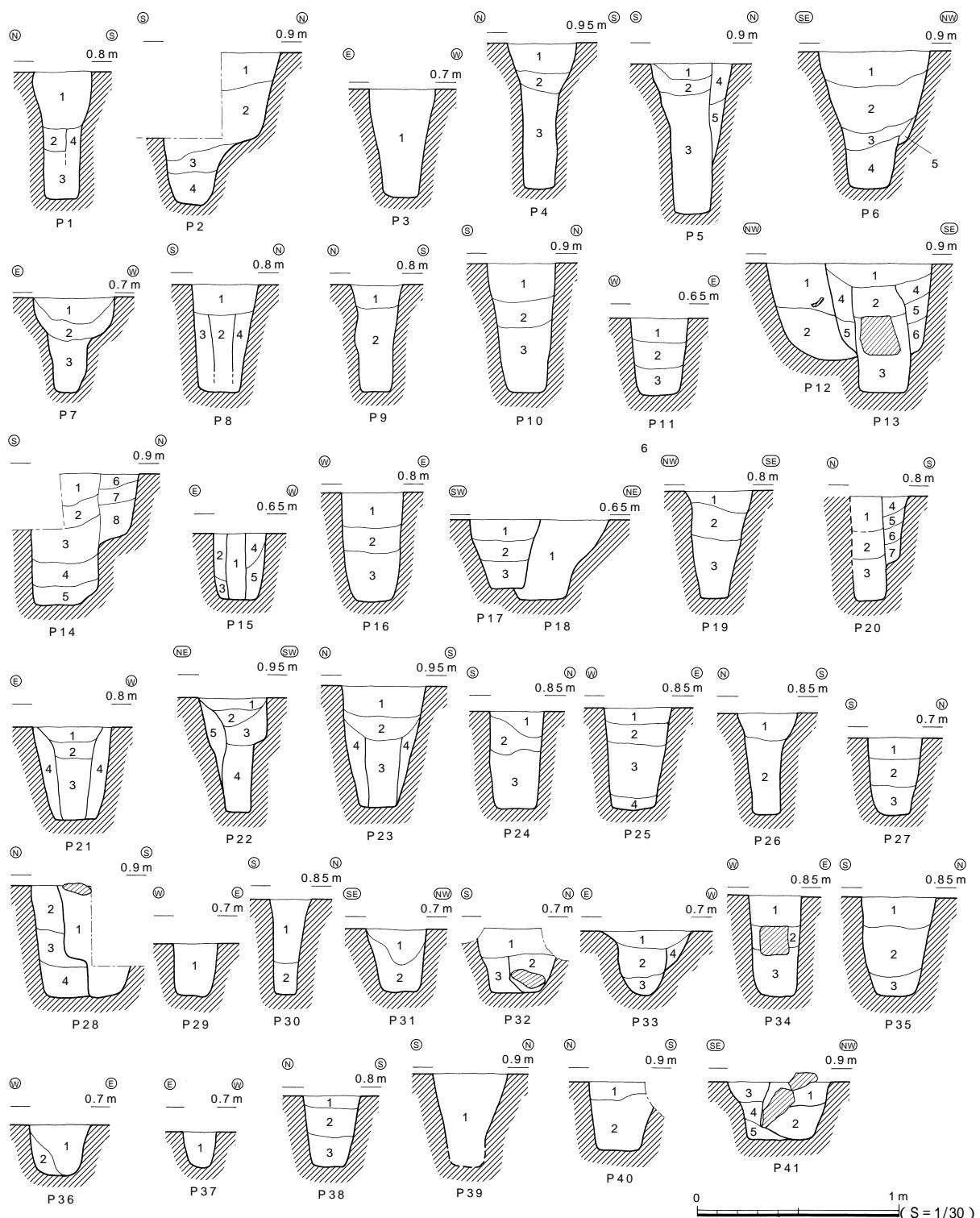


図67 古代末～中世の柱穴土層断面

大形柱穴がBX区を中心に分布する。また、底面のレベルからの分類も可能である(図67)。A群は底面高が標高0.1m前後(0.05~0.17m)で深い形態(図67-P1~6)、B群は底面が同約0.2m(同-P7~11・13~16)、B群は同0.23m(同-P18~21)、C群は同0.27~0.36m(同-P12・17・22~37)、D群は同0.4~0.55m(同-P38~41)である。A・B群では大形柱穴を含むほか、底面レベルが集中する傾向が強く、C・D群に認められ

表3 柱穴内土層注記一覧

番号 (区)	層	土層(包含物)	番号 (区)	層	土層(包含物)	番号 (区)	層	土層(包含物)	番号 (区)	層	土層(包含物)
1 (BX57)	1	暗灰色土	11 (BX57)	1	暗褐色砂質土(炭、焼土)	20 (BX60)	1	淡灰色土	28 (BX59)	1	灰茶褐色粘質土
	2	灰褐色土(灰色粘土塊)		2	暗褐色砂質土(炭)		2	灰色粘質土(淡青灰色粘土粒少)		2	淡灰褐色土
	3	暗褐色土		3	灰褐色砂質土		3	暗灰色粘土		3	暗灰褐色土
	4	暗褐色粘質土		1	暗灰褐色粘質土(茶褐色土塊少)		4	淡灰色土(淡青灰色土粒)		4	暗褐色土(暗茶褐色土粒、焼土)
2 (BX58)	1	淡褐色土(灰色粘土粒少)	12 (BX60)	2	暗褐色土	13 (BX60)	5	淡黃灰色土(淡黃白色土粒)	29 (BX57)	1	暗褐灰色砂質土(炭、焼土)
	2	灰褐色土(灰色粘土粒少)		2	暗褐色土		6	褐灰色土(淡黃白色土粒、炭)		1	暗褐色砂質土(灰色土粒、炭、燒土)
	3	暗灰褐色粘質土		1	灰色土(黄白色粘土粒)		7	暗褐灰色粘質土(淡黃白色土粒、炭)		2	暗褐色砂質土(炭、焼土)
	4	暗灰褐色粘質土		2	暗灰色土		3	暗茶褐色砂質土(黄褐色土粒、礫)		3	暗褐色粘質土
3 (BX58)	1	暗灰褐色土	14 (BX60)	4	灰褐色土(黄褐色土塊)		1	淡褐色粘質土(灰褐色土塊少)	31 (BX57)	1	暗灰褐色土(炭、土器)
4 (BX59)	1	灰褐色砂質土(灰色粘土塊少)		5	暗茶灰色土		2	淡灰褐色粘質土(灰褐色土塊少)		2	暗褐色粘質土(土器)
	2	暗灰褐色土(灰色粘土塊少)		6	茶灰色土(Mn多)		3	灰褐色粘質土(灰褐色土塊少)		1	淡灰褐色土(灰色粘土粒少)
	3	暗褐色土(灰色粘土塊少)		1	淡黃綠灰色土(炭、黃白色粘土粒少)		4	灰褐色粘質土		2	灰褐色土(礫:礎石)
5 (BX59)	1	灰褐色砂質土		2	淡黃灰色土(炭、黃白色土塊)		5	暗褐色粘質土		3	暗褐色粘質土
	2	灰茶褐色砂質土(灰色粘土粒少)		3	灰茶褐色土(灰色粘土粒少)		6	暗灰褐色粘質土		1	淡褐色土(灰色粘土塊)
	3	灰茶褐色土(灰色粘土粒少)		4	暗灰褐色土(黄白色土塊多)		7	暗灰褐色粘質土		2	淡灰褐色土
	4	暗褐色土		5	淡黃灰色粘質土		8	綠黃灰色土		3	灰褐色粘質土
	5	茶褐色粘質土		6	明黃綠灰色土	22 (BX59)	9	暗褐色粘質土(灰褐色土塊少)	34 (BX60)	4	灰褐色土
6 (BX60)	1	淡黃灰褐色砂質土(黃褐色土粒多)		7	淡黃綠灰色土		10	淡褐色粘質土		1	灰色土炭・焼土少
	2	暗茶灰色砂質土(黃褐色土粒)		8	綠黃灰色土		11	暗灰褐色粘質土		2	灰褐色土(礫)
	3	黃灰色砂質土(Fe多)		1	淡茶褐色砂質土(燒土)		12	暗褐色粘質土(灰褐色土塊少)		3	灰黃色粘質土
	4	黃灰色粘質土		2	灰褐色砂質土(炭、燒土)		13	暗灰褐色砂質土(燒土)		1	青灰色土
	5	暗灰黃色土		3	暗灰褐色砂質土(燒土)		14	暗茶褐色粘質土		2	暗灰褐色粘質土
7 (BX57)	1	灰褐色砂質土	16 (BX59)	4	暗灰褐色土		15	暗褐色砂質土(燒土)	35 (BX60)	3	黃灰色砂質土
	2	暗灰褐色砂質土(灰色粘土粒)		5	暗褐色土		16	淡褐色土(灰色土塊少)		1	暗灰褐色砂質土(炭、燒土)
	3	暗灰褐色土(灰色粘土粒)		1	淡褐色土(灰色土塊少)		17	灰褐色粘質土(灰色粘土粒少)		2	暗褐色土(灰色粘土塊少)
8 (BX58)	1	淡褐色砂質土(粗砂)		2	灰褐色粘質土		18	暗灰色土(灰褐色土塊少)	38 (BX58)	3	暗灰黑色(粘質)土(灰色粘土塊少)
	2	暗灰褐色砂質土(粗砂)		3	暗灰色粘質土		19	灰褐色土		1	灰褐色土
	3	灰褐色粘質土		1	暗灰色土(灰褐色土塊少)		20	暗黃灰色土		2	暗灰黑色土(灰色粘土塊少)
	4	暗褐色粘質土		2	暗褐色土		21	茶灰褐色土		3	暗灰黑色(粘質)土(灰色粘土塊少)
9 (BX57)	1	暗灰褐色土(土器)	24 (BX59)	3	暗褐色土		22	4(黄)灰色粘土	39 (BX59)	1	灰褐色土
	2	暗褐色土		4	暗褐色土		23	暗茶褐色粘質土		2	灰黑色砂質土(灰色粘土粒少)
10 (BX60)	1	黃灰色粘質土		5	暗褐色土		24	暗褐色土(灰褐色土粒少)		3	暗褐色土(灰色粘土粒少)
	2	灰褐色土		1	暗褐色土		25	暗灰褐色粘質土		1	灰褐色土
	3	暗茶灰色粘質土		2	暗灰褐色土		26	1暗褐色土		2	暗褐色土(灰色粘土粒)

る数値のバラツキの大きさとは違いを示す。しかし、現状では、各群について、分布上の偏在性は認めがたい。

柱穴の埋土は全体的に共通性が高く、柱痕部分と考えられる堆積が確認されることが多い(図67)。柱痕部分には灰色あるいは灰褐色粘土粒あるいはブロックを含む傾向が認められる(表3)。遺物を包含する柱穴も比較的多い。その多くは小~細片であり埋め土中の混入と判断されるが、11基の柱穴において完形あるいは完形に近い大形の破片が出土した(図68・69)。遺物は中層~上層のレベルに置かれた状態を示す場合がほとんどである(図68)。遺物は基本的には1点のみが出土し、土師質土器碗(図69-1~4)・杯(同-5)・皿(同-6~11)・瓦器皿(同-12)などがあげられる。こうした遺物には、何らかの祭祀的行為が想定されよう。

土器以外に注目されるものとして、10基の柱穴で確認された中形~大形の礫があげられる(図70、図版8)。

表4 各区分柱穴数

■ 撹乱					
60区	59区	58区	57区	56区	55区
3	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
溝					
0	0	2	3	0	0
1	4	10	8	0	0
9	20	38	24		
13	26	44	36		
		1	7		
					B Y区

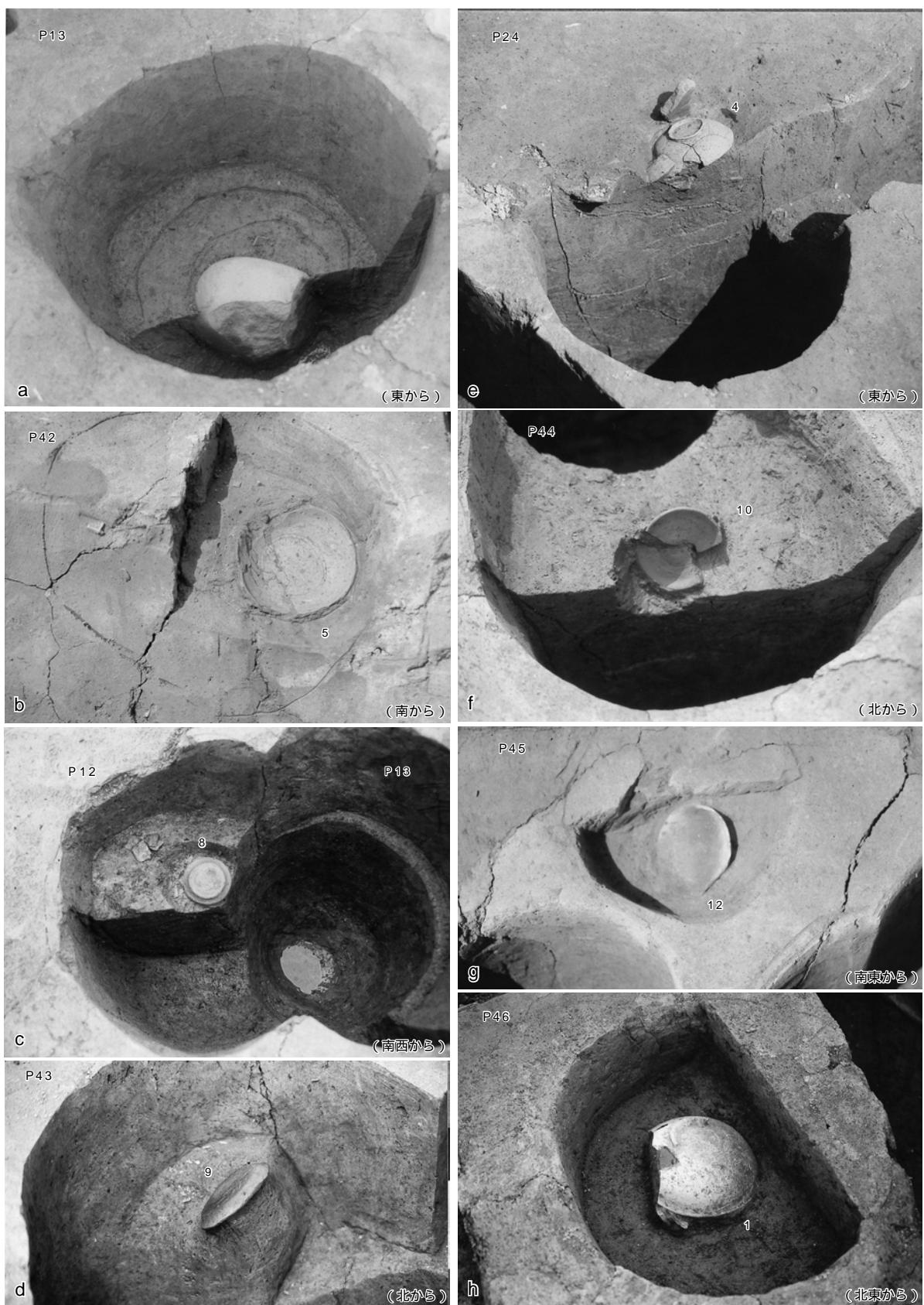


図68 柱穴内遺物出土状況

その中で、同時に皿を共伴する柱穴は1基（P44：BX58区）である。いずれの礎も柱穴の下面あるいは中層の位置する（図67）。大きさは15~25cmで、粗割りによって面を整えている。全体的な形状は多様であり規格性は認めがたいが、被熱痕が認められる場合が多い。礎石の役目が想定される。

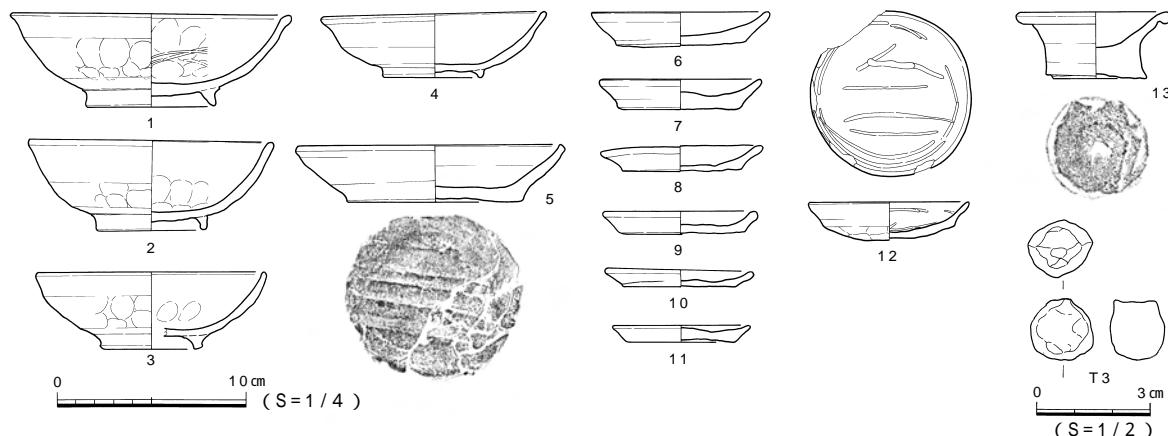
こうした祭祀的行為が想定される柱穴あるいは礎石状石を有する柱穴の分布状況を確認しておこう（図66）。

椀が内部に置かれた柱穴はP24（BX58区）・P46（BX60区）・P47（BX57区）、杯はP42（BX58区）、皿はP12（BX59区）・P43（BW58区）・P44（BX58区）・P45（BW57区）・P48（BW59区）・P49（BX59区）・P50（BW59区）があげられる。皿を有する柱穴の多さが際だつ。それらの分布は、椀出土柱穴がBX区に限定的で57・58・60区に各1基あるのに対して、皿はBW区を中心にBX区にも広がっており、器種による分布の違いが見いだされる。また、礎石状加工石を有する柱穴は、BW57区（P53）・BW58区（P52・54）・BX58区（P32・44）・BX59区（P13・34・41）・BX60区（P10・51）に分布する。特にBX区に集中し、椀の出土柱穴域と重複する傾向が指摘される。

その他の遺物では、P4（BX59区）出土の砥石・P3（BX58区）出土の釘・P12（BX59区）出土の不明土製品が注目される（図69・70、図版7・9）。土製品（T3）は皿・脚台（図69-8・13）と共に伴する。土玉状の一部に小さな突起部が作り出されているが、本来の具体的な姿を復元することはできない。

柱穴群の時期は、出土遺物あるいは重複関係を有する溝との関係から、古代末～中世前半におさまる。その時期幅のなかで柱穴の分布や内容に、時期的な違いが現れてはいないことから、断絶などによって集落構成が大きく変化するわけではなく、屋敷地は継続的に営まれたと判断される。

また、屋敷地内では、大形で底面の深い柱穴、礎石状加工石を有する柱穴、祭祀的行為に伴うと考えられる遺物を包含する柱穴、そういった柱穴が、BX区を中心に集中的に分布する傾向があることから、具体的には、調

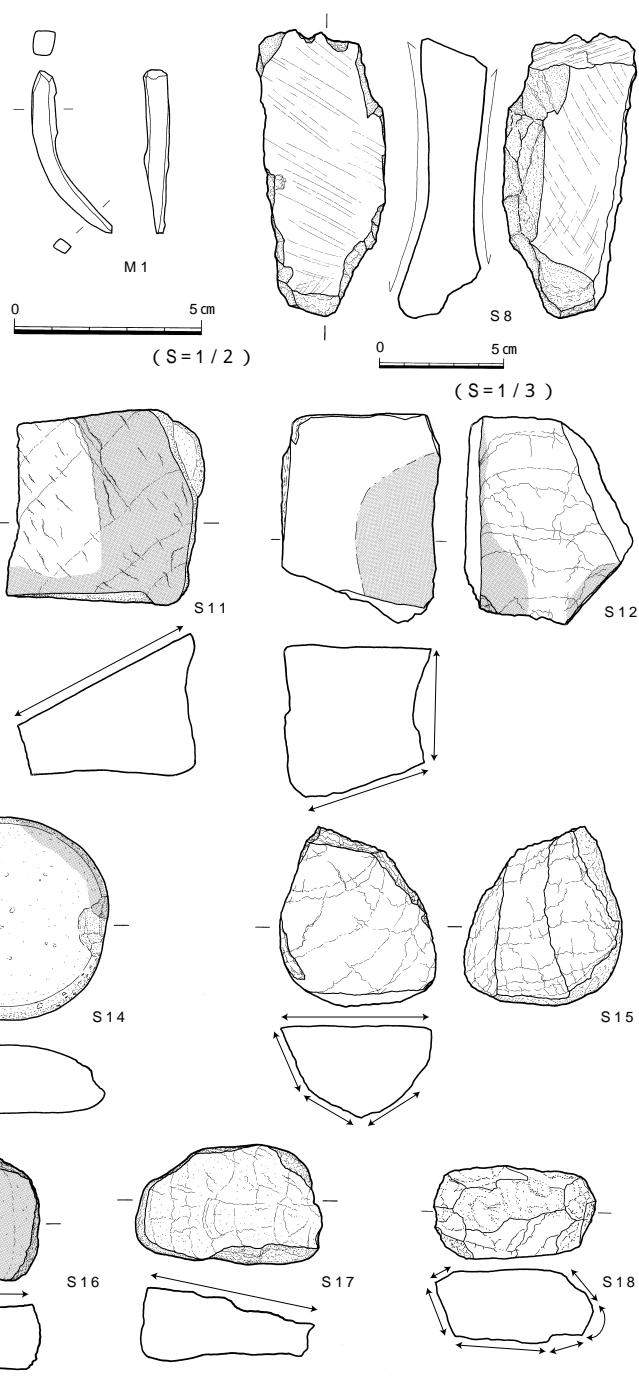


番号	ピット番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
			口径	底径	器高			
1	P46	土師質・椀	14.8	6.7	4.9	(内)ナデ後一部籠磨き・重ね焼き痕(外)押圧(口)横ナデ、高台1/2欠	微砂	淡橙白/橙白
2	P47	土師質・椀	13.0	5.4	4.7	押圧・ナデ(内)煤、口縁一部欠	微砂	淡黄白・白灰/黄白
3	P47	土師質・椀	12.0	4.1	4.1	押圧・ナデ(口)横ナデ、2/3残存	微砂	黄灰白
4	P24	土師質・椀	11.9	5.1	3.4	(内)ナデ後一部籠磨き・重ね焼き痕(外)ナデ・押圧	微砂	淡黄茶灰/淡茶灰
5	P42	土師質・杯	*13.7	*9.1	*3.0	横ナデ(底外)籠切り後ナデ、剥落顯著、口縁一部欠	微砂	黄茶灰
6	P48	土師質・皿	9.3	6.8	1.3	丁寧な横ナデ(底外)籠切り後丁寧なナデ、口縁一部欠	微砂	黄橙茶/橙茶
7	P49	土師質・皿	*6.4	4.8	1.2	横ナデ(底内)押圧(底外)籠切り	微砂	淡橙
8	P12	土師質・皿	8.6	6.2	1.3	横ナデ(底内)押圧(底外)籠切り	細砂、赤色粒	乳白灰
9	P43	土師質・皿	8.2	6.5	1.2	丁寧な横ナデ(底内)横ナデ後静止ナデ(底外)籠切り	微砂	黄茶灰/橙茶灰
10	P44	土師質・皿	7.8	5.9	1.0	横ナデ(底外)籠切り後粗いナデ	微砂	乳灰白
11	P50	土師質・皿	*7.1	5.8	0.9	横ナデ(底内)ナデ(底外)籠切り	微砂	明橙褐
12	P45	瓦器・皿	8.5	2.7	1.9	(内)暗文:粗(外)横ナデ・押圧	微砂	暗灰/暗灰
13	P12	土師質・台付皿	*8.3	5.9	3.5	横ナデ(底外)籠切り後ナデ、口縁一部欠	微砂	淡灰白
T 3	P12	不明土製品	長1.6、幅1.7、厚1.5	いびつな球状、特に上端に小突起状の凹凸あり、ナデ、重量2.6g			微砂	淡橙

図69 柱穴出土遺物(1)

査区の南側方向に、より大形の建物が建つ可能性が指摘される。さらに、こうした建物の柱穴では椀を伴う傾向も窺われる。

後世の攪乱などが影響して、柱穴を個別の建物にまとめられなかつたが、井戸2・3の南側、BWライン以南の空間に建物が配置されること、そして、調査区の南端付近から南方に向かって中心的な建物が存在した可能性が高い。



番号	ピット番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質 / 石材	特徴
M1	P 2	釘	4.7	0.6	0.6	-	鉄	角釘、一部曲がる、錆びれ
S 8	P 4	砥石	115.5	49.5	34.2	221.9	流紋岩	表裏・端面に研磨による摩滅
S 8	P 13	粗削盤	241.8	187.2	133.7	9680.0	閃緑岩	巨大な円盤を粗削
S 10	P 32	粗削盤	185.0	111.6	75.5	1998.6	花崗岩	盤を粗削り、平坦面をつくりだす
S 11	P 34	粗削盤	156.8	143.5	115.0	3754.2	流紋岩質凝灰角盤岩	巨大な盤を粗削り、平坦面をつくりだす、被熱
S 12	P 51	粗削盤	168.2	121.2	123.5	3757.4	流紋岩	巨大な盤を粗削り、角柱状に加工、被熱
S 13	P 41	粗削盤	226.5	145.0	74.2	2256.8	花崗閃緑岩	角盤を粗削り、板状に加工、被熱
S 14	P 10	砥石	162.0	176.2	55.3	2316.7	流紋岩質凝灰角盤岩	表裏面が平滑な円盤を利用、被熱
S 15	P 52	粗削盤	144.1	121.5	73.5	1748.3	花崗閃緑岩	盤を粗削り、平坦面をつくりだす、被熱
S 16	P 53	粗削盤	105.5	152.8	60.5	1253.6	花崗岩	盤を粗削り、平坦面をつくりだす、被熱
S 17	P 44	粗削盤	148.0	97.2	59.8	1107.7	石英斑岩	盤を粗削り、平坦面をつくりだす、被熱
S 18	P 54	粗削盤	131.1	74.0	58.6	759.6	石英安山岩	盤を粗削り、平坦面をつくりだす

図70 柱穴出土遺物(2) 石器・金属器

d . 溝

溝6（図53・71～73、図版3・4）

調査区南端において、58ラインの東約2.5m付近を東端部とし、調査区を東西方向に走る溝として検出された。BX～BY57～60区のBYライン上にほぼ一致する。検出にあたっては、本溝の上部を覆っていた炭化物を多く包含する6層中から検出を試みたが、最終的には、同層除去後、7層上面において確認した。東端部付近では、同面においても依然として6層から続く炭化物などの汚れが特に顕著であった。検出レベルは、本溝の北側肩部で標高1.38m前後、やや低い東端部付近で同1.13mを測る。また、58ライン以西において本溝内に位置することとなった調査区南壁面（図71-d）では、標高1.2m～1.26mに本溝の上面が求められる。このように、場所によって遺構掘削上面レベルに高低差が生じることとなった。その原因としては、遺構上部を覆う6層が10数cmの厚さで本溝内に落ち込んでいる状況が確認されており、本溝が完全に埋没する段階での地面の起伏に一因があるのではないかと考えている。

溝は長さ約18mが調査区内に残るが、西に向かって調査区外へ伸びる。幅については、溝の南側部が調査区外となるため正確な数値を把握することはできないが、0.5m～0.9mの残存部に加え、断面観察などから2m前後が推測される。底面は、西から東に向かって標高0.62mから0.5m、そして東端部では一段下がって同0.24mを測る。しかし、調査区南端ラインは本溝を斜めに横切っており、端部下面で計測されたレベルは溝の底面を正確に捉えられているわけではない。そうした点を考慮すると、全体的には標高0.5m前後にその位置が求められる。深さは0.8m前後、断面形は急峻な立ち上がりの逆台形が復元される。一方、東端部では深さは1m程度となっており、西側に延びる流路部分から落ち込む状態が平面的にも確認されている。そして、急峻な立ち上がりをもつて東部分は収束する（図71-b）。

埋土は、1群（上層）・2群（下層）・3群（最下層）に大別される。

最下層となる3群はa断面に確認される14・15層にあたり、本溝の東端部において長さ1.2m程度の範囲にのみ、その堆積が認められる。全体に鉄分の沈着が認められるが、炭・焼土などの包含はなく均質な土層を示す点は1・2群と異なる。標高0.24mに位置する底面は、b・c断面では3群の堆積が確認されないため、西側溝から一段下がるような状況を見せる。その差は25～30cmを測る。これは、両断面位置が溝の北側に偏っているため、3群の堆積部分からはずれている可能性も高く、その有無については断定できない。

下層にあたる2群は本溝全体に堆積が確認された。a断面の10～13層・b断面の5～7層・c断面の4層が対応する。底面レベルは、前述したように、東から標高0.49m（a断面）・0.5m（b断面）・0.63m（c断面）を測るが、c断面が底部に達していないことを考えると、標高0.5m前後に求められよう。堆積土は、a断面の様相から炭化物と焼土の包含が特徴的であり、多量の炭化物を含む上半（10・11層）と焼土が多い下半（12・13層）に分けられる。その他に、完形あるいはそれに近い大形破片の椀などが集中して出土する点も際立っており、こうした特徴から、3群とは区別される。

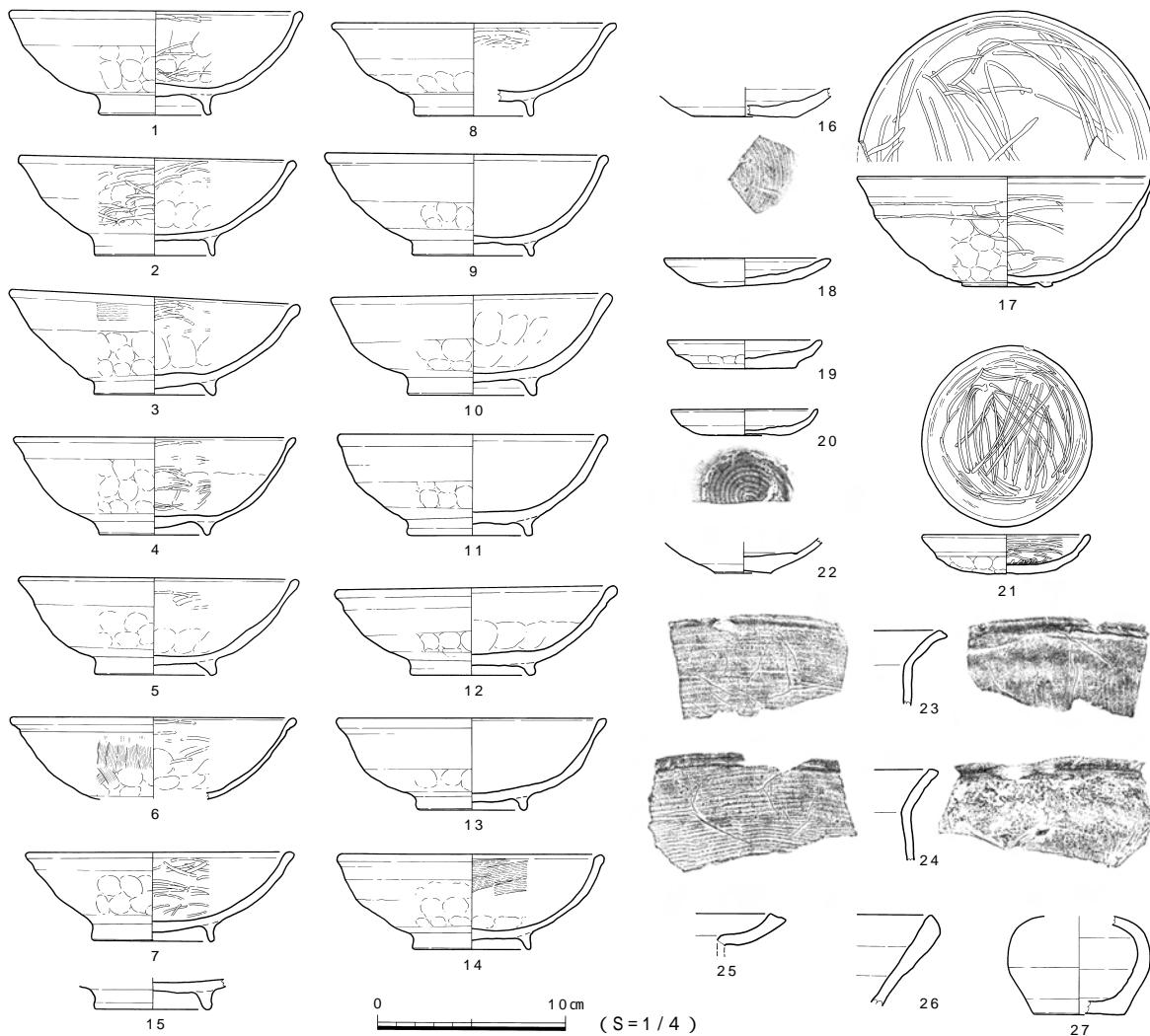
上層となる1群は、2群と同様に溝全体に堆積する。a断面の1～9層・b断面の1～4層・c断面の1～3層が含まれる。a断面では、包含物が比較的少ない1・2層、焼土・小礫・土器を多く含む3～6層、焼土・小礫を多少含むが際だつほどではない7～9層にまとめられる。下面是、a断面で標高0.73m～0.83m、b断面で同0.78m、c断面で0.8mを測る。a断面の1・2層は非常に薄い土層であり流入土的な性格が、そして3～6層と7～9層の関係は、後者が一定の堆積をした後に焼土など多くの包含物を含む前者によって溝が埋められたと想定される。こうした炭・焼土などの包含物は、3ヶ所の断面をみると、溝の中央部に堆積する傾向が強い。

以上の状況から、本遺構の埋没過程を復元してみよう。

まず、溝の最古段階では、3群の堆積を伴う下層溝が形成されている可能性がある。ただし、部分的な堆積である可能性も残っており、現時点では、資料不足で断定することはできない。次の段階となる2群の堆積は、底



面の高さが標高0.5m付近で高低差の少ない溝を、焼土粒を多量に含む土層の上部を大量の炭化物が埋めるという形で進行する。同群の堆積にあたっては、被熱を窺わせる埋土内の包含物に加え、b断面の7層下面では熱の影響と思われる硬化面が確認されており、被熱痕跡を強く残す。その後、1群の堆積においても、焼土などが上



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	*15.7	*5.6	5.6	(内)丁寧なナデ・一部箒磨き・下半押圧(外)横ナデ、1/3残存	微砂、均質	薄黄白～薄橙白
2	土師質・椀	14.9	6.2	5.2	(内)丁寧なナデ・一部箒磨き・下半押圧(外)押圧・粗い箒磨き、平滑で丁寧な作り	微砂、均質、石英顯著	乳白～薄黄白
3	土師質・椀	15.5	6.1	5.3	(内)丁寧なナデ・一部箒磨き・下半押圧(外)押圧・ナデの工具痕、二次的被熱、摩滅	微砂、均質	乳白～薄橙白
4	土師質・椀	*15.0	*5.6	5.2	(内)ナデ・一部箒磨き(外)押圧(口)横ナデ後端部箒磨き・丁寧で薄手な作り、1/3残存	微砂、均質	薄灰白/薄黄白
5	土師質・椀	*14.9	6.1	5.2	(内)丁寧なナデ・下半押圧(外)押圧後縦ナデ(口)横ナデ、3/4欠	微砂、概ね精良	乳白/橙白
6	土師質・椀	*15.3	-	-	(内)丁寧なナデ・一部箒磨き・下半押圧(外)押圧後縦ナデ・器壁薄手、1/4残存	微砂、均質	薄黄白～灰白
7	土師質・椀	15.3	6.2	4.8	(内)丁寧なナデ・粗い箒磨き・重ね焼き痕(外)押圧・底部に亀裂(口)横ナデ、厚手	微砂、均質	乳白
8	土師質・椀	*15.2	*6.0	5.0	(内)丁寧なナデ・一部箒磨き(外)押圧・ナデ・中央で屈曲、摩滅、1/3残存	微砂、均質	乳白～薄橙白
9	土師質・椀	15.1	6.2	5.5	(内)丁寧なナデ・重ね焼き痕(外)押圧・ナデ・三次的被熱	細砂、砂粒多	白灰/薄橙
10	土師質・椀	14.9	6.6	5.4	押圧・ナデ・底部に亀裂、摩滅、器壁厚手	微砂、均質、概ね精良	薄黄白～薄橙白
11	土師質・椀	14.4	6.1	5.4	(内)丁寧なナデ・重ね焼き痕(外)押圧・ナデ・摩滅、器壁厚手、3/4残存	微砂、均質	黄白
12	土師質・椀	15.1	6.2	4.7	(内)下半押圧後丁寧なナデ(外)押圧(口)横ナデ・端部肥厚、器壁厚手、摩滅	微砂、石英	乳白～薄橙白
13	土師質・椀	*14.4	*5.7	4.9	(内)丁寧なナデ(外)押圧(口)横ナデ・身部中位で屈曲、摩滅、3/4～1/3残存	微砂、均質	薄黄白～薄橙白
14	土師質・椀	*14.2	6.1	5.1	(内)板ナデ・底部押圧・重ね焼き痕(外)押圧後ナデ・粘土接合痕、摩滅、1/3残存	微砂、均質	乳白～薄黄白
15	土師質・椀	-	6.0	-	ナデ	微砂、均質、精良	乳白
16	土師質・椀	-	*5.8	-	横ナデ(底外)糸切り	精良	灰～青灰
17	瓦器・椀	*16.0	*4.4	5.9	(内)ナデ・粗い箒磨き・暗文(外)押圧後一部箒磨き、1/2残存	精良	黒・断面 黄白
18	土師質・皿	8.9	5.9	1.5	横ナデ(底外)箒切り後丁寧なナデ・摩滅	微砂、赤色粒	薄橙褐
19	土師質・皿	*8.2	*5.4	1.5	(内)横ナデ・仕上げナデ(外)横ナデ・下半押圧(底外)箒切り後ナデ、1/3残存	微砂、赤色粒	薄橙褐
20	土師質・皿	*7.8	*4.9	1.4	横ナデ(底外)糸切り・外面に自然釉が飛沫状に付着、1/2残存	微砂、均質	灰
21	瓦器・皿	9.0	7.6	2.1	(内)ナデ・同心円状や平行の暗文(外)押圧(口)横ナデ	微砂、均質	灰黒～黒
22	白磁・皿	-	*3.0	-	ナデ(内)見込部に沈線・中央に磨り痕(底外)箒切り後ナデ・露胎、内外面施釉	精緻	薄綠白
23	土師質・鍋	-	-	-	(内)横八ヶ(外)縦八ヶ後口縁部はナデ・押圧	微砂、均質	薄黄白～黄灰
24	土師質・鍋	-	-	-	(内)横八ヶ・上半幅広・下半幅狭・炭化物付着(外)縦八ヶ後押圧・煤付着	粗砂	暗褐
25	瓦質・鍋	-	-	-	(内)横ナデ(外)ナデ・押圧・煤付着	微砂、均質	黄灰～白灰/黒褐
26	須恵器・鉢	-	-	-	横ナデ	微砂、均質	灰～青灰
27	須恵器・小瓶	-	4.9	-	横ナデ(底外)箒切り後板ナデ・外面に自然釉が飛沫状付着、1/3残存	微砂、均質	暗赤灰/灰

図72 溝6出土遺物(1)

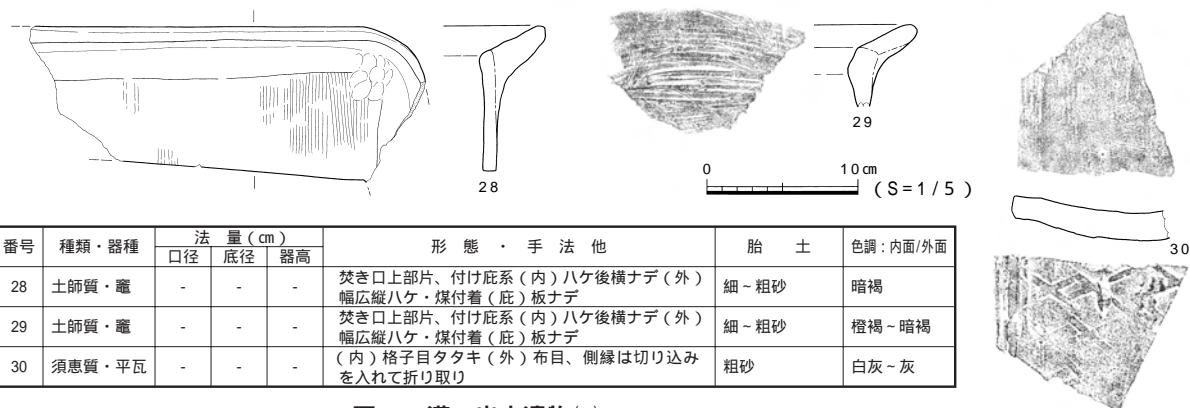
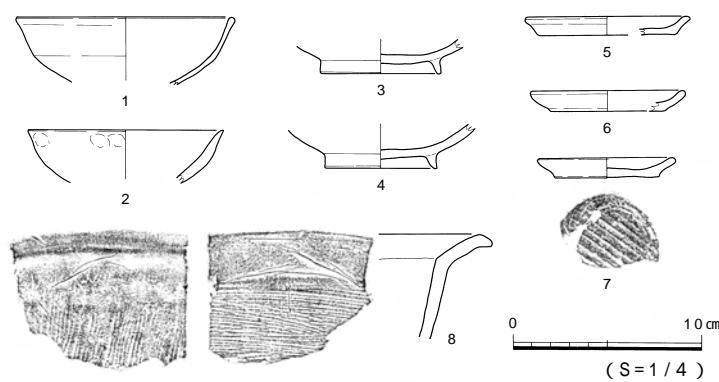


図73 溝6出土遺物(2)

半に多量に含まれる。さらに、その上部を覆った1層は、比較的早い段階で上面が沈下したと考えられる。そして最終的には、炭化物を多く含む汚れた土層(6層)が、その凹みを完全に埋め尽くし、溝の上部周辺を中心として厚く堆積する。

こうした堆積を生み出した背景には複数回に及ぶ溝の掘削、そして、顕著な被熱痕跡に関しては、例えば火災の発生後の整地作業などが考えられ、遺構の埋土あるいは周辺に広がる土層の形成に大きな影響を与えた可能性が想定される。

本溝からはコンテナ2箱分(1箱28ℓ)の遺物が出土した(図72・73)。ほぼ完形の5点を含む土師質土器椀(図72-1~15)は、個々の遺物の保存率あるいは量的にも出土遺物の中心を占める。その他の遺物で完形となるものは、土師質土器皿1点(同-18)と瓦器皿1点(同-21)のみである。瓦器椀は1/2程度の残存率である(同-17)。その他に、須恵器椀、白磁皿、鍋、甕、瓦などを含むが、いずれも小片である。未掲載遺物は、小~細片が全体でポリ袋1~2袋(13号)程度があげられる。土師質土器椀は籠磨きの有無などの特徴から新・旧の2群に分けられる。いずれにも完形品が含まれ、出土量も差を示さないことから、どちらかの混入とは考えにくい。また、それらの中で完形品に注意して出土位置を確認すると、下層からは籠磨きが残る古いタイプ(図72-2~4)が出土する傾向が指摘されることからも、溝の埋設時期は少なくとも2段階あると判断される。



遺構を覆う6層から出土した遺物(図74)は、中世前半(13世紀代)に属する特徴を有する。

以上の点から、本遺構が機能した時期は、古代後半~末におさまり、さらに、埋設時期は12世紀後葉と12世紀末葉前後の少なくとも2時期に求めることができよう。

番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調: 内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	*11.8	-	-	(内)ナデ(外)押圧・ナデ、1/5残存	細砂	淡白褐
2	土師質・椀	10.4	-	-	(内)ナデ(外)押圧・ナデ、1/6残存	微砂	淡白褐~暗灰褐
3	土師質・椀	-	6.4	-	(内)丁寧なナデ(外)ナデ	微砂、精良	灰褐~褐灰
4	土師質・椀	-	*6.1	-	(内)丁寧なナデ・粘土接合痕(外)ナデ、1/2残存	微砂、精良	淡灰褐
5	土師質・皿	*8.8	*7.4	1.1	横ナデ(底外)籠切り、1/5残存	微砂、精良	淡橙
6	土師質・皿	*8.2	*6.3	1.1	横ナデ(底外)籠切り後押圧、1/5残存	微砂、精良	淡褐白
7	土師質・皿	*7.3	*5.6	1.1	横ナデ(底外)籠切り後板ナデ、1/3残存	微砂、精良	淡褐
8	土師質・鍋	-	-	-	(口)横ナデ(胴)内面:横~斜めハケ・外:縦ハケ	微~細砂	淡茶褐/淡黄褐

図74 溝6周辺 6層 出土遺物

溝7（図53・75）

調査区南東部、BX～BY 56～57区において、BYライン上を東西方向に走る溝が復元される。溝6とは約1mの間隔をもって同じライン上に位置する。ただし、57ラインの東側では、溝23あるいは現代の共同溝設置工事によって消失している。

平面的な検出は基礎の下部にあたる部分で標高0.9m、9層であったが、一部に残された土層断面からは標高1.33～1.28mの7層上面に掘削面を求めることができる。残存長は東西方向に約2.5mである。

本遺構の上部には僅かに4層の堆積が認められる。同土層は、調査区南端部付近において6層を削平して形成される状況が西壁面でも確認されており、それに対応するラインが本溝上にあたることがわかる。

溝の幅は検出面で0.9m、土層断面上面で1.68mが残存するが、本来は2m程度が復元される。底面は標高0.8m前後に位置し、深さは約0.45mである。断面形は緩やかなすり鉢状を呈する。

埋土は、上層と類似する1層、焼土あるいは炭化物を包含する点が特徴的な2～5層、際だった包含物が認められない砂質土である6～8層、粘質土である9層以下の四群にまとめられる。5層の下面是標高1.03m、溝の底面となる10層の下面是同0.8m前後に求められる。

こうした底面レベルあるいは焼土・炭化物を包含する埋土の特徴を、本溝と同一ライン上で西側に位置する溝6と比較すると、本溝は溝6の1群に対応すると判断される。炭化物の集中土層に注目して細分した1～5層（上層）は溝6の1～6層（a断面：以下略す）に、6～8層そして9・10層（下層）が溝6の7～9層に対応する。それぞれの底面レベルは、下層の下面ではほぼ一致するが、炭化物等が含まれる上層では本溝の方が10cm程度高い位置を示す。このように、本溝も溝6と同様に、焼土あるいは炭の堆積によって埋没したことが見て取れるなど、両溝の関連性の高さが窺われる。その他に、位置関係からは溝8の存在も注目されるが、同時に機能したかどうかについては決め手に欠ける。

遺物は30片程度が出土した。掲載した遺物（図75）は、その中でもやや大きめの破片であり、それ以外は小～細片が占める。土師質土器椀・皿・鍋・竈、瓦器椀、須恵器椀などの破片である。一部の遺物には若干の時期差が認められ、器種構成あるいは時期幅などは溝6との内容と矛盾しない。ただし、全ての遺物が本溝の機能した時期を直接示すかどうかは、完形品などを含まない小片であることから注意する必要があろう。

本溝の埋設時期は、出土遺物の特徴に加え、溝6の下層部分が本溝には確認されない点を考慮し、溝6の上層、つまり新しい段階に求められる。古代末に考えたい。

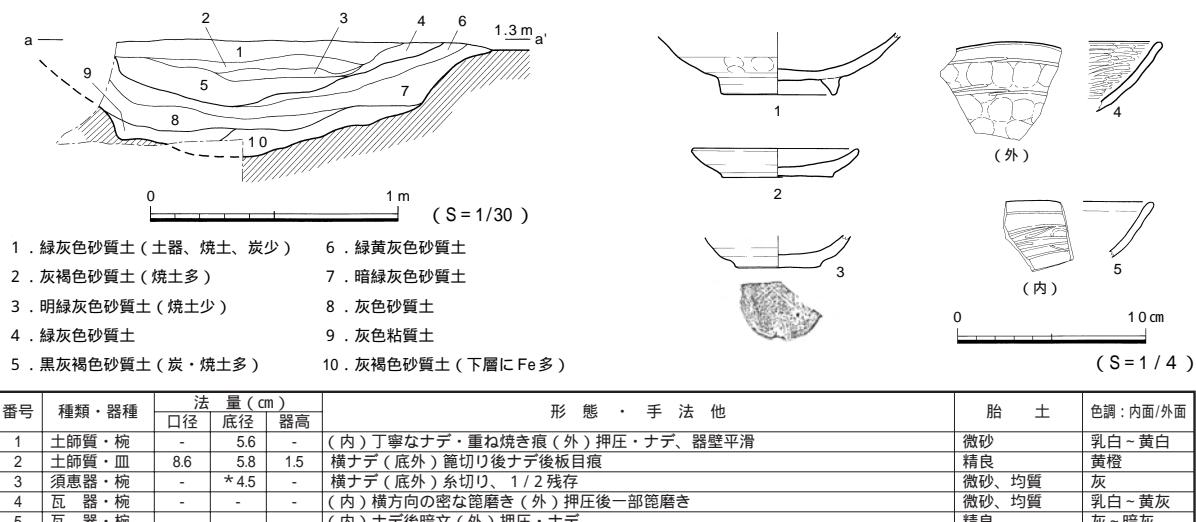


図75 溝7・出土遺物

溝8（図53・76）

BV ~ BY 56~57区で検出された。検出レベルは標高1.2m前後、4層下面であり、6層・7層に対応する。調査区の南東部、57ライン付近を南北方向に走る溝であるが、攪乱などによって上面が破壊される部分が多く、本来の姿を残す部分は少ない。北端部にあたるBV区では東側に溝9が接する。

溝の長さは約14mを測る。北端部と南端部は検出が困難な状況になることから、徐々に浅くなつて収束する形態と判断される。幅は0.9~1.1mが想定される。底面レベルは標高0.81~0.85mに収まるように、同0.83m前後で推移する。深さは0.36~0.4mを測る。掘り方の断面形はボウル状を呈する。

埋土は、灰褐色砂質土で炭化物・鉄分を多く含む1層、茶褐色系の粘質土である2・3層、土質は2・3層に類似するが色調が暗い黒茶褐色土でマンガンを多く含む点で区別される5層、の3群に大別される。1層は流入土の可能性が高く、2層以下が使用段階あるいは埋没段階の土層である。

遺物は小~細片が30片程度出土したのみである。土師質土器碗・皿・鍋の小片が20数片のほか瓦器碗片、竈片が含まれる。詳細な時期は不明確であるが、古代末の可能性も残す。

周辺溝との関係では、底面レベルは前述した溝6の1群・溝7の底部と共に通した数値を示す。本溝南端部も両溝間の途切れた位置に接する点も注目される。しかし、埋土の違いもあり、その関係は流動的である。

本溝は、両端が収束し底面レベルにほとんど差が認められない点、あるいは溝6・7など周辺遺構との位置関係などから、水路的機能よりは区画溝の要素が強いと評価される。

溝9（図53・77）

調査区の北東部、BR ~ BV 56区で57ラインの東約1.5mの位置を南北方向に走る。北壁面~BWラインで確認される。BTラインからBUラインの南2mまでの約6mの間は溝19・22・23によって大きく破壊され、さらに、BWライン以南は近・現代の工事で破壊される。

遺構の上面は、調査区北壁面での土層観察からは、標高1.13m、5層下面で、9層上面に求められる。しかし、多くの攪乱による分断によって場所ごとに検出レベルは異なる。北側部（溝19以北）では標高1.03m前後、南側部（溝22以南）では標高1.02~0.92m、さらに南端部では東側に走る溝と近接することや攪乱の影響で検出が困難となり、最終的に標高0.78mまで下げた段階で存在が確認された。

溝の残存長は約24mである。幅は、北側部で1.1~1.2m、南側部で0.6~0.7m、南端部で0.6mを測る。検出面の差を勘案すると、本来は北側部程度の規模が推定される。ただし、調査区北壁面では幅0.8mへと、直接つながる北側部から急速に縮小しており、北壁部に溝の端部があたる可能性を予想させる。

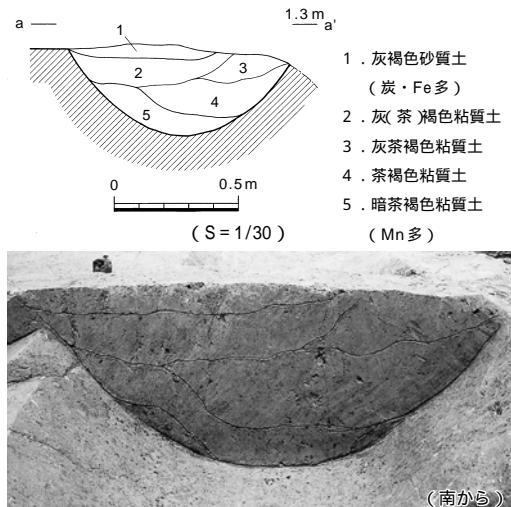


図76 溝8 土層断面

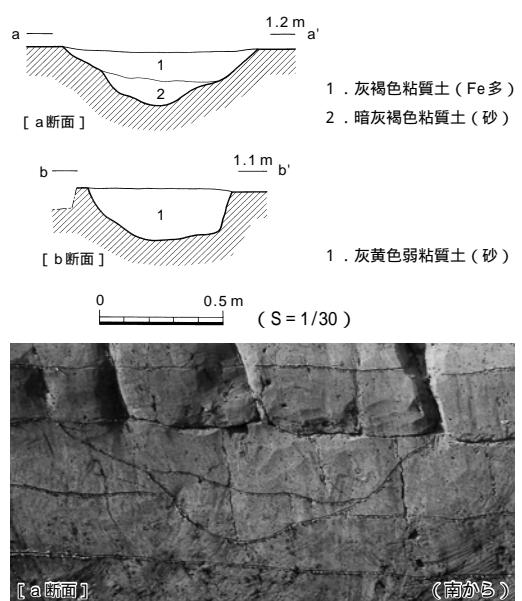


図77 溝9 土層断面

底面レベルは、調査区北壁面では標高0.91m、北側部で同0.88mから0.83mへと南に下がり、南側部で0.83m前後、南端部では同約0.7mとなり、全体に南に下降する。特に、南端部付近で傾斜がきつくなる可能性もあるが、調査部分が狭小であることから詳細な状況は不明である。深さは、検出面の違いから0.2~0.08mまでの幅がある。北側で0.15~0.2m、北壁面では0.22mであることから、0.2m前後の深さが復元される。断面形は丸みをもった逆台形あるいは凹凸のあるすり鉢状を呈する。

埋土は北端では二分されるが、南側では単一層として捉えられた。全体的に粘性をもつ土層で、北側では下半にそして南側では全体に砂を含む点が特徴である。遺物は土師質土器の小~細片が約10片含まれる。

断面形・埋土の状況から、溝8との類似性が高く、その位置関係から区画溝の役割も想定される。所属時期は遺構の関係も考慮すると、古代末、12世紀末の中で理解される。

溝10（図53・78・79）

調査区北壁面で確認された。BR 55~56区である。56ラインの西2.1mから東側にかけて位置するが、調査区北側溝内で収束し調査区内には広がらない。上面は 5層 下面、つまり 9層 上面の標高1.13~1.18mに求められる。

長さは3.6mを測る。底面高は東部分では標高1.03mであるが、最も深い西端部では同0.97mとなり収束する。深さは0.1~0.2mである。埋土は暗灰褐色粘質土の单一土層で、鉄分・マンガンの沈着が顕著である。遺物は出土していない。それ以上の詳細は不明であるが、形状・検出面などから古代末（～中世初頭）の溝と判断した。

溝11（図78）

調査区の北東部、BR 56区で検出した。検出高は標高1~1.03m、5層 下面、つまり 9層 上面である。BSラインの北0.5mの位置で溝9にとりつき、そこから緩やかにカーブしながら調査区北壁面に至る。

長さ3m、幅0.3~0.38mが残る。底面は標高0.9m前後で推移し、深さは0.12mを測る。断面形はボウル状を呈す。埋土は灰褐色土で灰色土をブロック状に含む。遺物は出土していない。

本溝は、位置関係から溝9あるいは溝10との関係が注目されるが、埋土の違いもあり、直接的に結びつける材料は少ない。小規模な水路としての機能が予想される。

所属時期は検出面あるいは周辺遺構との関係から古代末と考えられる。

溝12（図78）

調査区の北東部、BR 56区で検出した。溝11と同地点で溝9と重複する。溝11との先後関係は検出段階には同溝の下部であったが重複部分が少なく確定的とは言い難い。

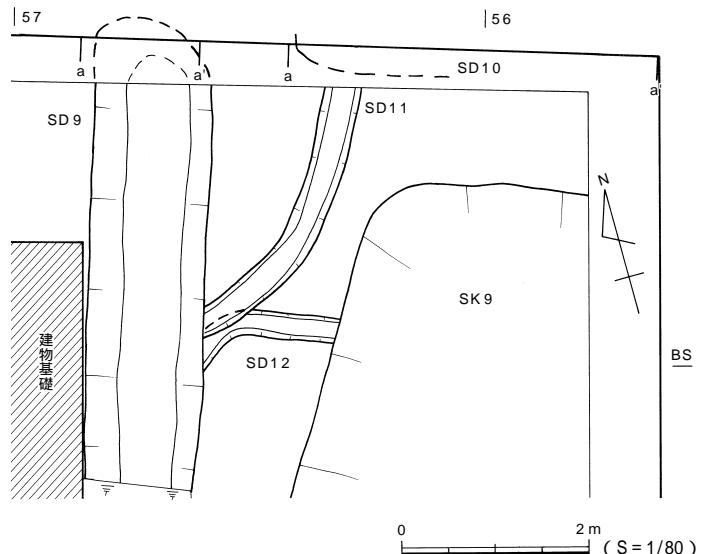


図78 溝9~12

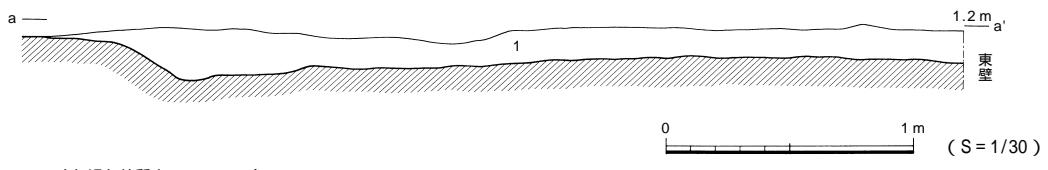


図79 溝10土層断面

方向は溝11とは異なり東に伸びるが土坑9の破壊で消失する。検出レベルは標高0.99mで5層下面である。長さ1.4m、幅0.3mが残る。底面は標高0.92mに位置し、深さは僅か0.07m程度である。断面形はボウル状を呈する。埋土は暗灰色土の単一土層であり、溝11と同様に灰色粘土塊を含む。遺物は出土していない。所属時期は検出面あるいは周辺遺構との関係から古代末と考えられる。

本溝は溝11との共通性が高く、同様に小規模な水路としての機能が予想される。

溝13(図53・80)

調査区の中央部付近を南北方向に走る。検出面は標高1.04~1.1m、4層下面である。7層あるいは9層上面にあたる。北側は溝22・23によって破壊され、同溝群より北側では検出されていない。南側では一部で井戸3が重複し本溝を分断する。南端部はBWラインから2m付近で浅くなり消失する。

長さは約10mが残存する。幅は、一部で0.7mを測るが0.5~0.6mが中心である。底面は、北側で標高0.94m前後、南端部では同1mを測り、南側に向かってやや上昇する。深さは、北側で0.15m前後、南側では0.09mと浅くなる。断面形は皿状を呈し、埋土は黄灰色系の粘質土である。

遺物は古墳時代初頭の小片が30片程度含まれる以外は、須恵器小片が2点あるのみである。やや新しい時期の可能性もあるが、時期決定には困難である。

所属時期は、こうした出土遺物や遺構の重複関係などから古代末と想定される。

溝14(図53・81)

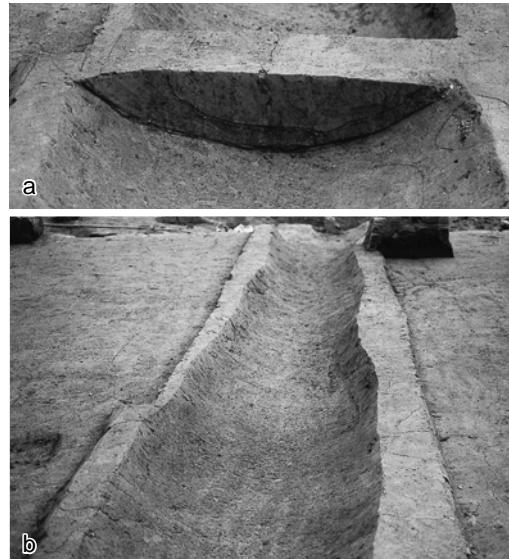
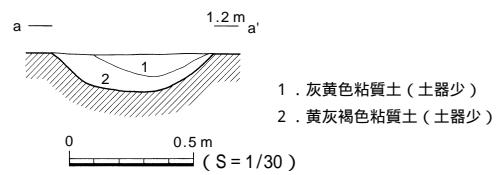
調査区の中央部、BVラインの南約2m付近を東西方向に走る。東西に広がる攪乱の肩部において検出された。随所に近代の建物基礎による攪乱部が及ぶため、残存部分は59ライン以西に限定され、全体像は不明な部分が多い。検出レベルは標高1.08~1.13mである。4層下面、7層にあたる。ただし、もう1層上層まで(約10cm程度)上昇する可能性を残す。

残存する長さは9.5mである。溝の幅は0.8m前後が復元される。底面は標高0.93~0.96mに位置し、深さは0.17mである。断面形は逆台形を呈する。

埋土は黄灰色粘質土(1層)が厚く堆積し、灰色砂質土(2層)が底面に薄い土層を形成する。本溝は、東西に走るラインが柱穴群の集中域の北端にあたることから、区画溝として性格が想定される。また、底面における砂質土の堆積を積極的に評価するならば、水の流れも考えられるが、残存部が少ないため、断定することはできない。

遺物は、古墳時代の混入遺物を除くと、土師質土器の細片(椀・皿・鍋)約10片と須恵器の小片2片が出土している。

本遺構の所属時期は中世前半と考えられる。



a. 土層断面(北から) b. 完掘状況(北から)

図80 溝13

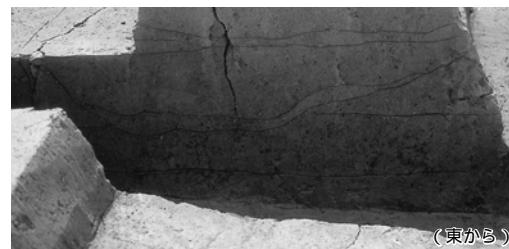
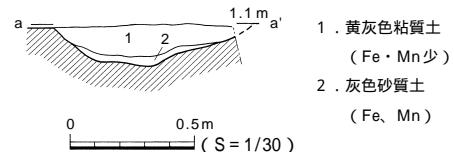


図81 溝14土層断面

溝15（図53・82～84）

調査区東端中央部、BV 55～56区において検出された。溝16～18が重複する。BW ライン以南は現代の共同溝設置による破壊によって消失する。溝の上面は、b 断面から標高1.14m、5層 下面に求められるが、その残存範囲が調査区端と溝21・23との間という非常に狭い範囲であったことが影響し、平面的な検出は標高0.78mの10a層 中まで下がることとなった。

北端は調査区東壁から北東方向に向けて調査区外へ伸びる。残存する長さは約4mである。その方向は北東 - 南西を示し直線的に走る。幅は約0.55mが平面的に確認されたが、壁面観察から本来は約0.7m前後が復元される。底面は北端で標高0.55m、南端で同0.58mを測るが、狭い範囲の計測であり、これが流路方向を示すものかどうかは確定的ではない。深さは0.55～0.58mが復元される。断面形はU字形に近い。

埋土は南端部（b 断面）で5層に分層される。全体には鉄分の沈着が顕著である。上層（1～3層）は褐色系の土層、下層（4・5層）は灰色系の土質でやや粘性が強い傾向がある。両者間に一度の掘り返しの可能性を求める事もできる。東壁（a 断面）で確認された6層は最下層であり、b 断面の下層に対応すると考えられる。c 断面では、上層に対応する土層を確認したが、その中の細分は困難であり、また、下層については調査区の東壁面際にあたる側溝による破壊で消失している。

遺物は土師質土器の小～細片が6点出土した。吉備系土師質土器碗を含む。所属時期は、遺構の重複関係・出土遺物から中世前半と想定される。

溝16（図53・82・84）

調査区東端中央部、BV～BW 55区に位置する。溝15の東側上部に重複しつつ、溝17によって溝の北側肩部が破壊される。また、BW ライン以南は現代の共同溝設置によって破壊される。遺構の確認は、調査区東壁土層断面（a 断面）とBW ライン上の土層断面（b 断面）で行った。遺構の上面は標高1.11～1.14mに求められる。5層 下面、9層 上面にあたる。

溝15の東側に平行して北東 - 南西方向に直線的に走る可能性が窺われる。調査区端部の極めて狭い範囲に位置したことによって平面的な検出はほとんどできなかつたが、長さはa 断面とb 断面との間1.5mが、そして、幅は約1mが復元される。底面は標高0.68mに位置し、深さは0.45mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は褐色系の粘質土で、明瞭に区別される。鉄分・マンガンの沈着が多い。

遺物は出土していないが、遺構の重複関係などから中世前半と想定される。

溝17（図53・82・84）

調査区東端中央部、BV 55区の東壁面において確認された。溝15・16上に重複する一方、溝18あるいは溝21・23によって大きく破壊される。残存範囲の狭小さとこうした遺構の切り合いから平面的な検出を行うことはできず、東壁面のみの観察となった（a 断面）。上面は標高1.13m、5層 下面、9層 上面に求められる。

溝の幅は約1.2m程度が推定される。底面は標高0.78m、深さは0.33mを測る。断面形はボウル状の可能性があるが明確ではない。長さおよび方向については確定できない。

埋土は、灰色系の粘質土（1・3層）を中心とする。両土層間には褐色粘質土である2層が非常に薄く部分的に堆積する。2層以外は鉄分あるいはマンガンの沈着が顕著である。

遺物は出土していないが、遺構の重複関係などから中世前半と想定される。

溝18（図53・82～84）

調査区東端中央部、BU～BV 55区において確認された。溝15・17上に重複しており、同地域に集中する溝群（溝15～18）の中では最後に形成された溝である。

調査区東壁面と溝21・23の間に僅かに残される。検出面は標高0.78mで 10a層 であったが、東壁面では同0.98～1.11mの 5層 下面、9層 上面に求められる。平面的検出が長さ2mという短さのため、その方向

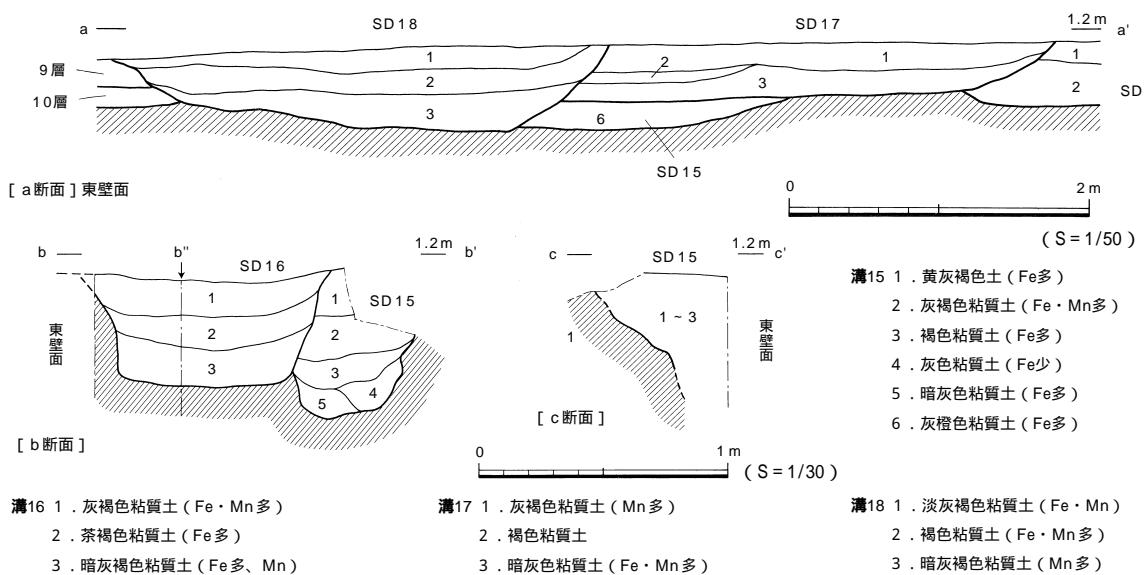


図82 溝15~18土層断面

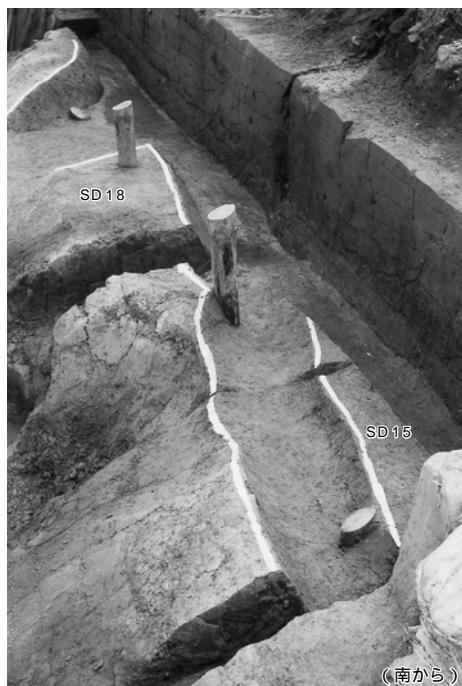


図83 溝15・18完掘状況

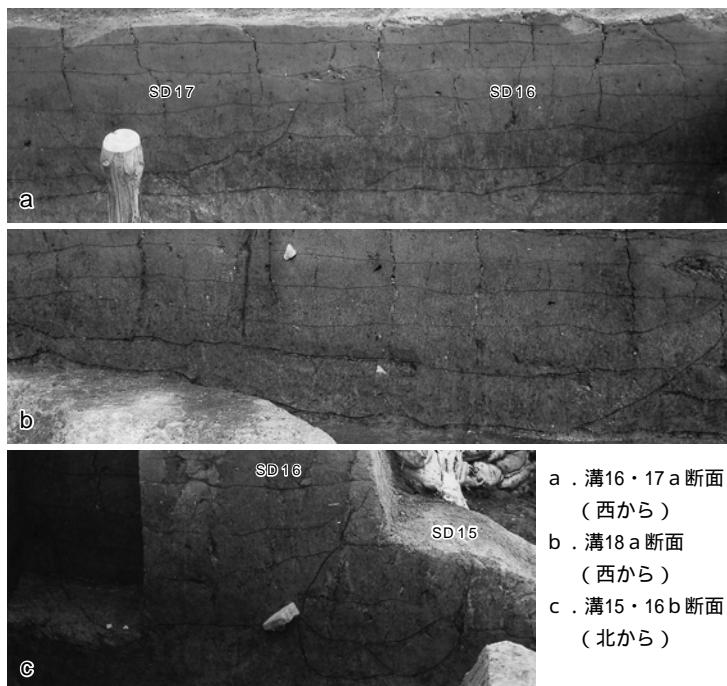


図84 溝15~18土層断面

の確定は困難であるが、溝15・16よりはかなり東に振った状況が想定される。幅は約1.4mが面的に確認されたが、少なくとも1.7m程度は復元される。底面は標高0.53mに位置し、深さは0.55mを測る。断面形は皿状に近い。埋土は褐色系の粘質土で、下半（2・3層）にはマンガンの沈着が特に顕著である。

遺物は土師質土器の小～細片15片、そして瓦1片を含む。所属時期は、遺構の重複関係などや出土遺物から中世前半と想定される。

溝19(図53・85~87、図版3・4・7)

調査区の中央部、BTラインとBUライン間を東西方向に走る。BT 55~60区に位置する。南側の肩部は溝23あるいは建物基礎によって破壊される。東端部(57ライン以東)では、一部で溝21が上部に重複し、溝20とは肩部が近接する(図85)。検出レベルは標高1.03~1.08m、5層下面で9層上面にあたる。

溝の長さは、調査区の西端から東端に及んでおり、調査区内では27.5mを測る。幅は1.8~1.9mである。底面レベルは、西側で標高0.31m、東側で同0.47mを測り、西に向かう傾斜が確認される。深さは、0.55m~0.78mを示す。断面形はY字形あるいは凹凸のある逆台形を呈する。

埋土は、色調・土質の特徴から、灰色系の砂質土である1~4層、やや粘性を強めた5~7層、色調が暗く粘性の強い8~9層の3群にまとめられる。上層部には全体的に鉄分の沈着を見るが、特に顕著なのは3層・7層・9層であり、各土層群の下面近くに対応する。こうした土層群の存在あるいは鉄分沈着土層が各土層群の下面に形成される点、各土層群の堆積ラインの状態などから、本溝には複数回の掘り返しが



図85 溝19東端部完掘状況

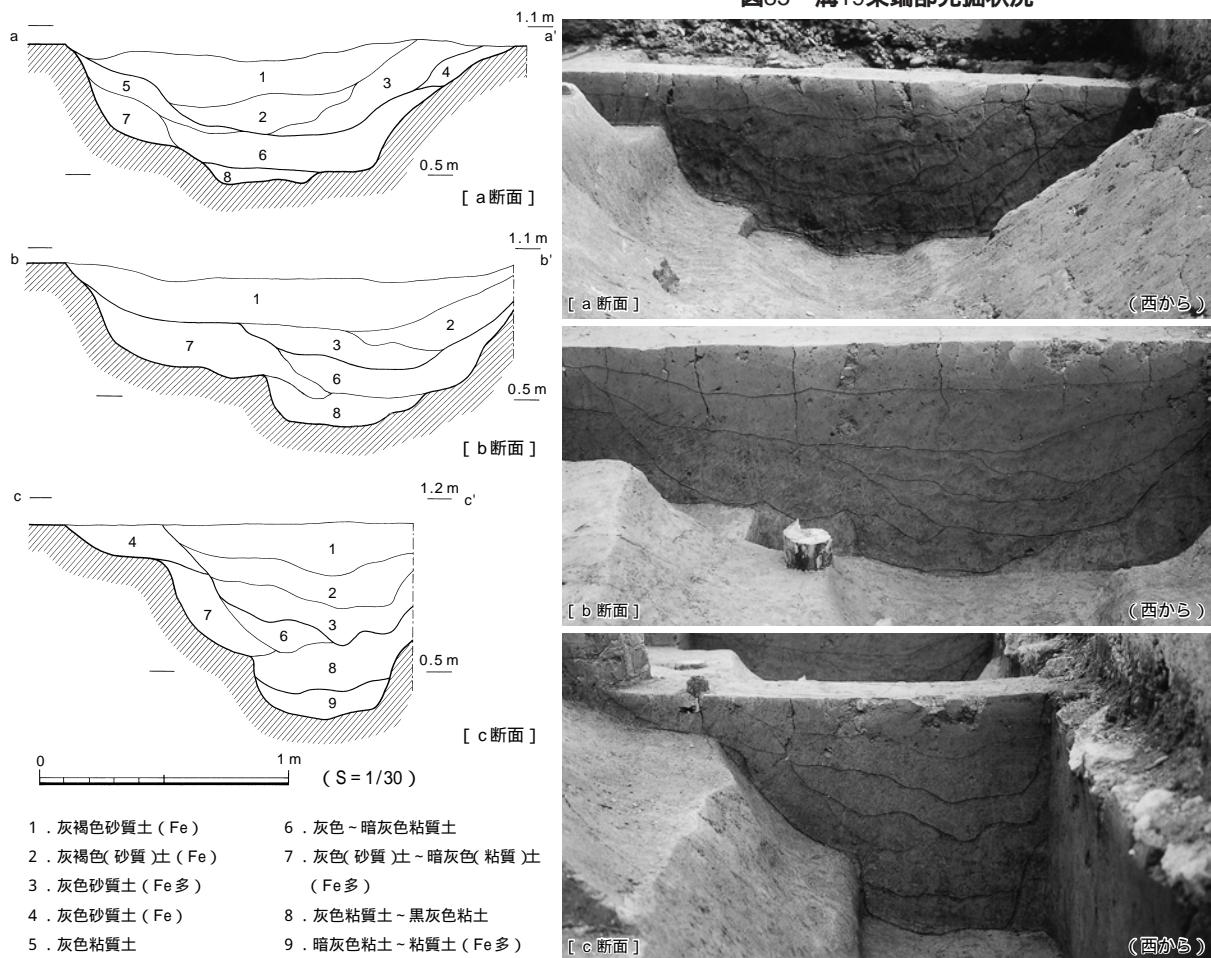


図86 溝19土層断面

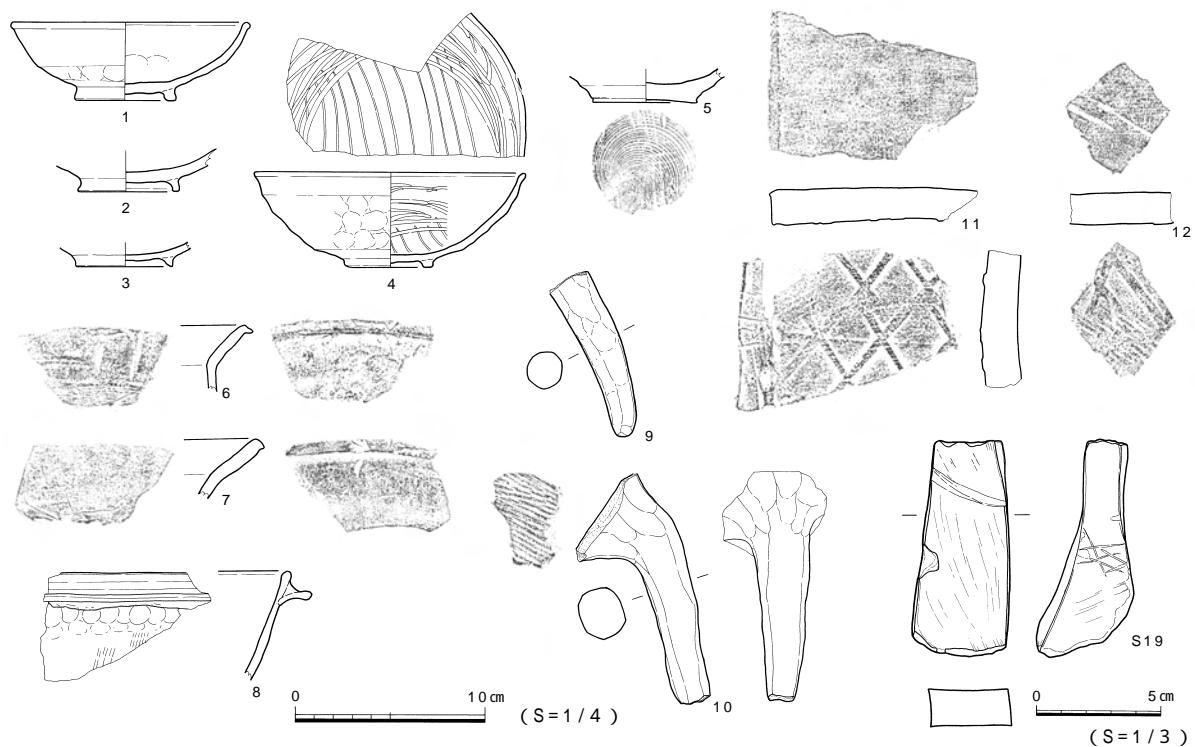


図87 溝19出土遺物

あつたことが想定される。機能としては、全体的特徴から、水路としての機能を有すると判断している。ただし、同時に土地区画の役割を有していたことは十分に考えられる。

遺物はコンテナ1箱(1箱28ℓ)の量が出土している(図87)。混入遺物を除くと、包含される器種は吉備系土師質土器碗(100片)・土師質鍋(45片)が量的にはほぼ同量で中心を占める。その他に瓦2片、竈小片20片、瓦器碗1片・皿1片、須恵器碗1片、須恵器片18点、瓦質鍋2点、青磁数片、そして砥石1点があげられる。いずれも小~細片であるが、吉備系土師質土器碗・瓦器碗(図87-1・4)は比較的保存率が高い。

本溝の埋設時期は、瓦器はやや古い時期を示すが、その他の遺物からは中世前半、13世紀中葉を中心とした時期が想定される。

溝20~23の推移(図53・89)

溝20~23は、ほとんど同一位置に重複して形成された溝群である。これらが埋設した時期は、中世前半の終わり、13世紀末~14世紀前半を中心としており、埋土の近似性や位置関係あるいは形状から連続的な使用を窺うことができる。ここでは、これらの溝の推移とそれぞれの関係を概略した上で、個々の溝について説明を行うこととする。

古い段階の溝は、検出面が5層下面となる溝20・21である。溝20はBUラインを中心とした調査区東壁か

ら西に向けて本調査区内に入り込む。そして56ライン付近から、南側のラインはほぼ直角に方向を転換して南に向かう。一方、北側のラインは北西方向（BTライン方向）に大きくカーブし、北側に張り出すような膨らみを見せる。溝21は、その上部に位置しており、BTライン～BWラインにおいてその存在が確認される。溝20の南北方向を示す部分の上部にすっぽりと重複する状態である。北端部は比較的急峻なラインで立ち上がるが、部分的には階段状の斜面が形成される。

両溝は、幅約4m、深さ1.3m以上という大形の規模を保つ。底面は標高0m以下（溝20：標高-0.15～-0.32m、溝21：同-0.05～-0.1m）という非常に低いレベルにあり、掘り方ラインも比較的急峻なすり鉢形あるいはボウル形であるという形態上の共通性を示す。さらに、底面あるいは最下層から出土した遺物については、現状では、時期差を見出ることは困難である。位置もほとんど重複する点などから、連続して使用され、同様の機能を有すると評価される。

両溝の重複関係については、平面的には切り合い関係を認めたが、溝20の検出は溝21の掘り下げ中であったため、上半部において明確な土層の切り合いは確認されていない。下半の埋土についても、遺構の性格上、明瞭は差を求めるることは困難である。僅かにe断面とf断面で上層の状況に違いが看取され、別遺構としての平面的検出に追従する要素を得ることができるが、これも溝端部のみの比較である点は問題を残す。ここでは検出時の認識を重視して別遺構としたが、同一溝あるいは溝20の一部改修なども想定可能な範囲に十分含まれる点を指摘しておこう。いずれにしても、前述したような共通性の高さから極めて関連の深い溝であることは確かであり、埋土の観察による両溝の切り合い関係がやや不明瞭である点は注意しておきたい。また、両溝が機能した段階あるいは溝21の段階に、西に向かう溝の有無については溝23の存在によって確認することはできないが、存在する可能性を高いと考えている。

次の段階は 5層 上面に対応する溝22そして溝23である。形態が明瞭な溝23について述べると、同溝はBUラインに沿って東西方向に走り、57ラインと58ライン間でほぼ直角に南方向に走行方向を転換し、L字形の溝を形成する。南北方向の部分は溝21に重複する。一方、溝22は溝23の南側～西側に一部が残されるのみで詳細は不明であるが、少なくとも東西方向部分では溝23の軸よりはやや北東に振れる状況が認められ、溝23の段階に若干方向を修正していることがわかる。

溝23では、溝の幅は東西方向部分で3m弱・南北方向部分で3～4m前後が確認される。深さは約1m前後を測る。底面は標高0.2m前後に求められ、前段階と比較するとレベルは高くなっている。全体的な規模の点ではやや小形化が進む傾向があるが大きな違いとは言い難い。断面形態は、東西方向部分では逆台形の底部に箱形の水路を有す。こうした形態的特徴は、a断面（図90）などの観察から溝22でも共通する。さらに、その特徴は最終的には近代におよぶ溝26にも継続する。

14世紀前半あるいは近世の遺物が溝23から出土していることから、自ずと機能した時期が想定されよう。埋土の堆積状況からは、複数回におよぶ掘り返しが確認される点も、長期間の使用と矛盾しない。

以上のように、溝20・21の段階と溝22・23の段階では、溝の方向に関して一部変化を見いだすことができるが、溝の位置・規模などの基本的な特徴に大きな変化は認めがたい。同位置における連続的使用が長期間におよぶ点に注目したい。13世紀中頃に遡る溝19の位置を踏襲するかのような配置は、同ラインが中世集落において重要な区画として認識されていたことを示す。

溝20（図88～93、図版3）

調査区の東端のほぼ中央部、BT・BU55区において、溝21・23を完掘中に、調査区東壁から西方向に向かって検出された。検出レベルは、標高0.95m前後であるが、調査区東壁面から、上面を標高1.13mに求めることができる。5層 下面にあたる。

平面的に検出が可能であったのは、調査区東壁から1～1.5m程度の範囲である。本溝は調査区東壁（BUラ

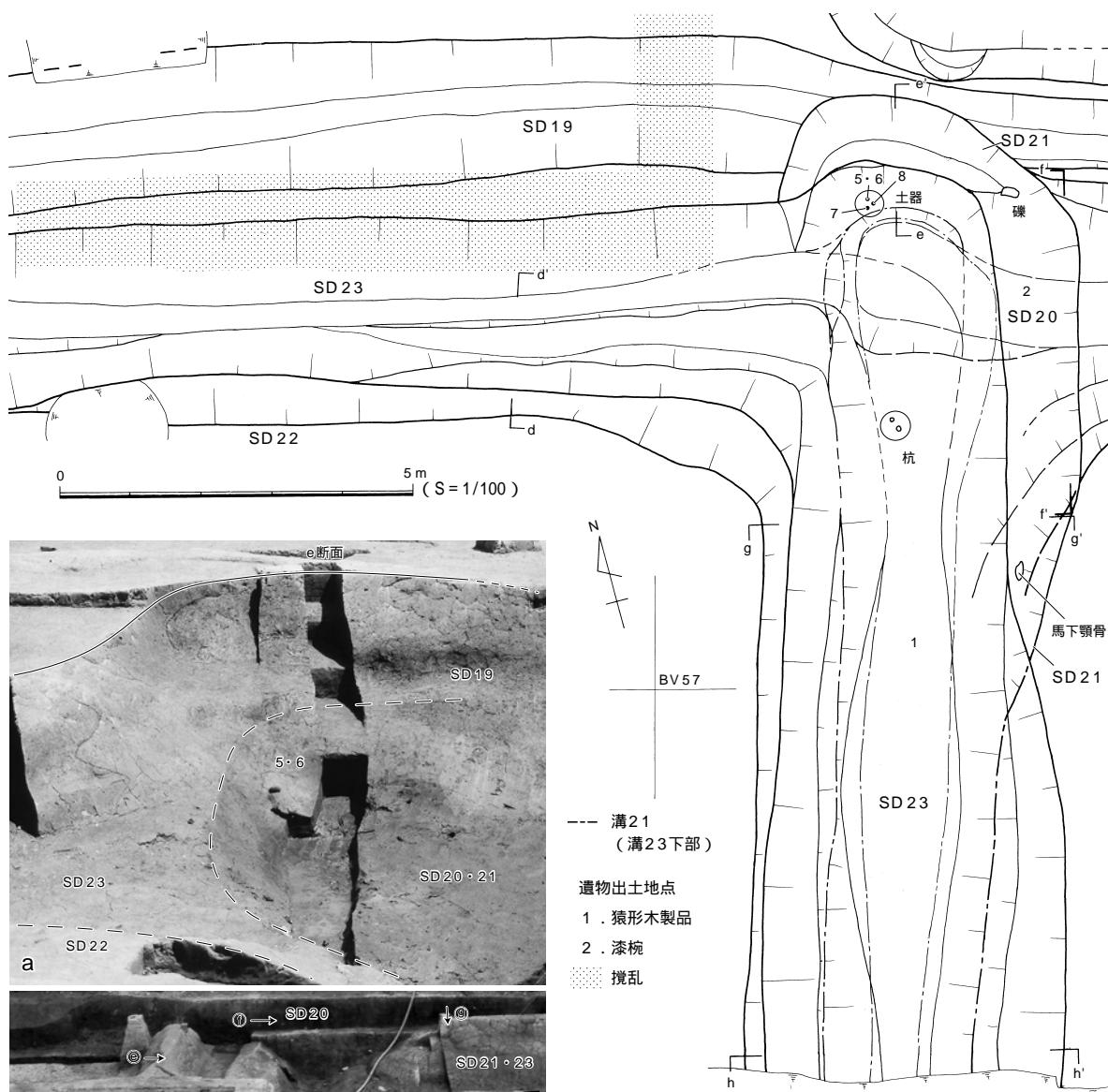


図88 溝20~23

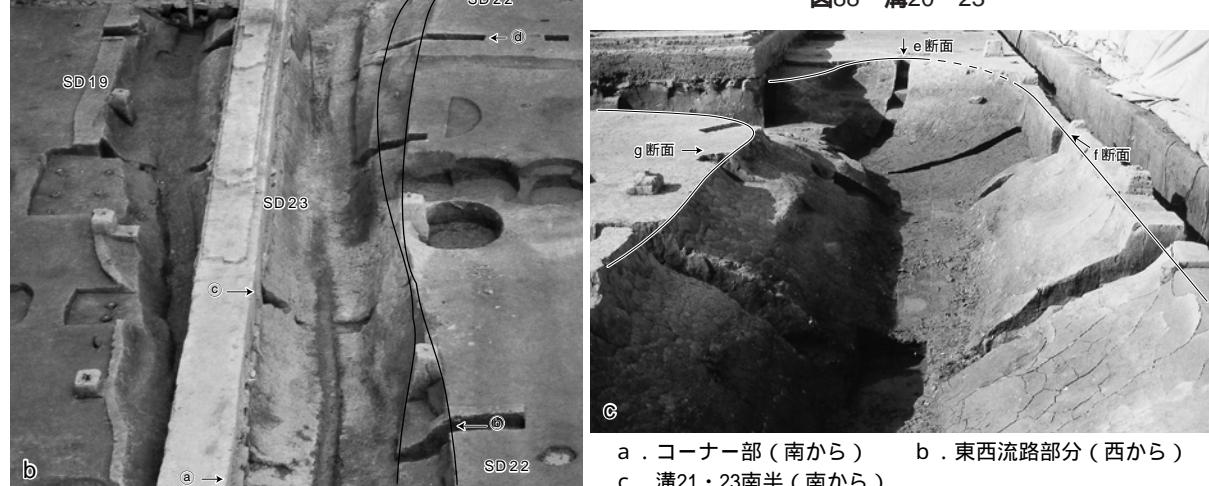


図89 溝20~23完掘状況

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

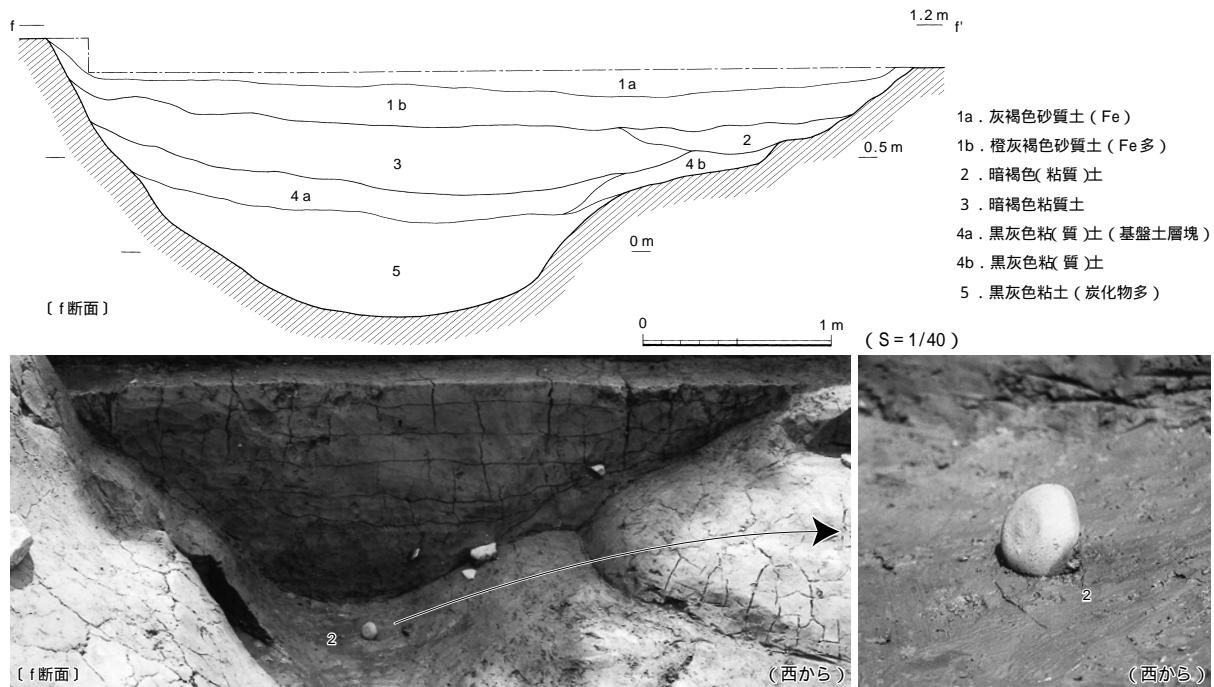
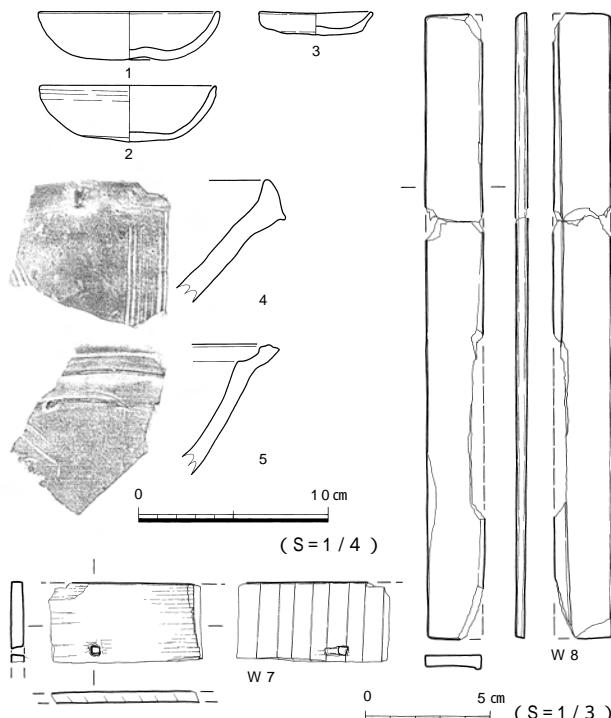


図90 溝20土層断面・遺物出土状況

イン付近)から西方向に伸びて本調査区に入り、さらに南側肩部は南方向に屈曲するようなカーブを示しており、流路が南北方向へ転換する様子を示す。また、北側肩部ラインは北側のBTライン方向に張り出すようなカーブが平面的に検出された。e断面(図92)の下部には本溝の堆積を認めることができることから、溝21と同位置に北側への張り出しが復元される。南北方向部分については、溝21・23の存在によって明瞭に確認することはできないが、土層堆積状況あるいは埋土の特徴などからその存在が想定される。ただし、本溝と溝21の埋土の区分は同様の機能を有する溝の堆積土であることから、その差は不明瞭であり、それぞれの範囲の確定は流動的である。

調査区東壁の土層観察から、本溝の幅は4.6m



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	9.6	4.0	2.6	(内)丁寧なナデ(外)ナデ(底外)押圧・ナデ、1/2残存	微砂、精良	淡橙褐
2	土師質・椀	9.3	4.6	3.0	(内)丁寧なナデ(外)ナデ(底外)押圧・ナデ(口)横ナデ	微砂、精良	淡褐～黄褐
3	土師質・皿	6.0	3.2	1.3	ナデ(底外)籠切り後粗いナデ、7/8残存	微砂、精良	淡橙褐～橙
4	備前焼・擂鉢	-	-	-	(内)ナデ・卸目2ヶ所(外)ナデ、口縁下部押圧	細砂、堅緻	灰/暗紫灰～赤褐
5	瓦質・鍋	-	-	-	(内)横ナデ(外)やや粗い横ナデ・煤付着	微砂、精良	灰/黒
番号		器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	特徴
W 7		曲物側板	(6.5)	3.2	0.5	スギ	柾目板、斜め方向に刻み目、下端に釘穴
W 8		札状木製品	26.2	2.3	0.6	スギ	割り材、両端側面を面取りして加工

図91 溝20出土遺物

が求められる。底面は北端部あるいは東部分のe・f断面（図90・92）で標高 - 0.32 m、南部分のg・h断面で（図93）同 - 0.15 mを測り、東に向けての流れが想定される。深さは、1.4 m前後～1.5 mを測り、断面形はすり鉢状を基本とする。

埋土をf断面（図90）で観察すると、色調から褐色系の上層（1～3層）と黒灰色系の下層（4・5層）に分けられる。さらに土質から、上層は砂質の強い1・2層と粘質土となる3層、下層はやや粘性の弱い粘質土である4層と、粘性の強い粘土で炭化物を多く含む5層とにそれぞれ細分される。全体的に際だった包含物は認められない。各土層の堆積ラインも自然堆積を思わせる。

出土遺物は吉備系土師質土器椀、土師質皿、備前焼、瓦質鍋、土師質竈などで、大半は小～細片である。溝21・23と分離が困難なものが約20片、本溝に共伴するのは8片である。その中で、ほぼ完形の土師質土器椀1点（図91-2）は屈曲するコーナー付近の底面（f断面：5層）において、ほぼ直立した状態で出土した（図90）。その他に、曲物片・板材などの木製品（図91）が、やはりコーナー付近の粘土層内に認められた。

本溝の埋設時期は、溝底面で出土した土師質土器椀などから14世紀前半の中に求めることができよう。他の遺物も矛盾しない。

溝21（図88・89・92～96、図版3・9・11）

BT～BW 55・56区、溝23の南北方向部分の下部に検出された。検出面は標高0.98～1.13 mで 5層 下面にあたる。平面的な検出状況から溝20埋没後の構として報告するが、先述したように両溝の関連性は高く、必ずしも別遺構として分離できない可能性も高い。

北端部は溝23の端部から北側に約1 mの地点に求められる（図92-e断面）。残存する長さは、南北方向に約14 mを測る。溝の平面ラインは、西側は比較的直線的に伸びるが、東側は溝20のコーナー部にあたるBT区においては、東側に大きくふくらみ溝20の上部に重複する。そのため、溝の幅はBUライン以南では2 m前後が溝23の下部に残るのみであるが、BT区では約4 mに及ぶ。こうした状況から、本来は4 m程度の幅が推定される。底面は標高 - 0.05～0.1 mの位置に認められ、南に向かって下降する可能性が想定される。深さは1.3 m前後である。断面形は、南北方向の流路部分ではすり鉢状を呈するが、北端部では直線的で急峻な壁面が階段状に形成される。

最も残存率の高いe断面（図92）では、埋土は上・下層に大別される。上層（1～3層）は緑灰色系あるいは明るい色調を示す土層群である。1～3層の細分は顕著に成される。1層は砂質土層で流入土的な性格が予想される。3層には砂の包含が特徴的である。下層（4・5層）は暗灰色系の粘性の高い土層で、特に最下層の5層には有機物の堆積が見られ、色調も黒色～暗色を強める。こうした土層の堆積状況は溝20に類似しており、同様の利用形態が想定される。また、2層・3層あるいは4層の下面ラインは逆台形状を示し、それが重複するようになされており、溝端部において掘り返しが頻繁に行われていることを窺うことができる。溝の管理あるいは機能の一端を示すものであろう。

遺物は、土器・土製品ではコンテナ2箱（1箱28ℓ）の量があげられる。土師質土器椀・皿と土師質鍋・瓦質鍋がほぼ同量で中心を占めるほか、亀山焼・備前焼の破片が各10数片、東播系すり鉢片1点、瓦6片、竈20片、土錘2点などを含む（図95・96）。大半が小片であるが、一部に完形の皿などを含む。木製品では猿形木製品・漆塗り椀・板材（図96）その他に焼け石1点があげられる。特に、猿形木製品は特筆に値する。

土師質土器皿4点（図95-5～8）は北端部斜面に沿うように、最下層（図92-e断面5層）からまとめて出土した。その内、完形品の2点（同-5・6）は重なり合い、溝20と同様に、斜めに傾いている（図89）。木製品では、漆塗りの椀（W15）が溝20と溝21の取り付き部（杭BU56周辺）において、暗～黒灰色系の粘土層から出土した（図89）。本溝の最下層（e断面5層・g断面4層）にあたると判断しているが、溝20の最下層（e断面5層）の可能性も残る。また、猿形木製品（W9）は、BVライン付近の溝中央部において曲物の底板

(W14)とともに取り上げられた（図89）。漆椀と同じく暗灰色系の粘土層からの出土であるが、レベル的には本溝の底面よりは高く、溝23との境部にあたる（g断面3層）。その他に、動物遺体として馬の下顎骨があげられる。同骨は、猿形木製品の東側、本溝の東壁斜面に張り付くように検出された（図89・94）。出土レベルは標高0.74mを測り、上層（g断面2層）に含まれことから、溝廃棄時に伴うものであることが想定される。猿形木製品とは平面的にもレベル的にも近接する位置関係を有する点は、その使用状況を考える上で注目される。

本溝の埋没時期は、無高台の土師質土器椀の特徴から、14世紀前半を中心とした時期が想定されるが、機能していた時期は13世紀まで遡る可能性が考えられる。溝20と明瞭な差はなく、連続的な使用が窺われる。

溝22（図53・88・89・92～94）

溝23の南側～西側に沿って検出された。BU～BV56～60区である。同溝と同様のL字形の形状を呈する。検出面は、平面的には標高1.08mまで下がる部分もあるが、全体的には標高1.17～1.28mであり、調査区西壁面からも標高1.27mの5層上面に求められる。溝23によって多くが破壊されているため全体の形状を示す部分は残っていない。しかし、本溝は東西方向の角度が同溝よりは若干北寄りに振れているため、59ライン付近以西では比較的の残存率が高い。

溝の規模・形態などの特徴が推定できるのは、調査区西壁面（図92-a 断面）のみである。溝の幅は1.55mが残存しており、2m程度の規模が復元される。底面は標高0.42m（a 断面）・同0.3m（b 断面）に位置し、深さは0.85m前後を測るが、それ以外では残存部が少ないため確認されない。断面形は、逆台形の底部に箱形の水路が付随する。掘り方壁面は直線的である。

a 断面では、埋土は褐色あるいは黄緑色を帯びる色調で粘性がやや弱い上層（1～3層）と灰色系で粘性の強い下層（4～6層）に大別され、さらに下層は褐色が強く粘性が若干弱い4層・5層と暗灰色で粘性の強い6層に細分される。上層と下層の堆積は、掘り返しによって生じた上層溝と下層溝の埋土となり可能性が高く、両溝の底面あたる3層では鉄分の沈着が、6b層では基盤土層のブロック状の包含が顕著である。

本溝は、その位置などの諸特徴から、特に溝23との強い関連性を持つことが予想される。

出土遺物は混入遺物を除くと、吉備系土師質土器椀あるいは皿などが20～30片含まれるのみである。時期が判別できるものは鎌倉時代の遺物である。

本溝の時期は、遺構の重複関係や検出面などから、14世紀前半の可能性が考えられる。

溝23（図53・88～89・92～94・97～99、図版3・5～9）

検出面は標高1.18～1.28mを測り、5層上面に対応する。調査区の中央部、BUライン上を東西方向に、そして、BT・BU56区において南に方向を変えて南北方向に走る。BT～BU56～60区・BV～BY55～56区である。溝20～22がすべて埋没した後に構築される。上部には溝26が重複する。

溝の長さは、調査区の西壁と南壁においてその存在が確認されることから、東西方向部が24m、その東端部で屈曲した後、南北方向に向きを転換して24m、全体で48mが調査区内に残る。溝の幅は、東西方向では、北側の肩部を建物基礎撤去後の下部調査において確認した結果、約3mの規模が復元される。一方、南北方向では3.2～4.3mの幅を示す。その数字の大きい南端部では断面形態が崩れた状態を見せる（図93-h断面）。東西方向よりはやや規模が拡大する傾向があるが、際だったものではない。底面は、東西方向では西端部（図92-a断面）で標高0.1mと低いが、b断面からd断面にかけては標高0.17～0.21m、さらに、南北方向ではg断面（図93）で同0.21m、南端部（同-h断面）で同0.18mと全体的に安定した数値が保たれる。このように、走行方向に関しては、西端部への下降が認められる。その他に若干の数値変化から、コーナー部を境に西方向・南方向への流れが考えられるが、必ずしも明瞭とは言い難い。深さは全体的には1m前後を測る。断面形は、東西溝部分では急峻な立ち上がりを見せる逆台形の底部に箱形の水路が付随しており、溝22と類似する。水路部分の幅は0.45～0.7mである。それに対して、南北方向部分では緩やかなすり鉢状～ボウル状を呈する。

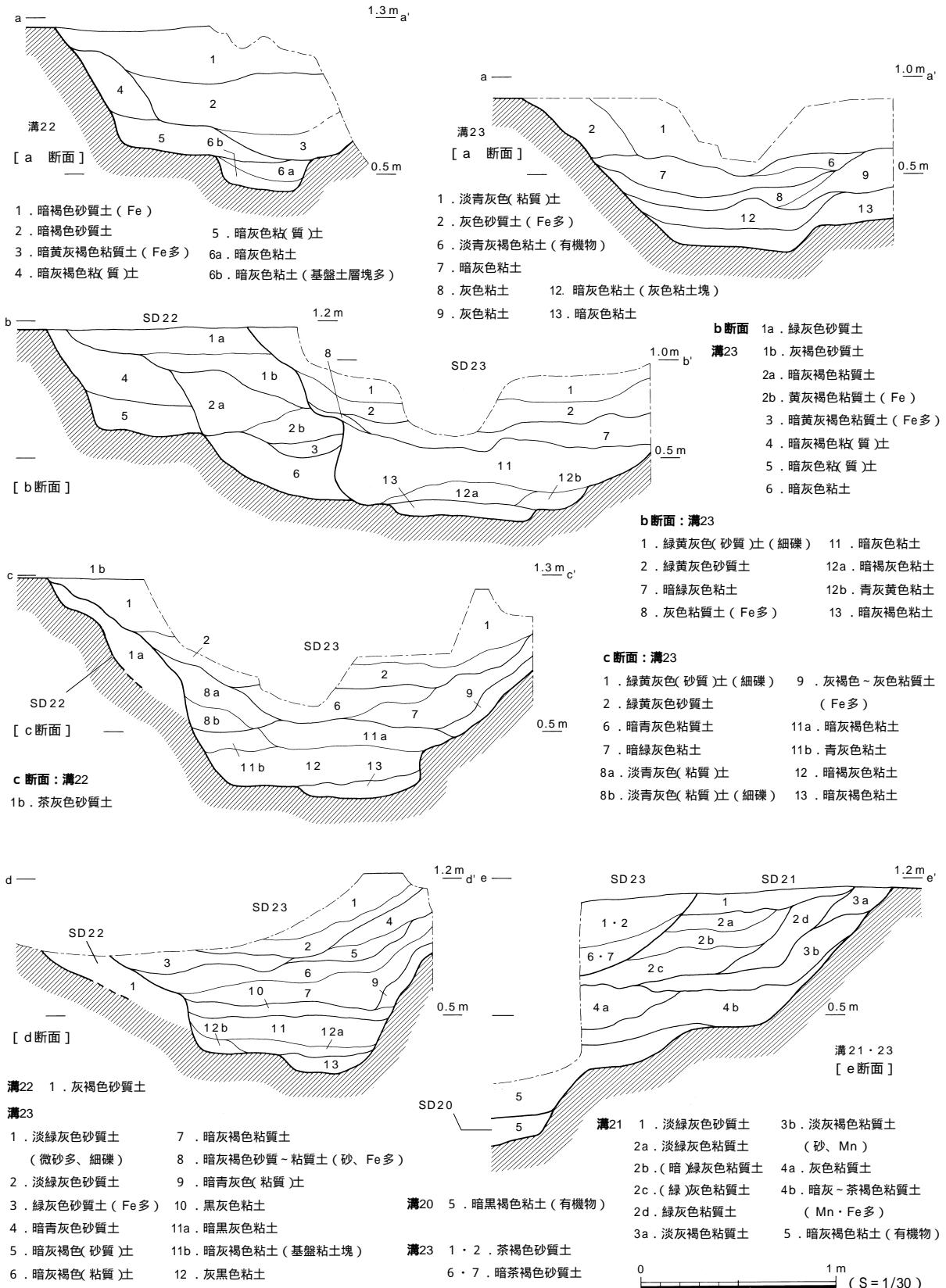


図92 溝20～23土層断面(1)

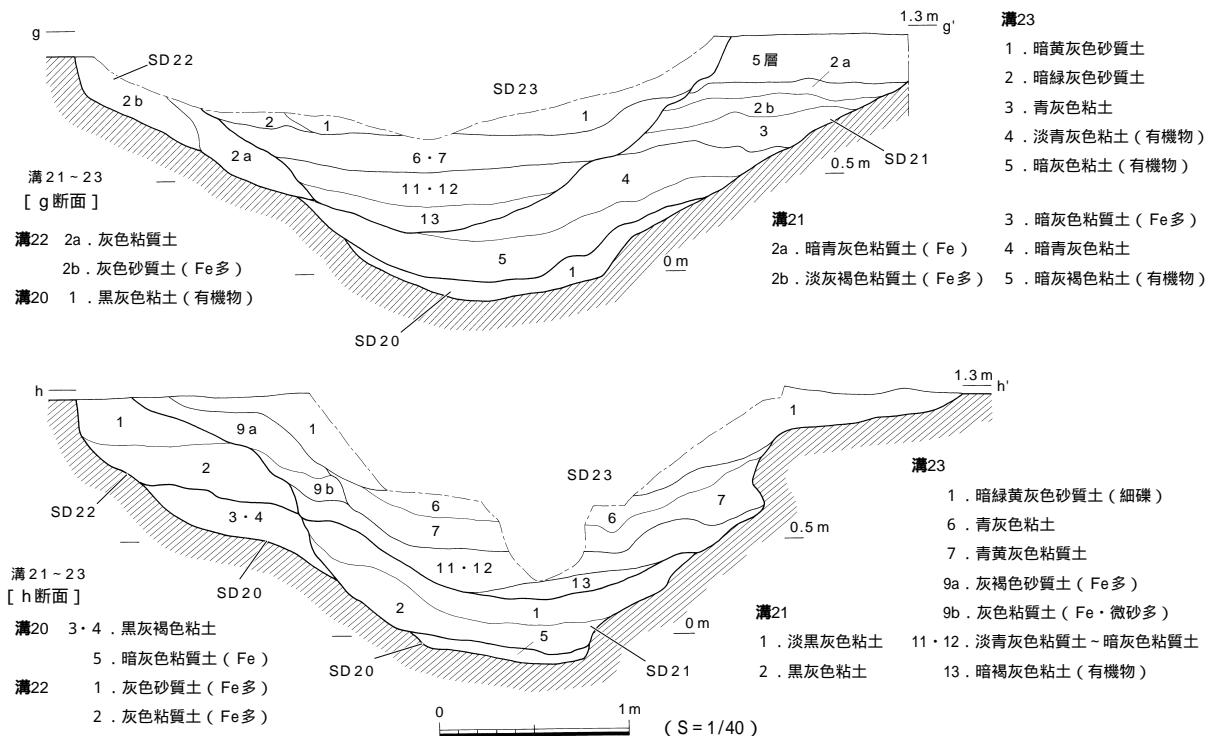


図93 溝20～23土層断面(2)

このように、東西方向からほぼ直角に南に曲がって走る溝であるが、コーナー部では北側への張り出しが若干認められる（図92-e断面）。ただし、平面的には攪乱によって分断されており、前述の溝21・22との関係は明確とは言い難い。少なくとも、北への張り出しあは溝20・21のように際だったものではないであろう。

埋土については、最も基本的な土層堆積が確認されるd断面（図92）で検討しよう。埋土は、それぞれの特徴から上層と下層に大別され、さらに上層は3群に、下層は2群に細分される。

上層は1～5層で構成される。その中で1群となる1・2層は、緑色あるいは黄色を帯びる淡灰色系の砂質土で、両層の類似性は高い。最終的に溝全体を覆う埋土として堆積する。2群となる3～5層はやや褐色を帯びる部分をもつ砂質土で、コーナー付近（d断面）にのみ堆積が確認される。ただし、e断面1・2層に限っては、このd断面4・5層に対応する土層としての可能性があり、コーナー部分における溝の張り出しを北側へ約0.4m程度もつと判断した。しかし、両断面の土層は直接に連続して確認はできなかったため、e断面1・2層は溝22の埋土となる可能性も残る。3群は6・7層で構成される。灰色系を中心とする粘土～粘質土で、両土層の類似性は高い。上層溝の底部となる。底面レベルは西端で標高0.38m、他では同0.5～0.54mとほとんど一定し、南端のg断面で同0.43mとなる。コーナー部での段差はなく、両端部が下降するという溝の状況が窺われる。

下層は8～12層にあたる。その中で1群となる8・9層は灰色系の砂質土～粘質土（一部では粘土）を中心とする。8層は溝の北側に堆積する。2群は10～12層である。暗色あるいは黑色を帯びる灰色粘土であり、最下層の12層では有機物の包含が認められるが、全体に類似性が高い。

各群の関係については、掘り返しなどの要因も考慮されるべきであろうが、個別具体的な指摘は困難である。ただ、特に東西方向において分層数が多い点は、使用時期幅の長さを考えると、溝さらえなど様々な溝の管理に伴う行為が繰り返し成された様子を示していると考えられる。

出土遺物量はコンテナ5箱（1箱28ℓ）におよぶ。土師質土器碗・皿・鍋・竈、備前焼・亀山焼、瓦、陶磁器類など多数の種類を含む（図97～99）。下層2群の最下面からは土師質土器碗（図97-5）が出土する。点数は

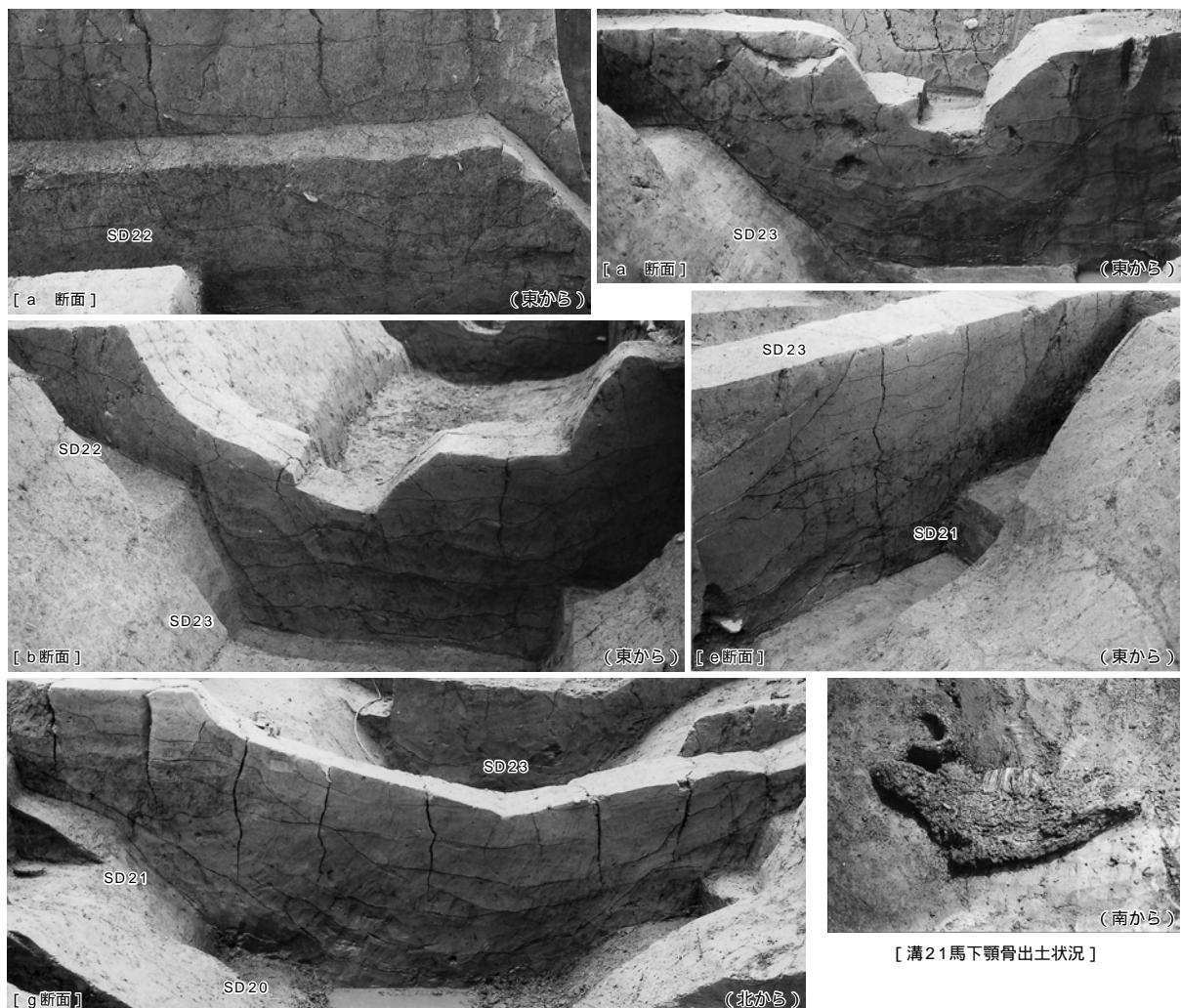


図94 溝20～23土層断面(3)・遺物出土状況

少ないが溝の最古段階の時期を示すと考えられる。上層からは近世陶磁器・瓦の出土が特徴的である。

本溝の埋没時期は、14世紀前半（～中頃）そして近世が想定される。

溝21・23出土遺物の特徴（図95～99、図版3・5～9・11）

ここで、溝21・23出土遺物の中で、土師質土器・陶磁器類・瓦・木製品・土製品・石器など注目される遺物に関する特徴をまとめておこう。

溝21では土師質土器の特徴と猿形木製品そして漆塗り椀について説明を加えよう。

土師質土器椀は高台が極めて低平で小形化したもの（図95-1）無高台で底部が押圧によって若干凹んでいるもの（同-3・4）がある。皿（同-5～10）においても、口径8cm前後で底部成形が押圧とナデで調整されるタイプ（同-5～8）と、口径約7cmで底部籠キリのタイプ（同-9・10）の2タイプが認められる。前者は無高台の椀との共通性が高く、底部籠キリ技法で成形される皿と明らかに区別される。また、2点の皿（同-5・6）の底部には籠記号が記される。1点の皿（同-7）では調整後に口縁部の一ヶ所をヘラ状工具で切っており、灯心の固定部を成形したとみられる。

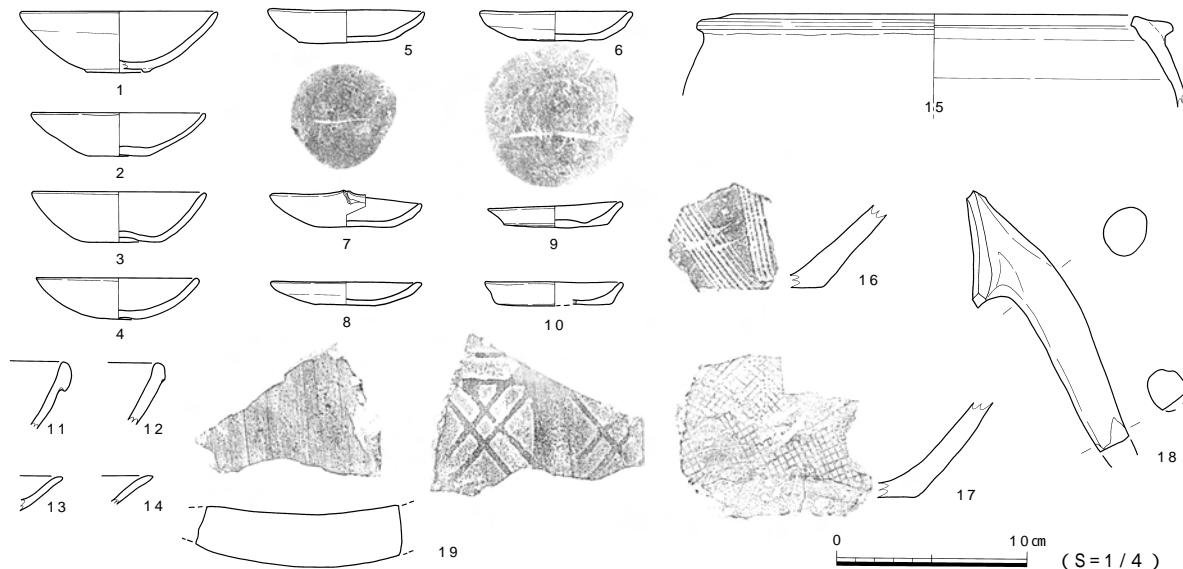
猿形木製品（W9）はカヤを材として、鳥帽子を被るニホンザルをかたどっている。鳥帽子は朱と黒漆で横縞模様を描き、サルの顔・尻も朱塗りのうえ、黒漆で目・鼻・口、体毛を描いている。両腕の位置に径0.5cmの穿孔があり、棒や紐を通して腕としていたことが窺える。基部底面にも径0.5cm・深さ1.0cm程の孔を穿つ。この

孔には棒を差し込んだものとみられ、孔の周辺に擦痕が認められる。こうした特徴から、W9は基部の孔に棒を差し込み、棒で動かした人形と考えられる。サルは厩の守り神とも言われており、一方で縁起物として猿回しを演じることが知られている。「くぐつまわし」は、全国の市などを巡業していく専業職民のひとつであり、W9はその「くぐつまわし」が使用する人形と考えられる。

本木製品に近接して出土した馬の下顎骨が出土している溝の祭祠に関わるものであると、これまでの例からもうかがえる。これに近い出土位置から猿形木製品（W9）が出土することは祭祠に伴う遺物としての意味も求められるかもしれない。漆塗り椀（W14）はカツラ属を材とする割りもので、外面全体に黒漆、内面に赤漆を塗布している。模様は認められない。

溝23では、輸入陶磁器・国産陶磁器・瓦・土製品を取り上げよう。

陶磁器類は、10世紀代に属する綠釉陶器椀（図97-12）あるいは12世紀代の白磁合子（同-13）・碗（同-14）といった古手のものから、16世紀末～17世紀初頭の天目椀（同-17）・美濃瀬戸皿（同-18）18世紀代の肥前染付椀（同-22）まで、かなりの時期幅が認められる。備前焼などの中世陶器（図98）では、器種としては圧倒的に擂り鉢が多く、その他にわずかに甕・壺・灯明皿が含まれている。擂り鉢にも14世紀代のもの（図98-27・28）から、18世紀代のもの（同-36・37）まで幅がある。産地についてはその多くが備前焼であるが、一部には関西系擂り鉢が含まれる（同-36・37）。堺か明石産である。瓦はコンテナ約1箱分が出土している。やはり、中世

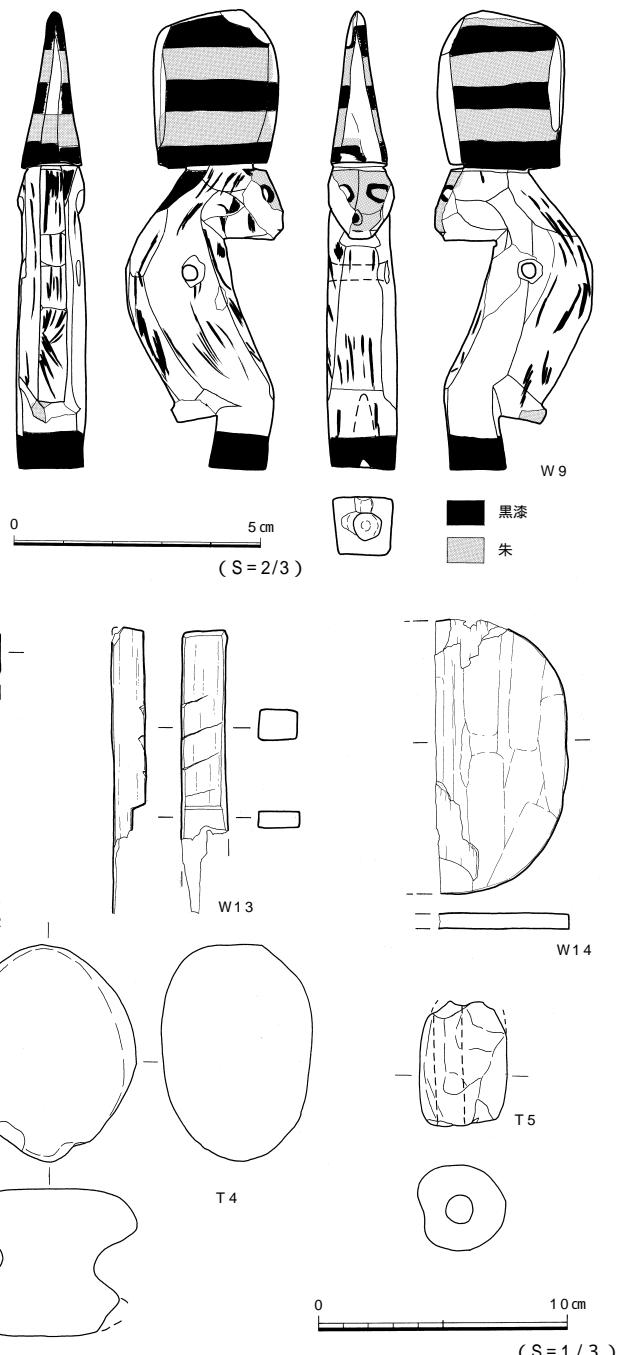


番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	*10.4	*3.3	*3.3	(内)丁寧なナデ(外)ナデ、高台は低小、1/3残存	微砂	淡黄褐
2	土師質・椀	*10.8	*4.9	*2.3	(内)丁寧なナデ(外)ナデ(底外)籠切り後ナデ、1/4残存	微砂	淡黄褐
3	土師質・椀	*9.2	*4.2	*2.6	(内)丁寧なナデ(外)ナデ(底外)押圧、1/5残存	微砂	淡橙褐
4	土師質・椀	8.6	1.6	2.2	(内)籠磨きに近い丁寧なナデ(外)ナデ(底外)押圧	微砂・精良	淡黄褐
5	土師質・皿	8.2	4.5	1.8	(内)丁寧なナデ(外)ナデ・押圧(底外)籠切り後ナデ・籠記号	微砂	淡橙/淡橙褐
6	土師質・皿	8.0	4.5	1.6	(内)丁寧なナデ(外)ナデ(底外)籠切り後押圧・ナデ・籠記号	微砂	淡黄褐
7	土師質・皿	8.1	3.8	1.9	(内)丁寧なナデ(外)ナデ(底外)押圧・ナデ、外面1ヶ所に籠切り(灯心固定用?)	微砂	淡橙・橙
8	土師質・皿	*8.1	*3.1	*1.2	(内)丁寧なナデ(外)ナデ(底外)籠切り後ナデ、1/5残存	微砂	黄褐
9	土師質・皿	7.1	5.5	1.3	横ナデ(底外)籠切り後ナデ、器高に歪みあり	微砂	褐白
10	土師質・皿	*7.2	*6.0	1.3	横ナデ(底外)籠切り後ナデ、1/4残存	微砂	淡黄褐
11	白磁・碗	-	-	-	ナデ後施釉、外面下方は露胎、白磁碗類か	精緻	灰白・釉オリーブ
12	白磁・碗	-	-	-	器表面に砂粒付着、全面施釉、つくりはやや粗い	精緻	灰白・釉・灰
13	青磁・碗	-	-	-	全面施釉	精緻	灰・釉淡オリーブ
14	白磁・皿	-	-	-	内面下方は露胎	精緻	灰白・釉・白灰
15	瓦質・鍋	*21.0	-	-	(内)横ナデ・体部下半は斜め籠削り後ナデ(外)ナデ、1/4残存	微砂、長石多数	暗灰黒
16	備前焼・擂鉢	-	-	-	(内)横ナデ・8条1組の放射状鉄目(外)横ナデ(底外)粗いナデ	微砂	暗茶/淡橙茶褐
17	亀山焼・甕	-	-	-	(内)横・斜めの粗いナデ(外)格子目タタキ(底外)粗いナデ	微・細砂	淡灰/黒灰
18	土師質・鍋	-	-	-	三足鍋の脚部(内)横ナデ(外)ナデ	微砂・精良	淡灰
19	瓦質・平瓦	*8.9	*11.3	2.7	(内)横ナデ(外)格子目タタキ	微砂・精良	暗黒

図95 溝21出土遺物(1)

～近世までの時期幅がみられる。格子目タタキ(図99-47)、布目痕(同-48)を残すもの、18世紀代(同-50)のものが認められる。

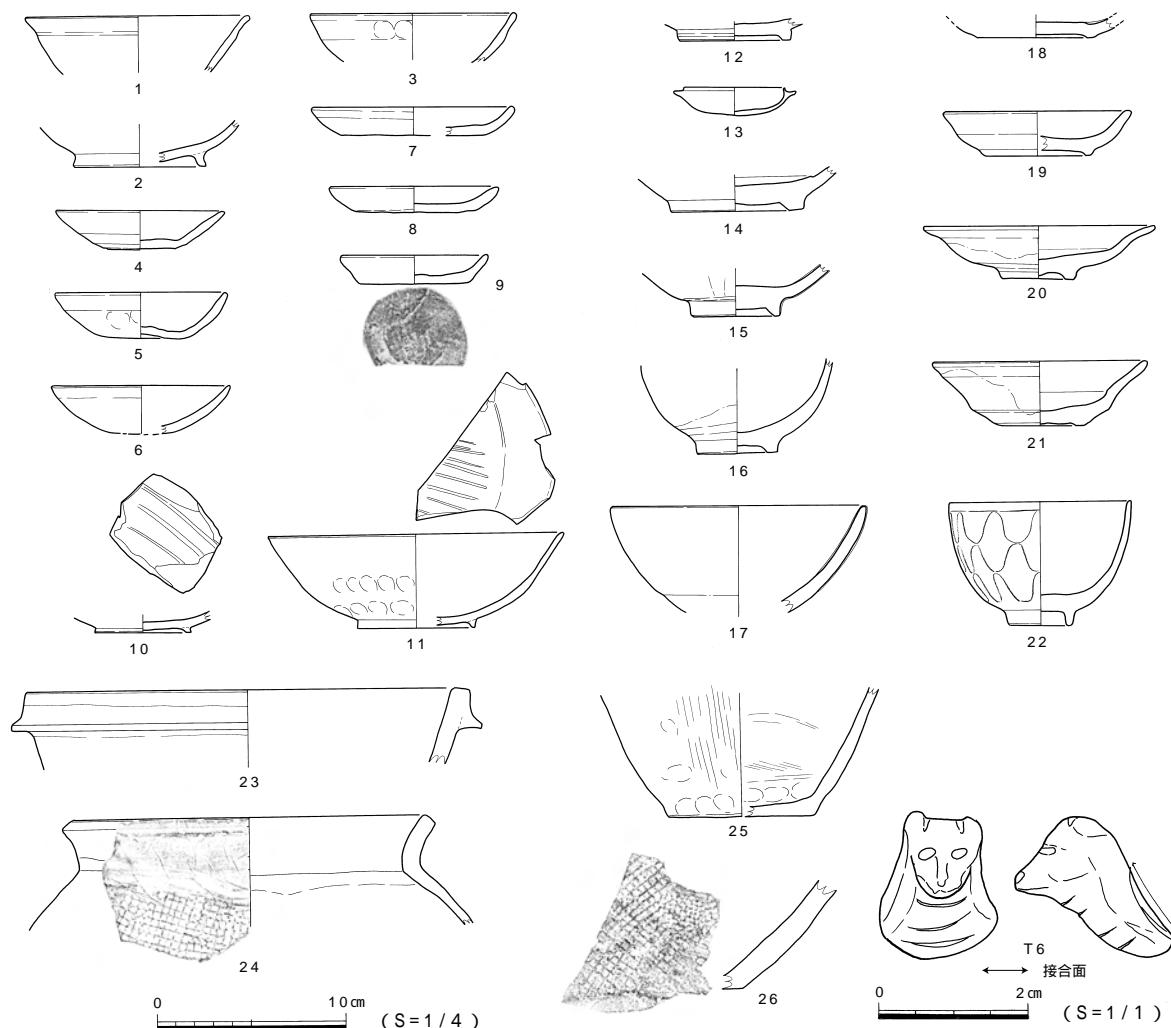
T6(図96)は動物の頭部をかたどった土製品であり、何らかの器の口縁などに貼り付けられていたものと考えられる。短い耳、小さく尖り気味の鼻を沈線で描くほか、頸部下側には横縞模様を同じく沈線で描く。石器は5点を掲載した(図99-S19～S22)。S19・22・23は砥石である。いずれも流紋岩を利用している。S20・21は加工した結晶片岩であり、本遺跡付近では産出しない材である。いずれも破損して全形が不明であるため用途は不明である。



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	特徴	胎土	色調：内面/外面
W 9	猿形木製品	9.2	2.7	1.4	カヤ	鳥帽子を被ったニホンザルをかたどる、鳥帽子を黒と朱の縞模様にサルの顔面と尻を水銀朱を塗る、両腕の位置に径0.5 cmの孔が貫通、図の底面にも径0.5 cmの孔を穿つ、棒を差し込み、動かして使用したものとみられる。		
W 10	椿状木製品	(20.3)	4.4	0.5	スギ	割り材、下部に割り込み、表面に工具による切り込み		
W 11	椿状木製品	16.4	1.3	1.0	-	柾目、両端面を面取りして加工		
W 12	板材	(9.5)	3.4	0.4	-	柾目板、下端は人為的な切断痕		
W 13	板材	11.3	1.9	1.2	スギ	柾目板、表面に削りの痕跡		
W 14	曲物底板	11.1	5.2	0.6	ヒノキ			
W 15	椀	口径15.4、底径7.2、器高6.3			カツラ属	内外面を平滑に仕上げ、底部器壁は厚い、短小な高台、全面に黒漆を塗布し、さらに内面全体に赤漆を塗布		
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	特徴	胎土	色調：内面/外面
T 4	土錘	8.7	7.1	5.9	293.9	有溝土錘、裏面の一部欠損	細砂	淡赤褐色
T 5	土錘	(5.0)	3.6	3.5	53.3	管状土錘、径1.1 cmの穿孔	微砂	淡橙褐色

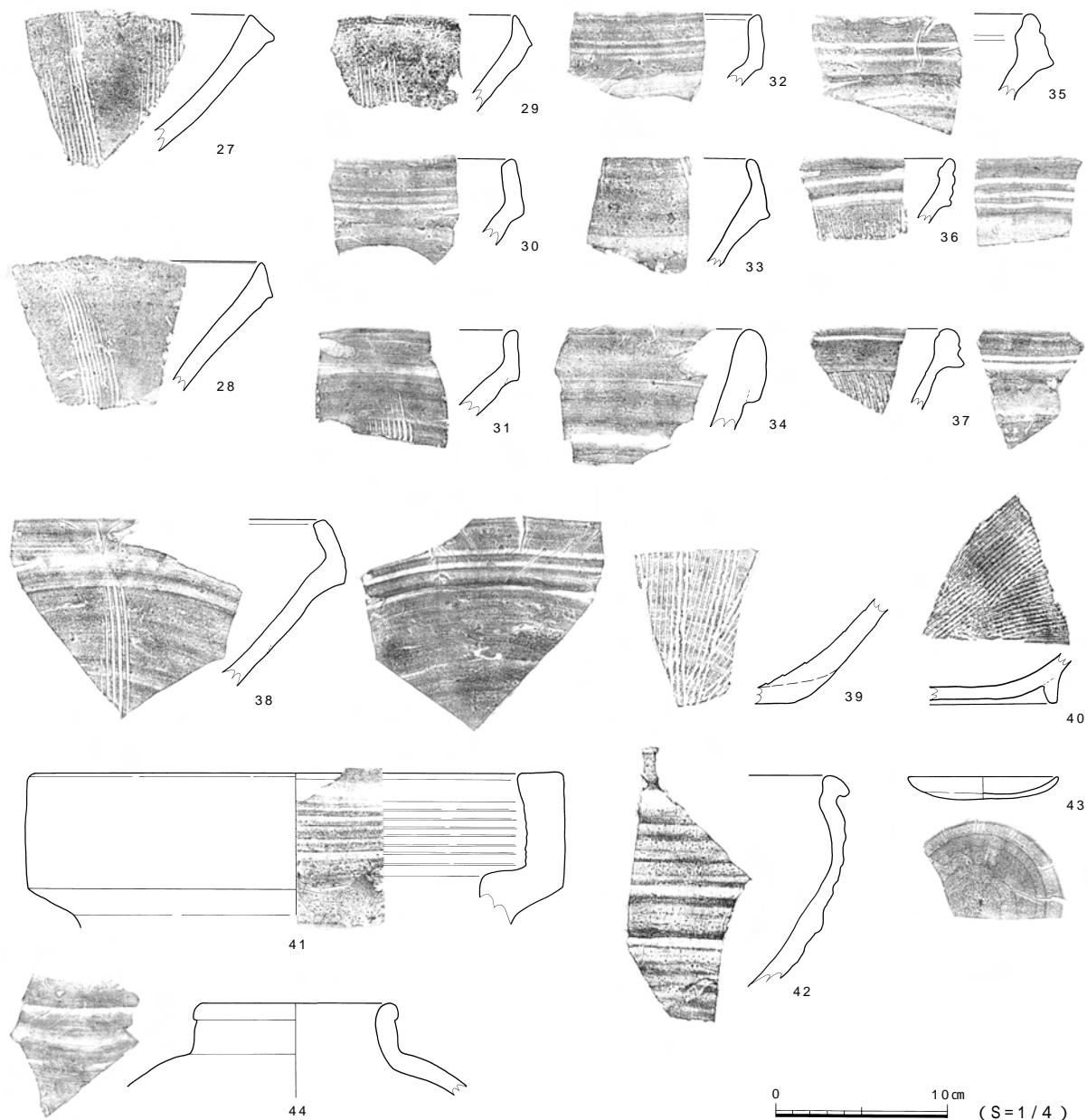
図96 溝21出土遺物(2) 木製品・土製品

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）



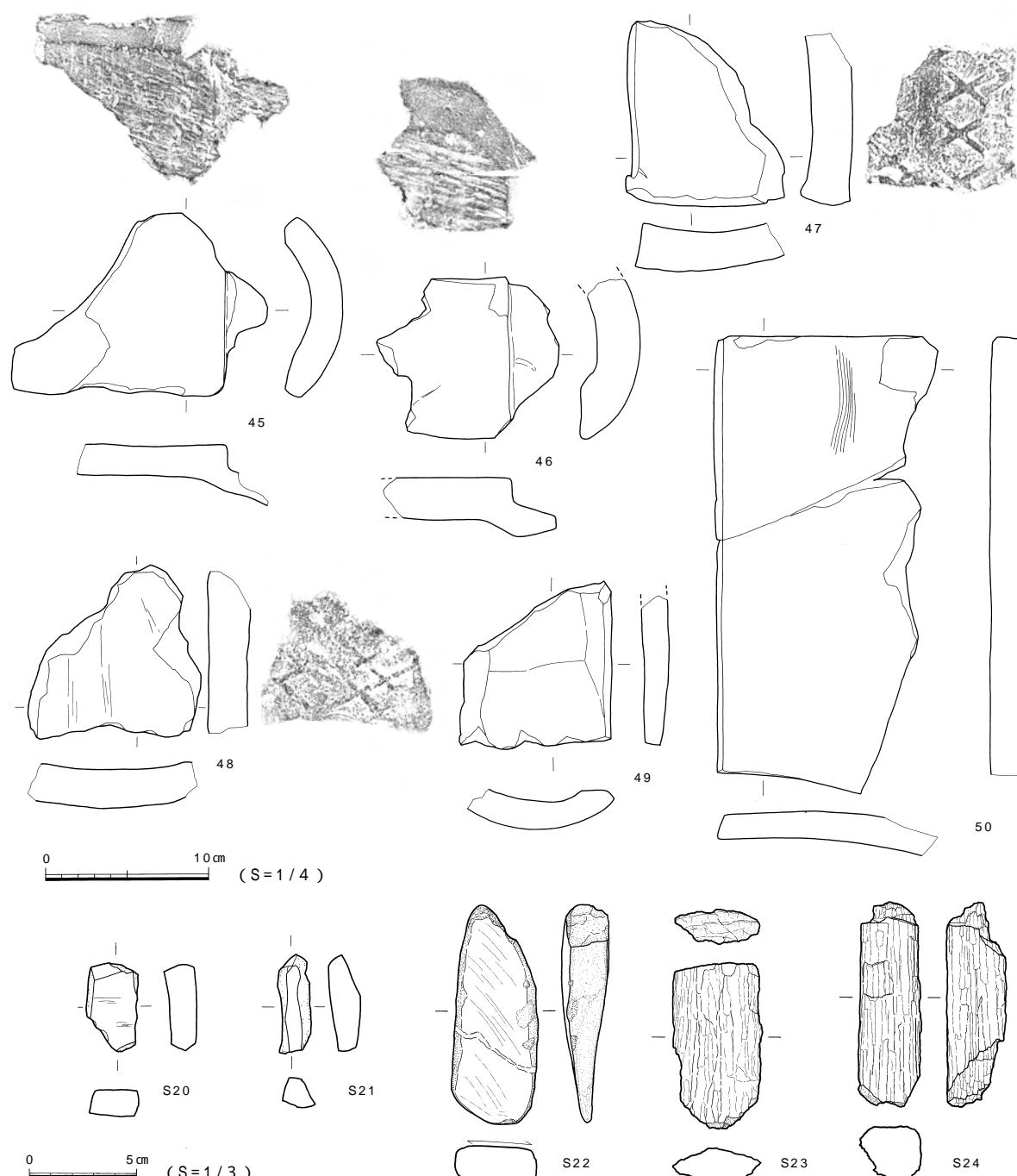
番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	*11.8	-	-	ナデ、1/3残存	微砂	淡褐白
2	土師質・椀	-	*7.0	-	丁寧なナデ、内面に重ね焼き痕、1/3残存	微砂、精良	淡褐
3	土師質・椀	*10.8	-	-	(内) 丁寧なナデ・光沢(外)ナデ・押圧、被熱、1/4残存	微砂	暗灰/暗灰褐
4	土師質・椀	*9.8	*4.7	2.0	横ナデ、(底外) 糸切り、口縁7/8欠	微砂	暗灰褐
5	土師質・椀	9.1	3.3	2.4	(内) 丁寧なナデ(外)ナデ・押圧	微砂	淡橙褐
6	土師質・椀	*9.4	*3.4	2.6	(内) 丁寧なナデ(外)ナデ・押圧、1/3残存	微砂	淡橙褐/淡黄褐
7	土師質・皿	*10.8	*7.6	1.5	ナデ(底外) 糸切り後丁寧なナデ、1/4残存	微砂	黄褐
8	土師質・皿	*9.0	*6.2	1.4	ナデ(底外) 篦切り後丁寧なナデ、1/5残存	微砂、精良	淡黄褐
9	土師質・皿	7.8	5.8	1.6	ナデ(底外) 篦切り後未調整、2/3残存	微砂、精良	淡黄褐
10	瓦器・椀	-	*5.2	-	ナデ(内) 平行の暗文、摩滅顯著、1/3残存	微砂、精良	暗灰/暗灰褐
11	瓦器・椀	*15.6	*6.2	*5.0	(内) ナデ・平行の暗文(外) 押圧、ナデ(口) 横ナデ、1/5残存	微砂、精良	灰
12	綠釉陶器・椀	-	*5.9	-	ナデ、施釉(高台) 削り出し・露胎	微砂、精良	灰(釉) 淡緑灰
13	白磁・合子	*5.4	-	*1.5	受け部のみ露胎、その他は極めて丁寧に施釉、外面上には細かい貫入	精緻	白(釉) 白
14	白磁・碗	-	*7.0	-	(内) 見込み外周に沈線一条、施釉(外) 露胎、削りだし高台、2/3残存	精緻	灰白(釉) 淡緑灰
15	青磁・碗	-	*4.8	-	(内) 施釉(外) 蓮弁文状の面取り・施釉厚め、疊付きと高台内は露胎	精緻	灰(釉)オリーブ灰
16	肥前陶器・椀	-	*4.2	-	唐津焼き、内面・外面部上半に施釉、深い貫入がみられる、体部下半～高台は露胎	精緻	淡茶(釉) 淡灰
17	天目・椀	*13.6	-	-	体部下方は露胎(施釉) 厚めで光沢・油滴状、1/6残存	精緻	茶(釉) 淡茶・黒褐
18	美濃瀬戸陶器・皿	-	*6.2	-	見込み釉剥ぎ、高台釉削り、3/4残存	精緻	淡灰(釉)オリーブ灰
19	灰釉陶器・皿	*10.0	*5.6	*2.4	疊付きのみ露胎、内面には貫入がみられる、1/2残存	微砂	灰(釉)オリーブ灰
20	肥前陶器・皿	*12.2	*3.8	*2.8	唐津焼き、外面下方・削り出し高台部は露胎、内底部に重ね焼き痕、1/4残存	精緻	灰(釉) 淡緑黄灰
21	肥前陶器・皿	*11.4	*4.5	*3.4	唐津焼き、外面下方・底部は露胎、内底部に重ね焼き痕、1/3残存	精良	灰(釉) 灰白
22	肥前染付磁器・碗	*9.6	*3.2	*6.4	疊付きのみ露胎、外面に淡藍色で網文、1/4残存	精緻	灰白(釉) 灰
23	瓦質・鍋	*23.4	-	-	ナデ、体部外面には煤付着、1/8残存	微砂、精良	灰白～灰/黒
24	亀山焼・甕?	*18.6	-	-	(口) 横ナデ(内) 同心円タタキ・ナデ(外) 格子目タタキ、1/3残存	微砂、精良	暗灰
25	瓦質・鍋?鉢?	-	*7.7	-	(内) 橫～斜位のハケ(外) ナデ・縦ハケ(底内) 押圧(底外) 丁寧なナデ、1/4残存	微砂	黒/暗灰黒
26	亀山焼・甕?	-	-	-	(内) 不定方向ナデ(外) 格子目タタキ(底) ナデ	微砂、精良	灰
T 6	土製品	長さ1.9、幅1.6、厚1.6			下頸～頸部には横縞、目・口・縫等は細い沈線で表現される。耳は短く、犬・テン・イタチ等の動物の頭部を表す。接合面とみられる面は丁寧なナデ。器などの装飾か。重量2.9g	微砂、精良	淡褐

図97 溝23出土遺物(1)



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
27	備前焼・擂鉢	-	-	-	(内) 横ナデ・放射状の卸目(外)ナデ	微砂	淡茶褐/暗赤褐
28	備前焼・擂鉢	-	-	-	(内) ナデ・押圧、8条1組の放射状卸目(外)ナデ	微~細砂	淡茶褐/淡茶褐~暗灰
29	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、8条1組の卸目	微~細砂	暗灰(口)淡茶灰
30	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ	堅緻	暗紫灰/暗赤褐
31	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、8条1組の卸目	微砂、精良	暗茶褐/茶橙褐
32	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ	微砂、精良	暗茶褐/淡橙茶
33	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、口縁肥厚部外面は器壁剥落により白色を呈する	堅緻	淡赤褐/灰褐
34	備前焼・甕	-	-	-	横ナデ	堅緻	暗紫灰
35	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、6条1組の卸目、口縁肥厚部外面には凹線2条	微砂、精良	明茶褐/暗紫褐
36	関西系・擂鉢	-	-	-	横ナデ、口縁肥厚部には凹線3条、明石産か堺産	微~細砂	淡赤褐
37	関西系・擂鉢	-	-	-	横ナデ、卸目、明石産か堺産	微砂	淡赤褐
38	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、8条1組の深い卸目、(底外)籠切り後ナデ	細砂	橙茶/橙茶
39	備前焼・擂鉢	-	-	-	粗いナデ、卸目、底部は押圧	細砂	淡灰/淡黄褐
40	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、放射状卸目	堅緻	赤褐
41	備前焼・大甕	-	-	-	横ナデ、口縁部内面に横方向の条線状の凹線、頸部には一部ワレ	細砂	茶褐~淡赤褐
42	備前焼・鉢?	-	-	-	横ナデ	微砂、精良	暗紫灰/茶~暗褐
43	備前焼・灯明皿	8.8	3.7	1.3	横ナデ、(底)籠削り後ナデ、2/3残存	微砂	暗紫灰
44	備前焼・壺	*11.0	-	-	横ナデ、1/6残存	細砂	淡橙/淡赤褐

図98 溝23出土遺物(2) 備前焼



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調: 内面/外面
		長さ	幅	厚さ			
46	瓦質・丸瓦	(13.1)	(11.3)	1.9	(内)布目痕・一部タタキ(外)丁寧なナデ	微砂、精良	暗灰~黒
47	瓦質・丸瓦	(9.7)	(11.3)	2.8	ナデ	微砂、精良	灰
48	須恵質・平瓦	(10.9)	(9.6)	2.5	(内)ナデ(外)格子目タタキ、図の下側面の調整は非常に粗い、煤付着	微砂	灰
49	瓦質・平瓦	(10.4)	(10.3)	2.3	(内)工具ナデ(外)ナデ・格子目タタキ	微砂、精良	灰白
50	瓦質・平瓦	(9.8)	(9.2)	1.8	(内)布目痕・工具ナデ(外)ナデ	微砂、精良	灰
51	瓦質・敷瓦	(27.9)	(13.7)	1.8	(内)ナデ・一部にハケ状痕(外)ナデ	微砂、精良	灰白~暗灰
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S20	砥石	(4.1)	(2.3)	(1.5)	(17.5)	流紋岩	少なくとも3面に擦り痕があり
S21	砥石	(4.5)	(1.4)	(1.3)	(10.4)	流紋岩	一部に擦痕、S20と同一個体か
S22	砥石	101.8	47.5	18.2	102.9	流紋岩	表面が摩滅
S23	加工痕のある石材	(77.8)	(41.3)	(18.8)	(77.1)	珪質片岩	板状に整形、用途不明
S24	加工痕のある石材	(96.0)	(27.0)	(28.2)	(97.8)	結晶片岩	面取りを意識した加工、用途不明

図99 溝23出土遺物(3) 瓦・石器

溝23の出土遺物は中世前半末～近世（江戸時代中期）のものが中心的に認められる。（岩崎）

溝24（図100）

調査区の東端、BV 55～56区で検出した。溝21・23を完掘後にその壁面で明瞭に認めることができた。平面的な検出は標高0.93～0.98m、5層 下面であり、9層 上面にあたる。

残存する平面形は東西1.8m、南北1mの円形が推定される。底面は標高0.13～0.15mに位置し、溝20の底部とほぼ一致する。上面からの深さは1mを測る。下端部から上面の東端部までの直線距離は2.1mである。

埋土は、砂質土で構成される上層（1～4層）と粘質土となる下層（5～8層）に大きく分けられる。さらに、後者は、堆積状況から5・6層と7・8層に細分され、それぞれの底面が平坦面を形成することから、全体としては階段状の掘り方断面形態を生み出している。この形状は、溝21の北端部分の断面形態に類似する。各下面が底面としての機能を有していたとすると、その高さは、下部から標高-0.07m・0.23m・0.53mとなる。

本遺構の機能を考える上で、埋土の傾斜が西に向かっており、位置関係からしても溝20あるいは21との関連を強く示す点は重要であろう。溝にとりつく取水口の役割も想定されるが、確定的な要素は指摘できない。また、水路使用の際の足場的な機能も視野に入れておきたい。

遺物は土師質土器碗・皿・鍋・竈、須恵器、瓦器の細片が約20片出土した。13世紀末葉を示すものを含むが、遺構の時期に合致するかどうかは明確ではないが、溝との関係も踏まえて13世紀末葉～14世紀前半の中で考えたい。

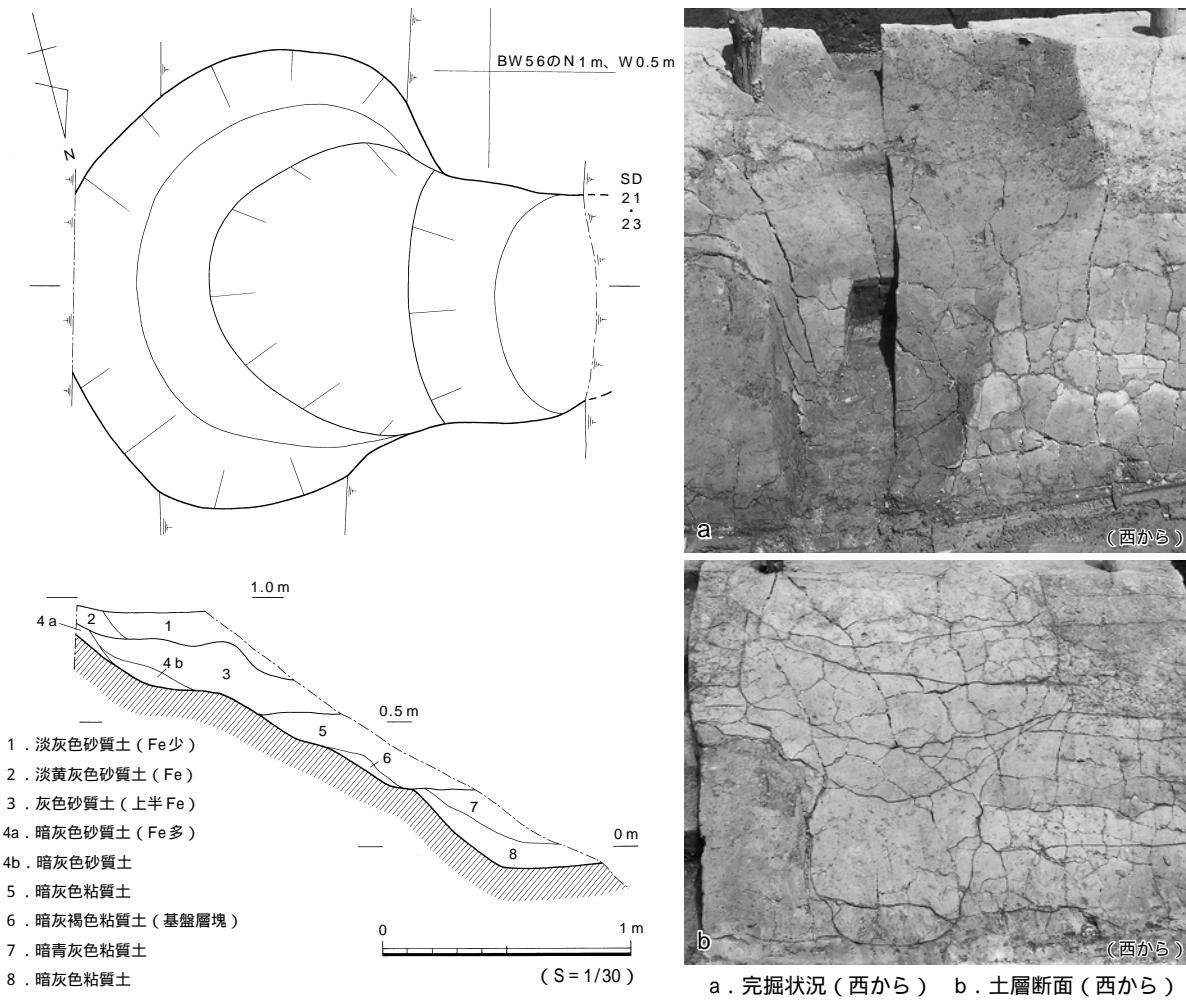


図100 溝24

5. 近世の遺構・遺物

近世に属する遺構は、土坑8基・溝2条があげられる。

遺構の配置は、調査区の中央部に中世以降踏襲される溝23がL字形に走り、土坑は溝の南北両岸に位置する。溝の南側には6基の土坑、北側には調査区西端部に重複した2基の土坑がそれぞれ集中する。溝23と土坑の同時性については、南側土坑群の北端部が溝の肩部に接する部分もあるが、同土坑群の出土遺物溝23の近世遺物との間に明瞭な時期差が認められないことから、概ね同時併存していたと想定される。一方、北側の土坑に関しては、出土遺物の時期がやや新しい傾向を示しており、南側土坑よりは後出するものであることが窺われる。

これらの遺構のなかで、中世～近世の使用時期が想定された溝23については、その連続性から前述した。ここでは、5層 検出の南側土坑群と 4層 検出の北側土坑群および小規模な溝25について述べよう。

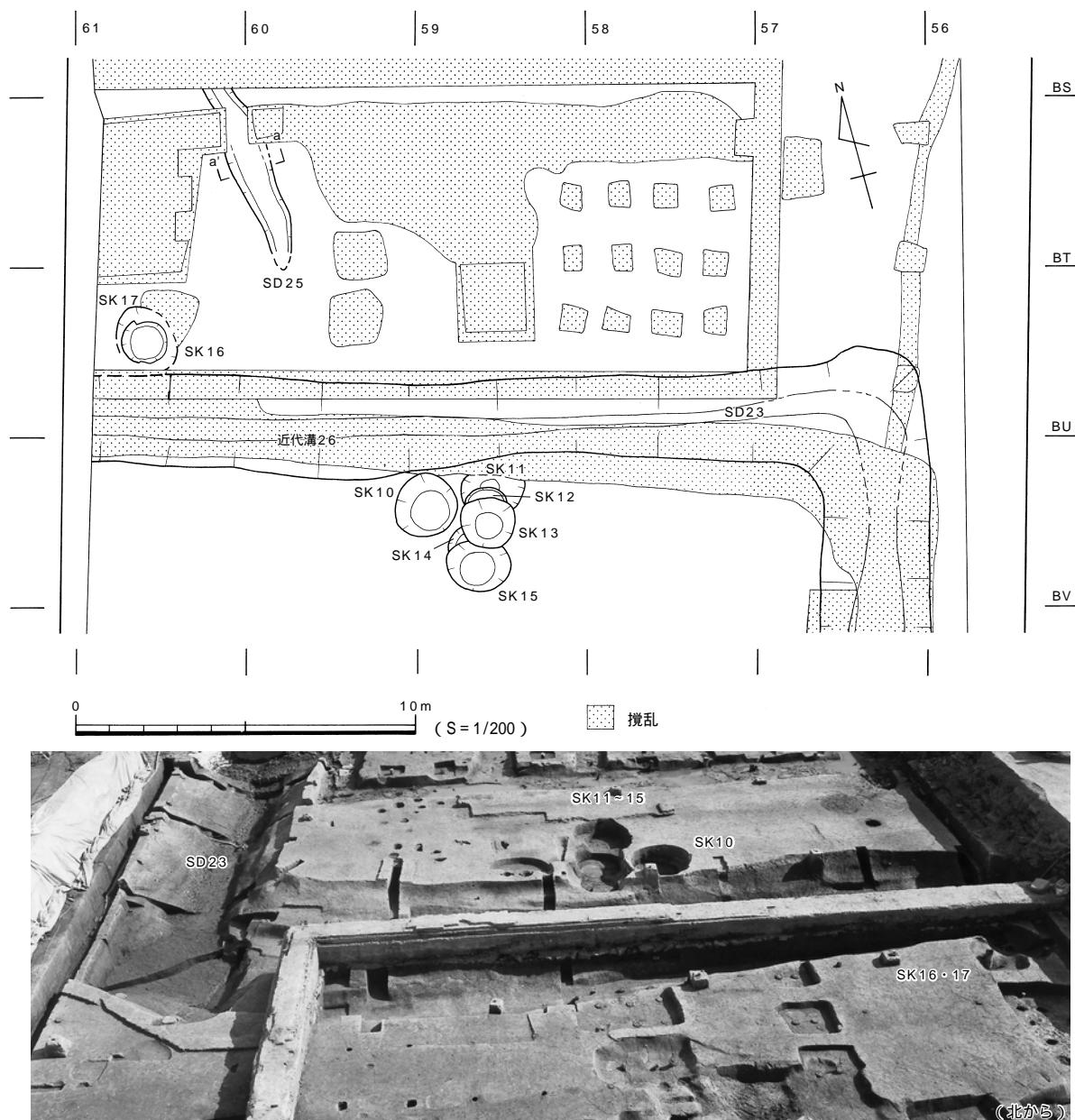


図101 近世遺構全体図

a. 土坑

土坑10(図102・103・111、図版5)

調査区のほぼ中央部、BU 58~59区に位置する。近代畦畔の下部にあたり、溝22・23の南側に接する。

標高1.25m、5層 上面で検出された。平面形は直径1.8~1.9mの円形である。やや不整形な部分も認められるが、これは北西部側に古段階の掘り方が一部残存するためであり、その部分を除くと、平面形は直径1.5~1.6mの円形が復元される。底面は標高0.53mに位置し、直径1.07~1.16mの広くて平坦な円形を呈する。深さは0.72mである。ほぼ垂直に掘削されており、断面形態は箱形を示す。底面から0.1m上部に残る段の存在から考えて、内部に枠が設置されていた可能性が高い。

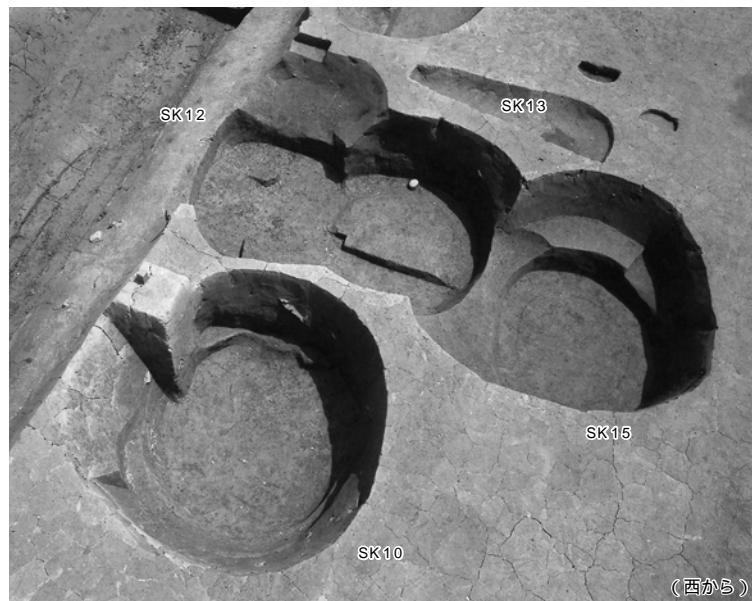


図102 土坑10周辺土坑群完掘状況

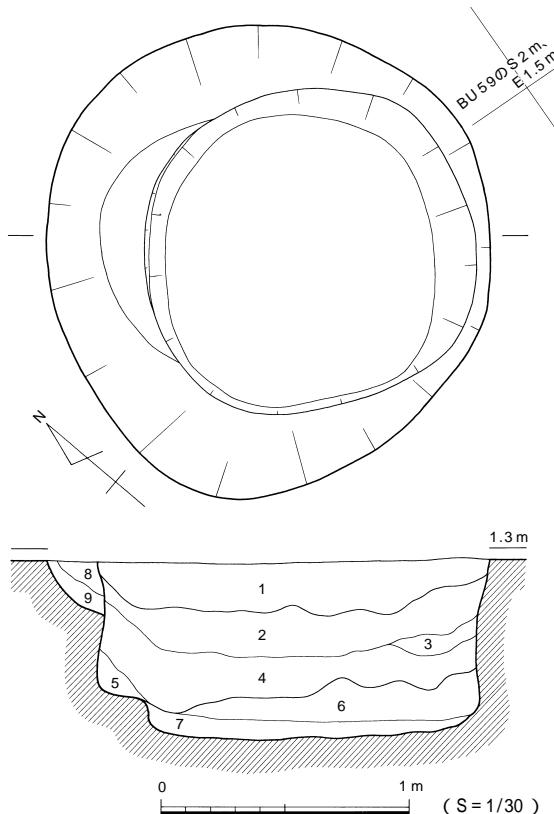


図103 土坑10

埋土は、新段階(1~7層)と古段階(8・9層)に大別される。前者は流入土と考えられる1層、多量の基盤層の塊りや砂を含む不均質な土質が特徴的な2~5層、砂の混入が少なく粘性が強い6・7層の3群にまとめられる。一方、後者は砂を多く含む不均質な土層であるが、1~7層と比べると暗い色調で区別される。

遺物は埋土全体から出土した。混入遺物を除くと、中心は小~中形片の瓦・陶磁器であり、約20片が含まれる。

本遺構は近世の野壙と考えられる。



- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1. 淡灰色砂質土
(炭、砂・緑灰色粘土塊少) | 6. 灰色粘質土(黄褐色土塊少) |
| 2. 淡灰色砂混土(炭、黄褐色土塊多) | 7. 淡灰色粘土
(緑灰色粘土塊多、砂少) |
| 3. (淡)灰色土(黄褐色土塊少) | 8. 暗灰(褐)色砂混砂質土 |
| 4. 淡灰色砂混粘質土(黄褐色土塊過多) | 9. 暗灰褐色砂混砂質土(Fe) |
| 5. 淡(綠)灰色砂質土(黄褐色土塊) | |

土坑11（図104・105）

調査区のほぼ中央部、BU 58区に位置する。近代畦畔の下部にあたり、溝22・23の南側に接する。土坑10とは2m程度の距離を挟んで東側、そして重複する土坑群の最北部に位置にする。南側を土坑12に、北側を近代溝によって破壊される。標高1.23m、5層 上面で検出した。

平面形は直径1.77mを残すが、復元すると約1.9mの円形となる。底面は標高0.17mに位置し、直径0.62~0.65mの隅丸方形を呈す。深さは1.06mを測る。断面形は、底面から0.4mまでほぼ垂直に立ち上がった後、標高0.55m付近から上方に開いてY字形となる。

埋土は、5層を挟んで、断面形の開放部を中心に堆積する上層（1~4層）と筒部にみられる下層（6~8層）に大別される。前者の土層には粗砂が含まれるほか、基盤土層粒が下層に向けて量を増すなど包含物が多い。後者は際だった包含物が認められない粘土層群である。上層は埋め戻しの埋土、下層は使用段階に堆積した土層の可能性が考えられる。5層は包含物を含む粘土層で鉄分が多い点は6層と共通するなど、上層と下層の中間的特徴を示す。

本遺構の検出・掘り下げは2回にわたって行った。最初は1~5層までを埋土と認識し、標高

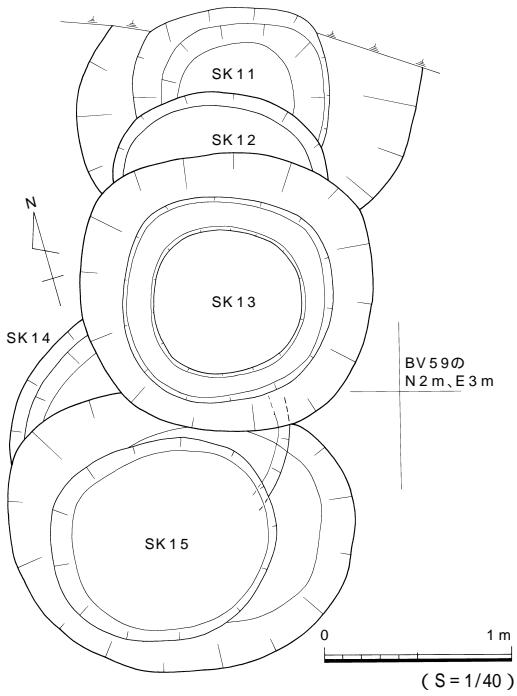
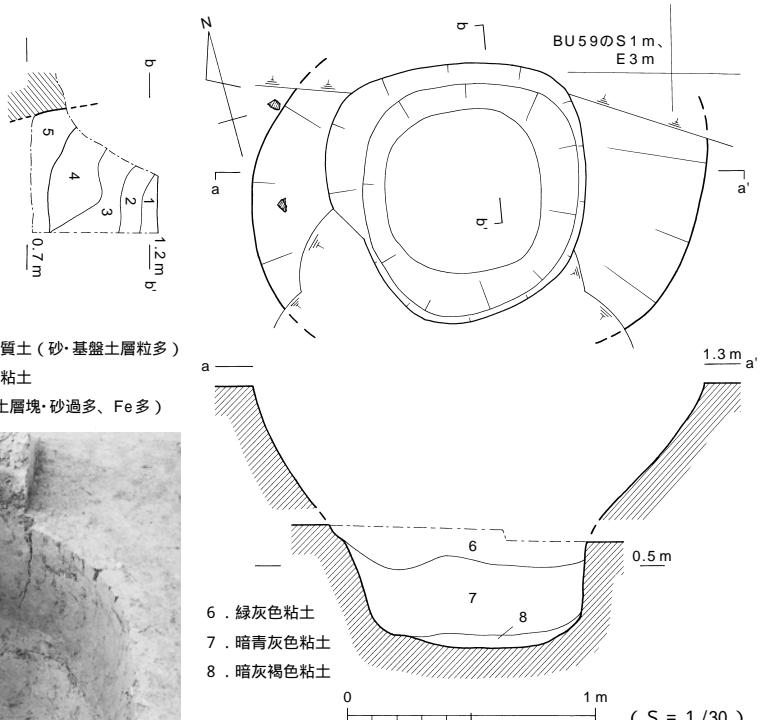


図104 土坑11~15



a. 下層部完掘状況（南から） b. 土層断面：下層部（南から）

図105 土坑11

0.55m付近で6層上面を底面とした。その後、全体を下げる段階に再度検出されることとなり、結果的に別々に確認した遺構ではあるが、平面的な位置が一致することから同一遺構と判断した。

ところで、本土坑は周辺に群集する近世土坑とは異なる特徴があげられる。Y字形という断面形態あるいは底面の高さが際だって低い値を示し深くて狭い底面を形成する点は、機能面での違いを窺わせる。どちらかといふと井戸のような特徴とも言えるが、湧水砂層には達しておらず、現段階では湧水は認められない。

遺物は、下層から古墳時代土師器の細片が数点出土したのみである。この遺物を積極的に評価する考え方もあるが、機能の特定とともに保留とし、現時点では本遺構の所属時期は近世としておきたい。

土坑12(図106・111、図版5・6)

調査区のほぼ中央部、BU58区に位置する。近代畦畔下部で、溝22・23の南側に接して形成される土坑群のなかに含まれる。土坑11の南側上部に重複する一方、土坑13によって南側を大きく破壊される。

標高1.23m、5層上面で検出した。平面形態は残存部分から直径1.14m程度の円形が、そして標高0.68mに位置する底面は直径1m程度の円形がそれぞれ復元される。深さは0.55mを測り、掘り方の断面形態は箱形を呈する。土坑13による破壊を免れた部分には、幅8cm前後を残す曲物が壁面に張り付いて廻る。

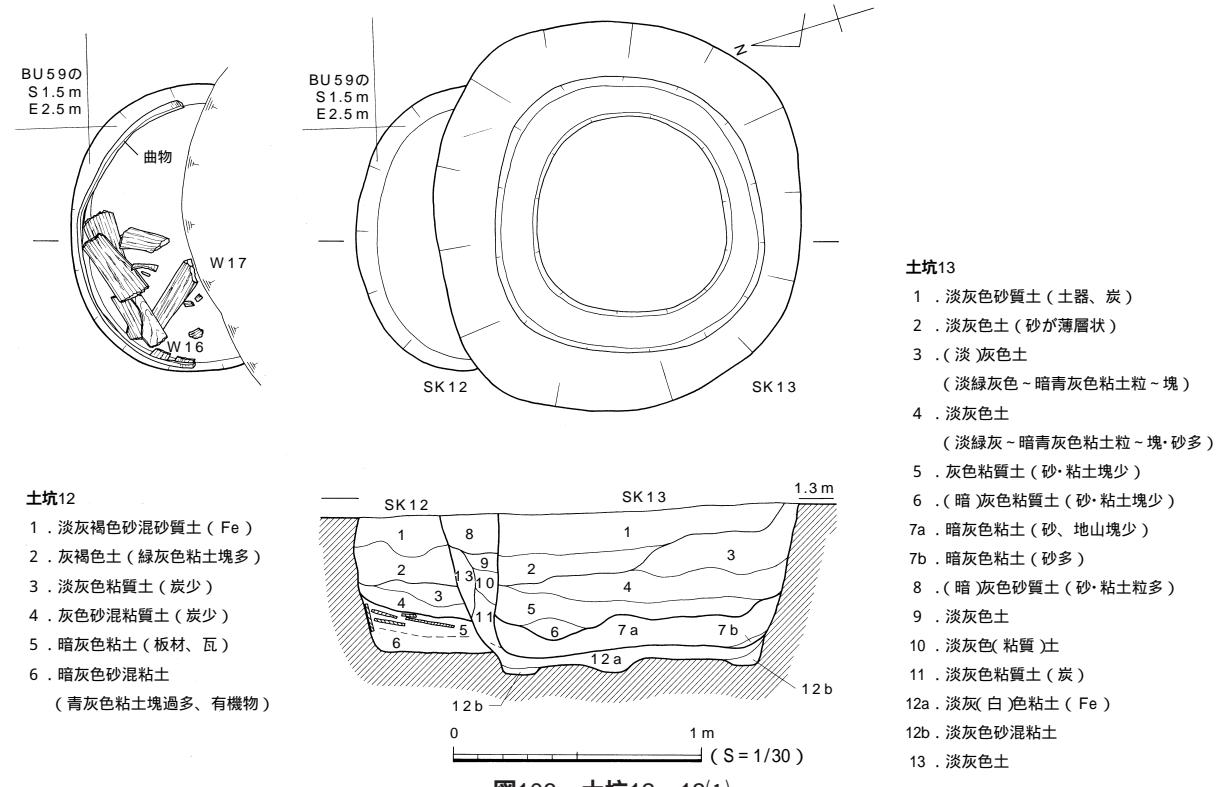
埋土は、全体では砂質の1層、粘性を示す2~4層、粘土層である5・6層の3群にまとめられる。緑灰褐色粘質土をブロック状に多く含む2層と、曲物・板材などを含む暗灰色粘土の5層が明瞭に分離される。また、6層には砂・粘土ブロックが非常に多く含まれる。5・6層は使用段階の堆積土と判断される。

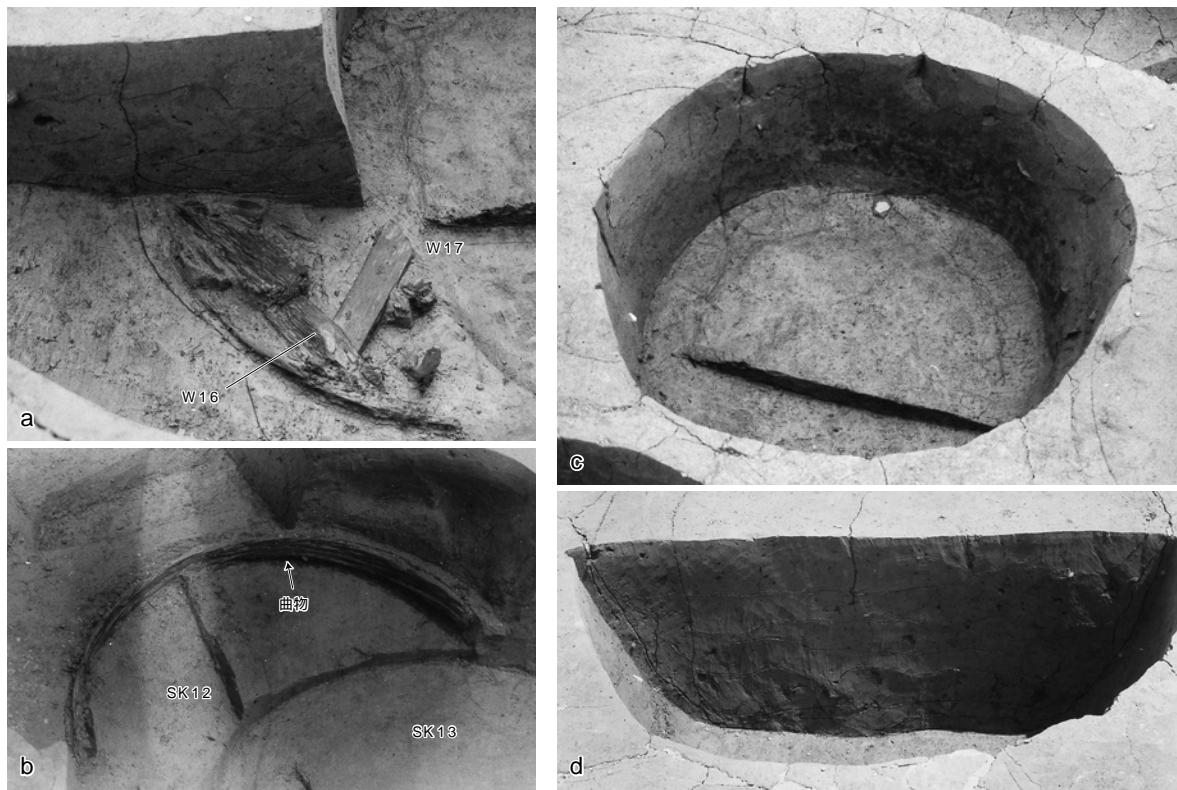
遺物は瓦(20点)が主体を成し、備前焼・陶磁器・土師質土器片を数点含むが、いずれも小~細片である。

本遺構は、近世の野壠と考えられる。

土坑13(図106・111)

調査区のほぼ中央部、BU58区に位置する。溝22・23の南側に接して形成される土坑群のなかに含まれる。土坑12・土坑14を大きく破壊し、さらに土坑15の北側の一部に重複する。同土坑群で最上部の土坑である。





a . 土坑12土層断面・木材出土状況(西から)
b . 土坑12曲物出土状況(南西から) c . 土坑13完掘状況(西から)
d . 土坑13土層断面(西から)

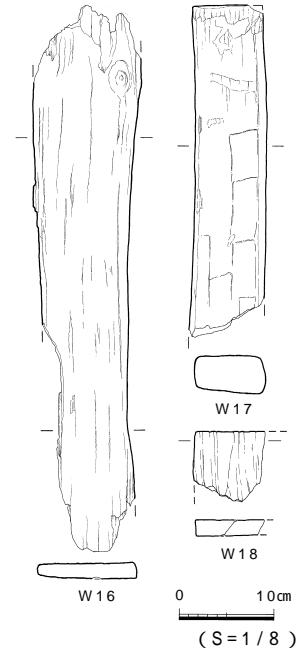
図107 土坑12・13(2)

標高1.28m、5層 上面で検出した。平面形態は、直径1.5m × 1.56mの円形を呈する。底面は標高0.61mにあり、直径1m × 1.05mの円形の周囲には幅16cm程度、深さ2~3cmの深い溝状の凹みがめぐる。深さは0.55mを測る。断面は逆台形~箱形である。

埋土は、新段階（1~7層）と古段階（8~13層）に大別される。

新段階では、1~6層が砂質~粘質土である。1層と2層あるいは5層と6層の類似性が高く、3層と4層では粘土粒あるいは粘土塊を多く含む。一方、粘土層の7層は上層と明瞭に区別される。また、底部には砂が薄く堆積する（7b層）。こうした特徴から、7層は使用段階の堆積土、4層以上の土層は埋め戻しの際の土層と考えられる。古段階では、9~11層が埋め土を構成する。12層は粘土層という点で7層と共通しており、使用段階に底部にたまつた土層と捉えられる。また、溝状の凹みを埋める12b層はきめ細かい粘土に砂が含まれる状態を示す。

このように堆積土の状態から、少なくとも1度の掘り返しを想定すると、前述した平面形状は古段階のものとなる。廃棄時にあたる新段階の土坑は規模がやや縮小し、平面規模は直径1.2m、底面は直径1.05mの円形となる。深さは0.56m、



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	特徴
W16	板材	(57.8)	11.3	2.0	マツ属複維管束亜属	柾目
W17	加工木	(35.2)	6.3	4.1	-	芯持ち材、面取り加工は丁寧、側面は丸みを帯びる、杭か？
W18	板材	(7.45)	(7.5)	1.75	マツ属複維管束亜属	柾目、上小口面の面取りは比較丁寧

図108 土坑12出土遺物 木製品

逆台形～箱形の断面形を呈する。

出土遺物は瓦片・陶磁器片が中心を成す。いずれも20片前後が確認される。その他には、土師質土器片・須恵器片などが全部で20片程度、古墳時代土器の細片50片程度を含む。

本遺構は、近世の野壠と考えられる。

土坑14(図104)

BU 58区に位置する土坑群のなかの1基である。土坑の大半は土坑13・15によって破壊されている。

標高1.25m、5層 上面で検出した。上面形態は、直径1.4m程度が残存することから、それよりやや大きめの円形あるいは楕円形が復元される。底面は標高0.84mまでが確認された。深さは、0.41mを測るが、もう少し深くなる可能性を残す。断面は箱形が予想される。

埋土は全体に青灰色系の土層であるが、その多くが破壊されており、詳細は不明である。

出土遺物は認められないが、周辺の状況から、本遺構は近世の野壠と判断される。

土坑15(図109・111)

調査区のほぼ中央部、BU 58区に分布する土坑群の南端に位置する。標高1.25m、5層 上面で検出した。

平面形は、長辺1.81m、短辺1.5mの楕円形を呈する。底面は標高0.72mに位置し、1.05m×0.93mのほぼ円形、

深さは0.53mを測り、断面形は箱形を示す。底部には一面に平瓦が敷き詰められている。

埋土は堆積状況から1～6層・7～11層・12～14層の3群に大別され、少なくとも2回の掘り返しが

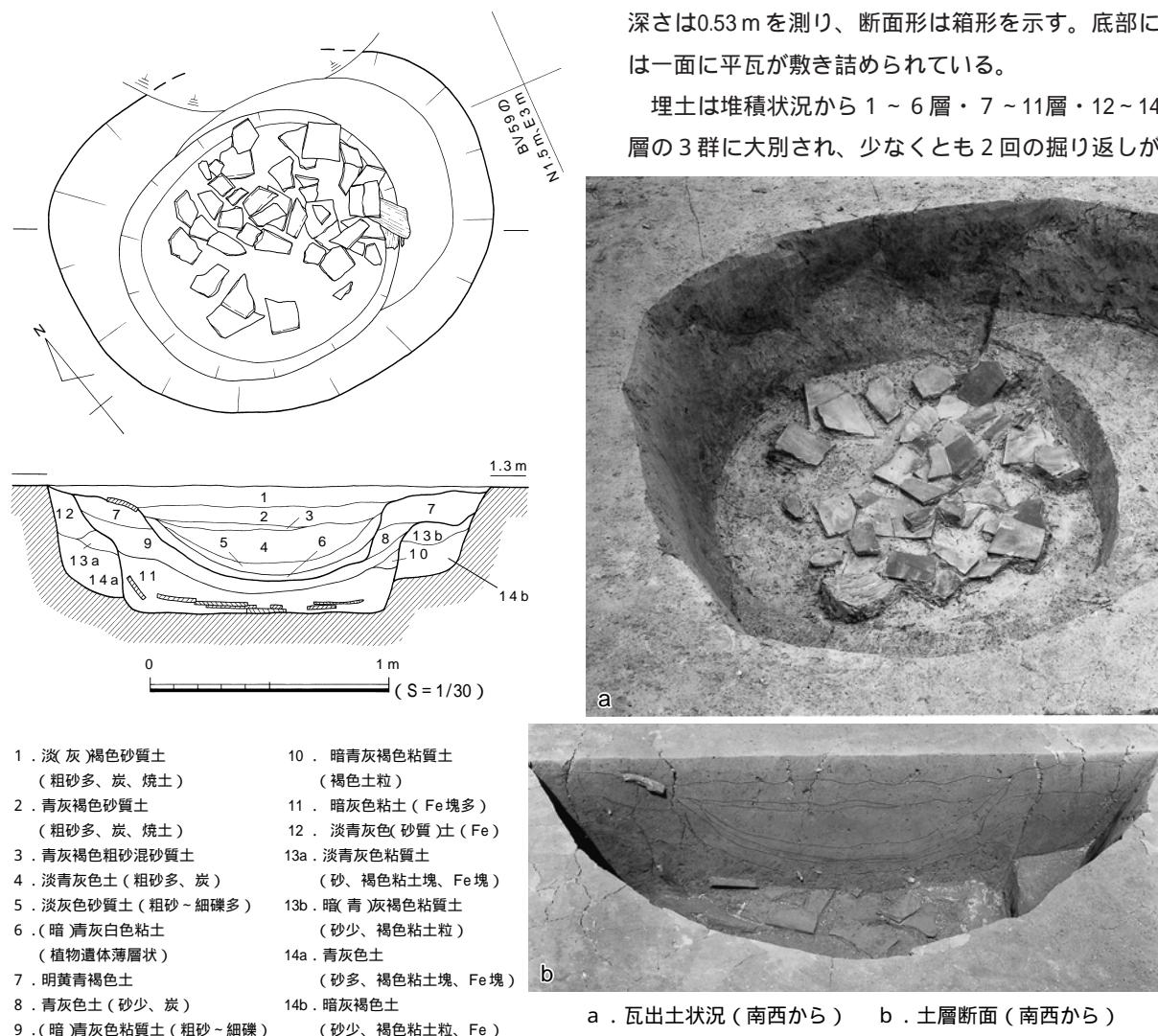


図109 土坑15

想定される。

最古段階の埋土は12~14層である。12層以外は褐色の粘土粒を含み不均質な堆積を示す点で共通性し、他と明瞭に異なる。次段階の埋土が7~11層である。本土層群は、9層に粗砂あるいは細礫が含まれる以外は、際だった包含物は認められない。底部にあたる11層は粘土層であるのに対して、上層(7~8層)は粘性が弱い。底部には瓦の他に鉄分が塊状となって沈着する。最終段階の埋土は1~6層である。本土坑は、この段階で直径約1m、深さ0.4m程度の規模となる。砂の包含が特徴的な砂質土層が主体の1~5層と、炭化した有機物の堆積が顕著な粘土層である6層に分けられ、6層が使用段階の堆積土と評価される。1~3層は比較的水平堆積であるのに対して、4~6層はたわんだ状況を示しており、堆積経緯の違いを示す。

遺物はコンテナ2箱(1箱28ℓ)の量が出土した。ほとんどが平瓦であり、その数は約80片を数える。その他は陶磁器・壺・土師質土器の細片が数片のみである。瓦は黒色系の色調で焼成状態の良好な瓦質タイプと灰色系の色調で焼きの甘いタイプに分けられる。それぞれが全体に占める割合は瓦質タイプが多く、前者:後者が3:2の量的比率を示す。焼きの甘いタイプでは断面の中心が黒色の状態のものが約半数を占める。

本遺構は、その特徴から近世の野壠と判断される。

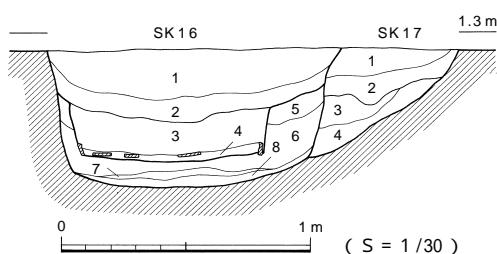
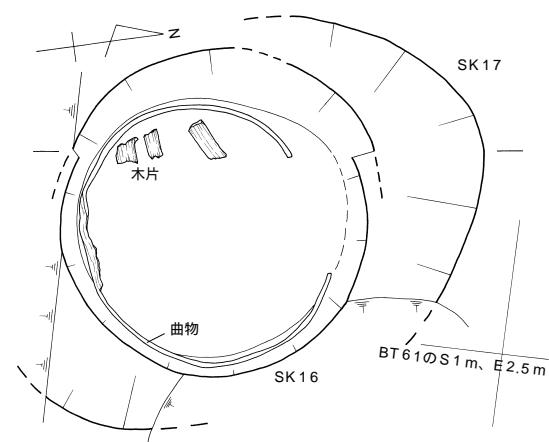
土坑16(図110・111、図版5・6)

調査区西壁際、やや北寄りに位置する。BT60区である。溝23の北側に近接し、土坑17の上部に重複する。北東部あるいは南側を攪乱によって破壊される。平面的な検出は標高1.22m、5層上面で行った。

平面形は直径約1.2~1.3mの円形を呈する。完掘状態での底部は標高0.67mに位置し、直径1.06mの円形を示す。深さは0.55m、掘り方の断面形は箱形である。

埋土下半において曲物が掘り方に張り付く状態で出土しており、本来は枠が設置されていたことを示す。曲物側板の下面レベルは標高0.78~0.8m、それに伴う埋土(4層)の最下面是0.73mに位置する。同レベルに、使用段階の底面が求められる。

埋土は、1・2層、3・4層、5~8層にまとめら

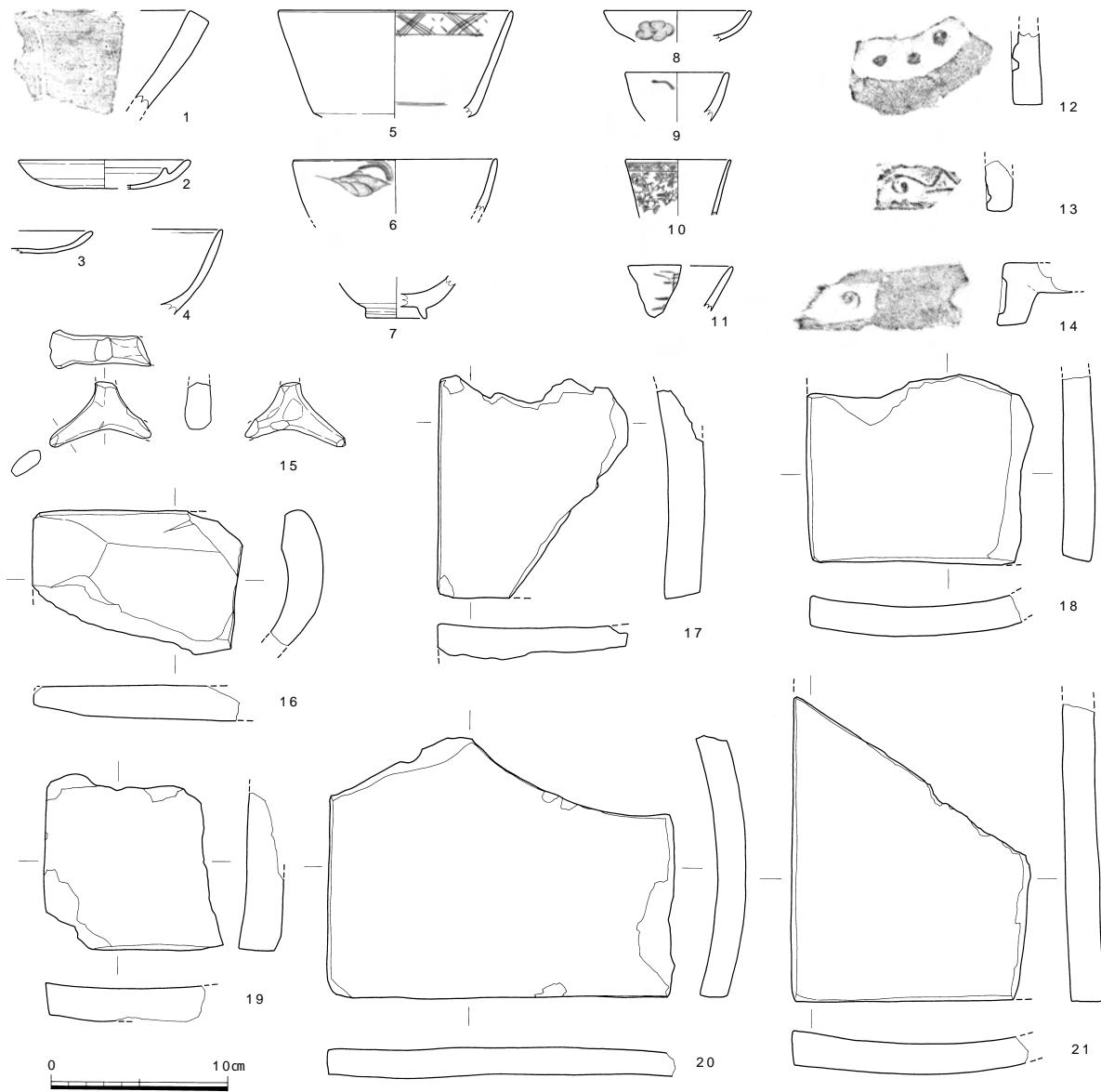


- 土坑16**
1. 淡灰色粗砂～細礫混砂質土(炭)
 2. 淡黄灰色砂質土(炭)
 3. 淡灰色粘質土(炭)
 4. 灰色砂混粘土～粘土混砂(板材)
 5. (淡)灰色粘土(炭)
 6. 灰色粘土
 7. 灰色粘土(青灰色土塊)

- 土坑17**
1. 淡黄灰色砂混砂質土
 2. 黄灰色土
 - (淡)灰色土
 - 灰色粘質土



図110 土坑16・17



(S = 1 / 4)

番号	出土遺構	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調: 内面/外面
			口径	底径	器高			
1	土坑17	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、卸目1ヶ所	微砂・堅緻	暗灰
2	土坑12	備前焼・灯明皿	*9.8	*4.0	*1.6	横ナデ、底部は糸切り後箇削り、1/3残存	微砂・堅緻	茶褐
3	土坑16	備前焼・灯明皿	-	-	-	横ナデ、底部は糸切り後箇削り	微砂	暗茶 断面 灰
4	土坑16	肥前染付・碗	-	-	-	施釉、内面口縁付近と見込み外周に呉須で一条横線を巡らせる	精良・堅緻	白(釉)白/淡緑灰
5	土坑16	肥前染付・碗	*13.2	-	-	施釉(内)呉須、1/7残存	精良・堅緻	灰(釉)淡灰/淡緑灰
6	土坑12	肥前染付・碗	*11.6	-	-	施釉(外)呉須:濃藍色、1/6残存	精良・堅緻	白(釉)白
7	土坑16	肥前染付・碗	-	*3.4	-	厚めの施釉、畳付きのみ露胎、高台外面に呉須:薄藍色	精良・堅緻	灰(釉)灰白
8	土坑16	肥前染付・皿	*8.4	-	-	施釉(外)呉須、1/6残存	精良・堅緻	白
9	土坑10	肥前染付・猪口	*5.8	-	-	やや厚めに施釉(外)呉須、1/6残存	精良・堅緻	白
10	土坑10	肥前染付・猪口	*6.0	-	-	薄めに施釉(外)呉須:藍色、1/5残存	精良・堅緻	白
11	土坑16	肥前陶器・椀	-	-	-	薄めに施釉(外)暗茶色釉で施文	微砂・精良	淡黄褐
12	土坑12	瓦質・軒丸瓦	長*4.6、幅*7.9、厚1.7	(内)ナデ・平滑(外)珠文3個・三巴文となるものと考えられる			緻密	暗灰 断面 灰
13	土坑12	瓦質・軒平瓦	長*3.1、幅*5.1、厚*1.4	(内)ナデ(外)唐草文の一部・変形唐草三転文になるものと考えられる			細砂	灰白 断面 灰白
14	土坑11	瓦質・軒平瓦	長*3.6、幅*9.0、厚*4.0	(内)ナデ・唐草文の一部・瓦当高3.6cm、文様区高2.1cm、側区片幅5.3cm			緻密	灰 断面 灰~黒
15	土坑16	土師質・トテン	長*2.8、幅5.7、厚2.1	平面「人」字形、ナデ、一部に焼けた痕跡あり			微砂	にじい縫・暗褐
16	土坑16	瓦質・丸瓦	長*12.0、幅*7.8、厚1.8	工具ナデ			細~微砂	暗灰 断面 灰
17	土坑16	瓦質・敷瓦	長*10.8、幅*12.7、厚2.1	ナデ・両面煤付着			微砂	灰~暗灰
18	土坑13	瓦質・敷瓦	長*10.6、幅*12.1、厚1.8	工具ナデ、両面煤付着、特に上面に顯著			微砂	灰~暗黒灰
19	土坑13	瓦質・敷瓦	長*9.2、幅*9.1、厚2.3	工具ナデ、両面煤付着			微砂	灰~暗黒灰
20	土坑15	瓦質・敷瓦	長*19.7、幅*14.9、厚1.7	工具ナデ、図上面画特に平滑、上面に煤付着			微~細砂	黒灰~灰
21	土坑15	瓦質・敷瓦	長*13.5、幅*17.3、厚1.8	工具ナデ、非常に平滑、上面に煤付着			微砂	黒灰~灰

図111 土坑10~13・15~17出土遺物

れる。1・2層は砂質土であり、特に1層では粗砂あるいは細礫の混入が顕著である。最終的な埋土あるいは流入土といえる。3・4層は粘性を強めて粘質土あるいは粘土となる。その中で4層は砂の包含が非常に顕著であり曲物が含まれるなど、使用段階の堆積土と考えられる。5～8層は灰色系の粘土層で、8層は色調が暗い。

3・4層と5～8層の関係は、後者が古い段階の土坑の埋土を、前者が新段階の土坑埋土をそれぞれ構成しているという見解と、後者は前者の下部を整えて曲物を設置する際の裏込め土という見解が考えられるが、現状ではどちらとも決めがたい。

遺物は瓦15片、陶磁器約40片が中心をなす。そのほかに、土師質土器碗・皿・鍋などが20片程度出土したが、いずれも細片である。トチンと見なされる土製品が1点含まれる。曲物については、ほとんど泥化しており、取り上げ後、現状をとどめるものではなかった。植物遺体ではモモ核が1点認められる。

本遺構の時期は、近世に属する。

土坑17（図110・111、図版6）

調査区西壁際、BT 60区において、土坑16の下部から調査区西壁面にかけて検出された。全体に残存部が少なく不明な部分が多い。

完掘段階での平面形は、長辺が2.2mを測る橢円形となる。断面の立ち上がりは緩やかで、すり鉢状の形態が復元される。深さは土坑16の数値を超えることはないことから、0.5m程度と予想される。

埋土は、黄灰色系の色調を示す上層（1・2層）と灰色系の土層である下層（3・4層）にまとめられる。1層に砂の包含が顕著あるが、それ以外は、際だった特徴は認められない。

遺物はわずかであり、瓦1片・備前焼2片・土師質土器片4片があげられる。いずれも小～細片で、土坑16と共通する。

本遺構の時期は近世に属する。

b. 溝

溝25（図112）

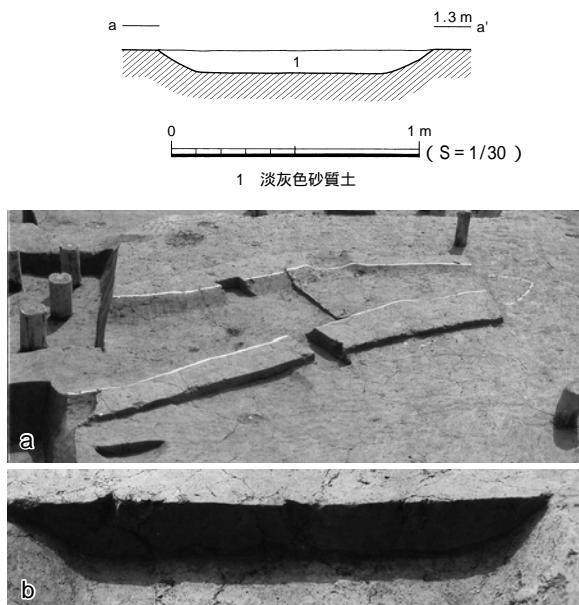
調査区の北西部、BR 60～BS 59区において検出した。北端部を中心に建物基礎などで破壊される。検出レベルは標高1.22m前後であり、4層上面にあたる。非常に明瞭に検出された。

形態は不整形であり、南端部は緩やかに上昇して姿を消す。北西から南東方向に5m程度が残る。幅は0.8～1m、底面の高さは標高1.06～1.15mで、深さは0.06～0.16mと浅い。断面形は皿状を示す。

埋土は淡灰色砂質土で3層と4層が混在するような状態である。遺物は全く出土していない。

非常に小規模でやや不整形な形態であることから人工的なものかどうかはやや疑問である。

時期は、検出面から近世が予想される。



a. 完掘状況（西から） b. 土層断面（南から）

図112 溝25

6. 近代の遺構・遺物

近代の遺構は、3層 上面で検出された溝・畦畔・水口があげられる。調査区中央部を東西方向から南北方向へ流れる溝1条の両肩部に幅広の畦畔が形成され、その畦畔から北方向と南方向に幅の狭い畦畔が走る。

a. 畦畔

検出レベルは標高1.5m～1.35m、3層 上面～上半である。畦畔は、溝26の両肩部に形成される畦畔Aと、同畦畔から南北に延びる畦畔Bが認められる。畦畔Aには7ヶ所に水口が設置される(図113)。

畦畔A(図113～115)

東西方向と南北方向で検出幅が異なる。前者では幅0.6～0.8mが残り、本来は0.8mの規模が想定される(図115-a断面)。後者は幅0.4～0.5mである。畦畔上面は標高約1.5mの数値が求められるが、検出段階では高低差を見せる。上面が水平に削平されていることは明らかであることから、本来は同レベルよりも上部に位置すると判断される。畦畔の構造については、a・b断面の観察から、削り出された4層によって核が形成されていることがわかる。4層 上部には灰褐色砂質土が堆積し、形状が整えられる部分も認められる(b断面)。耕

作土は場所によって砂質を強める場合(b断面)や有機質が堆積し粘性を強める場合(a断面)があるが、いずれも3層に対応する。

畦畔B(図113～115)

本来の姿を残す南壁面の断面(d断面)から幅0.4～0.45mを測ることが判る。頂部は標高1.62mに位置する。また、畦畔の構造は畦畔Aのように4層を削り出すものではなく、3層あるいは3層類似の土層によって形成される(c・d断面)。このように、畦畔Aとは規模や構築方法に違いを示す。

耕作面との関係を見てみよう。3層 上面の高さは、溝26の北側西半部で標高1.43mの数値を示す以外は、いずれも同1.48mを測り高低差は少ない。ところが、この数値を畦畔頂部と比較すると、畦畔Bのなかで溝以北～以東に位置するものは、同一

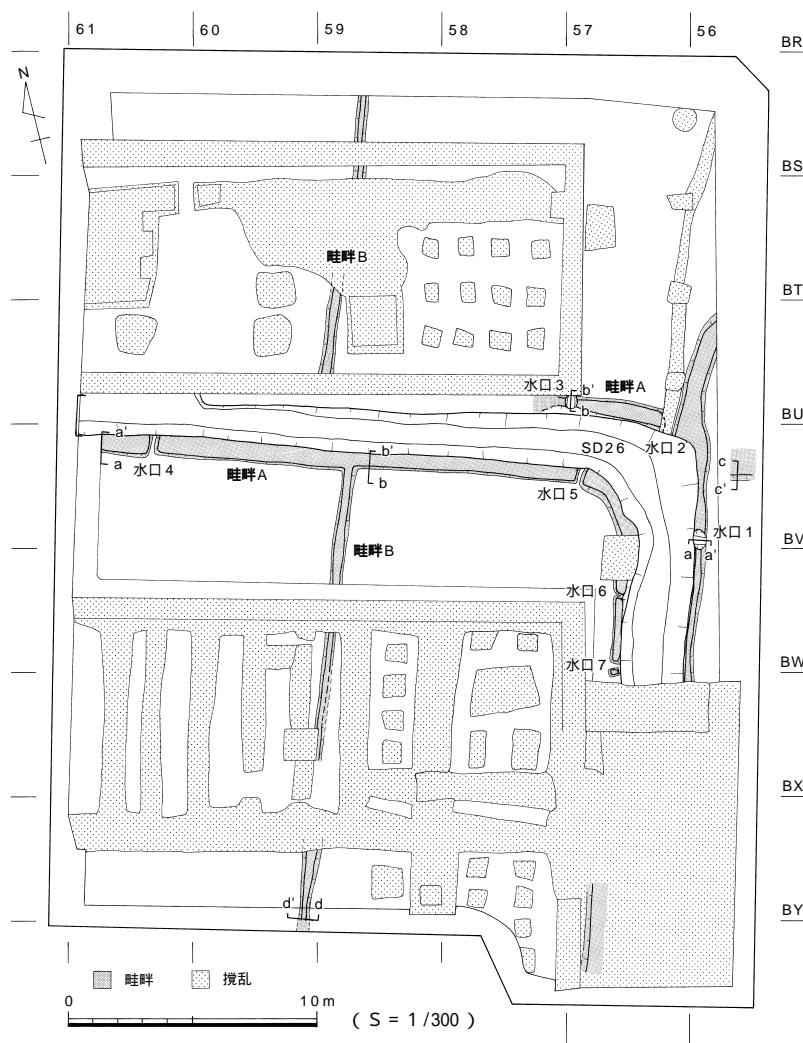


図113 近代遺構全体図

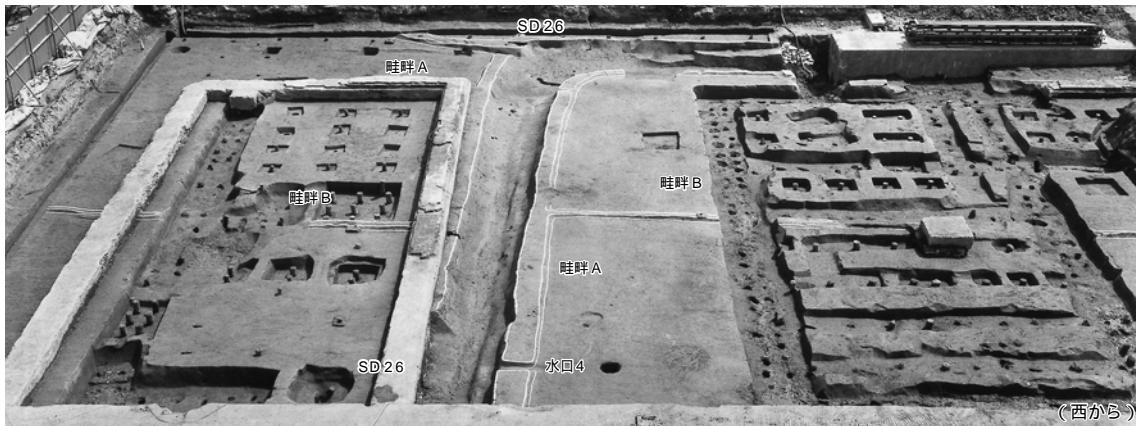


図114 近代遺構全景

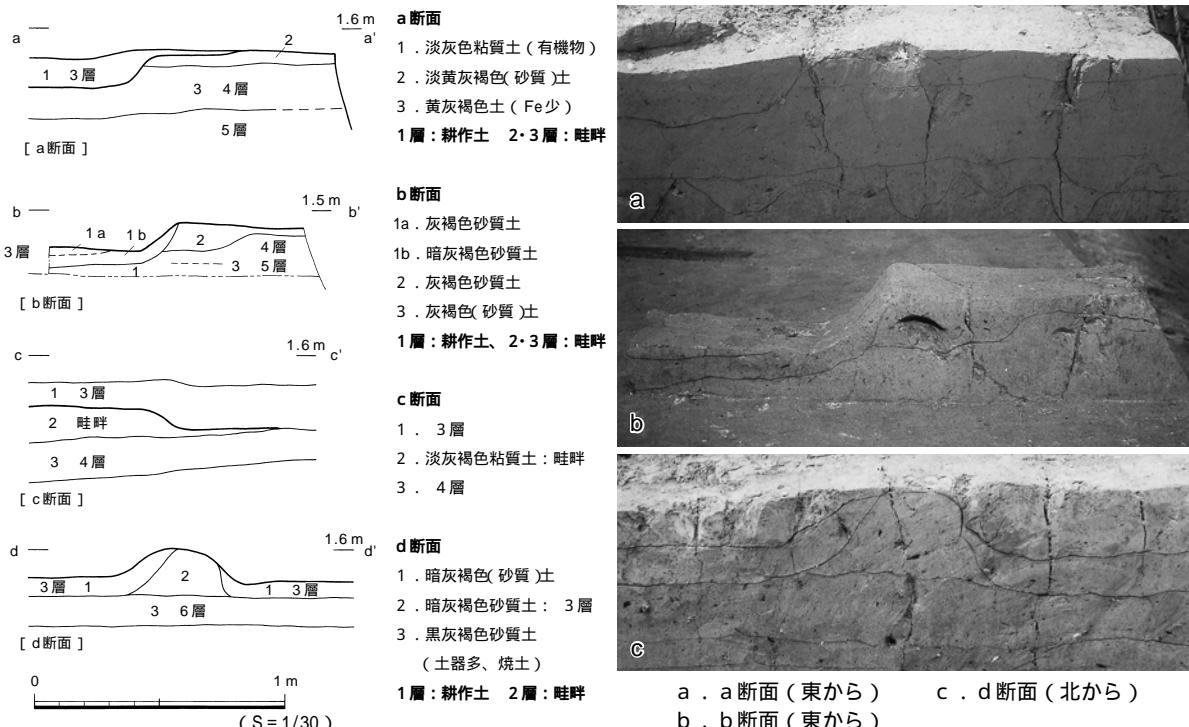


図115 畦畔土層断面図

レベルあるいは 3層 上面が畦畔レベルより高い状況を示す。つまり、これらの畦畔は、3層 耕作の中で消滅した可能性が考えられ、畦畔Bの継続性の弱さが現れている。それはc断面からも読み取れる。

一方、3層 下面は、溝26の北側では標高1.3m前後と低いが、南側では同1.33・1.37m・1.43mへと10~15m間隔で上昇する。下面に対応する土層は、北側では 4層、南端では 6層 となっており、旧地形の高低差が土地造成の過程に影響したことを示す。

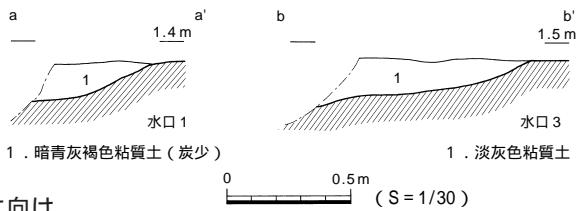
畦畔A・Bに認められる規模や構築方法の違いあるいは継続性の弱さは、溝の肩部に付随する畦畔Aが全体のなかで中心と位置づけられ、それに対して畦畔Bはやや流動的な面を有していたこと、そして、畦畔Aは前段階から踏襲される溝と一体化して、同様に継続的に形成された重要な畦畔であったことが窺われる。

3層 からは、瓦・中世土器・近世～近代陶磁器が出土しているなかで、瓦の比率が高い。

時期は、出土遺物から近世末～近代と判断される。

b . 水口

畦畔 A の検出に伴って 7ヶ所で確認された(図113)。畦畔 A を切る状態で溝状を呈するが、1ヶ所(水口2)は、攪乱で詳細は不明である。幅は0.3m~0.4m(水口4~7)が中心であるが、0.5m~0.8m(水口1・3)におよぶものも含まれる。いずれも、畦畔側から溝に向けて傾斜し、埋土は灰色系あるいは灰褐色系の粘質土である(図116)。細分が可能なものもあるが、ブロック状の堆積であることから、全体で単一土層と捉えることができる。



c . 溝

溝26(図113・117)

調査区の中央部、BT 56~61区・BT ~ BV 56区において検出された。検出面は標高1.45m前後、3層 上面である。中世溝23を踏襲してL字形に走る溝である。

溝の長さは、溝23と同様で全長48mにおよぶ。幅は2m前後である。底面は標高0.69mに位置し、深さは0.8mを測る。断面形はすり鉢状の底面に箱形の水路部分が付随する。

埋土は上層(1~3層)と下層(4~6層)に大別される。上層は淡青灰色・黄灰色・暗灰色の粘土に加えて粗砂・円礫などが混在する土層として明瞭に区別される。1~3層の細分はその比率の違いによるものであり、基本的な差は認めがい。2層との類似性が非常に高い。溝の廃棄段階の埋め土と評価される。下層は灰色系の粘質土~粘土である。堆積状況から4~6層と7層に細分される。6層には粗砂・砂利が非常に多く含まれる。水路の底面として機能していたことは明らかである。

遺物は、コンテナ2箱(1箱28ℓ)の量が、上層から集中的に出土した。瓦、中・近世~近代陶磁器類を含む。こうした遺物の内容も、溝23からの連続性を確認することができる。長期間におよぶ使用そして複数回におよぶ溝さらえなどの管理が行われていることが窺われる。時期は近世~近代である。



a . 水口 1 断面(南から) b . 水口 4 断面(北東から)

図116 水口 1・3・4

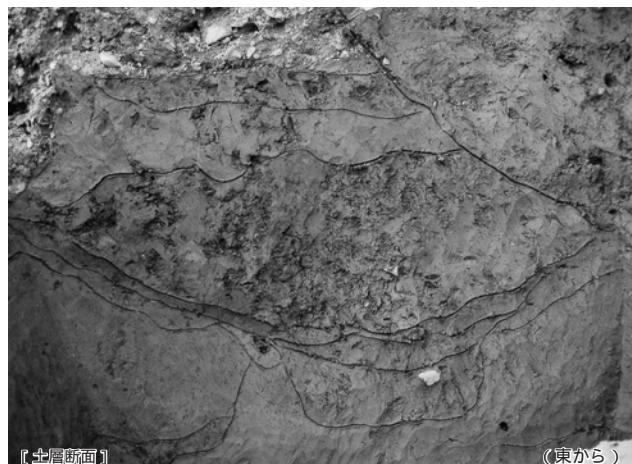
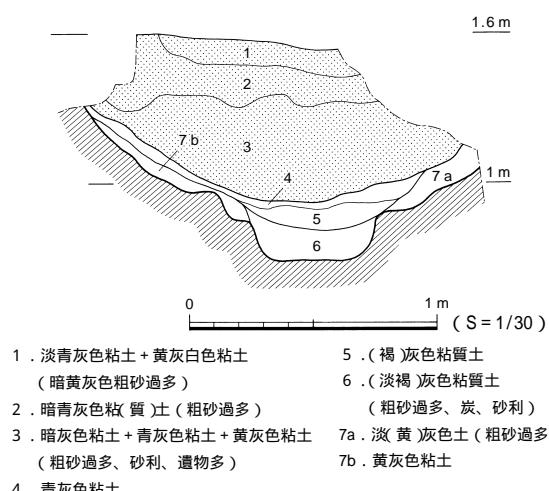
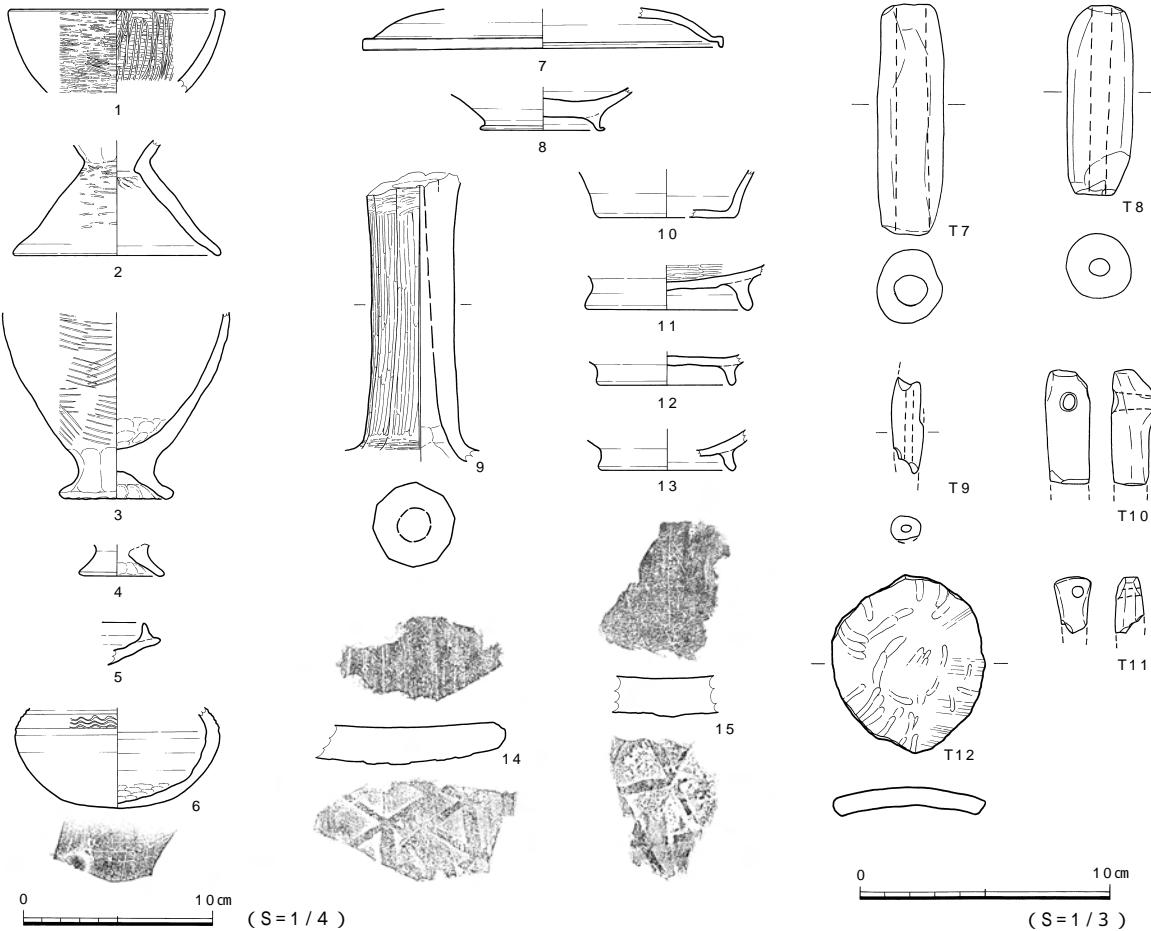


図117 溝26

7. 包含層出土遺物

遺構に伴わない遺物のなかで、ここでは古墳時代・古代の遺物、そして土製品・石器に注目して取り上げた(図118~120、図版7~9)。

1~4は古墳時代初頭に含まれる遺物で、3・4は製塙土器である。5・6は古墳時代後期の須恵器、7~13



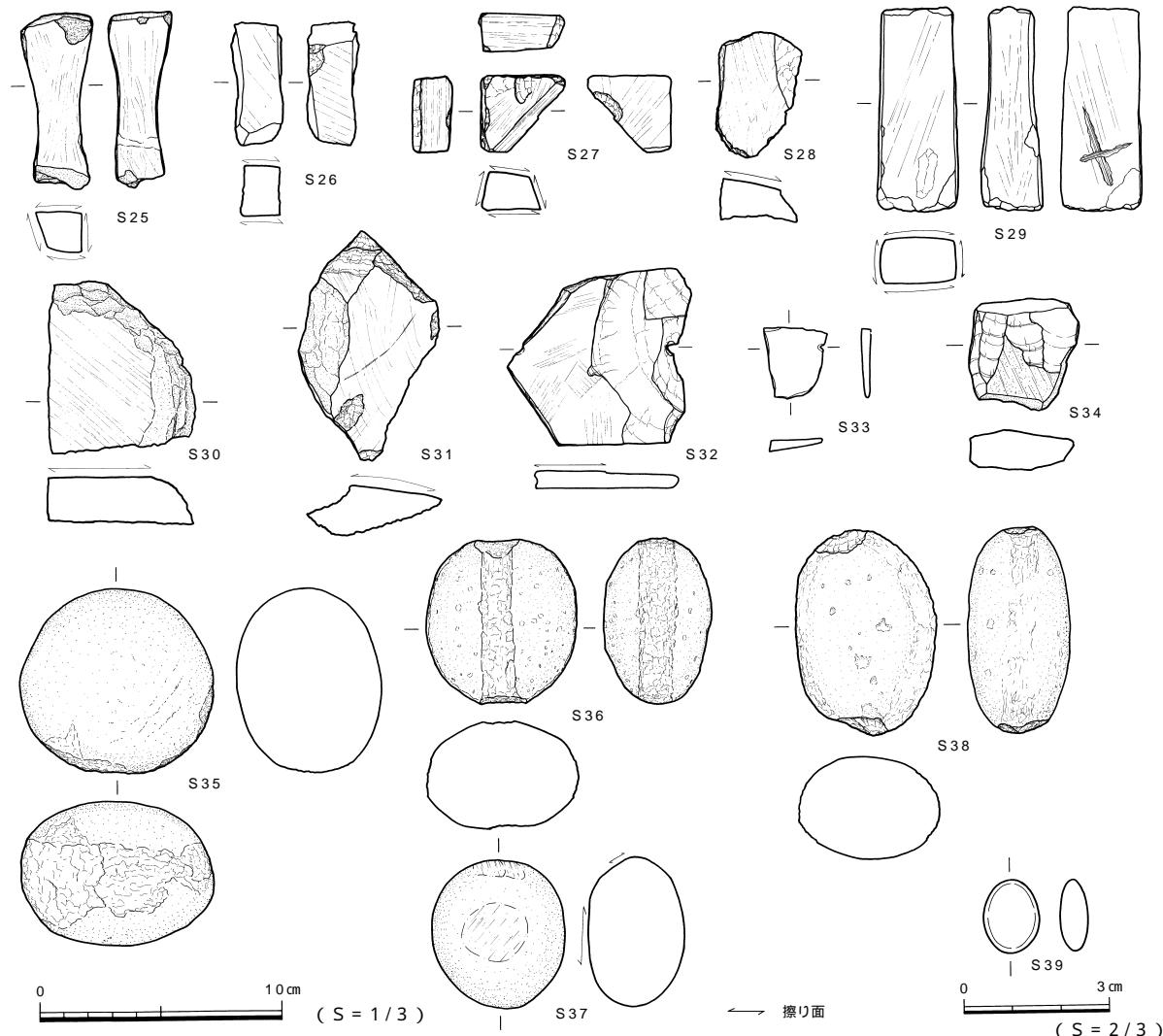
番号	層位	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調: 内面/外面
			口径	底径	器高			
1	9層	土師器・鉢	*11.0	-	-	(内) 密な範磨き後波状の暗文(外)密な範磨き、1/5残存	微砂、赤色粒	明橙褐
2	9層	土師器・器台	-	*10.7	-	(内) 紋目・ナデ(外)細かい範磨き・押圧、1/4残存	微・細砂、均質	薄橙褐
3	9層	土師器・製塙土器	-	*5.4	-	(内) ナデ(外)平行タタキ(脚・底)押圧、被熱による変色・剥落、1/2残存	粗砂、斜長石、角閃石	赤褐・暗褐
4	9層	土師器・製塙土器	-	*3.9	-	押圧・ナデ、断面内黒褐色	粗砂、石英粒	赤褐
5	4層	須恵器・杯身	-	-	-	横ナデ、白黄灰色の自然釉が飛沫状に付着	微砂、精良	薄赤灰~灰
6	4層	須恵器・庖	-	-	-	横ナデ(底内)押圧(底外)ナデ・「x」範記号、外面に3条の波状文、1/4残存	微砂、精良	灰~暗灰
7	3~4層	須恵器・杯蓋	*18.9	-	-	横ナデ、内面中央に墨?付着、転用硯の可能性あり	微砂、均質	青灰
8	5層	須恵器・椀	-	6.2	-	横ナデ、重ね焼き痕、高台端部は外側に屈曲	微砂、精良	青灰
9	5層	土師器・高杯	-	-	-	(内) ナデ・下部範削り(外)縦位範磨き、上下端横位範磨き、10角形の面取り	精良、水漉粘土	乳澄
10	5層	土師質・杯	-	*7.2	-	(内外) 横ナデ・丹塗り(底外)範切り後丁寧なナデ、1/5残存	精良、水漉粘土?	薄赤褐/乳白
11	4層	黒色土器・椀	-	8.4	-	(内) 密な範磨き・炭素吸着(外)ナデ、摩滅、1/4残存	微砂、均質	橙/黒灰
12	1~3層	黒色土器・椀	-	6.8	-	(内) 範磨き・押圧・炭素吸着(外)ナデ・摩滅、1/4残存	細~粗砂、砂粒多	薄橙/黒灰
13	4層	黒色土器・椀	-	*6.9	-	ナデ、(内) 炭素吸着・摩滅、1/4残存	微砂、赤色粒	薄橙褐/黒褐
14	4層	土師質・平瓦	-	-	-	(内) 格子目タタキ(外)布目、側縁部は切り離し後ナデ	細~粗砂、均質	白灰~赤灰
15	4層	土師質・平瓦	-	-	-	(内) 格子目タタキ(外)布目	細~粗砂、均質	乳灰
T 7	5層	土錘	長9.3、幅2.7、厚2.9	管状土錘、ナデ、孔径1.2cm、重量67.0g			細砂	明橙褐~灰黒
T 8	5層	土錘	長7.6、幅2.7、厚2.7	管状土錘、ナデ、孔径0.7cm、重量54.3g			細砂	淡黃褐
T 9	5層	土錘	長(3.3)、幅1.3、厚1.3	管状土錘、ナデ、孔径0.4cm、重量3.3g			微砂	淡橙~黃橙
T 10	5層	土錘	長(4.6)、幅1.8、厚1.8	棒状土錘、ナデ、孔径0.6cm、重量14.1g			細砂	淡灰褐~黃灰褐
T 11	5層	土錘	長(2.3)、幅1.4、厚1.4	棒状土錘、ナデ、孔径0.5cm、重量2.5g			細砂	淡茶褐
T 12	9層	土製円板	長7.2、幅6.2、厚0.8	ハケ後範磨き、平板ではなく若干凸面を呈する、土器底面を打ち欠いて円板状に加工、重量39.0g			細砂	赤茶褐~黃茶褐

図118 包含層出土遺物(1)

は古代の須恵器・土師器・黒色土器、10・11は瓦である(図118)。

鹿田遺跡では、弥生時代中期後半～古墳時代初頭・古墳時代後期・古代前半・古代末～近世・近代の遺構が広がる。本調査地点では、古墳時代初頭・古代末～近世・近代の遺構が検出されたのみであるが、遺物からは、古墳時代後期あるいは古代前半の遺物が散在しており、周辺での活動を窺うことができる。

その中で、特に古代の遺物では高杯と黒色土器の存在が注目される。高杯(9)は10角形に面取りがなされており、同時期の集落において一般的な遺物とは言い難く、本遺跡の性格を考慮する上で参考となろう。一方、黒

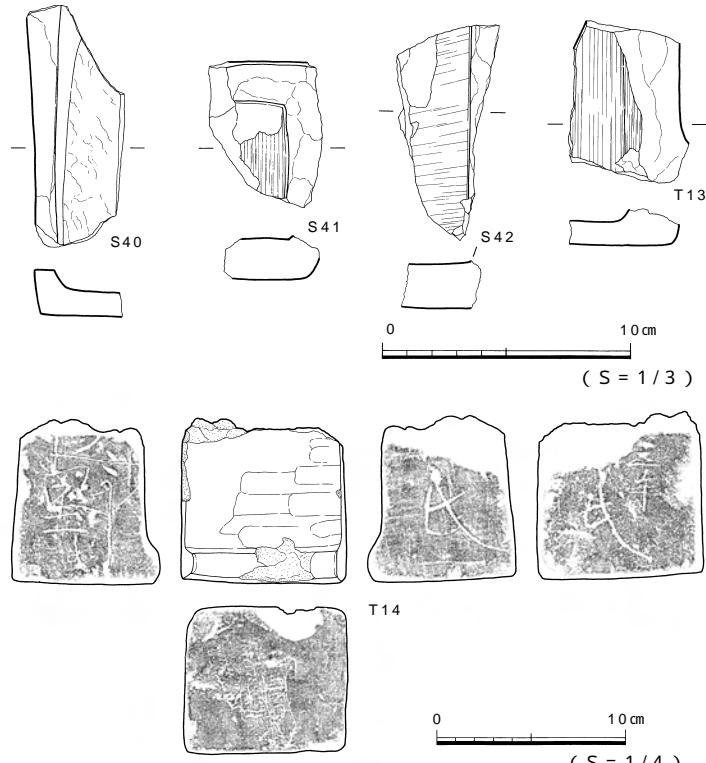


番号	層位	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	特徴
S25	5層	砥石	72.4	29.2	18.1	58.4	流紋岩	四面が著しく磨耗
S26	9層	砥石	(51.0)	(17.0)	21.0	(22.6)	流紋岩	図の表裏面が摩耗
S27	4層	砥石	22.0	33.8	15.3	19.9	流紋岩	表裏面と側面が磨耗
S28	側溝	砥石	(51.2)	(30.4)	(31.2)	(34.1)	流紋岩	表面に研磨による線状痕
S29	側溝	砥石	84.1	33.2	19.0	96.3	流紋岩	四面に研磨による擦痕、溝状の擦痕
S30	5層	砥石	(70.8)	(61.2)	(19.8)	(120.2)	流紋岩	片面が磨耗
S31	5層	砥石	(93.9)	(55.1)	(20.1)	(96.1)	流紋岩	表面に研磨による線状痕
S32	4層	穿孔石器	(71.2)	(78.9)	12.6	(54.9)	粘板岩	両側縁の中央付近に打ち欠きあり、擦痕みられる
S33	5層	穿孔石器	(29.0)	(26.0)	5.0	3.7	粘板岩	図右側縁に打ち欠き一箇所、S32に似る
S34	9層	加工痕のある石材	46.5	43.2	15.8	39.9	流紋岩	表面に対向方向の鑿痕跡
S35	9層	叩石	75.2	80.1	59.5	505.4	流紋岩質凝灰角礫岩	円盤の下縁に明瞭な敲打痕
S36	9層	石錘	68.0	62.5	44.0	265.0	流紋岩	表裏面と側縁に繩かけによる擦れの痕跡
S37	9層	磨石	61.2	55.0	40.0	215.8	閃綠岩	表面中央と上端付近に摩滅部位
S38	5層	石錘	85.0	58.3	41.6	279.7	花崗岩	両端に敲打による凹み、側縁に繩による擦れ
S39	4層	碁石	20.0	11.1	5.9	1.5	流紋岩	良質の石材、丁寧な研磨

図119 包含層出土遺物(2) 石器

色土器(11~13)の存在は10世紀の痕跡を示す。本遺跡では、同時期の明確な遺構は極めて少ない。文献史料において特に記述の多い「鹿田荘」の時期でもあり、同時期の遺物には注意が必要である。

石器は砥石・叩き石・石錐・磨り石・碁石・穿孔石器・硯、そして土製の硯・瓦質の壺をあげた(図119・120)。砥石の多さと、硯の存在が特徴的である。砥石は、いずれも流紋岩であり、特にS25は良く使い込まれている。石質もきめ細かく均質な石材が使用されている。出土土層は、中世~近世の5層4層からが多いが、古墳時代初頭に遡る9層からも、砥石・叩き石・石錐・磨り石が出土しており、特に叩き石・石錐・磨り石は9層に属する可能性が高い。T14は4面に字が刻まれるほか、線刻なども認められる。明瞭に読みとれる文字は「氏」「三年」であるが、それ以外は、判読不明である。攪乱からの出土であるため、時期等の特定はできないが、宗教施設の存在も予想させる。



番号	層位	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	特徴	
								一部器壁剥落、研磨による整形	
S40	4層	硯	(97.2)	(35.2)	17.5	(91.3)	粘板岩		
S41	攪乱	硯	(59.1)	(45.8)	17.5	(73.3)	粘板岩	研磨による整形	
S42	5層	硯	(87.2)	(32.4)	19.0	(49.4)	流紋岩	研磨による整形	
番号	層位	種類・器種	法量(cm)	形態・手法他			胎土	色調: 内面/外面	
T13	攪乱	瓦質・硯	長(64.5) 幅(49) 厚1.5	丁寧な研磨により光沢あり、炭素吸着			微砂	黒断面 茶灰	
T14	攪乱	瓦質・壺	長(8.8) 幅8.8、厚7.9	4側面に刻字・線刻・刺突を施文、全面炭素吸着、上部欠損			微砂	黒断面 灰	

図120 包含層出土遺物(3) 石器・土製品

第 章 第8次調査（RI治療室）

第1節 調査経過と概要

1. 調査に至る経緯

1998年度に、医学部附属病院でRI治療室の新設工事が具体化した。新設予定地は附属病院中央診療棟の西側である。当該地周辺では、1987年に北西の附属病院管理棟の発掘調査を実施している（鹿田遺跡第5次調査）ほか、中央診療棟の南側では1984年に試掘・確認調査を実施しており、これらの成果から、今回の建設予定地内でも、古墳時代～中世の包含層の存在が予想されることから、発掘調査を実施することとなった。

調査面積は165m²である。調査期間は1998年8月3日～9月1日で、調査員1名が担当した。

2. 調査体制

調査主体	岡山大学	学長	小坂二度見
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	稻田 孝司
調査研究員：調査主任	"	助手	横田 美香
管理委員会（発掘調査年度：1998年度）			
【委員】学長	小坂二度見	文化科学研究科長	岩間 一雄
文学部長	成田 常雄	自然科学研究科長	岩見 基弘
教育学部長	森川 直	資源生物科学研究所長	本吉 総男
法学部長	石島 弘	附属図書館長	神立 春樹
経済学部長	建部 和弘	医学部附属病院長	荒田 次郎
理学部長	佐藤 公行	歯学部附属病院長	佐藤 隆志
医学部長	産賀 敏彦	固体地球研究センター長	久城 育夫
歯学部長	松村 智弘	医療技術短期大学部長	遠藤 浩
薬学部長	原山 尚	学生部長	伊澤 秀而 ~1998年8月15日
工学部長	大崎 紘一	"	松畑 熙一 1998年8月16日~
農学部長	内田 仙二	事務局長	諸橋 輝雄
環境理工学部長	河野伊一郎	埋蔵文化財調査研究センター長	稻田 孝司
【幹事】庶務部長	厚谷 彰雄	施設部長	遠藤 久男
経理部長	黄揚川英了		
運営委員会			
【委員】（発掘調査年度：1998年度）			
センター長（文学部教授）	稻田 孝司	医学部教授	村上 宅郎
文学部教授	狩野 久	農学部教授（調査研究専門委員）	千葉 喬三
理学部教授	柴田 次夫	文学部助教授（調査研究室長）	新納 泉
経済学部教授	建部 和広	施設部長	遠藤 久男
【委員】（報告刊行年度：2005年度）			
センター長（事務局長）	梶原 憲次	副センター長（大学院文学研究科教授）	稻田 孝司

文学部教授 新納 泉
 " 久野 修義
 大学院医歯学総合研究教授 大塚 愛二
 大学院自然科学研究科教授 柴田 次夫

環境理工学部教授（調査研究専門委員） 沖 陽子
 埋蔵文化財調査研究センター助教授 山本 悅世
 （調査研究室長）
 施設企画部長 入江 良広

3. 調査の経過

1998年7月27日から造成土の除去を開始した。調査地点は以前に病棟が建設されていた地点にあたり、それらの基礎や、建物撤去時の攢乱によって調査区の大半が基盤層以下まで破壊されていた。そのため、総面積165m²のうち、調査可能面積は約4割にあたる66m²であった（図121）。

8月3日から本格的な作業を開始した。攢乱部分をすべて除去したうえで、8月10日から4層上面での遺構検出に入り、溝1条を検出した。次いで5層上面で溝6条、ピット4基を検出した。8月25日からは6層以下の面での遺構検出と精査を行い、溝2条の調査を行った。一部で基盤層以下の堆積土層を確認し、9月1日にすべての作業を終了した。

なお調査にあたっては、鹿田地区構内に設定した構内座標に従って、調査区内に3m角グリッドを設定した。構内座標は5m単位であるが、本調査地点は狭いため、調査時にはBSラインと54ラインを基に3m毎に区切り、記録や遺物の取り上げを行った。しかし本報告書においては、構内座標に基づいた呼称で記述する。



図121 調査開始状況

4. 調査の概要

古墳時代（図122）

古墳時代の遺構は7層上面で前期の溝1条、6層上面で後期の溝1条をそれぞれ確認した。いずれも確認できた範囲がごくわずかでしかないが、東から西へ流れる可能性が考えられる。出土遺物は遺構・包含層ともに少なく、全体としては人的活動は比較的希薄であったことが窺える。

古代末～中世前半

（図122）

5層上面で、主として東西方向の溝6条、ピット4基、4層上面で木樁を伴う小規模な溝1条をそ

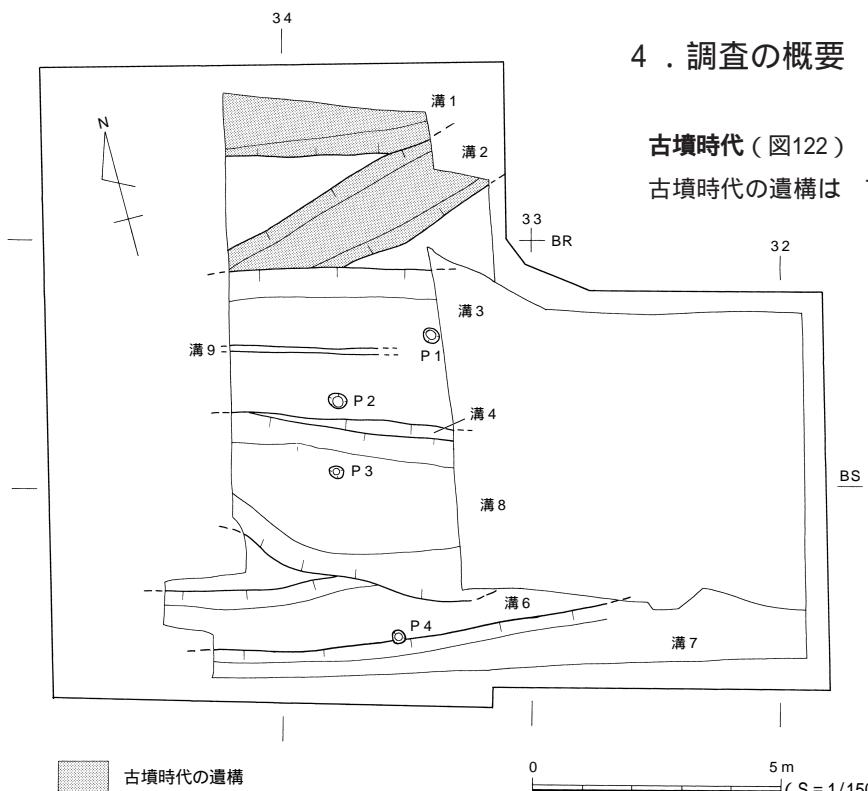


図122 検出遺構全体図

れぞれ検出した。

6条の溝は近接した位置に次々につくられており、特に溝3・4からの出土遺物が多い。遺物量からも、集落に近い地点と考えられるが、本調査地点内では居住域を示すものは確認されていない。近隣の既調査地点の成果では北側の第5次調査（管理棟）、南側の第9・11次調査地点（病棟）で、中世の集落の一部が確認あるいは推定されており、本調査地点は集落の縁辺部にあたるものと考えられる。

表5 第8次調査検出遺構一覧表

a. 溝

番号	時期	幅(m)	深さ(m)	底面高(標高m)	断面形	検出高(標高m)
溝1	古墳時代前期	1.8	0.4	0.5 - 0.58	皿形	1.0
溝2	古墳時代後期	1.9	0.4	0.45 - 0.5	皿形	1.2
溝3	古代末	4.0	0.5	0.8 - 0.85	皿形	1.2
溝4	古代末	2.4 - 3.7	0.4	0.8 - 0.85	皿形	1.25
溝5	中世前半	0.7	0.4	0.5	皿形	1.2
溝6	中世前半	1.2	0.4	0.8 - 0.9	皿形	1.2
溝7	中世前半	1.2	0.6	0.7	U字形	1.2
溝8	中世前半	3.1	0.3	0.95	皿形	1.25
溝9	中世後半	0.2	0.15	1.2	U字形	1.35

b. ピット

番号	時期	径(m)	深さ(m)	底面高(標高m)	検出高(標高m)
P1	中世	0.2	0.2	1.02	1.21
P2	中世	0.2	0.05	1.14	1.18
P3	中世	0.25	0.13	0.91	1.05
P4	中世	0.2	0.2	1.05	1.21

第2節 調査の記録

1. 調査地点の位置

本調査地点は鹿田キャンパスのほぼ中央に位置する（図123）。

鹿田地区構内に設定した構内座標に基づく表記ではBP～BS・32～34区にあたる。中央診療棟の西南角に位置し、東側には臨床講義棟が位置する。大正11年以降昭和3年頃の岡山医科大学平面図によると、本地点に病棟関連の建物が建設されていたが、戦後に作成された平面図によると、昭和20年調査以降、調査前には空き地となっていた。

2. 層序

本調査地点では、造成土以下、12層までの堆積状況を確認した。以下に本調査地点の土層について記述する（図124）。

1層：1917（大正6）年以降、現代までの造成土である。旧建物の現地表面は標高2.2～2.3mである。

2層：暗灰色砂質土で、やや粘性を帯び、しまりはない。上面のレベルは標高1.66mである。調査区のごく一部

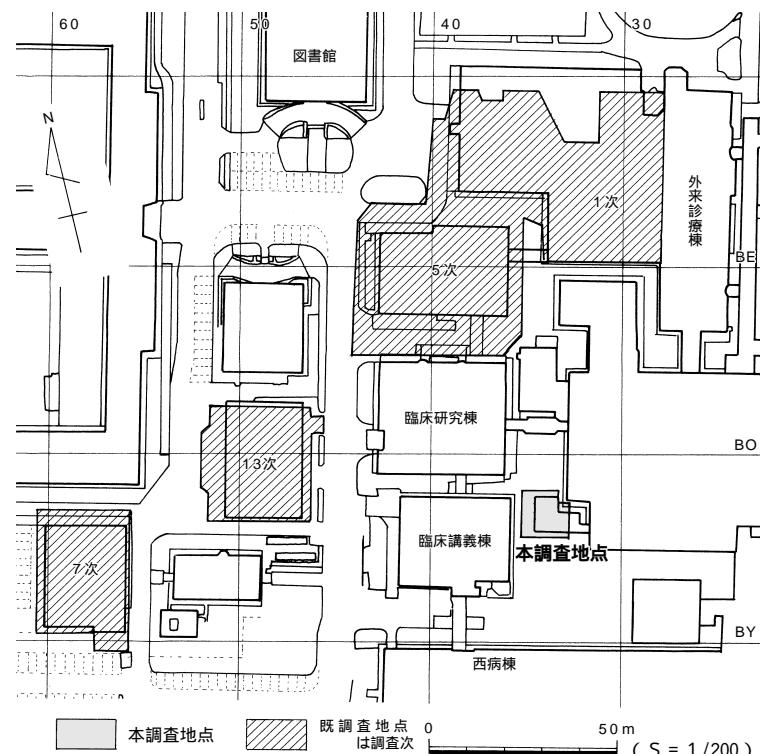


図123 調査地点位置図

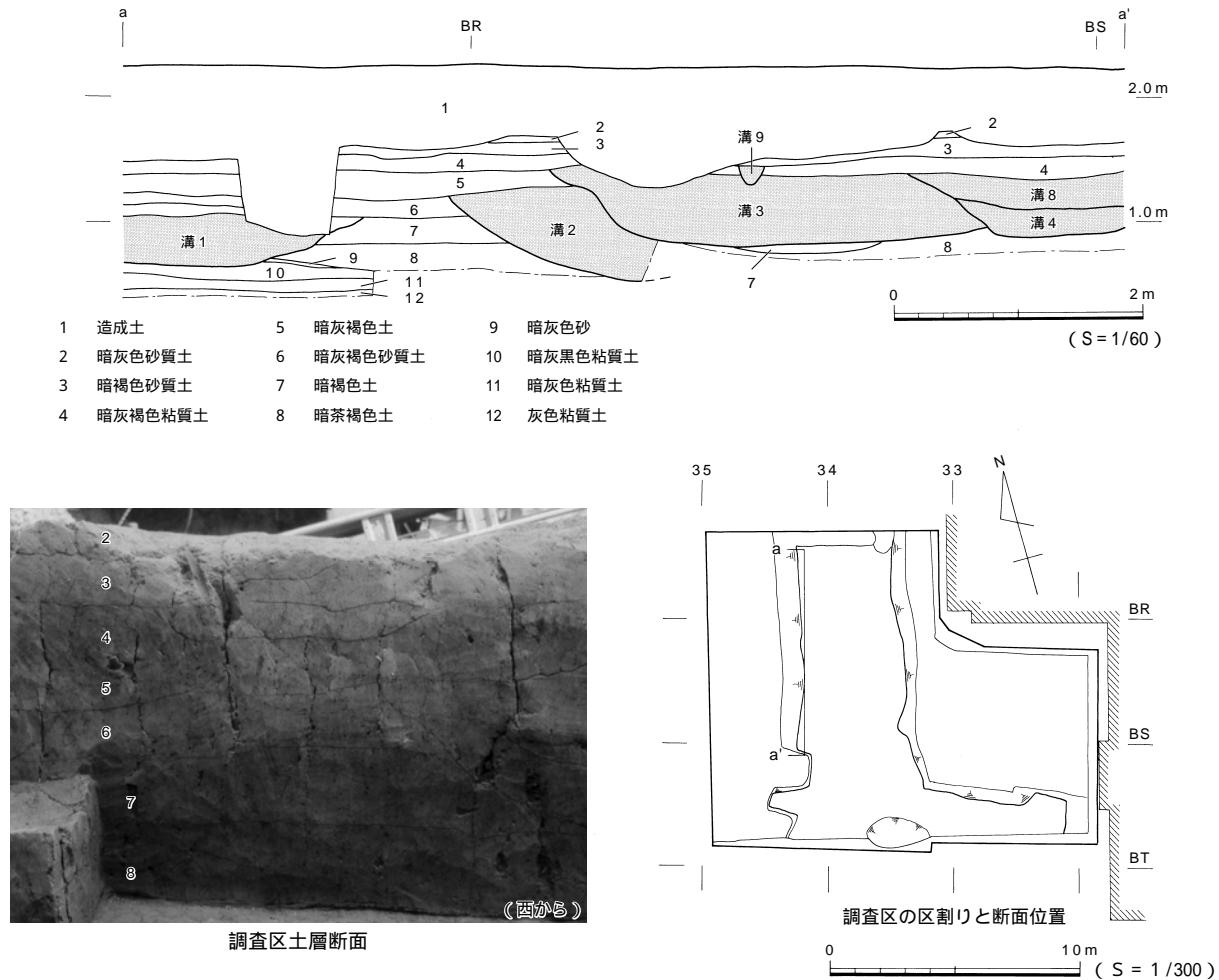


図124 調査区の区割りと土層断面

で確認されたのみで、本来の層厚は不明である。近代耕土層にあたるものと考えられる。出土遺物には染付皿・椀、磁器猪口の小片10数点がみられる。

3層：暗褐色砂質土で、鉄分が僅かに沈着する。上面のレベルは標高1.61mである。調査区南端の一部では、しまりの強弱によって、a・b層に細分できる。3b層は3a層よりもしまっている。近世層にあたる。出土遺物としては陶磁器の小片数点がみられる。

4層：暗灰褐色粘質土で、土器片・焼土・炭化物を含む。上面のレベルは標高1.40～1.53mである。中世堆積層にあたり、須恵器甕・備前焼擂り鉢の破片のほか、瓦片、土師質土器椀の小片多数等13号ポリ袋4袋の遺物が出土した。

5層：暗灰褐色砂質土で、ややしまりがある。鉄分・茶色粒を少し含む。上面のレベルは標高1.33～1.38mである。須恵器甕10片、土師質土器椀の小片多数等13号ポリ袋で3袋の遺物が出土した。中世と考えられる。

6層：暗灰褐色砂質土で、5層より暗く、砂質が増す。古墳時代後期の遺構検出面である上面のレベルは標高1.18mである。出土遺物はごくわずかに土師質土器の小片が認められた。

7層：暗褐色土で、茶色粒子・鉄分を僅かに含む。上面のレベルは標高1.13mである。古墳時代前期の土器を出土している。

8層：暗茶褐色砂質土で、無遺物層である。上面のレベルは標高0.83mである。

- 9層：暗灰色砂で、やや黒みを帯びる粘質土が混ざる。無遺物層である。上面のレベルは標高0.68mである。
- 10層：暗灰黑色粘質土で、無遺物層である。上面のレベルは標高0.58~0.68mである。
- 11層：暗灰色粘質土で、無遺物層である。上面のレベルは標高0.53mである。
- 12層：灰色粘質土であるが、鉄分が上部にしみこみ、黄褐色を帯びる。無遺物層である。上面のレベルは標高-0.42mである。

3. 古墳時代の遺構と遺物

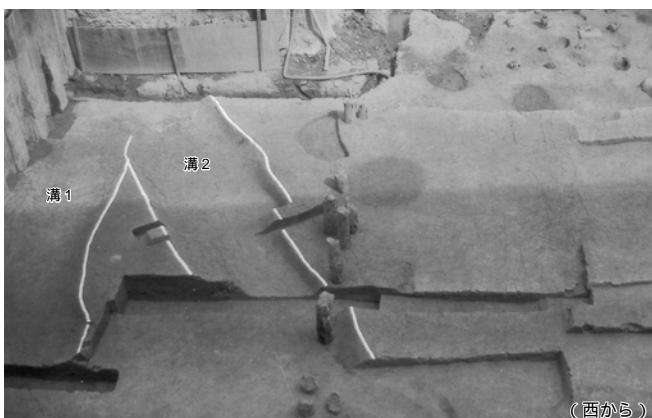
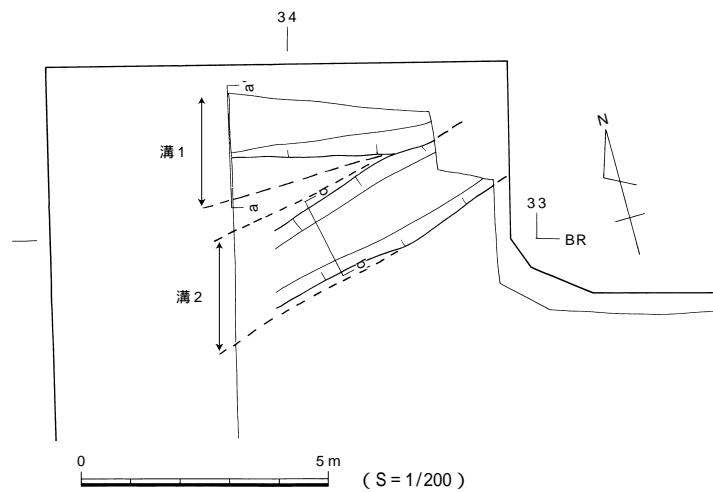
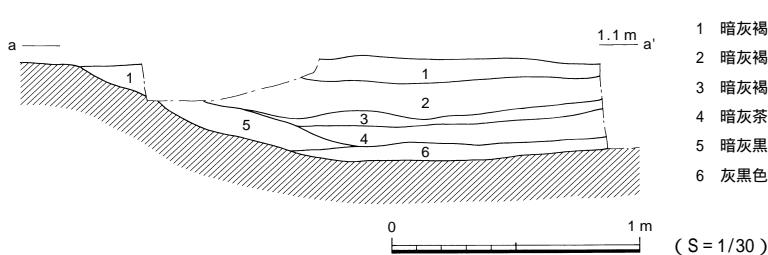
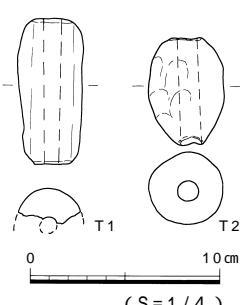


図125 古墳時代遺構全体図

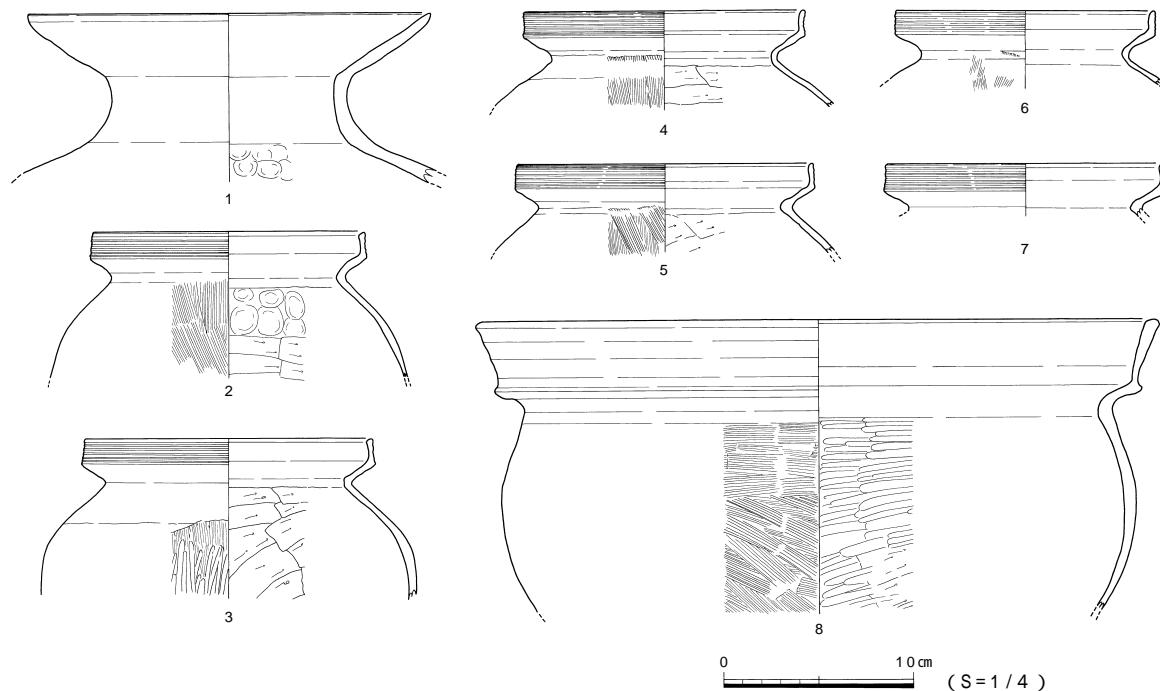


- 1 暗灰褐色砂質土
- 2 暗灰褐色弱粘質土
- 3 暗灰褐色弱粘質土
- 4 暗灰茶褐色粘質土(鉄分沈着)
- 5 暗灰黑色砂質土
- 6 灰黑色砂質土



番号	種類・器種	法量(cm・g)			形態・手法他	胎土	色調: 内面/外
		最大径	長さ	重量			
T 1	土錘	(3.5)	7.7	(68.5)	管状土錘、ナデ、穿孔径0.7~1.0m、1/2残存	細砂	淡黄橙褐
T 2	土錘	4.0	5.7	79.8	管状土錘、押圧、一部黒斑	細砂	淡橙灰

図126 溝1・出土遺物(1)



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師器・壺	21.2	-	-	(口～頸)横ナデ(内)籠削り(外)ナデ、剥落頸著、1/5残存	細砂	黄橙茶褐/明橙茶褐
2	土師器・甕	14.2	-	-	(口)横ナデ・櫛描沈線7～8条(内)籠削り・押圧(外)ハケ、1/5残存	細砂	黄橙茶褐/橙茶褐
3	土師器・甕	15.0	-	-	(口)横ナデ・櫛描沈線6～7条(内)籠削り(外)縦八ヶ後籠磨き・煤付着、1/6残存	粗砂	黄橙茶褐/橙茶褐
4	土師器・甕	14.6	-	-	(口)横ナデ・櫛描沈線7条(内)籠削り(外)縦八ヶ、1/5残存	粗砂	淡橙茶褐/淡橙茶褐
5	土師器・甕	15.4	-	-	(口)横ナデ・櫛描沈線7条(内)籠削り(外)縦八ヶ、1/5残存	細砂	淡黄橙灰/淡黄橙茶灰
6	土師器・甕	13.5	-	-	(口)横ナデ・櫛描沈線5条(内)籠削り(外)縦八ヶ：不明瞭、1/6残存	粗砂	橙茶褐
7	土師器・甕	14.4	-	-	(口)横ナデ・櫛描沈線7条(内)籠削り(外)縦八ヶ・一部煤付着、1/8残存	粗砂	橙茶褐
8	土師器・鉢	35.4	-	-	(口)横ナデ(内)横方向籠削り後籠磨き(外)横八ヶ・斜めハケ、1/3残存	細砂	黄橙茶褐/橙茶褐

図127 溝1・出土遺物(2)

西端で0.5mである。ごく一部の検出のため、走行方向は不明である。埋土はしまりや混入物の多寡により6枚に分けられる。最下層の5・6層は砂質であることから、流量が多い状況が窺える。その後4・3層が堆積した後に、少なくとも一度以上溝さらえを行いながら使用されており、粘質土が主体となることから流れは停滞気味であったとみられる。

本溝からは土師器甕を中心にコンテナ1箱(約28ℓ)の遺物が出土し、うち8点を図127に示した。甕6点、壺・鉢各1点である。その他に土錐2点が出土している(図126、図版13)。

本溝の時期は、古墳時代前期と考えられる。

溝2(図128)

BQ・BR33・34区に位置する。検出面は6層上面である。検出レベルは標高1.2m、推定幅1.9mで、検出面からの深さは0.4mである。断面

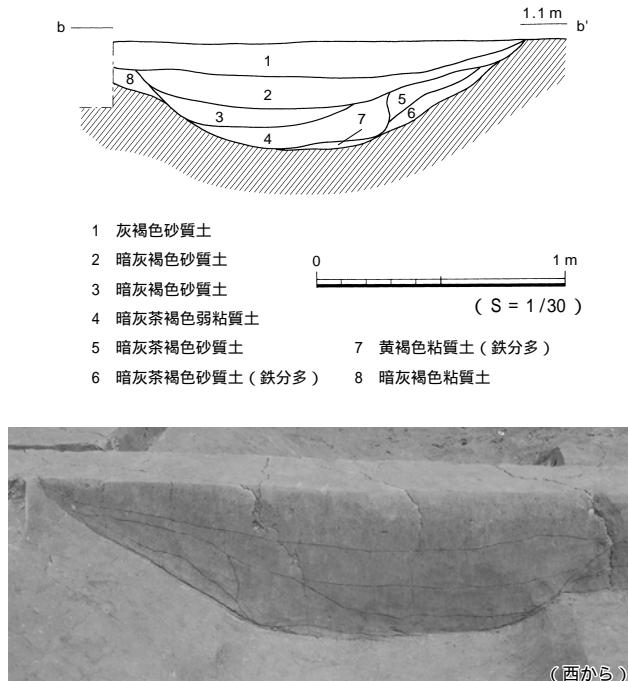
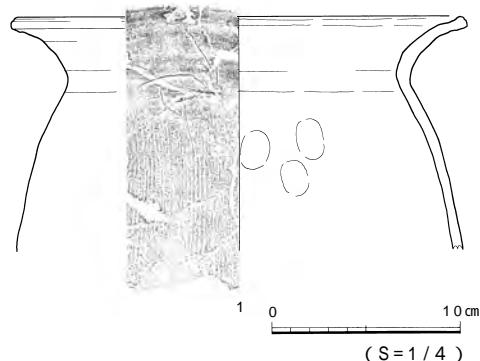


図128 溝2

形は皿形を呈する。底面のレベルは東端で0.45m、西端で0.5mである。検出した長さは短いが、この範囲では北東から南西へ流れていると考えられる。埋土は8枚に分けられ、流れとしては三段階が想定される。古段階は、5・6層の砂質土を底とする時期、中段階は4層、暗灰褐色粘質土を底とする時期である。新段階は2・3層（暗灰褐色砂質土）の堆積段階である。

本溝からはコンテナ1/2箱（約28ℓ）の遺物が出土したが、図化可能なものは図129の甕1点のみであった。この甕は古墳時代後期のものであり、その他に須恵器甕の胴部片等も出土していることから、本溝の時期については古墳時代後期と考えられる。



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師器・甕	23.4	-	-	(口)横ナデ(内)ナデ・押圧(外)縦ハケ、1/5残存	細砂	橙茶褐/黄橙茶褐

図129 溝2出土遺物

4. 古代末～中世の遺構と遺物

古代末～中世の遺構として溝7条・ピット4基を検出した。これらは、5層・4層上面での検出であり、前者の時期としては古代末～中世前半に、後者は中世後半と考えている。

古代末～中世前半の遺構として溝6条、ピット4基を検出した（図130）。6条の溝はBRライン～BTライン間にほぼ東西方向に走行するもので、溝3・溝4・溝6・溝8、溝5・溝6・溝7と切り合い関係をもって、次々と作られている。その時期は12世紀半ばから13世紀前半である。これらの溝の中でも、溝3・4からの出土

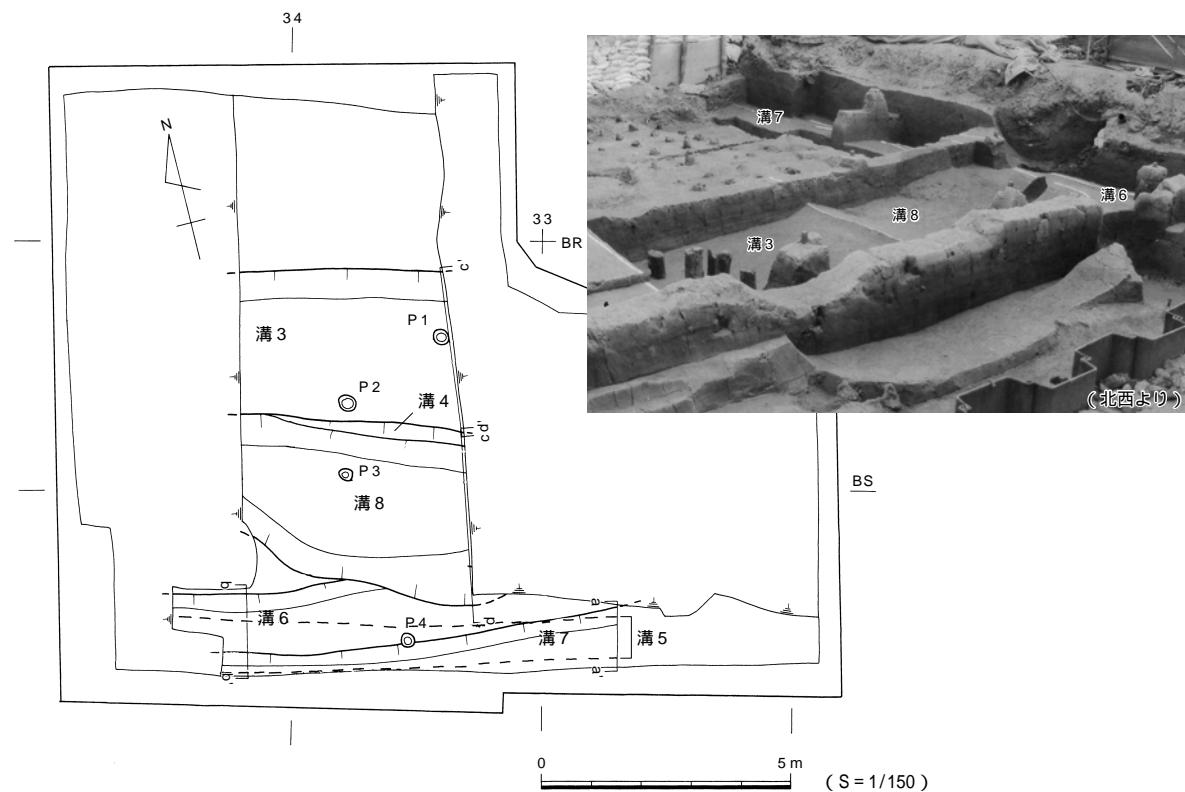


図130 古代末～中世遺構全体図

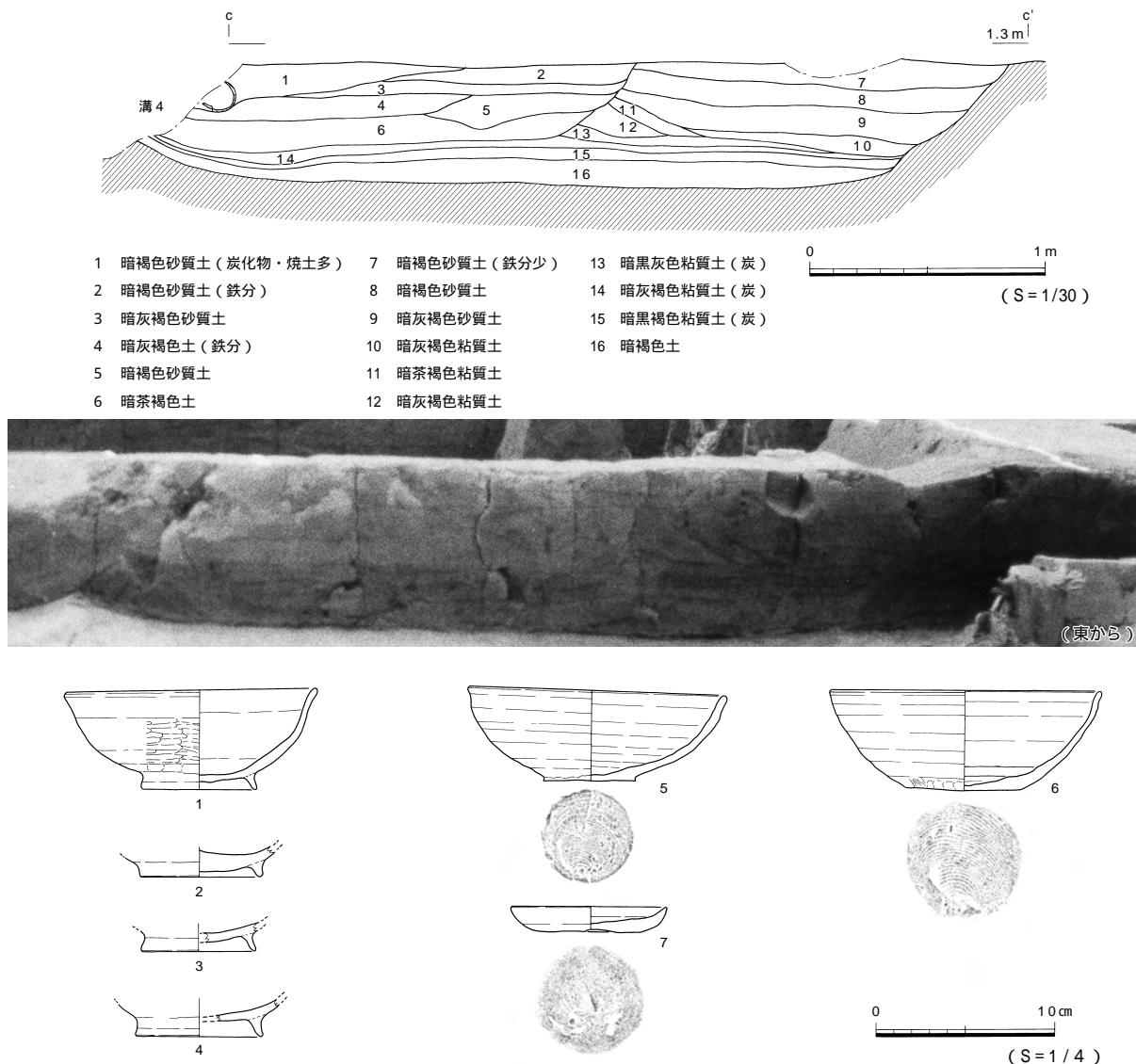
第8次調査 (RI治療室)

遺物が非常に多く、本調査地点の出土遺物のほぼ8割を占めている。ピット4基はこれらの溝を切ってつくられている。ピットはいずれも径0.2m、深いものでも深さ0.2mと残りが悪く、調査範囲内では配列の規則性を見いだすことはできなかった。出土遺物はなかったが、溝との関係から13世紀後半以降のものと考えられ、溝が埋設した後、何らかの建物が造られるというように、本調査地点付近の土地利用に変化を認めることができる。

a. 溝

溝3 (図131 図版12・13)

調査区の中央、BR33・34区に位置する、ほぼ東西方向に走行する溝である。南端は溝4によって切られている。検出面は 5層 上面である。検出レベルは標高1.2m、推定幅約4mで、検出面からの深さは0.5mである。



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	14.2	6.2	5.5	(内)ナデ後一部箇磨き(外)ナデ後箇磨き(口)横ナデ(底)押圧、2/3残存	微砂	淡白灰/白灰
2	土師質・椀	-	6.1	-	ナデ	細砂	黄白灰/淡黄白灰
3	土師質・椀	-	*6.4	-	ナデ、1/2残存	微砂	乳白
4	土師質・椀	-	*6.9	-	ナデ、1/2残存	微砂	黄灰/白灰
5	須恵器・椀	14.6	5.2	5.0	横ナデ(底外)糸切り、口縁部に重ね焼き痕暗灰色、3/4残存、「東播系」	微砂	灰/灰
6	須恵器・椀	15.3	6.4	5.6	横ナデ(底外)糸切り、口縁部に重ね焼き痕暗青灰色、2/3残存、「備前」	細砂	黄灰/白灰
7	土師質・皿	8.1	5.8	1.4	ナデ・一部押圧(底外)箇切り	細砂	淡橙茶褐

図131 溝3・出土遺物

断面形は皿形を呈する。底面のレベルは東端で0.85 m、西端で0.8 mである。埋土は16枚に分けられ、堆積状況から、当初幅4 m程の溝として流れていた時期があり、14~16層はその時の堆積土と考えられる。その後幅2 m程の溝として機能した、合計2回の流れが認められる。古段階が北寄りの流路であり、7~13層がこの溝の埋土である。このうち下半(10~13層)には暗灰褐色系の粘質土、上半(7~9層)には暗褐色砂質土が認められる。新段階は南寄りの流路であり、1~6層が埋土にあたる。いずれも暗褐色~暗灰褐色を呈する砂質土である。本溝は溝6にも南側を壊されており、また本溝の南肩を壊して後述の溝4がつくられていることから、溝の位置を少しずつ南側へずらしていくという傾向が窺える。このことから何度も掘り替えながらもこの位置に溝をつくることに意味があると考えられ、区画溝としての機能が想定される。

本溝からはコンテナ1箱(約28ℓ)の遺物が出土した(図131 図版12・13)。そのうち、土師質土器椀(1~4)・皿(7) 須恵器椀(5・6)を図131に掲載した。土師質土器椀は器高5.5 cmと深く、大ぶりなものである。須恵器椀のうち5は胴部から底部への屈曲部にわずかに段をもつ。その他に5・6の須恵器椀には 色調、胎土、重量、底径の点で異なる。5は灰色を呈し、器表面がきめ細やかで、器壁が厚く重量感がある。底径は5.2 cmを測る。産地としては東播系と考えられる。6は白灰色を呈し、器表面にざらつきがあり、薄手のつくりである。底径は6.4 cmと5よりも大きい。確定はできないが産地としては備前の可能性が考えられる。

これらの遺物から本溝の時期は12世紀代前半~半ばと考えられる。

溝4(図132~134 図版12・13)

調査区の中央、BR・BS 33・34区に位置する、ほぼ東西方向の溝である。検出面は 5層 上面である。検出レベルは標高1.25 m、推定幅は東端で3.7 m、西端で3.0 mである。検出面からの深さは0.4 mである。断面形は皿形を呈する。底面のレベルは東端で0.8 m、西端で0.85 mである。

溝4は発掘調査時点では一つの溝として掘り下げた。切りあい状況と出土遺物とを考え併せ、上層(1~3層)と下層(1~5層)を別の溝として、下層溝を溝4、上層溝を溝8として報告する。

溝4の埋土として1~5層の5枚を確認した。2層以下には主に暗褐色系の粘質土が堆積し、特に下半には鉄分の沈着が目立つ。1層は暗灰褐色を呈する砂質土で、炭・焼土を多く含み、特に遺物が多く含まれる。

本溝は、前述の溝3の南端を切ってつくられ、南端を後述する溝6に切られ、さらに上半に溝8が重複している。基本的には東西方向の流れであり、後述する出土遺物の豊富さから集落に近い位置にあたっていると考えら

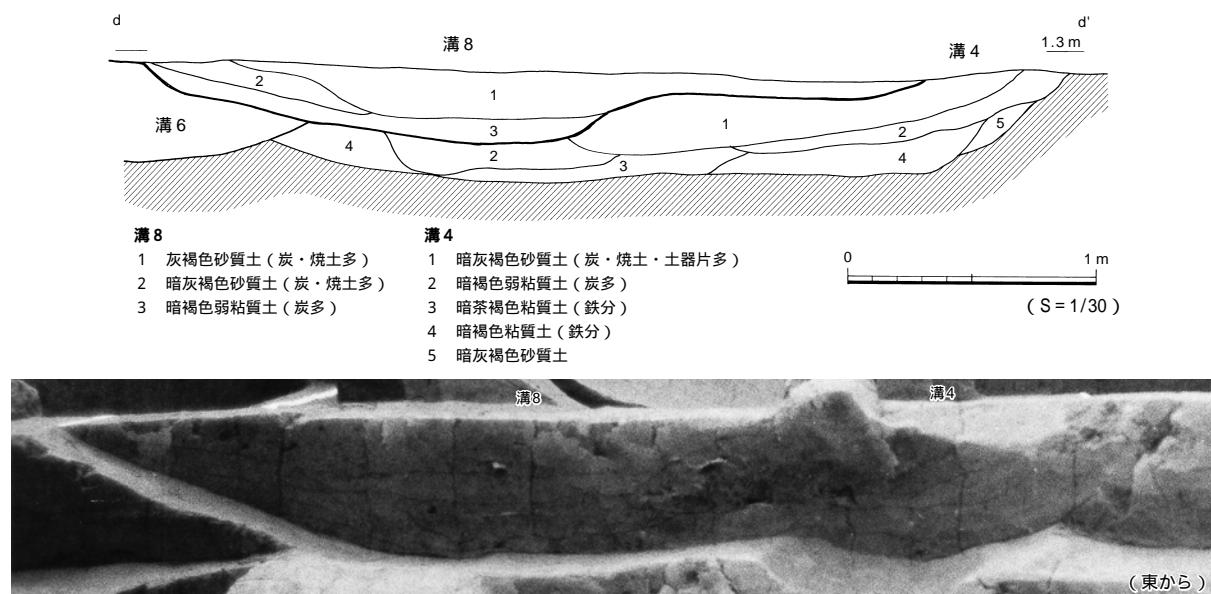
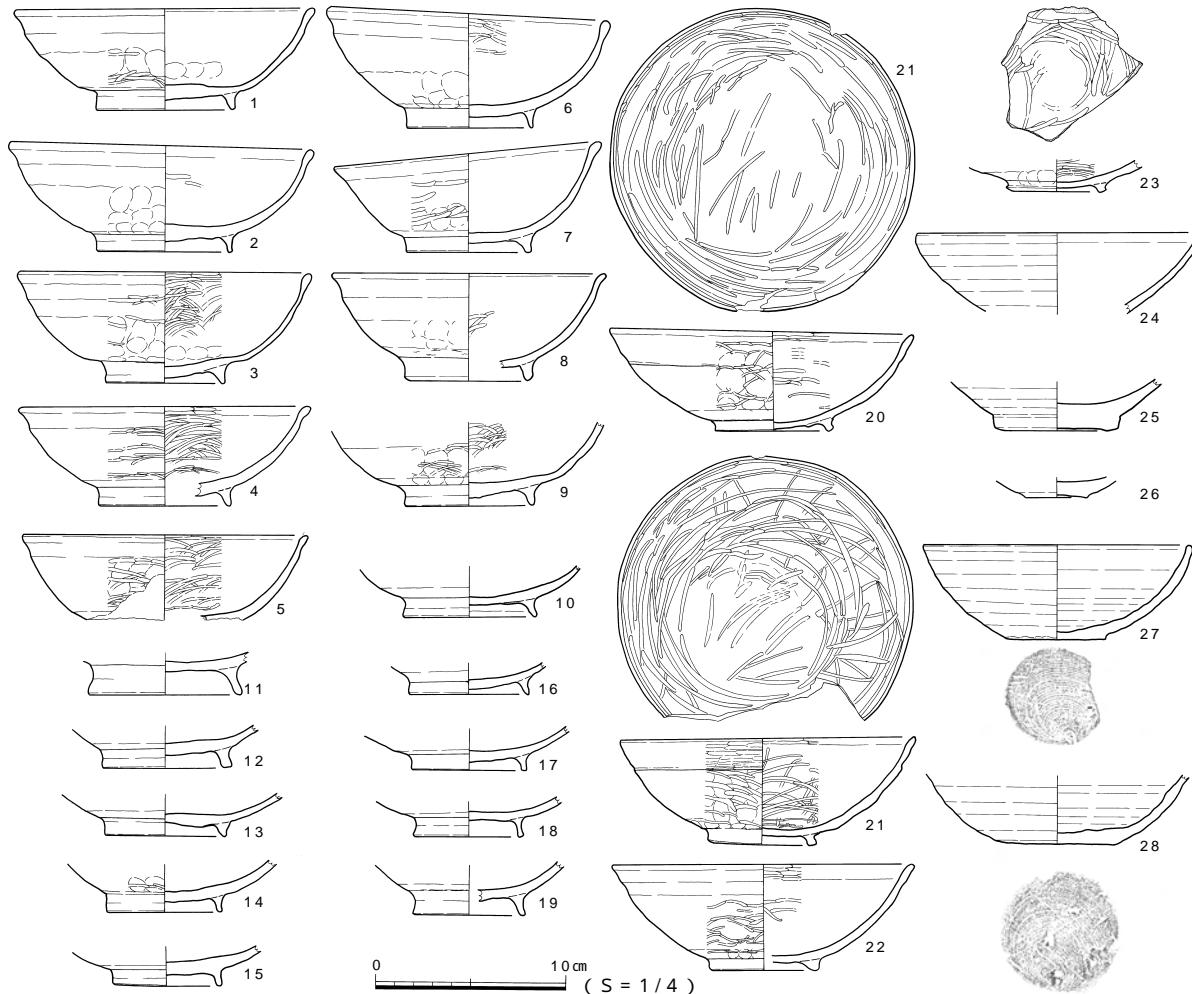


図132 溝4・8 土層断面



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	*15.9	7.2	5.3	(内) 丁寧なナデ・底部押圧(外) 押圧後一部籠磨き(口) 横ナデ、1/2残存	微砂	淡灰白
2	土師質・椀	15.8	6.8	5.6	(内) ナデ(外) 押圧後ナデ(口) 横ナデ(底) 押圧、2/3残存	微砂	淡黄白灰
3	土師質・椀	*15.6	6.3	5.9	(内) ナデ後籠磨き(外) ナデ後一部籠磨き(底) 押圧、1/2残存	微砂、精良	淡黄灰/乳灰白
4	土師質・椀	*15.4	6.9	5.3	(内) 丁寧な籠磨き(外) 粗い籠磨き、一部剥落、二次的変色、1/3残存	細砂	白橙灰/暗茶褐
5	土師質・椀	*15.1	-	-	(内) 篦磨き(外) 押圧後籠磨き、二次的変色、2/5残存	微砂、精良	乳白
6	土師質・椀	14.7	6.5	6.1	(内) 丁寧なナデ後一部籠磨き、重ね焼き痕(外) 押圧・ナデ	細砂	白黄灰/乳白
7	土師質・椀	14.2	6.3	5.3	(内) 丁寧なナデ(外) ナデ後一部籠磨き、2/3残存	微砂、精良	淡黄灰
8	土師質・椀	*15.1	6.6	5.6	(内) ナデ後一部籠磨き(外) ナデ・下半押圧(口) 横ナデ、1/6残存	細砂	灰白
9	土師質・椀	-	6.8	(4.4)	(内) ナデ後籠磨き・重ね焼き痕(外) 押圧後粗い籠磨き、口縁欠損	微砂	白灰
10	土師質・椀	-	6.9	-	(内) ナデ・底部押圧(外) ナデ、底部のみ完存	微砂、精良	淡茶灰/白灰
11	土師質・椀	-	*7.9	-	ナデ、1/3残存	細砂	淡茶褐/橙茶褐
12	土師質・椀	-	6.2	-	(内) 一部押圧後ナデ(外) ナデ、底部のみ完存	微砂	白灰
13	土師質・椀	-	6.2	-	(内) ナデ・重ね焼き痕(外) ナデ・底部押圧、底部のみ完存	微砂	乳白/淡茶灰
14	土師質・椀	-	5.8	-	(内) ナデ・底部押圧(外) 押圧後一部ナデ、底部のみ完存	微砂、精良	茶白
15	土師質・椀	-	5.5	-	ナデ、底部のみ完存	微砂	淡茶灰/淡茶・黒
16	土師質・椀	-	6.2	-	(内) 押圧後ナデ・重ね焼き痕(外) ナデ・底部押圧、底部のみ完存	微砂	黑褐/淡黄灰
17	土師質・椀	-	5.9	-	(内) ナデ(外) ナデ・底部押圧、底部のみ完存	微砂、精良	淡茶灰/茶灰
18	土師質・椀	-	5.4	-	ナデ(底) 押圧・ナデ、底部のみ完存	微砂	淡白灰/淡黄灰
19	土師質・椀	-	5.7	-	(内) ナデ・重ね焼き痕(外) ナデ、底部のみ完存	微砂	黄灰白
20	瓦・器・椀	15.7	5.2	5.7	(内) 篦磨き・底部摩滅・使用痕(外) 押圧後や粗い籠磨き	微砂	暗灰褐・暗灰/暗灰褐
21	瓦・器・椀	16.0	5.7	5.3	(内) 篦磨き・一部摩滅・底部は使用痕(外) 押圧後密な籠磨き、3/4残存	微砂	黑灰
22	瓦・器・椀	*16.0	*5.7	5.6	(内) 粗い籠磨き(外) 押圧後粗い籠磨き、二次的被熱、1/3残存	微砂、精良	暗灰/灰
23	瓦・器・椀	-	4.6	-	(内) 篦磨き(外) ナデ・押圧、底部のみ完存	微砂、精良	黑灰/淡灰灰・一部黄灰
24	白・磁・碗	*14.6	-	-	(内) 横ナデ・全面施釉(外) 下方の一部は露胎、1/6残存	微砂、精良	白灰・釉/灰白
25	白・磁・碗	-	6.5	-	(内) 施釉・使用により摩滅(外) 露胎?・籠削り(底) 削りだし、2/3残存	微砂、精良	淡白灰・釉/灰白
26	白・磁・皿	-	*3.3	-	(内) 貫入(外) 露胎・籠削り(底) 削りだし、1/2残存	精良	灰白・釉/淡綠灰白
27	須恵器・椀	*14.0	*5.3	5.0	横ナデ(底外) 糸切り、1/2残存、「東播系」	微砂	淡黄灰
28	須恵器・椀	-	*5.8	3.7	横ナデ(底外) 糸切り・籠記号「×」、1/5残存、「備前」	細砂	黄白灰/茶灰褐

図133 溝4出土遺物(1)

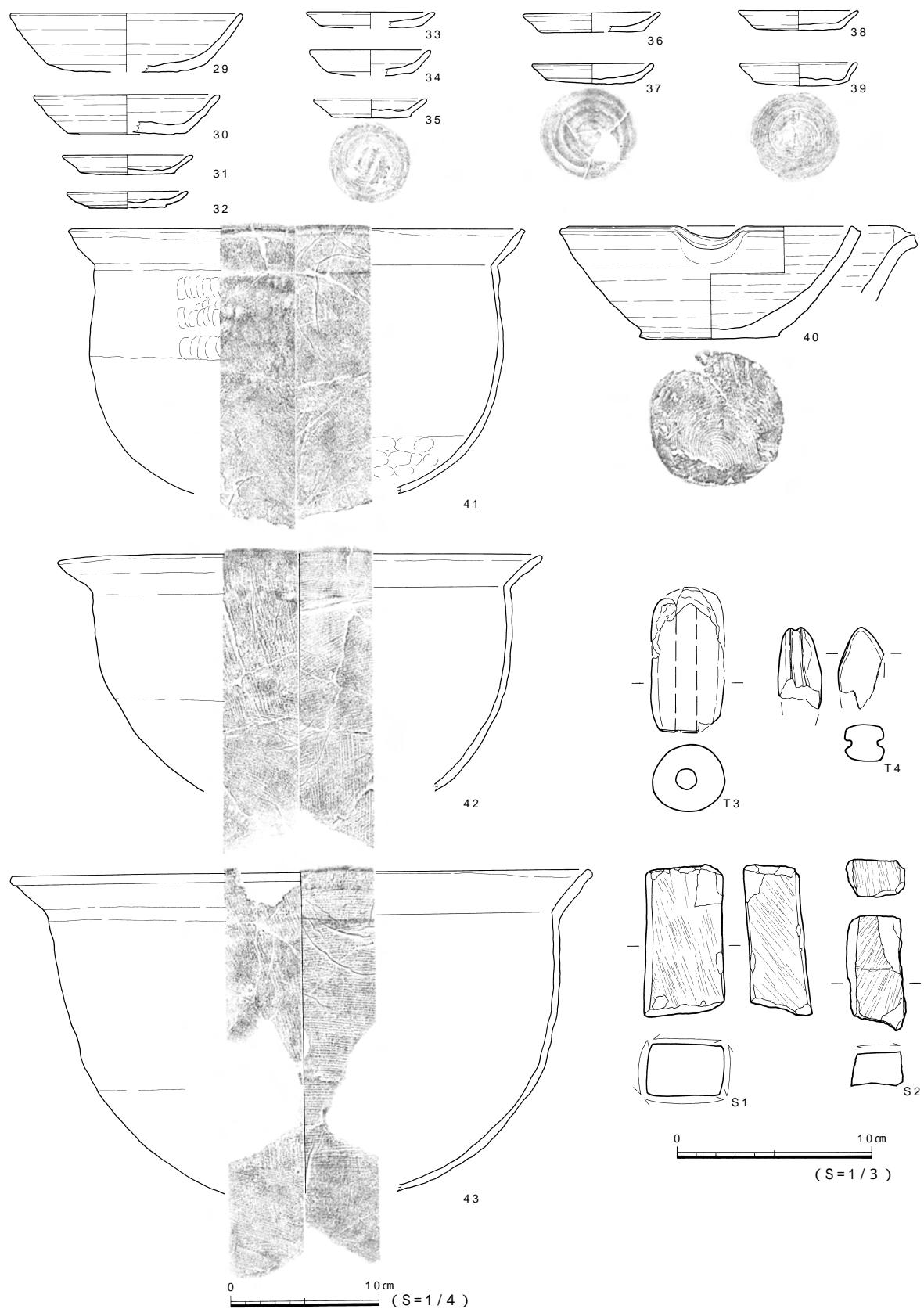


図134 溝4出土遺物(2)

第8次調査(RI治療室)

番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調: 内面/外面
		口径	底径	器高			
29	土師質・杯	* 15.7	* 10.5	3.9	横ナデ、(底内) 横ナデ後ナデ(底外) 篦切り、一部摩滅、1/5残存	微砂	淡黄橙白/茶灰褐
30	土師質・杯	* 12.5	* 8.1	2.7	横ナデ、(底内) 横ナデ後ナデ(底外) 篦切り、1/3残存	細砂	淡橙白/淡橙灰
31	土師質・皿	* 8.8	* 6.4	1.3	横ナデ、(底内) 横ナデ後ナデ(底外) 篦切り後ナデ、3/5残存	微砂	暗茶褐/黄茶灰
32	土師質・皿	* 8.1	* 5.2	1.1	横ナデ、(底外) 篦切り後粗いナデ、1/4残存	微砂	淡橙白灰/淡橙白灰
33	土師質・皿	* 8.0	* 5.7	1.3	横ナデ、(底内) 横ナデ後ナデ(底外) 篦切り後粗いナデ、1/4残存	微砂	淡黄灰/淡黄色灰
34	土師質・皿	* 8.7	* 6.9	1.1	横ナデ、(底外) 篦切り後ナデ、1/3残存	微砂	橙茶褐/橙茶褐
35	土師質・皿	8.2	5.8	1.8	横ナデ、(底内) 横ナデ後ナデ(底外) 篦切り後ナデ	微砂	黄橙灰
36	土師質・皿	* 7.7	* 5.3	1.4	横ナデ、(底内) 横ナデ後ナデ(底外) 篦切り後ナデ、1/3残存	微砂	淡黄白灰/黄白灰
37	土師質・皿	9.2	6.8	1.3	横ナデ、(底外) 篦切り後ナデ	細砂	淡橙茶褐/黄茶褐
38	土師質・皿	* 8.3	* 6.0	1.4	横ナデ、(底外) 篦切り後丁寧なナデ、1/3残存	精良	淡黄茶灰/明澄茶灰
39	土師質・皿	8.0	6.4	1.6	横ナデ、(底内) 横ナデ後ナデ(底外) 篦切り後粗いナデ	微砂	淡白黄灰/淡灰
40	須恵器・片口鉢	19.1	9.5	7.8	(内) 上半: ハケ後ナデ・下半: 斜めハケ・底部押圧(外) 上半: 押圧・下半: 斜め (内) 横ハケ・底は縦ハケ(外) 押圧・ハケ: 上半は縦で下半は斜め方向、下方は被熱、底部欠損	細砂	淡青灰/灰
41	土師質・鍋	* 30.6	-	-	(内) 上半: ハケ後ナデ・下半: 斜めハケ・底部押圧(外) 上半: 押圧・下半: 斜め ハケ・煤(口)ナデ、1/2残存	細砂、砂粒	茶褐/暗茶褐
42	土師質・鍋	32.4	-	-	(内) 横ハケ・底は縦ハケ(外) 押圧・ハケ: 上半は縦で下半は横方向・煤、1/3残存	細砂	淡黄褐/暗茶褐・墨茶褐
43	土師質・鍋	* 39.0	-	-	(内) 横ハケ・底部は縦位(外) 押圧・ハケ: 上半は縦で底部は横方向・煤、1/3残存	細砂	明黄茶褐/暗茶褐

番号	種類・器種	法量(cm・g)			形態・手法他	胎土	色調: 内面/外面
		最大径	長さ	重量			
T 3	土錘	3.7	7.4	86.3	管状土錘、ナデ、表面の剥落激しい、穿孔径1.1cm、黒斑	微砂	淡橙茶褐
T 4	土錘	1.9	(3.6)	(17.2)	有溝土錘、ナデ、両側縁に溝をつける、下半欠損	微砂	橙茶褐

番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	重量(g)	石材
		長さ	幅	厚さ			
S 1	砥石	(8.3)	4.0	2.6	4面全てに使用痕、摩滅・線状痕あり、下端欠損	181.7	流紋岩
S 2	砥石	6.0	2.6	1.8	正面と上端面に使用痕、摩滅・線状痕明瞭	50.4	粘板岩

れる。

本溝からはコンテナ3箱(約28ℓ)の遺物が出土した(図133・134、図版12・13)。狭小な調査面積を考慮すると、非常に濃密な出土量である。これらの遺物は溝8と同時に掘っているが、出土位置からその大半は1層からの出土と推定できる。内容をみると、土師質土器碗・杯・皿・鍋・竈等、須恵器碗・擂り鉢・甕、瓦器碗があり、その他に土錘・砥石が出土している。土師質土器碗には口径14.2~15.9cmのものが見られる。1~4は、器高5.3~5.9cmと深く、丁寧な磨きが残り、口径15.4cm以上の大振りなものである。皿は口径7.7~9.2cmのものが見られ、8cm前後のものが主体である。瓦器碗は4点を掲載している。20・21は和泉型瓦器碗で、20は口径15.7cm、21は口径16.0cmである。磨きは一部が摩滅により見えにくくなっているが密に入っている。和泉型 - 2期にあたるものと考えられる。須恵器の碗は2点出土している。27は器表面がきめ細やかで、重量感のある特徴から、東幡系と考えられる。対して28は表面にざらつきがあり、薄手のつくりであるなど、産地としては備前の可能性が考えられる。須恵器片口鉢は東播系と考えられ、東播期 - 2にあたるものであろう。

これらの遺物の特徴から、溝4の時期は12世紀前半~半ばと考えられる。須恵器碗に東播系と備前産のものが両方みられるなど、溝3出土遺物との類似点が多く、溝3・4は近接した時期であろう。

溝5(図135)

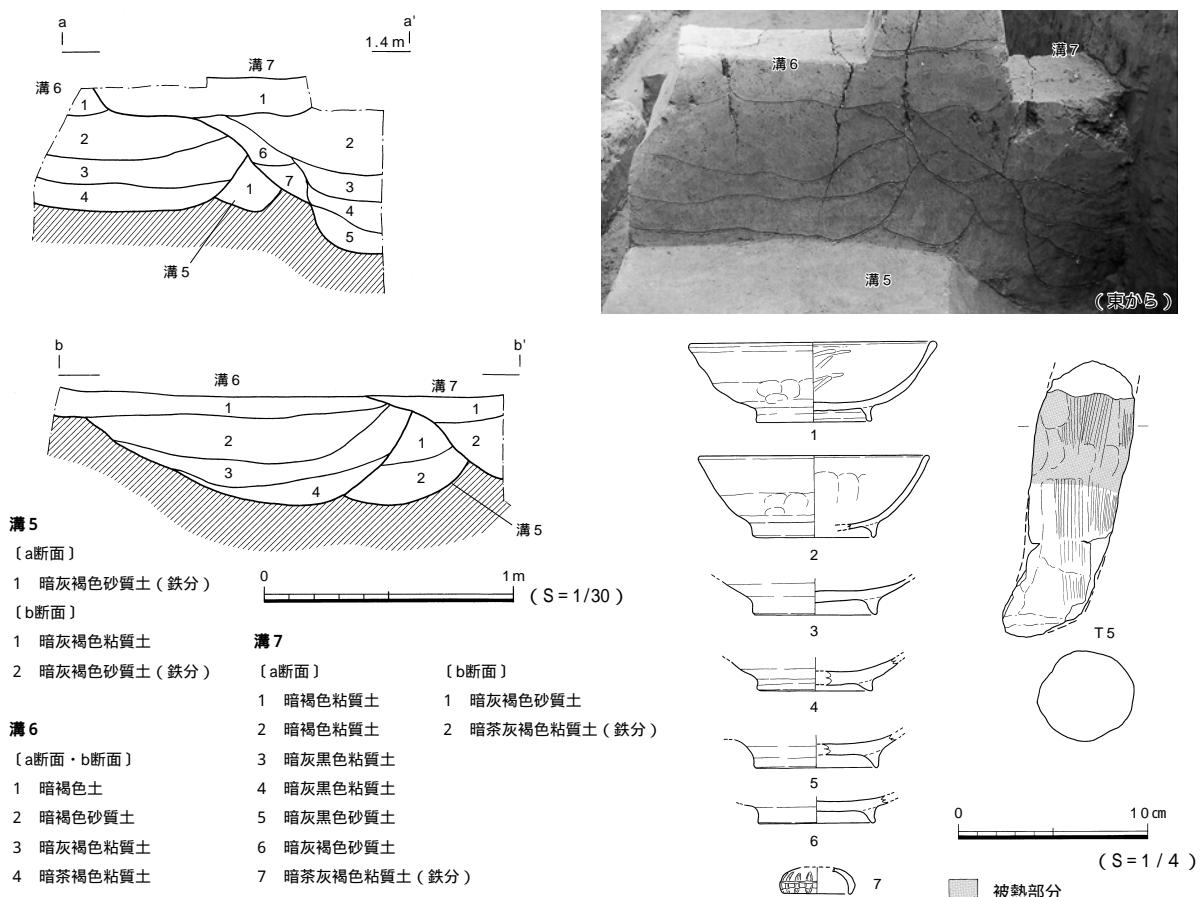
調査区の南端、BS33・34区に位置する。ほぼ東西方向に走行する。両側を後述する溝6・7によって壊されており本来の幅の推定は困難である。深さは0.4mが残り、底面のレベルは東端で0.5m、西端で0.6mである。長さ7m程の検出であるが、その中で10cmの高低差となると、西から東への流れを推定できる。断面形は皿形を呈する。埋土は多いところで2枚に分けられる。主体となるのは暗灰褐色を呈する砂質土層である。出土遺物には焼けた石がわずかに認められるのみである。

出土遺物がなく時期の確定は困難であるが、溝5・6との位置・方向・形態の類似から、本溝の時期も古代末~中世前半、12世紀後半~13世紀と考えている。

また溝5~7は一部で重複している箇所があり、調査当初に分離せずに掘り下げた部分がある。そこからの出土遺物として、図135-7の青白磁が出土している(図版13)。合子の蓋と考えられる小片で、蓋外面には花弁状の刻みが施される。天井部は欠失しているため文様の有無は不明である。この青白磁合子については、確定はできないものの、溝5の遺物である可能性が高く、時期は矛盾しないものと考えている。

溝6(図135)

調査区の南側、BS33・34区に位置する溝で、南西~北東方向に走行する。南側は後述する溝7によって切ら



番号	種類・器種	出土遺構	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
			口径	底径	器高			
1	土師質・椀	溝7	*13.1	*5.9	4.3	(内)ナデ後一部箇磨き(外)ナデ・押圧、1/2残存	微砂	乳白
2	土師質・椀	溝7	*12.2	*6.2	4.4	ナデ・押圧、1/5残存	微砂	黄灰白/橙灰白
3	土師質・椀	溝7	-	*6.3	-	ナデ、重ね焼き痕、高台1/2残存	微砂	暗茶白/茶白
4	土師質・椀	溝7	-	*6.2	-	ナデ、高台部1/3残存	微砂	黄灰白/黄灰白
5	土師質・椀	溝6	-	*6.0	-	ナデ、高台部1/2残存	微砂	乳白/淡橙灰白
6	土師質・椀	溝6	-	*6.4	-	ナデ、高台部1/2残存	微砂	茶灰/淡茶灰
7	青白磁・合子蓋	溝5・7	*3.6	-	*1.5	(内)横ナデ・露胎(外)花弁状の刻み・上面部施文の有無は不明	精緻	黄白(釉)淡青白

番号	種類・器種	出土遺構	法量(cm)		形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
			最大径	長さ			
T 5	土製支脚？	溝6	5.2	(14.7)	縦方向のハケ後一部押圧、被熱により一部白色化	細～粗砂	黄橙褐～白黄灰

図135 溝5～7・出土遺物

れている。また北側は34ライン以東で溝8に切られている。検出面は5層上面である。検出レベルは標高1.2m、推定幅1.2mで、検出面からの深さは0.4mである。断面形は皿形を呈する。底面のレベルは東端で0.8m、西端で0.9mで、西への流れを推定できる。埋土は4枚に分けられる。下半には暗灰褐色～暗茶褐色の粘質土が堆積し、その上位には暗褐色を呈する砂質土層が見られる。

本溝から13号ポリ袋1袋分の遺物が出土しており、うち土師質土器椀2点(図134-5・6)・土製支脚(同T5)を掲載した(図版13)。T5は径5cm程の棒状で、上半部が被熱により変色している。図の下方ではやや細くすぼまり、先端でわずかに屈曲する形状をなす。土製支脚の可能性を考えているが、類例をまちたい。

出土遺物と、溝の切り合い関係を考慮して、本溝の時期は中世、13世紀前半と考えられる。

溝7(図135)

調査区の南端、BS 33・34区に位置する。南西～北東方向に走行する。南半は調査区南壁にかかっている。検出面は5層上面である。検出レベルは標高1.2m、検出面からの深さは東端で0.6mを測る。比較的残りの良

いa断面では、断面形はU字形を呈し、底面のレベルは標高0.7mである。埋土はa断面では7枚に分けられる。この断面からは6・7層の堆積後掘り返され、2～5層が堆積し、最後にたわみ状となったところに1層が堆積したものと考えている。古い流路は下層(7層)に粘質土、上層(6層)に砂質土が堆積している。一方、新しい流路は最下層(5層)は砂質土、2～4層に灰黒色系の粘質土の堆積が認められ、水量の変化を窺うことができる。最終的に1層の粘質土が堆積し、溝7は完全に埋まることとなる。

本溝からは土師質土器片を中心にコンテナ1/3箱(約28ℓ)の遺物が出土し、そのうち土師質土器碗4点を図化した。図135-1は口径13cm前後、2は口径12cm前後、いずれも器高4.3cm前後である。これらの遺物から、本溝の時期は13世紀前半～半ばと位置づけられる。

溝8(図132)

前述の溝4の上位に重複している。東西方向の溝である。5層 上面で検出した。調査時には溝4と一緒にして掘り下げた。検出面のレベルは標高1.25m、幅3.1m、検出面からの深さ0.3mである。底面のレベルは標高1.0mである。埋土は1～3層の3枚にわけられる。1～3層のいずれも、炭・焼土を多く含む特徴が認められ、下層に重複する溝4の埋土、なかでも1～3層に近似している。

本溝の南側のラインは南に膨らむように蛇行している。調査範囲内では流れの方向は不明である。

出土遺物はなく、溝4・溝6を切っていることから、13世紀半ば以降に作られた溝と考えられる。

溝9(図136)

調査区の中央、BR・BS33・34区に位置する、ほぼ東西方向の小規模な溝である。検出面は 4層 である。検出レベルは標高1.35m、幅0.2mで、検出した部分のほとんどに木質部分(3b層)が残っており、幅15cm、厚さ2cm弱の板状の部分が、残存長3mほど認められた。平面では板状であったが、断面観察では3a層が凹字状に3cmほど立ち上がっていることが認められ(図136右)一部木質の残る底板とすでに土壤化している側板とからなる木樋があったものと判断した。

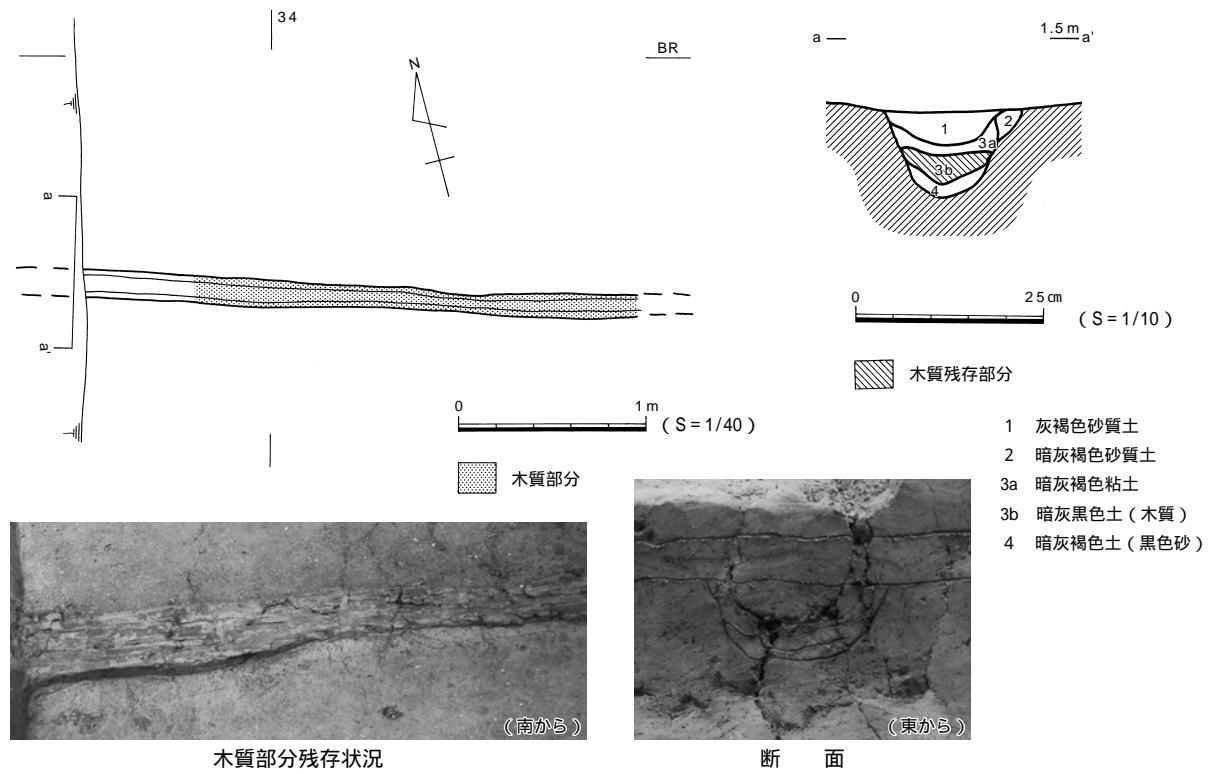


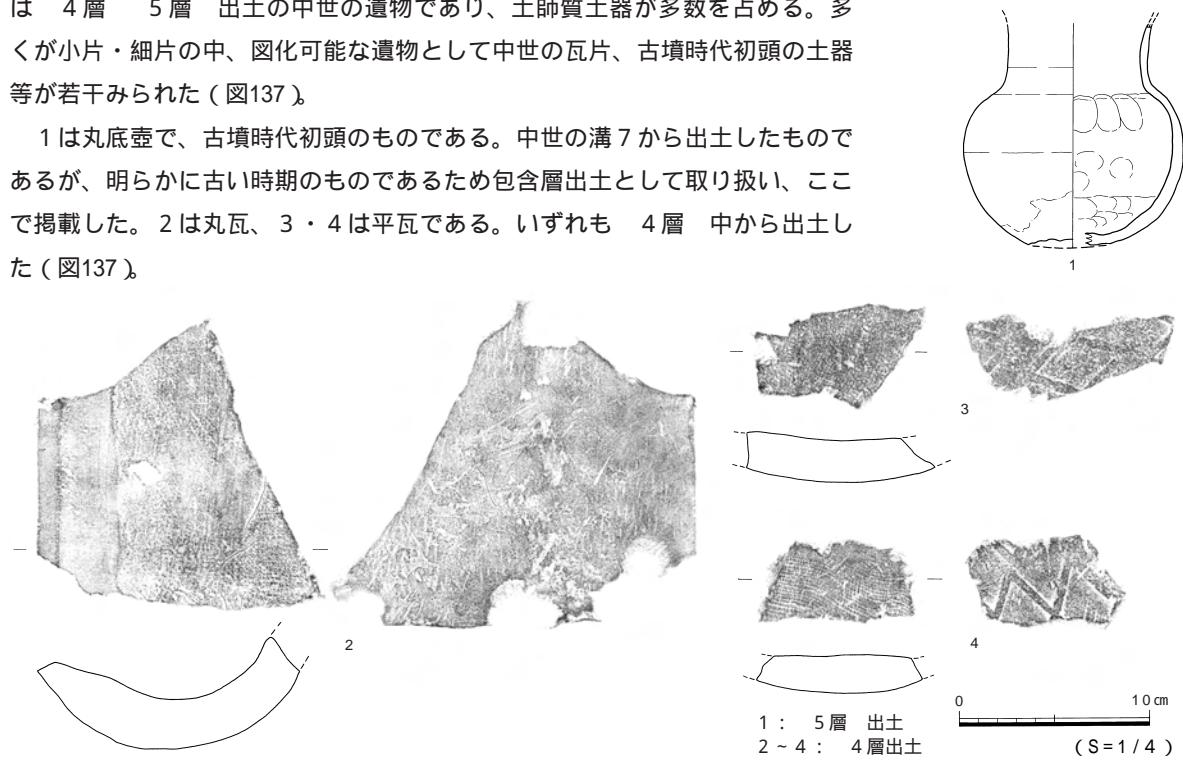
図136 溝9

検出面からの溝の深さは0.15m、木樋遺存部分では検出面から木樋の底までの深さが約0.1mである。木樋の全形は不明である。出土遺物は見られず、検出層位から時期としては中世後半のものと考えている。

5. 包含層出土遺物

包含層の出土遺物は、コンテナで1/2箱（約28ℓ）ほどであり、その大半は4層～5層出土の中世の遺物であり、土師質土器が多数を占める。多くが小片・細片の中、図化可能な遺物として中世の瓦片、古墳時代初頭の土器等が若干みられた（図137）。

1は丸底壺で、古墳時代初頭のものである。中世の溝7から出土したものであるが、明らかに古い時期のものであるため包含層出土として取り扱い、ここで掲載した。2は丸瓦、3・4は平瓦である。いずれも4層中から出土した（図137）。



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師器・丸底壺	-	-	-	(胴内)押圧・粗ナデ(頸内)ナデ(外)ナデ、底部は打ち欠きにより欠損	細砂	乳灰/乳灰～茶
番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調
		長	幅	厚			
2	土師質・丸瓦	(17.1)	(13.3)	3.2	(内)布目・ナデ、図の左側縁は箒削りで平滑(外)ナデ	微砂	橙褐
3	瓦質・平瓦	(5.6)	(10.6)	2.3	(内)布目・ナデ(外)格子目タタキ	微砂	灰
4	瓦質・平瓦	(5.1)	(8.9)	2.0	(内)布目・ナデ(外)格子目タタキ	微砂	灰

図137 包含層出土遺物

第 章 自然科学的分析

1. 岡山大学構内鹿田遺跡第7次調査出土木材の樹種

能 城 修 一（森林総合研究所木材特性研究領域）

岡山大学構内鹿田遺跡第7次調査で出土した27点の樹種を報告する。内訳は、古墳時代初頭の井戸1基から出土した木材8点と、中世から近世の井戸や土壌から出土したもの19点である。27点中には10分類群が認められた。ここでは、出土した樹種の木材解剖学的な記載を行い、代表的な試料の顕微鏡写真を示して同定の根拠を明らかにする。樹種同定用のプレパラート標本は、木材から横断面、接線断面、放射断面の切片をカミソリで切りとり、ガムクロラール（抱水クロラール50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入して作製した。プレパラートには、OKUF-871からOKUF-904の番号を付して標本番号とした。プレパラート標本は森林総合研究所に保管されている。

1. マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科 図138：1a - 1c (OKUF-900)

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量多く明瞭。放射組織は柔細胞と上下端に位置する放射仮道管からなり、分野壁孔は窓状、放射仮道管の水平壁は鋸歯状。保存状態が悪く、鋸歯の突起の程度が不明瞭なため、マツ属複維管束亜属と同定した。

2. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. Et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図138：2a - 2c (OKUF-875)

垂直・水平のいずれの樹脂道も持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量少ない。早材の終わりに樹脂細胞が散在し、樹脂細胞には黒色の樹脂が詰まっている。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は中型のトウヒ型で孔口は垂直にちかく開き、1分野に普通2個。

3. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don スギ科 図138：3a - 3c (OKUF-878)

垂直・水平のいずれの樹脂道も持たない針葉樹材。早材の仮道管は薄壁で径が大きく、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材はやや量多く明瞭。早材の終わりに樹脂細胞が散在し、樹脂細胞には黒色の樹脂が詰まっている。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は大型のスギ型で孔口は水平に開き、1分野に普通2個。

4. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図139：4a - 4c (OKUF-890)

早材のはじめには径200μmほどの大型で丸い単独管孔が緩く数列配列し、晩材では小型で薄壁の単独管孔が緩やかに放射状～火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は单一。木部柔細胞は晩材でいびつな接線状。放射組織は同性で、小型で单列のものと、緩い集合状から複合状の高さが1mm以上となる大型のものとからなる。道管と放射柔細胞との壁孔は単壁孔状で柵状を呈する。

5. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図139：5a - 5c (OKUF-895)

径100μmほどの中型で丸い厚壁の単独管孔が放射方向～緩い火炎状に配列する放射孔材。道管の穿孔は单一。木部柔細胞はいびつな接線状。放射組織は同性で、小型で单列のものと、幅100μmを越え高さが1mm以上となる大型のものとからなる。大型の放射組織にはときに結晶細胞が認められる。道管と放射柔細胞との壁孔は単壁孔状で柵状を呈する。

6. クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) Presl クスノキ科 図139：6a - 6c (OKUF-893)

径150-50μmほどの丸い管孔が単独あるいは放射方向に2～3個複合して、年輪内で径を減じながら疎らに散在する半環孔材。道管の穿孔は单一で、道管内にはチローシスが著しい。木部柔細胞は周囲状で、しばしば大型の油細胞を含む。放射組織は異性で3細胞幅位、高さが揃っていて、しばしば層階状に配列する。

7. カツラ属 *Cercidiphyllum* カツラ科 図140：7a - 7c (OKUF - 876)

径30 - 50 μmほどの角張った管孔がほぼ単独で密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は30本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で2 ~ 3細胞幅位。

8. ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図140：8a - 8c (OKUF - 882)

径30 - 10 μmほどの単独管孔が年輪内で径を減じながら密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は20本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は背の低い異性で2細胞幅位、しばしば上下端に大型の結晶細胞をもつ。

9. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図140：9a - 9c (OKUF - 889)

径30 μmほどの角張った管孔がほぼ単独で密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は30 ~ 40本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は単列異性。

10. タケ亜科 Subfam. *Bambusoideae* イネ科 図141：10a (OKUF - 897)

維管束の中心には一対の小型の丸い管孔があり、それに直行するように原生木部間隙と篩部が位置し、全体を取り囲んで厚膜組織が維管束鞘を形成する。そうした維管束が互いにくっつくことなく柔組織のなかに散在する。

今回調べた試料はいずれも時代ごとの点数が限られており、器種もまちまちであるため傾向を読むことは困難である。強いていうと、古墳時代には広葉樹が多く、中世から近世にはスギとマツ属複維管束亜属といった針葉樹が多いようである。これまで鹿田遺跡で出土した木材(能城、1993)と対照してみると、スギとヒノキ、二葉松類が古代から中世に多い点で共通性がある。これまでの調査で杭として多用されていたモミ属とクヌギ節が今回検出されていないのは、杭を扱っていないためであると考えられる。

参考文献

能城修一 1993 「岡山大学鹿田地区から出土した木製品の樹種」『鹿田遺跡』、119 - 146. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

表6 岡山大学構内鹿田遺跡第7次調査で出土した木材の樹種

樹種名	古墳初		13C	14C	14C中頃?	(中~近世)		近世		竹札	不明	
	加工木	自然木	板材	札	板材	不明	板・棒	自然木	曲物	板材	木製品	
マツ属複維管束亜属	1	2							5	1		1
ヒノキ									1			
スギ			1	1	1			2				
コナラ属クヌギ節		1										
コナラ属アカガシ亜属		1										
クスノキ	1	1										
カツラ属					1							
ツバキ属	1	1						1				
サカキ		1										
タケ亜科										1	1	
総計	2	6	3	1	1	1	2	1	1	5	1	2

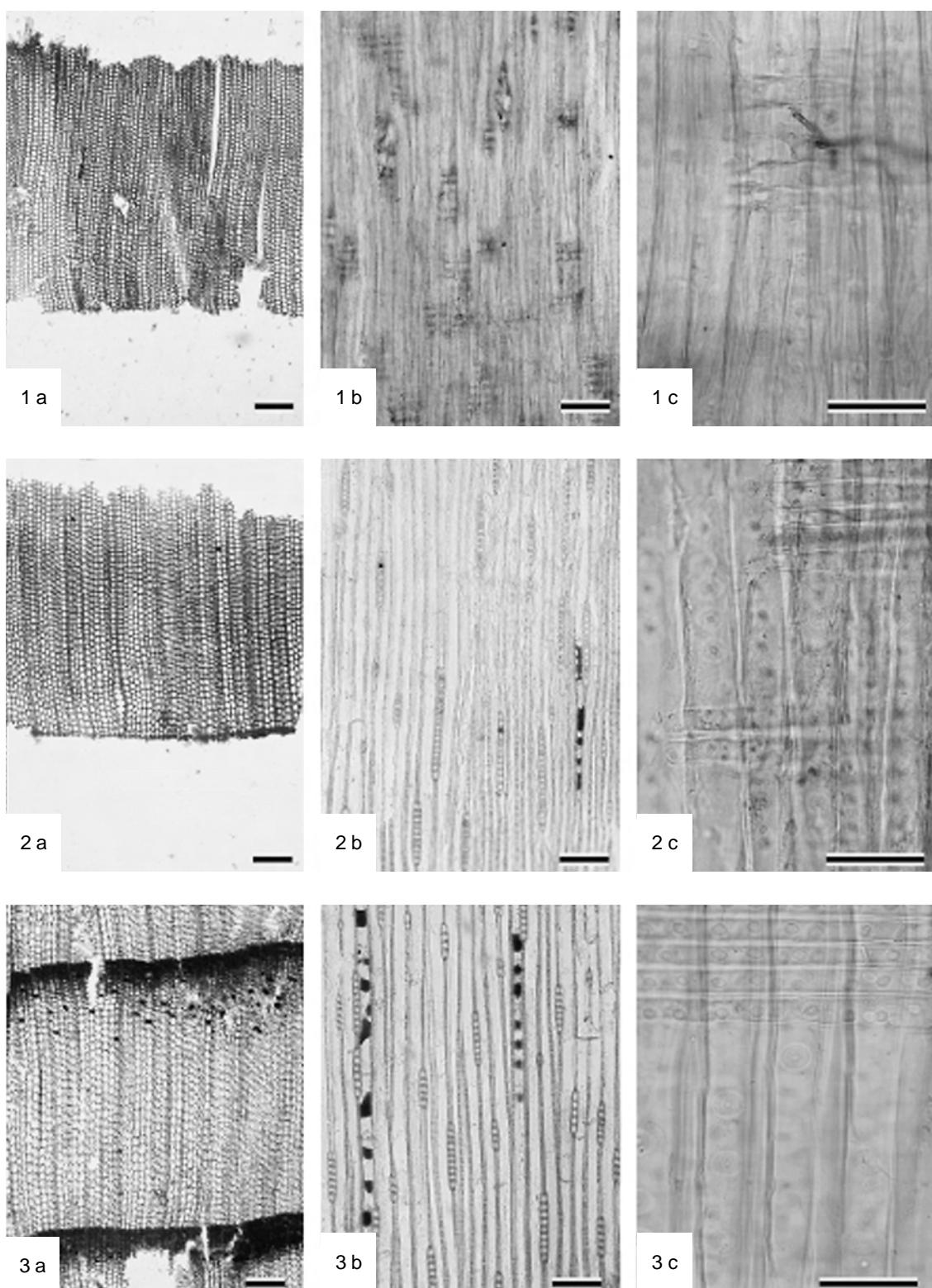


図138 岡山大学鹿田遺跡第7次調査出土木材の顕微鏡写真(1)

1 a - 1 c : マツ属複維管束亜属 (OKUF - 900)、2 a - 2 c : ヒノキ (OKUF - 875)、3 a - 3 c : スギ (OKUF - 878)

a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面、スケール = 200 μm (a), 100 μm (b), 50 μm (c)

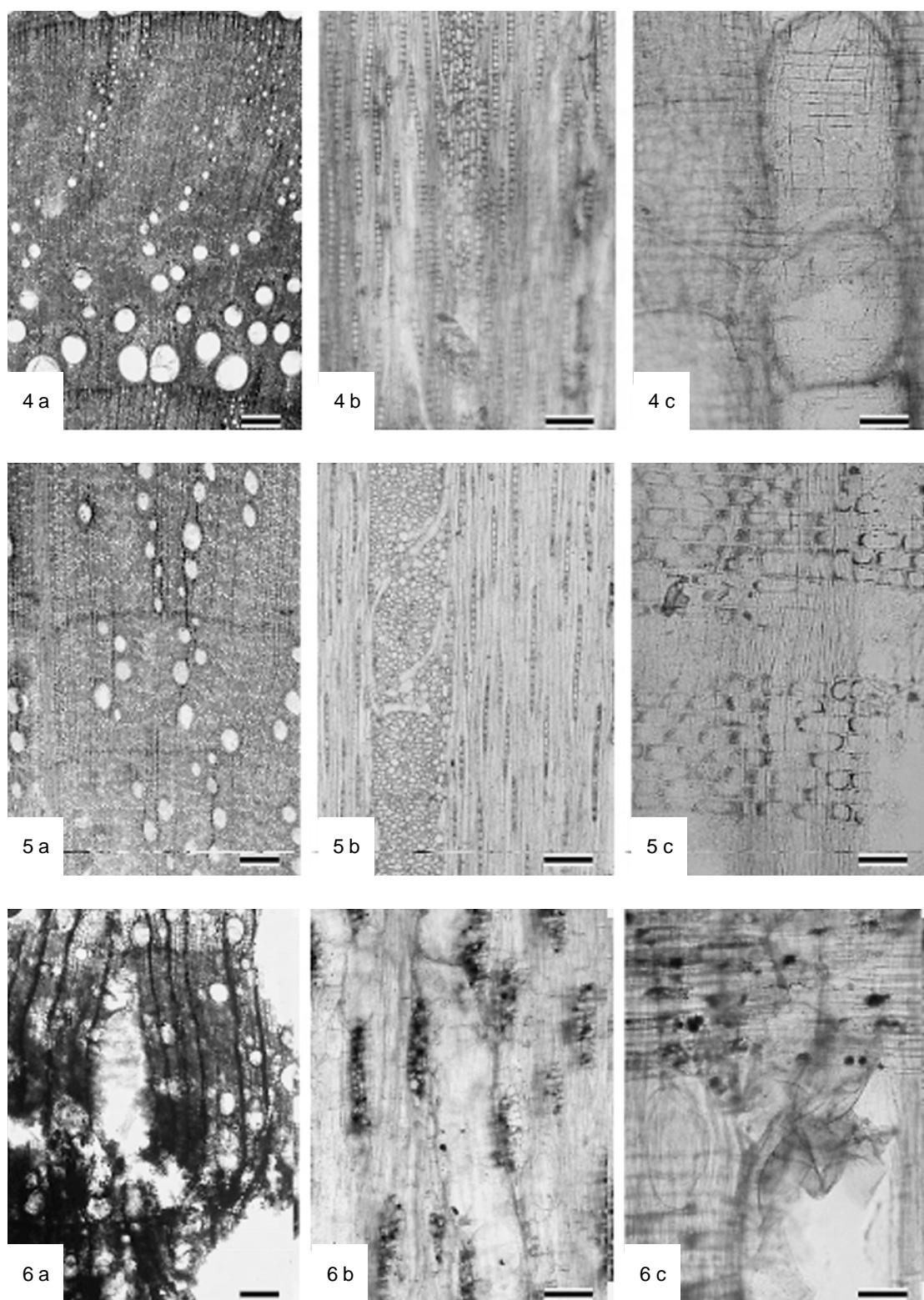


図139 岡山大学鹿田遺跡第7次調査出土木材の顕微鏡写真(2)

4 a - 4 c : コナラ属コナラ節 (OKUF-890) 5 a - 5 c : コナラ属アカガシ亜属 (OKUF-895) 6 a - 6 c : クスノキ (OKUF-893)

a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面、スケール = 200 μm (a), 100 μm (b), 50 μm (c)

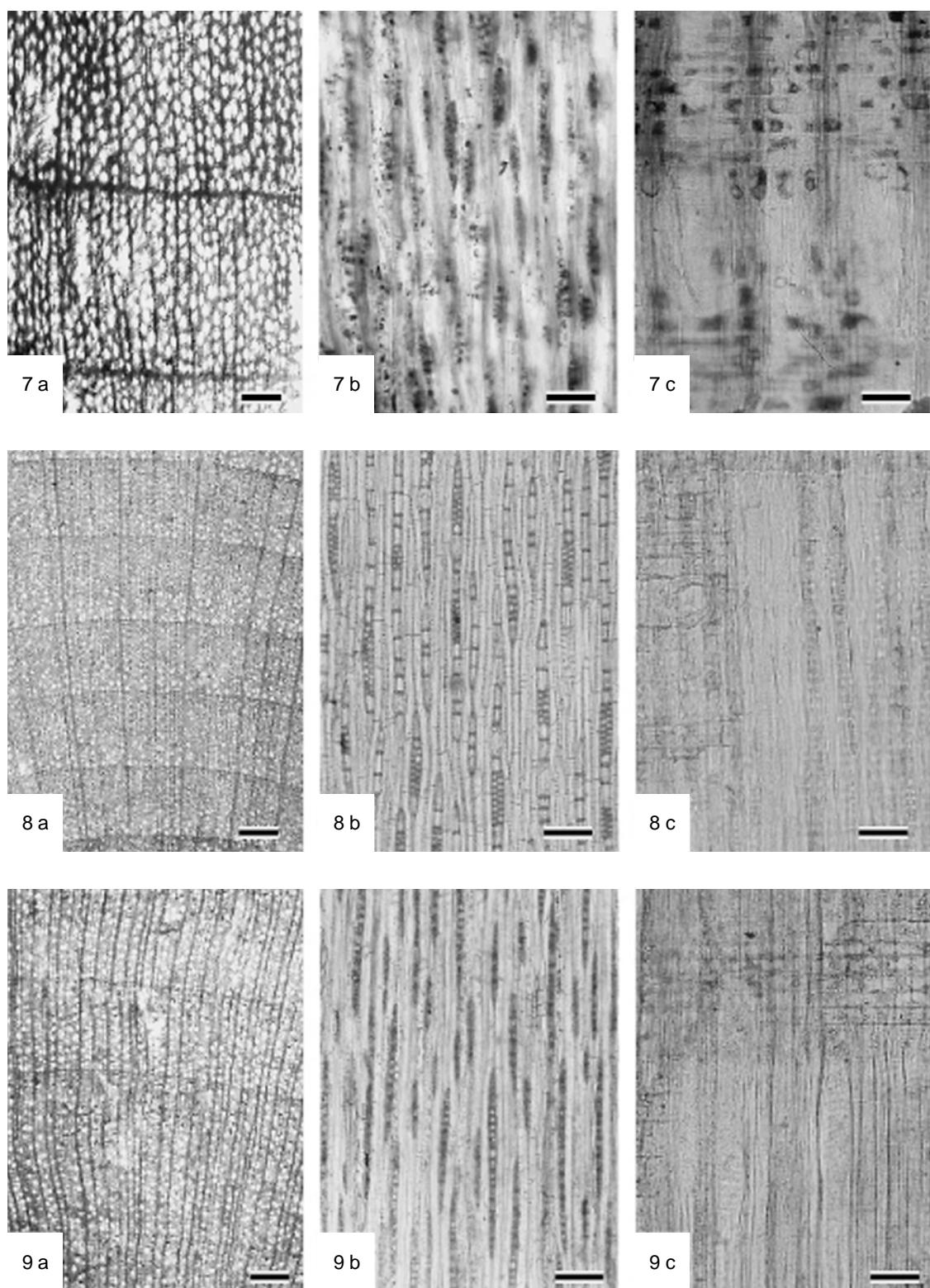


図140 岡山大学鹿田遺跡第7次調査出土木材の顕微鏡写真(3)

7a - 7c : カツラ属 (OKUF - 876) 8a - 8c : ツバキ属 (OKUF - 882) 9a - 9c : サカキ (OKUF - 889)
a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面、スケール = 200 μm (a), 100 μm (b), 50 μm (c)

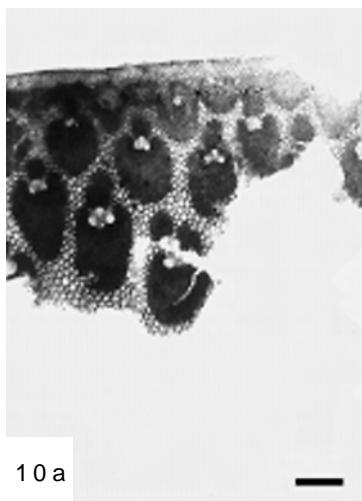


図141 岡山大学鹿田遺跡第7次調査出土木材の顕微鏡写真(4)

10a : タケ亜科 (OKUF - 897)

a : 横断面、スケール = 200 μm (a)

表7 樹種一覧

標本	No.	Pl.番号	樹種名	製品名	出土遺構	時代	本文中 掲載番号
OKUF -	871		スギ	板材	溝21	中世後半～近世	図96W10
OKUF -	872		スギ	方形スティック	溝21	中世後半～近世	図96W13
OKUF -	873		ツバキ属	流木	溝21	中世後半～近世	
OKUF -	874		×	棒・板	溝21	中世後半～近世	図96W11・12
OKUF -	875	図138-2	ヒノキ	曲物	溝21	中世後半～近世	図96W14
OKUF -	876	図140-7	カツラ属	-	溝21	中世後半～近世	図96W15
OKUF -	877		スギ	穿孔付板材	溝20	中世後半(14C)	図91W8
OKUF -	878	図138-3	スギ	札	溝20	中世後半(14C)	
OKUF -	879		スギ	板材	井戸3	中世前半(13C)	
OKUF -	880		マツ属複維管束亜属	板材	井戸3	中世前半(13C)	
OKUF -	881		マツ属複維管束亜属	板材	井戸3	中世前半(13C)	
OKUF -	882	図140-8	ツバキ属	流木？	井戸1	古墳初	
OKUF -	883		無し	加工痕あり？	井戸1	古墳初	図31W3
OKUF -	884		×	流木？	井戸1	古墳初	
OKUF -	885		ツバキ属	杭	井戸1	古墳初	
OKUF -	886		×	樹皮	井戸1	古墳初	
OKUF -	887		マツ属複維管束亜属	焼材	井戸1	古墳初	
OKUF -	888		無し	流木	井戸1	古墳初	図31W2
OKUF -	889	図140-9	サカキ	流木	井戸1	古墳初	図31W1
OKUF -	890	図139-4	コナラ属コナラ節	流木？	井戸1	古墳初	
OKUF -	891		無し	流木？	井戸1	古墳初	
OKUF -	892		無し	流木？	井戸1	古墳初	
OKUF -	893	図139-6	クスノキ	木製品？	井戸1	古墳初	
OKUF -	894		クスノキ	木製品？	井戸1	古墳初	
OKUF -	895	図139-5	コナラ属アカガシ亜属	流木	井戸1	古墳初	
OKUF -	896		マツ属複維管束亜属	板材	土坑16	近世	
OKUF -	897	図141-10	タケ亜科	竹札	土坑16	近世	
OKUF -	898		マツ属複維管束亜属	流木？	土坑12	近世	
OKUF -	899		タケ亜科	竹？	土坑12	近世	
OKUF -	900	図138-1	マツ属複維管束亜属	板材	土坑12	近世	
OKUF -	901		マツ属複維管束亜属	角棒状木製品	土坑12	近世	
OKUF -	902		マツ属複維管束亜属	板材	土坑12	近世	
OKUF -	903		マツ属複維管束亜属	板材	土坑12	近世	図108W16
OKUF -	904		マツ属複維管束亜属	板材	土坑12	近世	図108W18

2. 鹿田遺跡第7次調査出土木製品の樹種調査結果

(株)吉田生物研究所

1) 試 料

試料は岡山県鹿田遺跡第7次調査から出土した容器2点(W4;図62 井戸3、W15;図96 溝21)である。

2) 観察方法

削刀で木口(横断面)と、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の角切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3) 結 果

樹種同定結果(針葉樹1種、広葉樹1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

ヒノキ科アスナロ属(*Thujopsis sp.*)(図142 No.1)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

カツラ科カツラ属カツラ(*Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.*)(図142 No.2)

散孔材である。木口ではやや小さい薄壁で角張っている道管(~100 μm)がおおむね単独または2~3個不規則に接合して平等に分布する。道管の占有面積は大きい。放射柔組織は不顯著。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。道管内腔には充填物(チロース)がある。板目では放射組織は方形ないし直立細胞からなる単列のものと、方形ないし直立細胞の単列部と平伏細胞の2列部からなるものがある。高さ~900 μmからなる。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。

参考文献

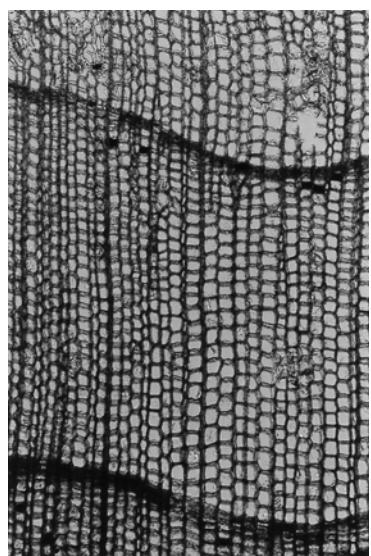
- 島地謙・伊東隆夫 1988「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版
- 島地謙・伊東隆夫 1982「図説木材組織」地球社
- 伊東隆夫 1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載 ~」京都大学木質科学研究所
- 北村四郎・村田源 1979「原色日本植物図鑑木本編」・保育社
- 深澤和三 1997「樹体の解剖」海青社
- 奈良国立文化財研究所 1985「木器集成図録 近畿古代編」(奈良国立文化財研究所史料第27冊)
- 奈良国立文化財研究所 1993「木器集成図録 近畿原始編」(奈良国立文化財研究所史料第36冊)

使用顕微鏡

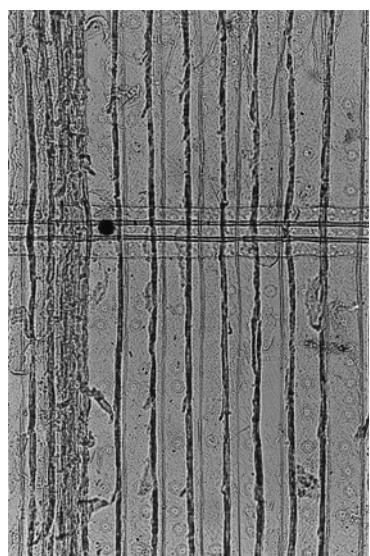
Nikon MICROFLEX UFX DX Type115

表8 出土木製品一覧

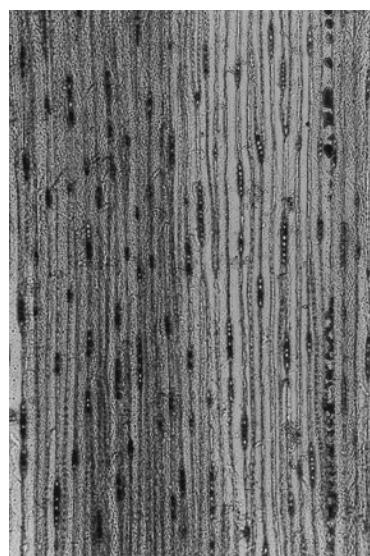
調査番号	品名	樹種	出土遺構	報告番号
	曲物	ヒノキ科アスナロ属	井戸3	W4
	漆椀	カツラ科カツラ属カツラ	溝21	W15



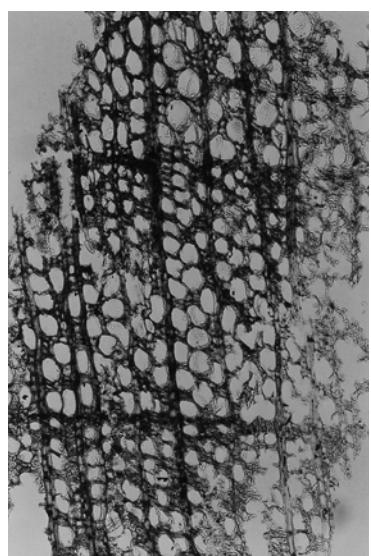
木口 $\times 40$
No. - 1 ヒノキ科アスナロ属



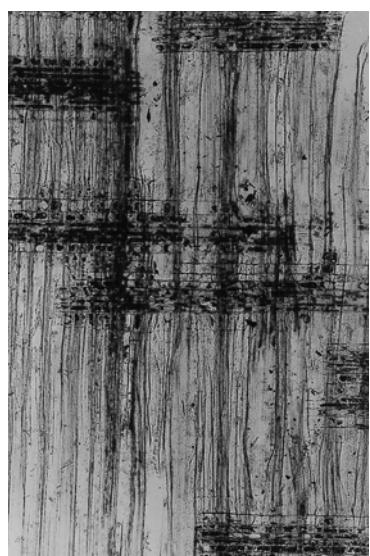
柾目 $\times 40$



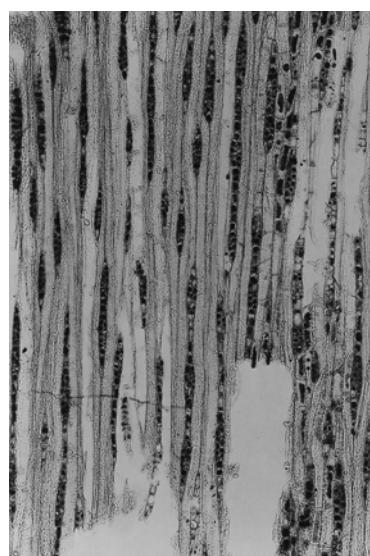
板目 $\times 40$



木口 $\times 40$
No. - 2 カツラ科カツラ属カツラ



柾目 $\times 40$



板目 $\times 40$

図142 出土木製品の顕微鏡写真

3. 鹿田遺跡第7次調査出土漆器の塗膜構造調査

(株)吉田生物研究所

1) はじめに

岡山大学に所在する鹿田遺跡から出土した漆器一点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2) 調査資料

調査した資料は表9に示す中世の漆器一点(W15; 図96 溝21)である。

3) 調査方法

表9の資料本体の内外面から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

4) 断面観察結果

塗膜断面の観察結果を表10に示す。

5) 適要

- 岡山大学の鹿田遺跡第7次調査出土の漆椀について塗膜構造を観察した。
- 全面赤色の内面は、下地の上に透明漆と赤色漆とが1層ずつ重ねられている。
- 黒色地に赤色漆で文様が施されている外面は、下地の上に透明漆1層と、文様部の赤色漆層が観察された。
- 赤色漆には赤色顔料として朱が混和されていた。

表9 出土漆器一覧

No.	品名	樹種	概要	出土遺構	報告番号
1	漆器椀	カツラ	内面赤色で外面には黒色地に赤色で文様が施された椀	溝21	W15

表10 塗膜構造

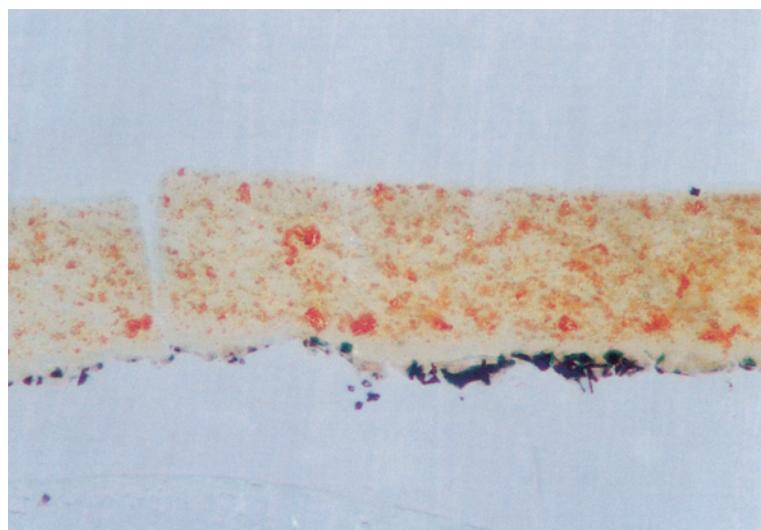
No.	器種	部位	写真No.	塗膜構造(下層から)			
				下地		漆層構造	顔料
				膠着剤	混合剤		
1	漆器椀	内面	1	柿渋	木炭粉	透明漆/赤色漆	朱
		外面	2	柿渋	木炭粉	透明漆/赤色漆	朱

塗膜構造：下層から下地、漆層という構造をとる

下地：内外面とも、褐色の柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地であった。

漆層：全面赤色の内面は、下地のすぐ上に薄く透明漆が施された後、赤色漆が1層重ねられた様子が観察された。外面には黒色地となる透明漆層の上に文様部の赤色漆が認められた。

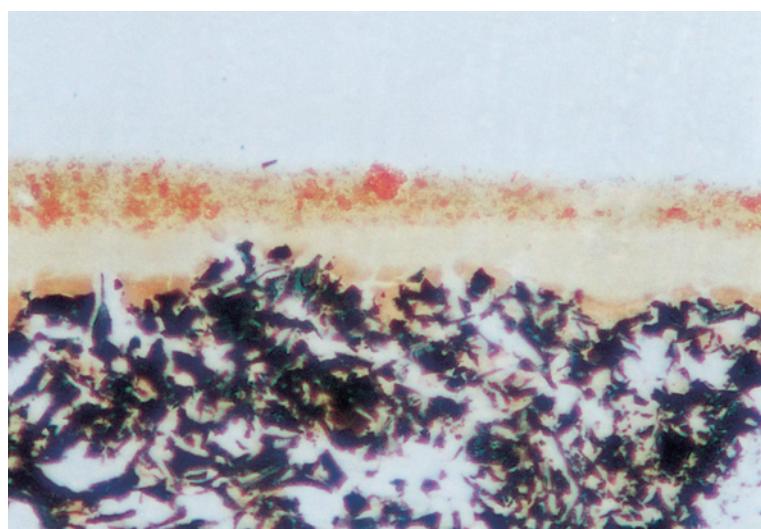
顔料：内面の赤色漆層に混和されている顔料、外面文様部の赤色顔料はともに朱であった。



内面 $\times 400$



外面 $\times 400$



外面拡大 $\times 800$

図143 塗膜構造断面写真

4. 猿形木製品の樹種鑑定と赤色顔料分析

(財)元興寺文化財研究所

1) 分析資料および分析内容

猿形木製品 (W9; 図96 溝21出土): 樹種鑑定・顔料分析

2) 使用機器

- 生物顕微鏡 (株)オリンパス BX50
- エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (XRF) セイコーインスツルメンツ(株)製 SEA5230
- 試料の微少領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。ナトリウムより重い元素が検出可能である。(モリブデン管球使用、管電圧45kV、大気圧条件下)

3) 方法および結果

樹種鑑定

方法

主に破断面から、メスを用いて微量の木質を採取し、試料とした。剃刀の刃で鑑定に必要な木口面(横断面)、柾目面(放射断面)、板目面(接線断面)の3方向の切片を作製し、生物顕微鏡で観察した後、写真撮影を行った。

結果

カヤ: 針葉樹で、早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞はみられない。仮道管にカヤに特徴的に表れる2本の螺旋が対になった螺旋肥厚がみられる。

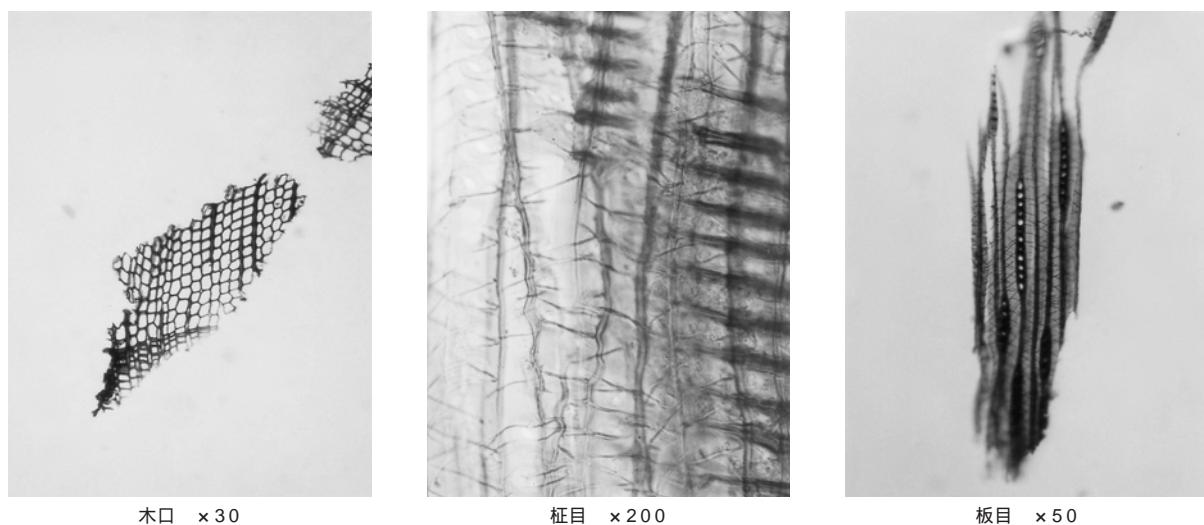
顔料分析

猿形木製品の水を軽く拭いた後、XRFで元素分析を行った。分析は頭巾の赤色部分とその周辺の顔料が塗られていない部分の2ヶ所とした。

赤色部分から主に、水銀(Hg)、鉄(Fe)が検出された。顔料が塗られていない部分から鉄が検出されたことにより、赤色顔料はベンガラ(Fe₂O₃)ではなく、水銀朱(HgS)と考えられる(図144)。

表11 測定条件

	A	B
測定装置	SEA 5230	SEA 5230
測定時間(秒)	180	300
有効時間(秒)	127	212
資料室雰囲気	大気	大気
コリメータ	1.8 mm	1.8 mm
励起電圧(kV)	45	45
管電流(μA)	20	24
コメント	2001 - 1200 岡山大学鹿田遺跡 猿形木製品 赤色部	木胎部



[スペクトル]

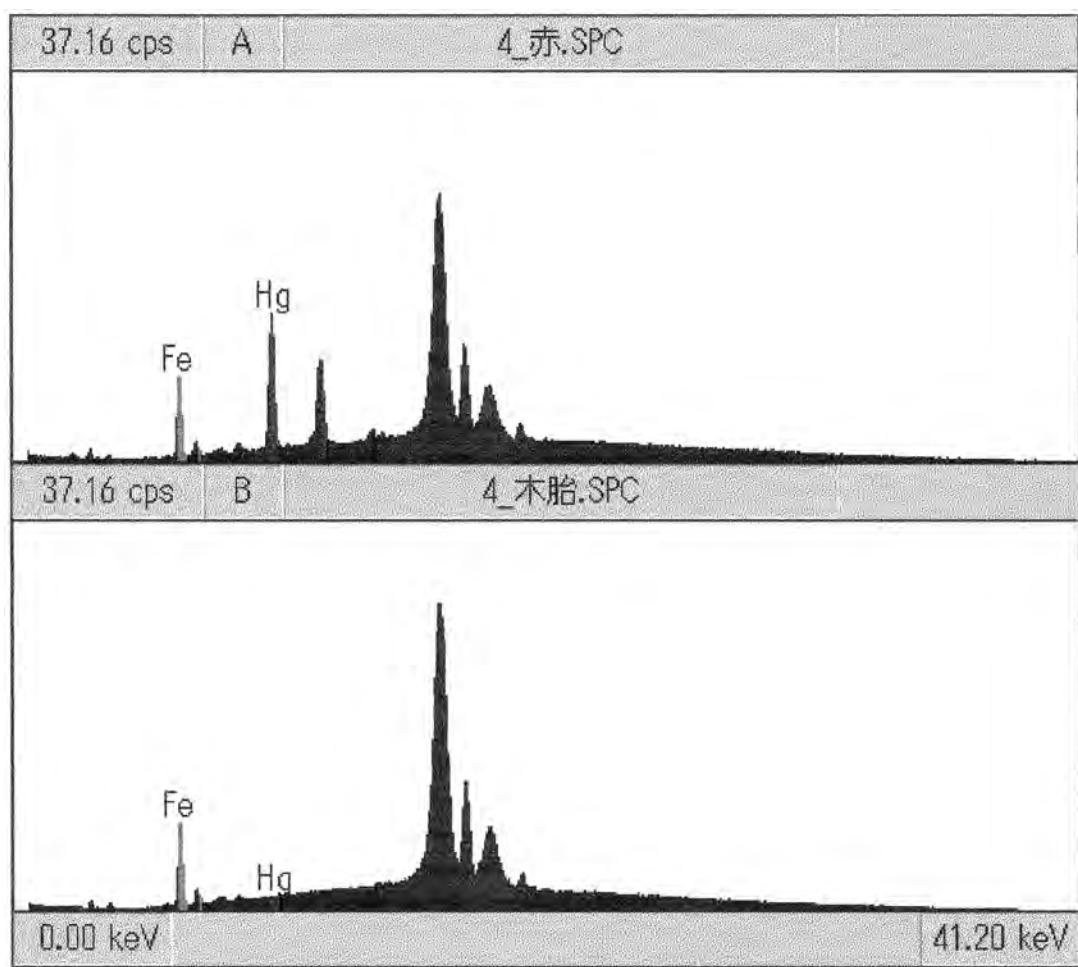


図144 猿形木製品のXRFスペクトル

5. 鹿田遺跡第7次調査における放射性炭素年代測定

(株)古環境研究所

1) はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は現在とは異なっていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から曆年代に較正する必要がある。

2) 試料と方法

試料名	地 点 ・ 層 準	種 類	前処理・調整	測定法
1	井戸1、3土器(外面)	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
2	井戸1、17土器(内面)	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3) 測定結果

試料名	測定 (Beta-)	^{14}C 年代 (年BP)	^{13}C (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	曆年代(西暦) (1 : 68%確率、2 : 95%確率)
1	224898	1810 ± 40	-26.2	1790 ± 40	交点: cal AD 240 1 : cal AD 210 ~ 260, 300 ~ 310 2 : cal AD 130 ~ 340
2	224899	1810 ± 40	-25.8	1800 ± 40	交点: cal AD 230 1 : cal AD 140 ~ 250 2 : cal AD 120 ~ 330

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際的慣例により Libby の 5,568 年を使用した (実際の半減期は 5730 年)。BP は Before Physics の略。

(2) ^{13}C 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

^{13}C 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の ^{13}C 値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

(4) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

曆年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の曆年代値を意味する。1 (シグマ 68% 確率) と 2 (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 ~ 2 値が表記される場合もある。

4) 所 見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、1では 1790 ± 40 年BP (1 の暦年代で AD210 ~ 260, 300 ~ 310年) 2では 1800 ± 40 年BP (同AD140 ~ 250年) の年代値が得られた。放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅がかなり大きくなっているが、これは該当時期の較正曲線が不安定なためである。

文 献

Stuiver et al. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法 . 考古学のための年代測定学入門 . 古今書院 , p.1-36 .

第 章 考 察

1. 鹿田遺跡における土師質土器椀の編年について

古代末～中世前半、鹿田遺跡が立地するいわゆる「吉備地域」では白色系の色調が強く意識される吉備系土師質土器椀が広く分布する。同椀の遺跡から出土する椀に占める割合は圧倒的に高く、同地域では在地の土師質土器椀 = 「吉備系土師質土器椀」と評価できるほどである。しかし、特に古い段階には、同椀とは特徴がやや異なるタイプの土師質土器椀の存在も、数量は少ないが確認される（山本1993）。それらを明瞭に区別することは困難な場合もある。ここでは、主たる目的となる遺構間の同時性を探るための前提作業として、土師質土器椀全体を包括して編年の目安を提示することとしたい。

(1) 編年基準

編年基準は従来の研究（神谷1981・鈴木1988・山本1992・1993・草原1993他）から逸脱するものではなく、法量変化（口径と器高）と箒磨きの特徴を指標とする。その中で、より細かな領域設定を行うことで、遺構出土椀の法量分布の実態を明らかにする。法量分布を一定の狭い範囲に区切った領域の複合体で表す点が特徴である⁽¹⁾。

対象とする資料は、鹿田遺跡第1次調査～第7次調査で報告された土師質土器椀である。基本的には、遺構（井戸・土坑・溝）から出土した椀の中で口径・器高が計測可能なものに限定し、保存率が低く数値の精度が保たれないと判断されるものは除外した。時期を考える上で参考とした瓦器あるいは須恵器鉢などの共伴遺物に関しても同様である。ただし、量的な問題を補うために、器高は復元できないが口径のみが計測可能であった資料については、参考資料として図の下端に点を落とした（図145）。また、口径・器高の計測値に幅がある場合は、その平均値を取り上げている。

(2) 法量分布域の設定

土師質土器椀の法量分布域を区分するにあたっては、各遺構からの一括性が反映されるように、器高について1～12域に区分し、それぞれについて口径をa・b域から最大a～e域に細分した（図145・表12）。また、時間軸に強く関わる要素が、大形の法量域では特に器高の低下に、そして小形の法量域では、口径の縮小がより重要な要素として加わるという違いが、口径13.2cm前後を境に生じていることが想定される。そのため、同値よりも口径が大形となる領域を1～6域に、小形の領域を7～12域とし、分析にあたっては、一部で区別した取り扱いとなっている。

1～6域は、口径13.2cm以上で器高6.5cm～3.7cmの範囲である。それらを、遺構から得られる一括性と土器の特徴を考慮して器高値を細分した結果、区分される各領域幅はそれぞれ0.4～0.5cmを示すこととなった（表12）。口径については、器高5.1cmを境として、器高が高い1～3域と低くなる4～6域の間で、その上限となる数値が0.5cm程度の違いを示す。そのため、口径の細分については、両域間で設定数値をかえることとした。

具体的には、1～3域は、器高5.11cm以上で口径13.2cm以上の法量域である。口径の上限は、破片資料の存在を考慮して16.5cmまでを含めたが、現段階では、全体が復元される資料からは16cmである。各領域の境は器高6cm・5.5cmで、その中の細分は口径15.3cm・14.5cmを境とし、a・b・c域に区分した。その結果、1域ではc域は確認されないため、1a域・1b域・2a域・2b域・2c域・3a域・3b域・3c域がそれぞれ設定される。

4～6域は器高5.1cm以下、口径13.2cm以上の範囲を示す。各領域の境は器高では4.6cm・4.1cm、口径では15cm・14cmを境にa・b・c域に区分する。6域ではa域を確認できないため、4a域・4b域・4c域・5a域・5b域

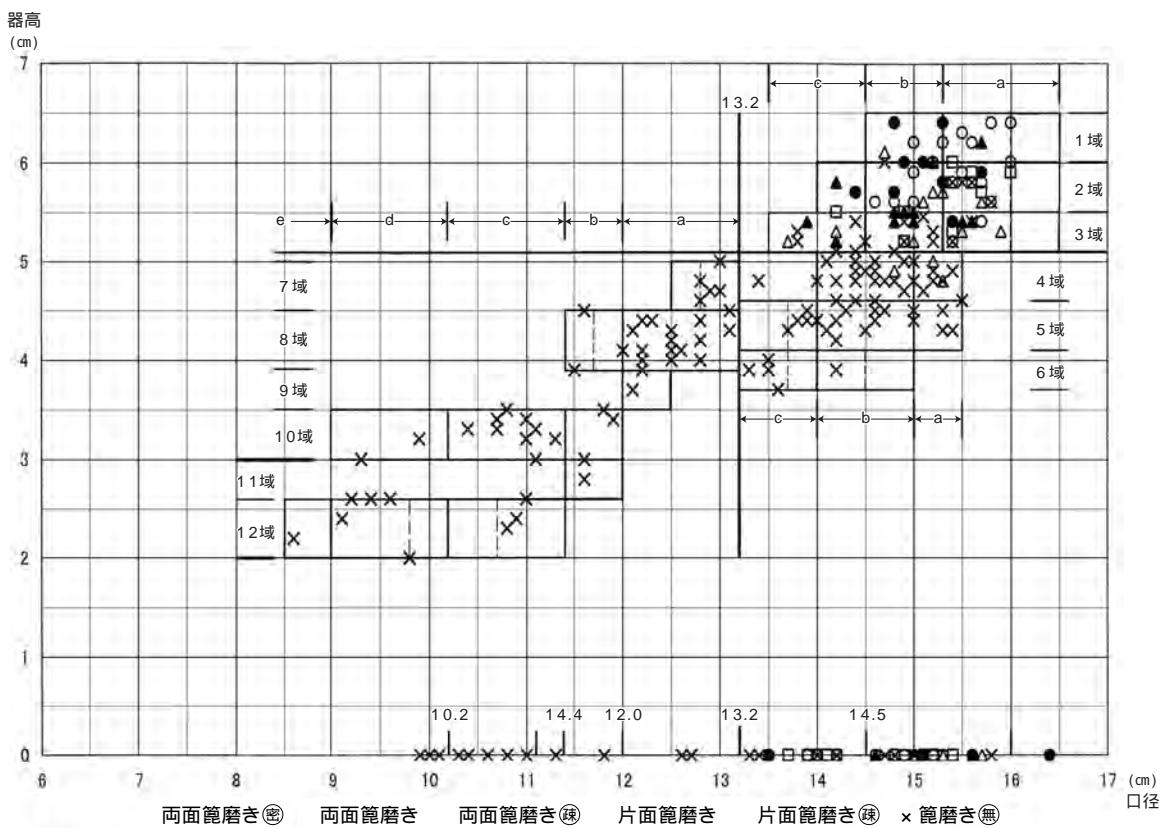


図145 鹿田遺跡出土土師質土器椀法量分布

b域・5c域・6b域・6c域が設定される。各領域間の状況を比較すると、4・5域においては、口径の上限つまりa域の上限は15.5cmであり、1～3域の数値より低下しているが、下限については14cmあるいは13.5cmを中心としたラインが境となっており、2・3域とさほど違いを見せない。また、6a域～6b域あるいは4c域には分布がほとんど認められない状態や5c域でも口径の下限が4域よりもやや低下する点からは、器高の低下するにしたがって、口径もやや小形化する傾向が多少読み取れるが、顕著とは言い難い。

表12 土師質土器椀法量表(密 普通 疎 ×無し 量:僅少)

領 域	口 径(cm)		器 高(cm)		口径差	器高差	範 磨 き		高 台
	下 限	上 限	下 限	上 限			両 面	片 面	
1 a	15.31	16.5	6	6.5	1.2	0.5			有
1 b	14.5	15.3	6	6.5	0.8	0.5		×	有
2 a	15.31	16.5	5.51	5.99	1.2	0.5		×	有
2 b	14.5	15.3	5.51	5.99	0.8	0.5		有	
2 c	14	14.49	5.51	5.99	0.5	0.5		有	
3 a	15.31	16.5	5.11	5.5	1.2	0.4		×	有
3 b	14.5	15.3	5.11	5.5	0.8	0.4		×	有
3 c	13.5	14.49	5.11	5.5	1	0.4		×	有
4 a	15	15.5	4.61	5.1	0.5	0.5		×	有
4 b	14	14.99	4.61	5.1	0.5	0.5		×	有
4 c	13.2	13.99	4.61	5.1	0.8	0.5		×	有
5 a	15	15.5	4.1	4.6	0.5	0.5		×	有
5 b	14	14.99	4.1	4.6	0.5	0.5		×	有
5 c	13.2	13.99	4.1	4.6	0.8	0.5		×	有
6 b	14	15	3.7	4.09	0.7	0.4		×	有
6 c	13.2	13.99	3.7	4.09	0.6	0.4		×	有
7 a	12.5	13.19	4.51	5	0.7	0.5		×	有
8 a	12	13.2	3.9	4.5	1.2	0.6		×	有
8 b	11.4	11.99	3.9	4.5	0.6	0.6		×	有
9 a	12	12.5	3.51	3.89	0.5	0.4		×	有
10 b	11.4	12	3	3.5	0.6	0.5		×	有
10 c	10.2	11.39	3	3.5	1.2	0.5		×	有・無
10 d	9	10.19	3	3.5	1.2	0.5		×	無
11 b	11.4	12	2.61	2.99	0.6	0.4		×	無
12 c	10.2	11.39	2	2.6	1.2	0.6		×	有・無
12 d	9	10.19	2	2.6	1.2	0.6		×	無
12 e	8.5	8.99	2	2.6	0.5	0.6		×	無

7～12域は、口径13.2cm未満の領域で、器高は5cm～2cmの幅を有す。設定領域の境は、器高値が4.5cm・3.9cm・3.5cm・3cm・2.6cmにあり、各領域幅は0.4～0.6cmである。口径は13.2cm～8.5cmのなかで、12cm・11.4cm・10.2cm・9cmを境にa～e域に細分を行った。その中で、9・11域では資料点数は非常に少なく分布は希薄であり、領域区分の設定に問題がある可能性も残るが、すべての領域に均質な分布状態が広がるわけではない。その結果、7a域・8a域・8b域・9a域・10b域・10c域・10d域・11b域・12c域・12d域・12e域が設定される。全体をカバーする領域設定を目指したが、実際の分布は、8a域・10c域に顕著なように、領域内でもより集中的な分布を見せる部分が確認される。7～10域では、器高の低下と口径の小形化が相関関係をもつ傾向が比較的明瞭に表われる。6域まででもその傾向は多少認められたが、その変化の差は大きい。器高が最も低下する領域を構成する12域では、包含される資料の多くが無高台タイプの椀である。この無高台の椀は10c域・10d域・11b域にも確認される。資料点数が少なく、ややまとまりのない分布を示す。形態面においても違いが予想されることから、その領域設定もふくめ今後再検討が必要であろう。

(3) 篓磨きと法量分布域

編年を考える上で注目されるもう1点の要素である籓磨きの状況を整理しておこう。籓磨きが確認されるのは1域～3域であり、4域では極めて少ない(図145、表12)。

1域・2域は全体的に共通性が高い。籓磨きは椀の内外両面に施されるものが多いが、片面のみのものも多少含まれる。籓磨きの密度については、両面あるいは片面ともに、非常に密度が高く丁寧なものから密度が低く粗雑なものまで確認される。その違いには、椀の持つ本質的な特徴のほかに、保存状態の問題あるいは実測者の観察視点の違いも無視できないのであるが、ここで重要なのは密度の高いものが安定的に含まれている点であろう。そのなかでも、特に1b域に含まれる椀では両面の籓磨きが丁寧で密度の高い傾向がある点は注目される。こうした籓磨きが主体的な領域の中で、籓磨きが全く施されないものも、わずかではあるが含まれている。しかし、そのほとんどが3域よりも器高が低い後出的な遺物を共伴することから、本領域では本来的なものではないことと判断される。

一方、3域では1域・2域とはやや様相が異なる。全体的に籓磨きが両面に及ぶものは激減し、3a域あるいは3b域では、片面への籓磨きあるいは籓磨きが施されないタイプが中心をなす。僅かに含まれる両面磨きは、口径の大きい3a域に数点含まれるのみである。また、籓磨きの密度も低下し粗雑なものが多い。ところが、3c域では、破片資料を加えて観察すると、これらとはやや異なり、両面磨き・片面磨きそして磨きのないタイプまでが含まれる。籓磨きがないものの中にも、丁寧なナデと表現される工具痕跡を残すものが目につく。口径が小形な領域であるにも係わらず、全体に籓磨きの丁寧さが保たれている。その中にはやや厚手で典型的な吉備系土師質土器椀とはやや様相が異なるタイプも認められる。

4域は籓磨きが施されないタイプが中心である。数が極めて限定的な片面籓磨きタイプは、口径が大きいa域周辺に僅かに認められる程度である。

以上のように、あらためて法量域と籓磨きの有無との相関関係を確認することができるが、その粗密の差は必ずしも直線的に変化するわけではないことも注意が必要であろう。

(4) 分布域と時期設定

a. 領域のグルーピング

前項で設定した法量域に対して、同一遺構から出土した椀の法量分布がどのような組み合わせを示すのかを確認し、領域分布状態に類似性がもとめられる遺構群をまとめて表した(表13)。その作業にあたっては、埋没に際し時間幅が比較的短いと考えられる井戸の領域構成を重視し、溝については、その遺構の性格から時期幅の存

在を考慮した。

1 ~ 6 域では "1 域"、"1 域 + 3 c 域"、"1 域 + 2 域 + 3 c 域あるいは 3 b 域"、"2 域"、"2 域 + 3 域"、"3 域"、"3 域 + 4 域"、"4 域 + 5 域"、"5 域"、"5 域 + 6 域"を抽出することができる。

一方、7 域以降について、同様に器高を優先した基準でグルーピングを行うと、"7 域 + 8 域 + 9 域"、"10 域 + 12 域"、"11 域"、"10 域 + 12 域"というまとまりとなり、同一表記の群が形成されてしまうことから、器高のみの分類が機能しないことがわかる。口径を加えてグルーピングを行うと、"7 a 域 + 8 a 域 + 8 b 域 + 9 a 域"、"10 b 域 + 10 c 域 + 12 c 域"、"11 b 域"、"12 c 域 + 10 d 域 + 12 d 域 + 12 e 域"、さらに口径優先でまとめると、"7 ~ 9 - a · b 域"、"10 ~ 12 - b · c 域"、"10 · 12 - d · e 域"となる。器高も無視できないが、口径が重要な要素となっていること、それが小形化するにしたがって、より顕著となることがわかる。ただし、遺物の点数が僅少な遺構も少なくないという点は、領域分布の安定性に問題を残す。今後、資料的な補強と検証が必要であろう。

ここで、複数の領域にまたがる場合について考えてみたい。それには、いくつかのパターンを見て取れる。1 域から 12 域への時間的推移は、これまでの研究から明らかであり、そうした流れを念頭において理解していくといい。

"1 域 + 3 c 域"、"1 域 + 2 域 + 3 c 域 (あるいは 3 b 域)"の場合。中心的な領域 (1 域あるいは 1 域 + 2 域) のほかに、それとは法量面で明瞭な差を示す領域が組み込まれるパターンである。両者間に数量的差も存在する傾向が強い。3 c 域の椀は、法量面で明瞭な違いを見せるため、異なった時期として考えられがちである。しかし、籠磨きの特徴は前項でも述べたが 1 域・2 域の椀と共に通する上、両域との共伴関係が強い点から、大形品 (1 · 2 域) を中心に小形品 (3 c 域) が加わるというセット関係が想定される。少なくとも 3 c 域で籠磨きが施されるものは、1 · 2 域に伴うと考えた方が良いかもしれない。"2 域"にもその傾向は残す (第 5 次調査溝 34/35)。

"2 域 + 3 域"、"3 域 + 4 域"の場合。複数の領域が継続して占められ、領域間の量的差も比較的少ない。いずれの遺構も溝である点も考慮すると、溝の重複あるいは掘り返しなどの具体的な影響も考えられるが、いずれにしても遺構利用期間の幅として理解される。

"4 域 + 5 域"の場合。と同じく継続期間の幅を示すという考え方と同時性と評価して過渡期と捉える考え方がある。井戸においても確認されている点や領域間の椀の特徴が 3 域と 4 域のように明瞭とは言い難い点から、後者の可能性が求められるが、評価についてはやや流動的である。

"5 域 + 6 域"、"7 ~ 9 - a + b 域"、"10 ~ 12 - b + c 域"の場合。複数の領域に分布が認められるが、領域間の量的差が比較的明瞭に存在し、中心的領域を形成するパターンである。"5 域 + 6 域"では、6 域単独の遺構は現段階では明瞭でないことから、5 域を中心としたまとまり、そして、"7 ~ 9 - a + b 域"、"10 ~ 12 - b + c 域"についても、8 a 域あるいは 10 c 域を中心としたまとまりといえよう。

"10 · 12 - d ~ e 域"の場合。まとまりのなさが指摘されるが、資料点数が少なく評価はしがたい。高台の有無の問題も含む領域であり、"10 ~ 12 - b + c 域"との関係を含めて、今後検討が必要であろう。資料の増加を待ちたい。

以上の検討から、同時性を示すグループとして、"1 域 + 3 c 域"、"1 域 + 2 域 + 3 c 域あるいは 3 b 域"、"2 域"、"3 域"、"4 域"、"4 域 + 5 域"、"5 域 + 6 域"、"7 ~ 9 - a + b 域"、"10 ~ 12 - b + c 域"、"10 · 12 - d ~ e 域"の 10 群が抽出される。

b . 時期設定とその概要

すでに提示されている時期との整合性を鑑みて、各領域について時期設定を行うと以下のようになる (表 14)。

期 : 1 域と 2 域を含む領域を基本とする。具体的には、"1 域 + 3 c 域"、"1 域 + 2 域 + 3 c 域 (あるいは 3 b 域)"であり、大形で器高が特に高く、籠磨きが丁寧という特徴を持つ椀を中心とし、小形で深めの椀を少量含む

表13 遺構別出土椀法量の領域分布

遺構番号	1a 1b	2a 2b	2c	3a 3b	3c	4a	4b	4c	5a 5b 5c	6a 6b	7a	8a	8b	9a	10b	10c	11b	12c	10d	12d	12e	時 期	瓦 器	東播系須恵器
5 土15																						- 1	楠 - 1	
1 井21																						- 2 a		
1 井22																						- 2 a		
1 井27																						- 2 a		
3 土13																						- 2 b		
5 井4																						- 2 b		
3 溝7																						- 2 b		
2 土123																						- 2 b		
2 溝8																						- 2 b ~ 3		
5 溝34/35																						- 3		
5 井5																						- 3		
2 溝19																						- 3		
3 井2																						- 3		
1 井26																						- 3		鉢 - 2
8 溝3																						- 3 ~		椀 - 2
8 溝4	x																					- 3 ~		椀 - 2・鉢 - 2
6 土2																						?		
1 井23																						?		
1 井28																						?		
5 井6																						和 - 1		
1 井24																						和 - 1		
3 溝8																						?		
3 土7																						?		
3 土8																						?		
5 土16																						?		
1 溝70																						~ - 1 a	和 - 3	~ - 1
1 溝71																						~ - 1 a	和 - 3	
7 溝6																						~ - 1 a	和 - 3 ?	
6 溝10																						~ - 1 a	和 - 3 ?	
6 溝17																						~ - 1 a	和 - 3 ?	
7 井2																						- 1 a	鉢 - 1	
1 井29																						- 1 a ~ 1 b	楠 - 3 / 和 - 2	
5 溝37																						- 1 a ~ 1 b	和 - 1	
5 溝38/39																						- 1 a ~ 1 b	和 - 1	
1 井30																						(1 a ~) 1 b		
6 土4																						- 1 b	和 - 1	
6 溝11																						- 1 b	和 - 1	
6 溝16																						- 1 b	和 - 2	
6 溝15																						- 1 b	和 - 2	
2 井5																						- 1 b	和 - 2	
1 井31																						- 2		
5 溝48																						- 2		
2 井6																						- 2		
6 井1																						- 2		
7 溝19																						- 2		
8 溝7																						- 2		
6 溝13							x				x x		x x		x		x					- 2 ~ 3	和 - 2	鉢 - 2・椀 - 1
5 井7																x x	x x	x				- 3		鉢 - 2
2 溝11																x x	x x	x x				- 3		
6 溝14																x x	x x	x x				- 3		
5 溝51/52																x	x	x				- 3		
5 土21/22																	x	x	x			- 3		
5 土24																x	x	x			- 3			
5 土26																x	x	x			- 3 (~)			
5 溝50																x	x	x			- 3 (~)			
7 溝21																x	x	x	x	x	- 3 ~			
7 土9																x	x	x	x	x	(- 3 ~)			
7 溝20																x	x	x	x	x				
7 溝23																x	x	x	x	x				
7 井3																					- 1 ?	和 - 1		
6 溝12																					- 1 ?	和 - 1		

1 a・1 b・2 a...12 e : 土師質土器椀法量の領域を示し、表12と一致する。

遺構番号はその頭にはそれぞれ調査次番号を付した。

井 : 井戸 “ 篦磨き ” : 両面磨き（密） : 片面磨き 無 : 高台なし

土 : 土坑 : 両面磨き（普通～やや疎） x : 磨きなし

■ 遺構内に占める領域 ■ 遺構内で希薄な領域 ■ 復元個体から推定される領域

楠 : 楠葉型瓦器

和 : 和泉型瓦器

という構成が復元される。ただし、3c域の存在は安定的とは言えない。同時期は以下の3期に細分される。

- 1期は1a域あるいは1b域と3c域で構成され、2域・3域を含まない。つまり、丁寧で密度の高い籠磨きがなされる深い椀が安定的に確保されている段階である。 - 2期は1域に2域が加わる場合であり、やや低めで仕上がり感が少し粗雑になる椀が混ざっている段階である。本時期では、従来の研究成果に準拠し、口径がやや小さいb域をもつ場合を - 2a期、口径がやや大きくなるa域をもつ場合を - 2b期として区別した。ただし、その時期差については検討の余地を残す⁽²⁾。 - 3期は2域のみで1域を含まない段階であり、特に深くて丁寧な作りの椀が姿を消す時期と考える。

こうした期における時期の細分は、個々の遺物の差というよりは、特に深い椀を含むかどうか、あるいはやや浅い椀を含むかどうかという土器構成の違いによっている。そのため、実際にはなかなか不明瞭である点は否めない。その弱さを補うために、やはり、籠磨きの密度などの違いを合わせて検討することが求められよう。また、こうした状況を生み出す背景に、時間変化あるいは椀の使用状況などの影響を考えなければならないだろう。それが同時期の特徴とも言える。

期：3域が対応する。比較的大形で籠磨きが施される椀の特徴は期と同様であるが、器高は全体に低下し、籠磨きが片面にあるいは粗雑化する特徴が顕在化する点で期とは区別される

ここで、従来鹿田遺跡で設定していた時期との関係を説明しておこう。今回再考したのは、法量分布域が、3域と4域にまたがっている遺構に関する評価である。従来は、過渡期として「 - 2期」(以下、従来の鹿田遺跡設定時期は「 」を付して区別する)を設定していた。それに対して、前項でも述べたが、ここでは一時期というよりは、使用時期幅を示す継続性と評価し、それを期と - 1a期とに組み込むこととした(表14)。そのため「 - 2期」に対応する時期をここでは設定していない。ただし、期の中では後出的、あるいは - 1期では早い時期など、それぞれの中での時期差を考える十分あり得る。

期：4～6域、"7～9-a・b域"、"10～12-b・c域"を含む。籠磨きが施されない椀を基本とし、器高の低下と口径の縮小化がその間に進行する。時期細分は以下のようになる。

- 1期には4～6域が対応する。さらに、器高からの細分が遺構の状態から可能だと判断されるため、4域を - 1a期に、5・6域を - 1b期とした。前項で述べたように、両時期にまたがる遺構が多い中で第7次井戸2あるいは第1次井戸30はそれぞれの領域を示している。ただし、数量不足による不安定感は否めない。今後、資料的な補強が必要であろう。

ところで、 - 1期では、前段階の期から - 1b期にかけて、領域では3域～5域に他と比べると法量分布が複数にまたがる傾向が指摘される。それは、遺構の種類にかかわらず生じており、他の時期にはあまり看取されない状況である。その背景には、期とは反対に、椀における変化の早さを窺うことができる。

周辺遺跡を見ると、百間川当麻遺跡井戸3の資料は4b域に集中的であり - 1a期に、助三畳遺跡井戸4の場合は4～6域に広がりがあり、 - 1期との対応が想定される(山本1993)。

- 2期・ - 3期は、従来からの設定と一致する。
- 2期は"7～9-a・b域"にあたる。口径の小形化が顕著であり、比較的集中度が高い。周辺遺跡では、川入遺跡P9が一致する(山本1993)。

- 3期は"10～12-b・c域"に対応する。口径と器高そして高台を含む全ての要素が小形化する点に特徴がある。法量の領域は10c域に特に集中しており、集中度の高さは - 2期と同様である。ただし、遺構では器高が際立って低下する12c域のものを共伴しており、さらなる法量の低下も現れている。その他にも、11b域に属する無高台の椀もこの領域に含まれる。資料点数は少ないと、その評価は流動的であるが、こうした12c域あるいは11b域についての評価については、台付き椀と無高台椀の関係を整理する必要があるだろう⁽³⁾。今後、資料数の補強を進め再検討を行いたい。

表14 時期の対応関係

『鹿田5』(山本2007)	領域	実年代	『鹿田4』(山本1993)
- 1	1+(3c)	11世紀中頃～後半	- 1
- 2 a	1b+2(+3c)	11世紀末～12世紀初頭	- 2
- 2 b	1a+2(+3c)		- 3
- 3	2	12世紀前葉～中葉	
	3	12世紀後葉	- 1 - 2
- 1 a	4	12世紀末葉	- 1
- 1 b	5～6	13世紀初頭～前葉	- 2
- 2	7～9a～b	13世紀中葉	- 3
- 3	10～12b～c	13世紀後葉～14世紀初頭	
	10～12c～e	14世紀前半	

『鹿田4』との対応関係は特に - 期については分類基準がやや異なるため必ずしも一致するものではない。目安としたい。

期：“10・12-d・e域”を中心とする。高台が消失し、無高台の椀が主体となる。分析対象とした椀の終焉期である。周辺遺跡では、津寺遺跡土壙47が近い分布を示す（山本1993）。高台がない点も共通する。

c. 実年代との対応

共伴する瓦器あるいは東播系須恵器との関係を確認してみよう（表13）。

瓦器は、- 1期に楠葉型の - 1期、- 2a期に楠葉型 - 3期・和泉型 - 3期をそれぞれ含む。第2次地点溝8から出土した和泉型 - 1・2期については同溝の使用時期幅が - 2b期～ - 3期と想定され、瓦器は - 3期に属すると判断している。よって、- 3期では和泉型 - 1・2期、期では和泉 - 2・3期・ - 1期、- 1a期では楠葉型 - 3期・和泉 - 1期（2期？） - 1b期には和泉型 - 1・2あるいは - 3期がそれぞれ共伴する。

一方、東播系須恵器では、片口鉢の搬入が認められる。期・期には期2段階が、- 1a期には期2段階、- 3期には期2段階と考えられる鉢が伴う。

また、草戸千軒町遺跡の編年（鈴木1996）と対応させると、- 2期は草戸期前半に、- 2～3期が同期後半に、- 3期に同期前半～期後半古段階が、期に期後半新・最新段階の口径がそれぞれ近い分布を示す。

以上の諸関係あるいはこれまでの陶磁器類などの検討結果も踏まえて実年代をあえて提示するならば、以下のようにになる。- 1期が11世紀中頃～後半、- 2期は11世紀末～12世紀初頭、- 3期は12世紀前葉～中葉、期は12世紀後葉、- 1a期が12世紀末葉、- 1b期が13世紀初頭～前葉、- 2期が13世紀後中葉、- 3期が13世紀後葉～14世紀初頭、期が14世紀前半をそれぞれ目安とすることができるのではなかろうか（表14）。- 3期については、法量分布を見ると - 2期と - 3期の間にやや空白が見いだせることから、その間にもう1段階を設定することも可能であろう。ここで取り扱った鹿田遺跡の資料は、実年代としては、やや新しい13世紀末葉～14世紀初頭の遺物が中心をなすと推定されるが、今後、同時期の細分を考えていきたい。

実年代との関係は、瓦器の年代観あるいは木簡などの共伴遺物に頼るものであり、基準資料の間に各設定時期の資料を機械的に当てはめている。前述したように、外見的に見いだせる椀の変化が、必ずしも一定の時間幅の中で進行した根拠はない。各時期の時間が均等に推移するとは必ずしも言えないわけであり、こうした実年代については、絶えず流動性をもつことはやむを得ないことであろう。今後、この分析データをたたき台とし、周辺遺跡等との検討を詰めていくことによって、検証・修正を行いたい。

(5) まとめ

集落構造を考える前提作業として、古代末～中世前半の土器について見直しを行った。法量分布を広い範囲で一括する方法を見直し、5mm前後の単位で設定した狭い領域の組み合わせによって、遺構から出土する椀の実態を把握しようとする試みであったが、資料的に不十分な面も多い中での作業であり、今後、補強しつつ検証を進めることは欠かせない。そのほかに、一期に見られる小形椀の問題は吉備系土師質土器椀の成立期を理解する上で注目される。その他に、土師質土器椀の法量あるいは形態の変化が時間によって均質ではなく、時期によって異なる点も注意される。こうした背景には何があるのかなどの疑問も今後の課題である。また、編年作業で避けて通れない実年代との対応関係もさらに検討していく必要があろう。

ここでは、一応、遺構の併行関係をおさえることはできたように思える。今後は、こうした問題点については、他の地点での良好な資料も期待できることから、改めて提示することとする。

(山本悦世)

註

- (1) 既存の研究では、椀の法量変化と箇磨きの変化を指標としている。その表現方法としては、遺構ごとの分布範囲を大きくくくり、その分布域の位置関係を比較する方法あるいは口径値の度数分布を比較する方法などが中心である。法量分布域の比較では、かなり幅広い分布域が示されることが多いため、時期が異なる遺構が互いに重複する部分も広くなり、遺構の併行関係を考える上では、やや不都合な場合もある点は否めない。
- (2) 1a域と1b域遺物が出土する地点をみると、第1次地点とその他の地点とに分離する状態となる。特に、広範囲な調査域で遺構数も確保される第1次地点で、1a域の遺物が出土しない点の問題が残る。近接した時期と理解される。
- (3) 草戸千軒町遺跡の編年では、無高台タイプ(椀A)の出現を高台が極端に縮小した段階の一期前半に初現を求めており(鈴木1996)、同時期の口径分布は鹿田遺跡では10～12c域にあたり、-3期にはほぼ一致しており、無高台椀の共伴は矛盾しない。

参考文献

- 神谷正義 1981「高台付椀に関する二・三の整理」『三手(庄内幼稚園)遺跡発掘調査報告』
 篠原芳秀 1982「尾道市浄土寺出土の土師質土器」『草戸千軒』114
 尾上 実 1983「南河内の瓦器椀」『古文化論叢』
 馬場昌一 1984「岡山県助三畠遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』第4号
 鈴木康之 1988「鹿田遺跡出土の中世土器について」『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1冊
 山本悦世 1993「吉備系土師器椀の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
 草原孝典 1993「中世土師質土器について」『小丸山(中山中)遺跡発掘調査報告』
 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』
 鈴木康之 1996「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』

鹿田遺跡第1次調査～第7次調査の文献・挿図出典

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988『鹿田遺跡』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
2. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1990『鹿田遺跡』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
3. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
4. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
5. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊

2 . 中世の集落構造と推移 鹿田遺跡の場合

中世前半期の集落は、11世紀以降、12世紀～14世紀に継続する傾向が強い。鹿田遺跡はまさにその時期に営まれた集落である。ここでは、前項で設定した時期^①（表15）に即して、遺構の同時性に注目し（表16）、中世前半期における集落の実態を鹿田遺跡から探ることとする。

（1）鹿田遺跡における屋敷地の構造

岡山大学の敷地内では、2006年度までに17回の発掘調査を行っており、敷地全体の様相が徐々に判明してきている。その中で、これまでに報告された第1次調査～第8次調査の成果を中心にとりあげたい。地点としては、第1次調査地点と第5次調査地点は接していること、第6次調査地点と第7次調査地点は近接した位置関係にあることから、それぞれ同一地点として扱うこととし、第1・5次調査地点、第2次調査地点、第8次調査地点、第3次調査地点、第6・7次調査地点の5ヶ所にまとめる（以後、1・5次地点・2次地点……と略す）。

後世の破壊の影響を強く被る鹿田遺跡では、屋敷地のなかで中心的構造物となる掘立柱建物など、比較的掘削規模が小さい遺構の残存率が低く、良好な資料を求めるることは難しい。それに対して、地下深くに掘り込まれる井戸あるいは溝は、その位置を確実にとらえることができる点で貴重な遺構である。また、井戸と掘立柱建物とのセット関係も指摘できる（山本1990）ことから、井戸の位置あるいはその数から、屋敷地の様相を推し量っていきたい。

遺構の継続性をみると、一期以降 - 3期にかけて連綿と井戸を形成し屋敷地の継続を示す1・5次地点、集落の存続時期からすると、途中から、つまり一期以降に屋敷地が形成され、その後継続する6・7次地点、初期段階の一期に成立しつつも二期には廃絶される3次地点が確認され、地点によって異なる継続幅を示す（表16・17）。

2次地点・8次地点については、調査面積の狭小さから井戸や土坑の分布の有無が確定できないため、屋敷地の構造に関する議論からは外しておきたい。ただ、両地点では溝が主たる遺構として検出されており、区画の問題では重要な地点である。

次に、個々の屋敷地について、その構造を整理しよう。

a . 個別地点の様相

第6次・第7次調査地点（図146、表16・17）

本地点では一期～二期の遺構が検出される。溝は、E15°S方向（以下、東西方向と略す）とN15°E方向（以下、南北方向と略す）で構成される。

一期では、T字状の位置関係を示す溝（6次地点溝10・17、7次地点溝6）が中心的な遺構である。東西方向を示し、一致したライン上に位置する溝10と溝6の長さは59mを測り、東端は7次地点、西端は6次地点で収束する。南北方向（溝17）では、6次地点で北から延びて東西溝の西端付近で収束する。いずれも端部が収束する点が特徴である。6次地点溝10と溝17の間は約8mの幅で空いており、通路の可能性が考えられる。溝6では明瞭に掘り返しが確認されており、一期の遺物は古段階の溝に含まれる。その後、このT字形を呈する溝は、

- 1a期の比較的早い段階に埋没することが出土遺物から確認されている。その他に、同時性の可能性がある溝として、7次地点溝7～10があげられる。いずれも収束した端部を有する。溝10と溝6・7の間は35m、溝9と6次溝17の間は、その数値の約2倍に近い172mを測り、一定の基準による区画が想定される。

表15 設定期と実年代

- 1 期	11世紀中頃～後半
- 2 期	11世紀末～12世紀初頭
- 3 期	12世紀前葉中葉
期	12世紀後葉
- 1 a 期	12世紀末葉
- 1 b 期	13世紀初頭～前葉
- 2 期	13世紀中葉
- 3 期	13世紀後葉～14世紀初頭
期	14世紀前半

考 察

表16 遺構と椀の法量領域(地点別)

調査地点	遺構番号	1a	1b	2a	2b	2c	3a	3b	3c	4a	4b	4c	5a	5b	5c	6a	6b	7a	8a	8b	9a	10b	10c	11b	12c	10d	12d	12e	時期
1次	5土15																											- 1	
5次	1井21			.					x																			- 2 a	
	1井22																											- 2 a	
	1井27																											- 2 a	
	5井4			.																								- 2 b	
	5溝34/35																											- 3	
	5井5																											- 3	
	1井26																											- 3	
	1井23																											(?)	
	1井28																												
	5井6																												
	1井24																												
	5土16(墓)								x																				
	1溝70																	x										- ~ - 1 a	
	1溝71							x										x	x									- ~ - 1 a	
	1井29																	x	x	x	x	x						- 1 a ~ 1 b	
	5溝37																	x	x	x	x	x						- 1 a ~ 1 b	
	5溝38/39																	x	x	x	x	x						-(1 a ~) 1 b	
	1井30																	x	x									(- 1 a ?)	
	1井25																												
	1井31																	x	x									- 2	
	5溝48																	x										- 2	
	1井33																											(- 2 ?)	
	5井7																											- 3	
	5溝51/52																											- 3	
	5土21/22																											- 3	
	5土24																											- 3	
	5土26(墓)																											- 3(~)	
	5溝50																											- 3(~)	
	1井32																											(- 3 ~ ?)	
2次	土123		x																									- 2 b	
	溝8																											- 2 b ~ - 3	
	溝19																											(- 2 b ? ~) - 3	
	井5																x	x	x	x	x						- 1 b		
	井6																	x	x									- 2	
	溝11																	x	x									- 3	
	溝15																												
8次	溝3																											- 3 ~	
	溝4		x																									- 3 ~	
	溝7																	x										- 2	
3次	土13			x																								- 2 a	
	溝7			x																								- 2 b	
	井1			x																								(- 2 b ?)	
	井2			x																								- 3	
	溝8																												
	土7(墓)																											(?)	
	土8(墓)																												
6次	6土2			x																								?	
7次	7溝6				x												x	x									- ~ - 1 a		
	6溝10					x																						- ~ - 1 a	
	6溝17						x																					- ~ - 1 a	
	7井2																x											- 1 a	
	7井3																	x										-(1 a or) 1 b ?	
	6土4						x											x	x									- 1 b	
	6溝11							x										x	x									- 1 b	
	6溝16							x										x	x									- 1 b	
	6溝15					x												x	x	x	x	x					(- 1 b ~ - 2 ?)		
	6溝12																		x	x	x	x	x						
	6井1																x	x	x	x	x						- 2		
	7溝19																x	x	x	x	x						- 2		
	6溝13																x	x	x	x	x						- 2 ~ 3		
	6溝14																	x										- 3	
	7溝21																	x	x	x	x	x	x	x	x	x	- 3 ~		
	7土9																	x	x	x	x	x	x	x	x	x	(- 3 ~)		
	7溝20																	x	x	x	x	x	x	x	x	x	(- 3 ? ~)		
	7溝23																	x	x	x	x	x	x	x	x	x			

1 a · 1 b · 2 a ... 12 e : 法量の領域を示し、その数値は表1に示している。

その他の凡例は表13(149頁)に準ずる。

遺構番号は1次5次調査地点、6次7次調査地点についてはそれぞれ調査地点番号を付した。

出土遺物情報の不足を遺構の重複関係等の情報で補い、時期を調整した遺構は時期の項目で(?)付きとした。

井：井戸、土：土坑 ■ 遺構内に占める領域 ■ 遺構内で希薄な領域 ■ 復元個体から推定される領域

表17 地点別構造の推移

(遺構数)：遺物情報の不足を遺構の重複などから補って判断した遺構数。 EW・SN・L字・コ字：溝の方向を示す。

存在する可能性が考えられる。 : 同時期の数、付していない場合は、数字が同時期を示す。

期の遺構は、その他に土坑が1基報告されるが、井戸は未確認である。柱穴群については、東西溝の上部に重複するものが多く、出土遺物は一期に属するものが大半を占め一期の溝に伴う柱穴などの遺構は極めて少ないが、溝内から出土する遺物は比較的豊富であることから、調査区の南側に屋敷地が広がることが予想される⁽²⁾。

- 1期には、7次地点に井戸2基が形成される。1基（井戸2）は、- 1a期に属し、前述の7次地点溝6と時期的に重複する。しかし、井戸から出土する椀の法量は、同溝から出土する椀の最も小形の領域となることから、同井戸は、溝の埋没後、比較的早い段階に利用・廃棄されたと判断される。それに続いて、もう1基の井戸（井戸3）が近接して作り替えられる。その時期は、詳細な時期は決めがたいが、井戸2に連続する時期から新たな溝の形成期としておさえられる - 1b期の間に求められる。- 1b期には6次地点で南北方向の溝が、溝11から溝15・16へと、ごく近接したライン上に継続的に形成される。

- 2期には、6次地点に井戸1基（井戸1）のほかに、6次地点の南北方向の溝13、7次地点で東西方向の溝19が残される。両溝から出土する椀の領域幅はほぼ一致することから、同一溝と判断され、屈曲したコーナーをもつL字形（あるいはT字形）となることが想定される。規模は一期の溝と大差はないが、端部が収束する部分は確認されない。より閉鎖性をもつ区画としての特徴が窺われる。

この溝の位置は - 3期に踏襲されるが、- 3期から 期にかけて、6次地点溝13そして同溝14、7次地点溝20・21に見られるように、溝は大形化し、L字形からコの字形の平面形へと展開する。7次地点では、幅4m、深さは1mを超える部分も認められる。こうした溝による区画は、溝の芯芯間で東西69mを有し、大溝で囲まれた閉鎖的な屋敷地を形成する。この状態は 期の溝（7次溝23）に継続する。

また、柱穴群は溝に囲まれた屋敷地の中でも、7次地点井戸2・3の位置より南側の空間に広がる。柱穴の中には、直径と深さの規模が大きいもの・礎石状の石を底部付近に残すものなどが含まれる。これらは分布域の南寄りに偏在する傾向をもつ。柱穴からは - 1~3期の遺物が出土することから、東西軸を持つ同時期の掘立柱建物の広がりが想定される。つまり、掘立柱建物には規模あるいは構造が異なるものが含まれ、より大形の建物は柱穴分布域の中でもやや南より、屋敷地を復元するならば、中心付近に位置しているといえるのではなかろうか。井戸は - 1期と - 2期に確認されるのみである⁽³⁾が、こうした柱穴群の存在から屋敷地の継続が予想される。

遺構の配置では、井戸は掘立柱建物分布域の端部で、溝に近接した位置にある。掘立柱建物分布域と溝との間

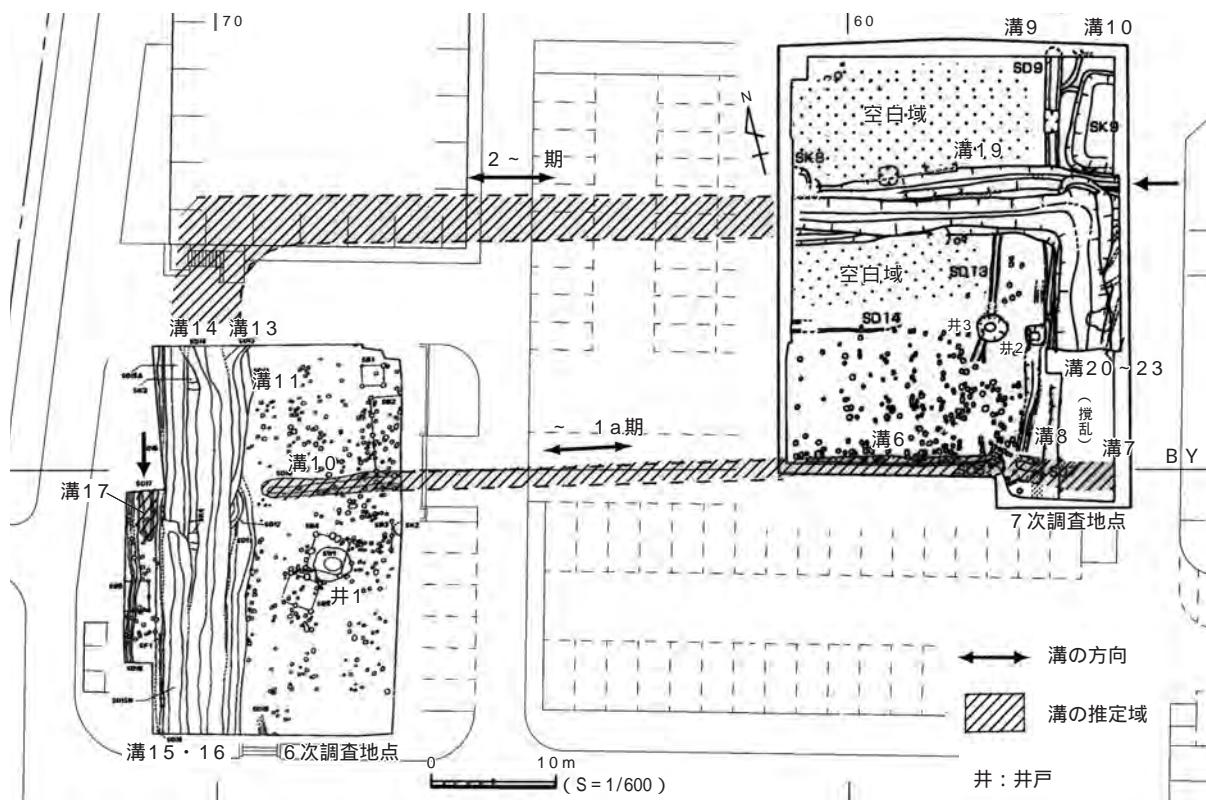


図146 鹿田遺跡第6・7次調査地点遺構配置(文献4・5に加筆)

には構造物が残らない空白域が東西方向に広がり、溝の南側、屋敷地側では幅7m、溝の北側は幅10mを測る。作業場あるいは耕作地のような機能が考えられるが、いずれにしても屋敷地の空間利用を示す点で注目される。

第1次・第5次調査地点(図147、表16・17)

鹿田遺跡の継続期間を通じて、屋敷地が連綿と営まれる数少ない地点であるが、後世の削平によって、本来求められる掘立柱建物などは多くが消失している。全体の遺構配置を見ると、井戸の集中をA群域～E群域の5ヶ所に見出すことができる。B群とC群に関してはさほど離れた状況とは言い難いが、溝70の存在を考慮した。

期には、井戸は - 1期から - 2期(1次井戸21・22・27、5次井戸4)へ、その数を3～4基に増加させる。その中で、C群域に位置する1次地点井戸21と同井戸22は近接する位置関係にあり、作り替えが予想される。両井戸とA群域の1次地点井戸27、そして5次地点井戸4は20～30mの距離を保っており、ごく近い時期には3ヶ所に各1基が配される状況が復元される。 - 3期には、A群域とE群域にそれぞれ1基の井戸(1次地点井戸26、5次地点井戸5)と東西方向の溝(5次溝34・35)がセット関係をなす。両井戸は同溝を挟んで配されており、その間隔は56m程度である。5次地点では溝の南5m程度の位置に、1次地点では溝からは25m程度離れる。溝による敷地の区画として評価される。以上のように、期には2～3単位の生活単位が想定され、区画溝の出現は - 3期に求められる。

期には、1次地点に明瞭な区画溝が位置を変えて形成されている。L字形(あるいはT字状)をなす1次地点溝70と溝71である。その区画幅は、南北方向の溝70のラインから調査区東端までの48m以上が確保される。溝70では溝の掘り返しが確認され、古段階と新段階に溝が重複すると理解される。その他の遺構としては井戸と土壙墓1基(5次調査土坑16)があげられる。溝とほとんど重複する1次井戸23・5次井戸6を除くと、1次地点井戸24・28の2基が同溝とセットになる。井戸24はA群域に、井戸28はB群域に属し、その間隔は約27mを測る。この段階に区画内の井戸の数は2基となっており、2つの生活単位の存在が窺われる。土壙墓は南側の区

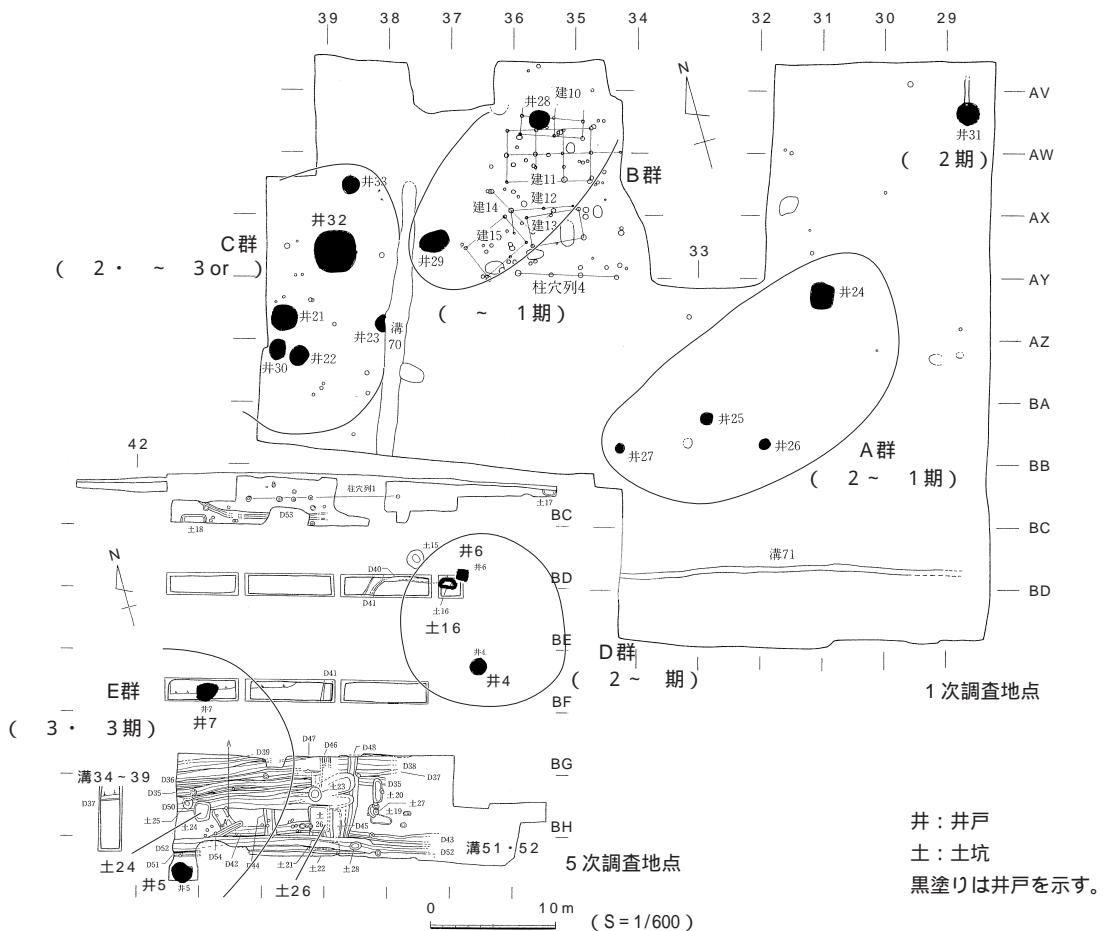


図147 鹿田遺跡第1・5次調査地点遺構配置(文献1・3に加筆)

画ラインを構成する1次溝71に近接する。屋敷墓(橋田1991)の出現として評価されよう。

- 1a期に入ると、早い段階に溝70・71は廃棄される。次の段階となる - 1a～1b期には、溝は再び南側の5次地点に移動し(溝37～39)以後継続的に掘り返しながら利用される。こうした推移は6・7次地点と共に通する点が多い。同時期には2基の井戸(1次地点井戸29・30)が含まれる。B群域とC群域にそれぞれ1基である。A群域には認められることになるが、1次地点井戸25が - 1期に属する可能性があることから、少なくともA・B・C群域では - 1期を通じて井戸が継続したと理解できる。

- 2期では、井戸はA群域から北東のやや離れた位置に井戸1基(1次地点井戸31)そして出土遺物の全体的特徴から本時期に属するとされる井戸1基(1次井戸33)がC群域に配される。両井戸は約50m程度離れる。

- 3期では、井戸1基(5次地点井戸7)がE群域で確認されるのみで、遺構は全体的に希薄となる。溝は、前段階の東西溝がやや南側へ位置を移動し(5次地点溝51・52)継続する。規模は幅1m前後で、それまでの溝と比べて変化はない。溝周辺には墓の可能性を持つ土坑(5次地点土坑26)が点在する状況も一期に引き継がれる。ただし、本時期は細分が予想され、井戸と土坑が同時期であるかどうかは、今後検討が必要である。

次の段階の井戸は、C群域の1基(1次井戸32)にその可能性を想定した。遺物の特徴や構成あるいは井戸の規模の違いなどからである。しかし、無高台の椀は明確ではなく、 - 3期末～一期の時期幅の中で考えたい。この段階で、前段階に認められる遺構密度の低下は顕在化し、屋敷地は終焉を迎える。

このように本地点で認められる井戸集中域の中でも、A・C群域については一期～二期に継続的な井戸の構築が行われており、そこには自ずと屋敷地の存在が導き出される。また、一期～ - 1期の井戸が確認されるB群

域は、やや後出の屋敷ととらえられる。D・E群域については、井戸の数が少なく、時期は一期・二期あるいは三期・一期であり、相互補完的な状況を見せる。その評価については慎重を期したいが、少なくとも生活の場の広がりを示していることは確かである。それぞれの群域がある程度の距離を持ちながら配されており、本地点では、時期を通じて少なくとも3~4ヶ所の生活単位が想定される。また、L字溝と同じ一期~一期a期の遺物を出土する時期に限定するならば、少なくとも2区画の屋敷地があり、その北東区域内には2単位の生活単位が存在した状況を描き出すことができる。

3次調査地点(図148、表16・17)

3次地点は、鹿田遺跡の東南隅に位置する。一期~一期の初期段階に、比較的短期間で姿を消す屋敷地という点で、他とはやや異なる特徴を持つ。

屋敷地が形成されるのは一期~2b期からと考えられる。南北方向の溝(溝7)の西側に井戸1基(井戸1)・土坑1基(土坑13)が位置する。井戸は溝に近接する。続く1~3期~一期ではコの字に区画された屋敷地が復元される。東西方向の溝8・11と南北方向の溝12が、その区画溝と判断される。前段階の溝7が東側に作り替えられ、直線的に整えられた状態である。溝の端部はいずれも収束する傾向を見せ、開放的な区画となっている。南北に位置する溝8と11の距離は36mを測る。そして、この区画溝は一期に埋没する。

それぞれの時期に対応する掘立柱建物は、溝の方向に軸を揃えて復元される(山本1992)が、その位置は全体

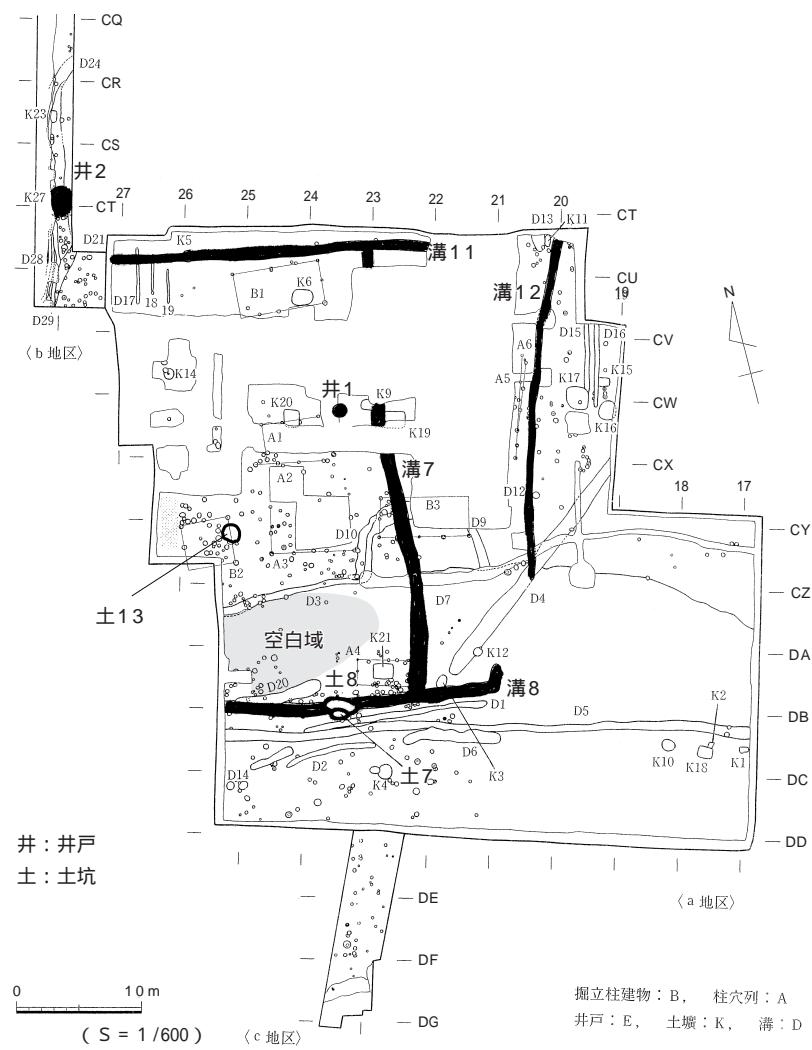


図148 鹿田遺跡第3次調査地点遺構配置(文献2に加筆)

には区画の北半部に偏在しており、南側を画する東西溝（溝8）と掘立柱建物群との間には約8m前後の空白域が確認される。また、最終段階に形成される土壙墓2基（土坑7・8）は、溝8の上部に重複しており、屋敷地の南端部に一致する。

b . 屋敷地の構造

3次地点では一期の様相、1・5次地点では～期の様相、6・7次地点では一期～二期の様相について、より具体的に説明することとなった。それらを参考に全体的に屋敷地の構造をまとめよう。

区画溝による屋敷地の設置は、-2b・3期からはじまり、敷地全体に広がるのは一期である。区画溝で仕切られた屋敷地は、掘立柱建物・井戸・土坑・柵などの構造物で構成される。井戸は各時期1基ないしは2基が形成される。同時併存する井戸は、1次地点に見られるように、一定の距離を保つ。それは生活単位の場に応じたものとして捉えられる。井戸の位置は溝の縁あるいは建物群の端部に配される傾向を持つことは、3次地点や6・7次地点で窺われるが、必ずしもそれに限るわけではない。土壙墓は、1次地点や3次地点の状態から、その位置に溝との関わりを見ることができるが、屋敷地の端部としての意識と理解される。掘立柱建物群は、3次地点あるいは6・7次地点で確認される空白地域の広がりに注目すると、区画内全体に広がるのではなく、やや偏った位置に建物群を配し、その前面には溝との間に何らかの作業空間が存在したことを窺うことができる。その機能については耕作地あるいは通路などがあげられるが、いずれにしても屋敷地内の空間利用を考える上で、注意しなければならない。

c . 各屋敷地の特徴

区画溝が敷地全体に整備された状態を示す一期には、こうした構造をもつ屋敷地あるいは生活の単位は、1次・5次地点で2区画に2～3ヶ所、3次地点で1～2区画、そして6次・7次地点の南側で1～2区画が存在した可能性があり、全体では少なくとも4～6区画は数えられる。それらの中で、広い区画を有する1次・5次地点では、1区画の規模は約50m+と考えられ、溝を挟んで少なくとも2つの屋敷地が東西に配される。一方、南東端に位置する3次地点のように、区画規模が36mとやや小規模であり、短期間で姿を消す屋敷地も認められる。しかし、1単位の屋敷地の構造については、1・5次地点と共通する点は注意しておきたい。6次・7次地点の南側も興味深い。そのほとんどが調査範囲外であるため詳細は不明であるが、溝の形状は非常にしっかりしたものであり、その後の展開を見ると1次・5次地点とさほど差のない屋敷地が存在する可能性を有す。屋敷地の広さの違いからは、機能的な違いも考えていく必要があるが、屋敷地を形成する個々の構造物の規模や配置に、大きな差がない点から、それは屋敷地間の格差というものとは異なると考えられる。

期には、-2期以降に生まれる変化が-3期に顕在化する。それが顕著に現れるのが6・7次地点の屋敷地である。同地点の区画溝の推移に注目してみよう。～期の溝はいずれの地点でも端部が収束する傾向が強く、区画される空間も開放性が高い点で共通した特徴を示す点は、同地点においても同様である。それに対して、一期に新たに形成される溝は、閉鎖的空间を意識したものであることが、収束した端部をみせない一連の溝の形態から予想される。それが最も明確になるのは-3期～期である。溝の規模は平均的に3m前後、一部では幅4m以上におよぶ。深さは平均1m前後が保たれる。全体像は確認できないが、コに字形に囲まれた空間を作り出していることは十分に予想される。このように東西幅約69mを測る屋敷地を取り囲むように巡る溝は閉鎖性を高めた空間を創出している。こうした6・7次地点の溝形態は、それまでにないものである。一方、1次・5次地点では、-3期における溝の大形化は認められない。逆に、遺構の希薄化への動きを見せ、屋敷地としての終焉へ向かう。

以上のように、各屋敷地の特徴からは、一期～二期において、集落全体に比較的均質な屋敷地が配される景観が復元されるのに対して、-2期以降、その均質性は解体化へと向かい、6・7次地点に見るように、-3期～期には、一部に力が集約されていくような格差が顕在化するという大きな変化を読み取ることができる。

(2) 区画溝の設置

これまで集落の推移を検討する中で、区画溝の問題を折に触れて述べてきた。ここで、敷地全体に区画の跡を残す期の区画溝を中心に設置基準を考えたい。それに当たっては、まず、鹿田遺跡が立地する微高地周辺の旧地形を復元しておこう。

a . 旧地形と屋敷地（図149）

これまで発掘調査が実施された地点は、ほとんど微高地上にあたっているが、その周辺部については、どうであろうか。旧地形を復元するためには、いくつかの地点の試掘調査あるいは立会調査によるデータを利用することができます。鹿田遺跡の北端部にあたる1次地点の北側～北東部では、試掘調査あるいは小規模な発掘調査が行われており、かなり広い範囲に河道あるいは谷状地形が広がることが報告されている。その時期は弥生時代にまで遡り、中世段階にも1次地点からかなりのレベル差が指摘され、耕作地としての利用が一部で想定される（山本1987a、高田2006）。

一方、南端部付近にあたる3次地点の南側～南東部には、現在も用水路が走っているが、3次地点の南側に位置する第4次調査では、東北から南東に走ると予想される河道の存在が確認されている（大橋1990）。また、岡大の敷地境に走る用水路の壁面観察を行った立会調査からも、3次地点の北東部から南側は谷地形になることが想定されている（山本1987b）。

こうしたデータから、北側では1次地点に比較的近い位置に微高地端部が、そして、南側では3次地点の端部付近からは河道あるいは谷地形が広がる状態が復元される。東側に関してもさほど東への広がりは求められない。つまり、南北330m程度の微高地上に集落が形成されていたと考えられる⁽⁴⁾。

b . 溝の設置基準

期の区画溝は、8次地点の溝3・4（東西方向）を除いて、それ以外の地点で新たに位置を変えて形成される。1次地点でL字あるいはT字状を構成する溝70（南北方向）と溝71（東西方向）、3次地点ではL字形となる溝7（東西方向）・溝11（東西方向）・溝12（南北方向）、6・7次地点では途切れたT字状を示す6次調査溝10・7次調査溝6・7（東西方向）と6次地点溝17（南北方向）、そして7次調査溝8・9（南北方向）と溝10（東西方向）である。以上の溝の位置から、東西方向に5ヶ所、南北方向に4ヶ所の区画線を求めることができる（図149）。

東西方向では、区画線1（1次地点溝71）から南に向かって、区画線2（8次地点溝4・7次調査点溝10）までが約74m、区画線3（6次地点溝10・7次地点溝6）までが約106m、そして、区画線3から区画線4（3次地点溝11）までが約108m、区画線4から区画線5（同溝8）までが約38mを測る。この数値のなかで、区画線1から同3までの約106m、区画線3から同4までの約108mという数値が注目される。この値は多少幅があるが、1町を108mと考えると、1町の単位にほぼ一致あるいは近い値と評価できる。それ以外の区画線間距離で計測された32m・38mの数値は、1町の1/3（36m）の値と相前後する。こうした数値を積極的に評価すると、1町の区画を行い、その中をさらに1/3に区切るという基準が浮かび上がってくる⁽⁵⁾。

では、北端部はどうであろうか。旧地形から1次地点の北側には、微高地の落ちが設定される。屋敷地の北端ラインが、1/3町の距離にないことは調査範囲内で確認されている。また、旧地形の復元からは1町までの広がりを北側に求めることはできない。こうした状況から、1次地点の屋敷地の南北幅を1/2町（54m）に想定することは可能である。この数値は、前述した1次地点の区画幅が50mは確保できるという点と矛盾しない。

南北方向の区画はどうであろうか。東端部にあたる区画線6（3次地点溝7の屈曲位置・同溝12）から西端の区画線9（6次地点溝17）までは約254m、区画線7（1次地点溝70）までは約87m、区画線7から区画線8（7次地点8・9）までは約95m、区画線8から同9（6次地点溝17）までは約72mである。区画線8と9の間は2/3町の数値を示すが、それ以外は不規則であり、東西方向に見られるような規格性の広がりは認めがたい。

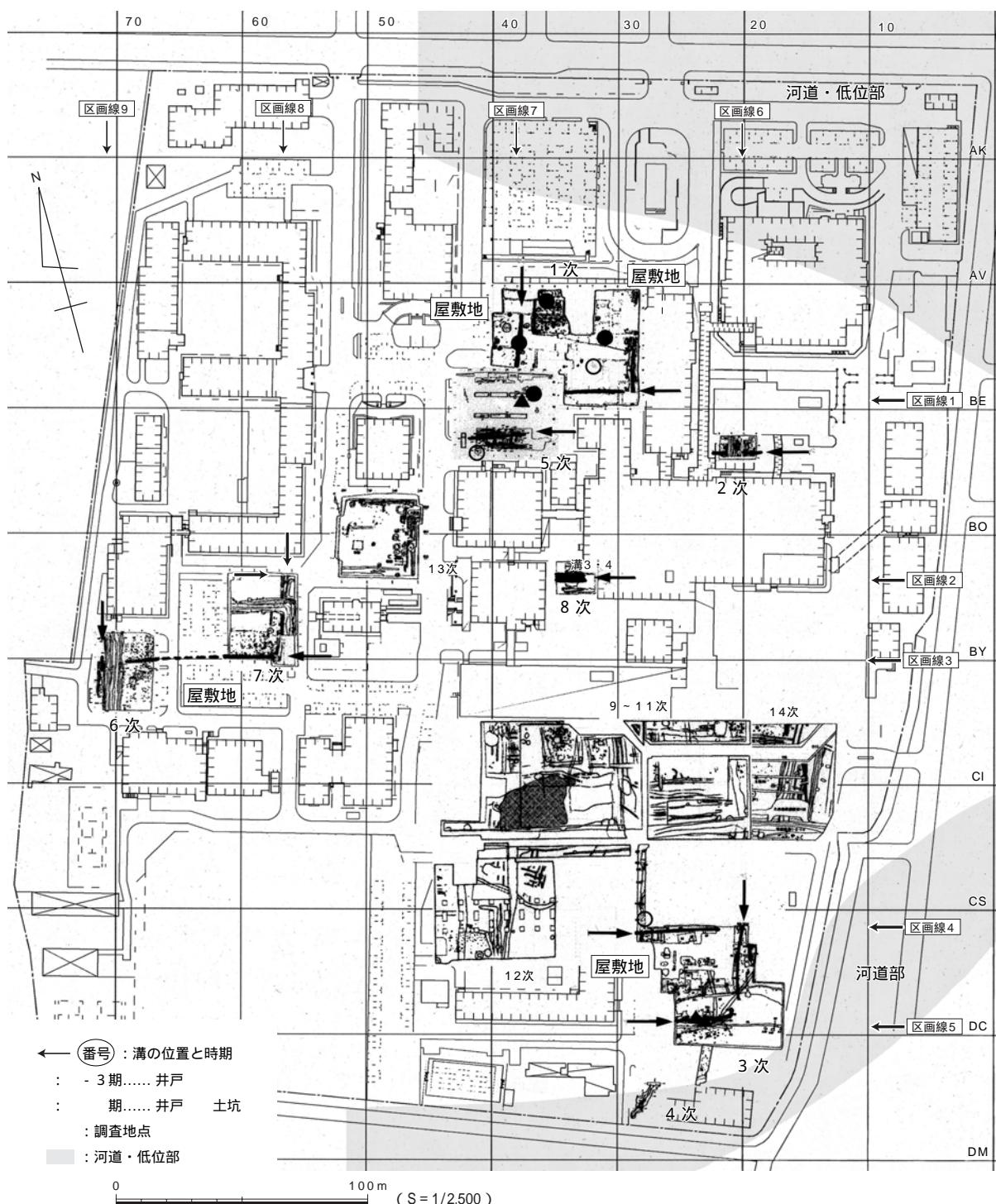


図149 鹿田遺跡遺構配置と区画 1(- 3 ~ 期)

こうして設定された区画は、すべてが居住する屋敷地として利用されているわけではないことは、遺構の粗密から窺うことができる。その詳細は、第9次～13次調査の報告に譲りたいが、建物などの構造物が建つ部分と、耕作地あるいは低湿地部などの配置が、一定の基準で区画された空間に配されるという景観が予想される。

このように、一期における溝は、ほぼ軌を一にして設置され廃棄される点、端部が途切れるという形態的共通性、東西方向の区割りに際して1町の単位が意識されていることなどから、敷地全体に計画性をもって設置され

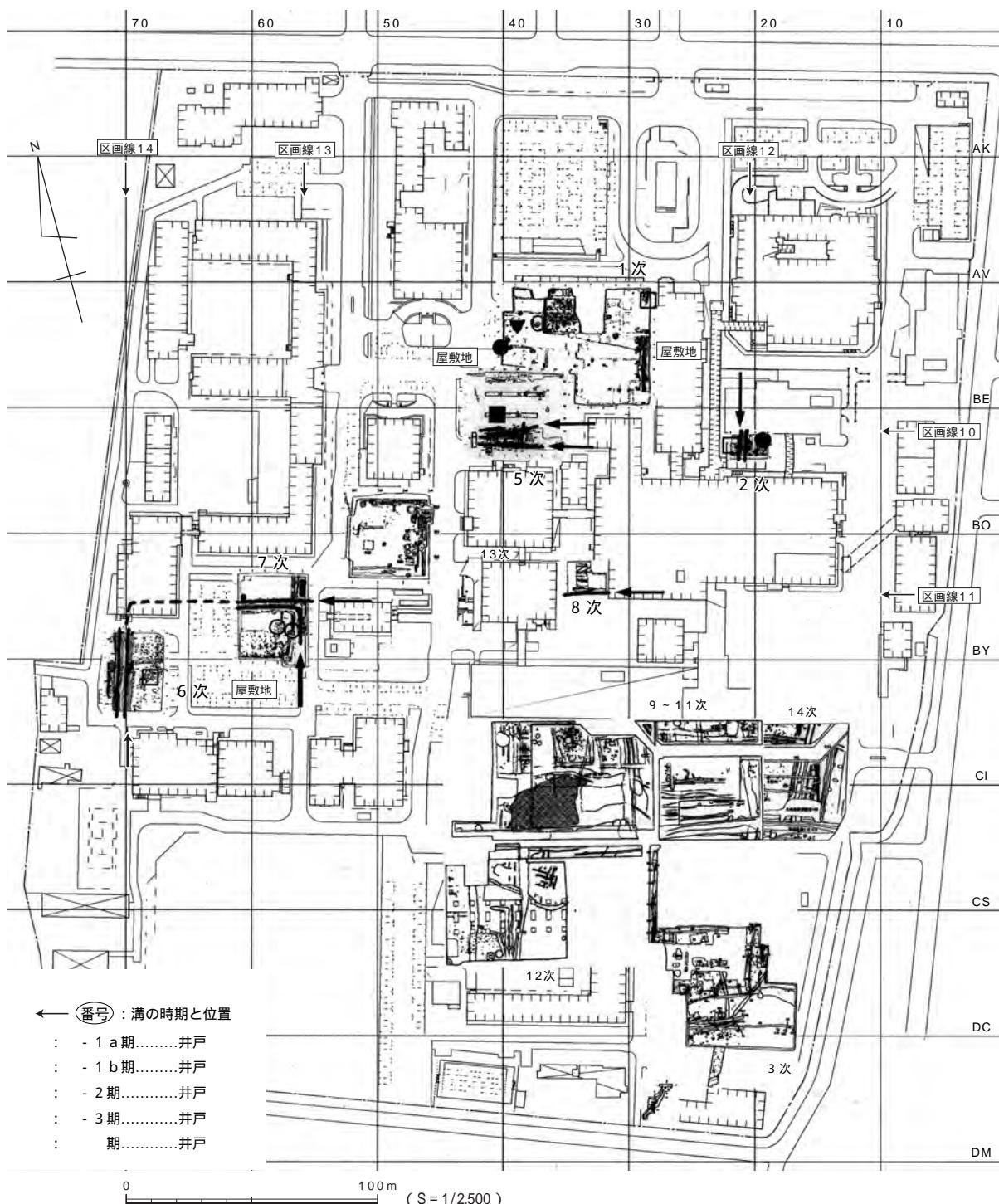


図150 鹿田遺跡遺構配置と区画2(· 期)

たことが窺われる同時に、均質的な区分である点も指摘しておきたい。

一方、一期での新たな溝の区画については5ヶ所で確認されるが、検証資料に乏しいため、一定の基準は見出せない。その中で、コの字形へと展開する6・7次地点では、区画線13と同14の間隔が約69mを測る(図150)。この規模は、他地点では認められない広さであり、溝の形態についても張り出し部を有するなど、その違いは同地点で如実に現れている。一期の開放性の高い区画から閉鎖性を高めた区画へという溝へ変化が、規模の大形化

と連動して進行している点も注目される。

(3) 集落の推移にみる画期

以上、集落の推移と集落構造そして敷地の区画状況について検討を行った。その結果、以下の2時期に画期の存在を指摘することができる。

第1の画期： 期～ - 1a期に求められる。簡単に言えば、土地区画の基準が変化する形として現れる。古代的な集落構成からの転換期と評価したい。

期を中心に認められる集落構成は、1町(108m)を基準とした東西区画によって敷地を区分し、その中に屋敷地を配するという空間構造を示す。区画溝は断続的であり、開放型の屋敷地が形成される。いずれの地点も溝の規模などは類似した状況を保つ。現状では6ヶ所程度の屋敷地が集落を構成すると見られ、敷地全体に配される。 - 1a期には、前段階とは異なる基準での区画が設定されることが予想される。その過程において、屋敷地の再編が進む。

この時期の変化は土師質土器椀の推移からも傍証されよう。 ~ 期の同椀は、深くて大振り、そして磨き上げた白い椀という特徴を強く意識したものである。それに対して、 - 1期には、器高が低下し、籠磨きが消失していく。また、同時期の特徴として、各遺構から出土する椀の領域構成が複数の領域にわたっており、椀の形態変化が急速であった可能性があることは前項で述べた。そして、 - 2期以降はその変化は一定の方向性のものでまとまりを見せ始める。こうした椀の変化は、集落の動向と時期が一致する。 期～ - 1a期の時期において、古代から中世へ、質的变化が器の使用形態あるいは生産形態にもおよんでいると考える。こうした評価は小皿でも指摘される(松木1993)。

第2の画期： - 3期～ 期である。特定の屋敷地には周囲から隔絶するかのような屋敷景観が生まれ、集落内の格差の存在を暗示する。

古代以来、敷地内の中核部に位置し、連綿と屋敷地が継続的に営まれてきた1・5次地点の屋敷地は終焉へ向かう。一方、6・7次地点では、区画溝は飛躍的に大型化する。その残存規模は幅3～4m以上、深さ1m以上を測り、堀ともいえるような溝をめぐらせた閉鎖性の高い屋敷地は集落内で際立ったものである。ここでは、特に溝に注目してその差を述べたが、出土遺物からも、こうした見解の妥当性が指摘できる。

6次・7次地点からの出土遺物で、特記すべきものをあげると、輸入陶磁器類、銅鏡、板碑、猿形木製品⁽⁶⁾、瓦などがあげられる。輸入陶磁器類は6次地点の溝を中心に出土するが、他の地点と比較してもその質量は豊富である。銅鏡あるいは板碑を思わせる遺物そして瓦の出土量、さらに、7次地点の溝から出土した猿形木製品(岩崎2007)という特異な遺物などは特に注目されよう。同地点では、ごく一般的な屋敷地の枠を超え、居館(広瀬1986)あるいは寺社関連の屋敷地としての機能も視野に入れた検討が必要と言えるのではなかろうか。

(4) 周辺遺跡との比較

鹿田遺跡における集落の構造あるいは推移について整理していくなかで、鹿田遺跡では、 期(12世紀後葉)を中心とした段階までには、集落内が1町を基準とした数値によって東西方向の区画がなされていた状況を復元した。また、集落構造は ~ 期と ~ 期の間で大きく変化している点も画期として取り上げた。それが顕在化する時期は13世紀後葉～14世紀初頭を前後する時期である。こうした区画溝の問題に注目しつつ、岡山県南部の主要な遺跡の状況と比較してみよう。

旭川東岸の平野部に位置し、鹿田遺跡とは旭川を挟んで対岸に立地する百間川原尾島遺跡(岡山市)は、中世村落の分析の中で「平安時代後期に集村化の中で成立した条里集落」と位置づけられている(岡本1996)。報告によれば、集落は成立当初から条里制地割りの坪境に溝が検出され、周辺に掘立柱建物・土壙墓・井戸によって

構成される集落の広がりが想定されている。広さは方1町半程度である。さらに、中世後期には大きな変化が、「屋敷地を取り囲む溝あるいは堀の出現」としてあげられる。方1町(108m)の範囲は、幅390cm、深さ110cmの大形の溝によって囲まれ、その中に3つの方形区画が溝によって形成される。幅は広いところで36mを測るようである。室町時代とされる。ただし、出土遺物には13世紀代のものが含まれるという点は、その成立を若干遡られることは可能かもしれない。全体に非常に整然とした区画と遺構配置を見ることができる。

足守川下流域に位置する津寺遺跡・高塚遺跡・三手向原遺跡でも中世集落が報告されている。

津寺遺跡(岡山市)では、土筆山調査区において広範囲に集落が調査されている。土筆山調査区では、屋敷地が7ヶ所に想定される(正岡他1994)。区画の規模は2区画で長さ30m、1区画は15mである。そのうち、溝で区画された屋敷地は4ヶ所で、最大の溝は幅3.3m、幅1mを測る。屋敷地内での拡張を示す溝も認められる。区画のない屋敷地の端部は近接する水田によって端部が区画される。時期は、12世紀後半～14世紀の遺物を出土するが、溝・土坑からは13世紀～14世紀前半の遺物が中心をなす。

高塚遺跡(岡山市)では、鎌倉時代には条里地割を踏襲した屋敷区画が成立し、集村的な状況を呈する。室町時代には、その区画間をさらに溝で区画して四周を囲う宅地が成立し、防御的な集村化と理解される(弘田2000)。13世紀中～14世紀初の時期では、50mと35mの区画幅が指摘される。

三手向原遺跡(岡山市)(草原2001)は12世紀末～13世紀の集落で、区画溝に注目すると、12世紀末の仕切り的な形態から13世紀中葉には屋敷地を取り囲む状態へ変化する。その区画は25m四方となる。12世紀末の集落は1単位の屋敷が想定されている。

こうしてみると、鹿田遺跡において、溝で区画された屋敷地の形成が一期(12世紀後葉段階)にはすでに展開していた点は、周辺の遺跡では必ずしも一般的でないことがわかる。同時期に対応する数少ない遺跡である百間川原尾島遺跡・三手向原遺跡でも、この段階での範囲は広くはない。そういう点で鹿田遺跡は比較的早い段階に集村化の方向性が認められる集落と評価されよう。

区画溝に注目すると、一期段階では、百間川原尾島遺跡・三手向原遺跡とも直線的な仕切り溝となっている。さらに、鎌倉時代以降について検証すると、室町時代に向けて、溝が四周を巡る形へと展開する点はほとんどの遺跡で共通しており、同時期の区画の特徴といえよう。ただし、溝の区画幅については遺跡によって異なる。もっとも整備されているのは百間川原尾島遺跡である。ここでは1町を単位とした区割りであり、その内部は3分割されている。一辺36mという数値が示される。こうした分割方法は、時期は異なるが鹿田遺跡の一期と一致する。一方、足守川流域の遺跡では、津寺遺跡では30m前後、高塚遺跡では50mあるいは35mがあげられる。1町の基準に近いものもあるが、安定したものではない。鹿田遺跡でも、一期～二期にかけて、一定の数値は求められていない。そのなかで6・7次地点の屋敷地区画が69mの数値は、1町の2/3というような基準であろうか。いずれにしても、同区画の大きさあるいは溝の規模は、他の集落と比較しても大形の部類に属することは明らかである。一般的な農民層の屋敷地とは言い難く、特別な性格が想定される。

(5) まとめ

以上、中世集落の実態を明らかにするために行った鹿田遺跡の分析から、集落構造・その推移などについて、ある程度具体化することができた。その動向からは、一見、継続的に進行している集落において、～一期(11世紀後半～12世紀後葉)と～3～二期(13世紀後葉～14世紀前半)では、敷地の区画基準・空間利用などの構造的な問題にとどまらず、格差の顕在化という質的な変化も内在していることが予見されることとなった。また、周辺遺跡との比較からは、鹿田遺跡の特性が際立つ。つまり、鹿田遺跡では、古代末の段階にはすでに、敷地は1町を基準とした溝によって区画され、1/3町あるいは1/2町といった広がりを有する屋敷地が配置される。これは百間川原尾島遺跡などと同様に、周辺遺跡に先駆けて見られる景観と評価される。ただし、百間川原尾島

遺跡では条里地割りに合致した条里集落とされるのに対し、鹿田遺跡ではその方向は真北から15度東へ振った方向を軸としており、同敷地の北側に広がる東西南北方向の条里区割りには合致しない。その主軸は岡山大学鹿田地区の敷地にあわせて設定している構内座標の軸にほぼ一致している。鹿田遺跡一帯にはこうした傾いた地割りが現在も広がっており、古くから「鹿田庄」の位置を考える際に注目されてきた（石田1962）。この地割りは少なくとも12世紀まで遡ることが確認されたわけであるが、こうした12世紀代の集落状況を生み出す背景に「鹿田庄」としての特性を求めるることは自然の流れであろう。

さらに集落の推移から古代から中世への変化も見逃せない。整然と区画された区画が一度放棄され、新たに形成された屋敷地では、遅くとも13世紀末葉には、堀を彷彿させる大形溝に囲まれた敷地が創出される。これは社会的動向に一致するものであるが、その中でも規模の大きさは注目される。居館の基準として、屋敷地の区画規模は重要な要素であり、1町あるいは1/2町が求められる（広瀬2006）。また、堀で囲まれた防御性の強い居住空間の出現（D型）は、「13世紀前葉に出現し、12世紀以前とは飛躍的な上昇として認識される」との評価（広瀬1986）がある。第6次・7次調査地点の屋敷地は1町にはとどかないが、前段階からの推移を考えると、それに類似した性格、少なくとも一般的とはいえない性格が求められるのではなかろうか。14世紀中頃、備前の武士団である松田氏の勢力が「鹿田庄」に及んでいたことも指摘されている（藤井1971）。武士の台頭も視野に入れ、その性格を探ることが必要であろう。

古代～中世の集落動向についても、今後整理の進む鹿田遺跡あるいは周辺遺跡の資料を合わせて、検証を行っていきたい。

註

- (1) 時期設定については前項で検討した（山本2007、145～152頁）。設定時期と実年代との対応関係は表15にあげた。また、椀の法量域と時期の関係は、表14（151頁）を参考とされたい。

土師質土器椀法量分布表

領域	口径(cm)	器高(cm)	領域	口径(cm)	器高(cm)	領域	口径(cm)	器高(cm)	領域	口径(cm)	器高(cm)
1 a	15.31～16.5	6～6.5	4 a	15～15.5	4.61～5.1	7 a	12.5～13.19	4.51～5	12 c	10.2～11.39	2～2.6
1 b	14.5～15.3		4 b	14～14.49		8 a	12～13.2	3.9～4.5	12 d	9～10.19	
2 a	15.31～16.5	5.51～5.99	4 c	13.2～13.99		8 b	11.4～11.99		12 e	8.5～8.99	
2 b	14.5～15.3		5 a	15～15.5	4.1～4.6	9 a	12～12.5	3.51～3.89			
2 c	14～14.49		5 b	14～14.99		10 b	11.4～12	3～3.5			
3 a	15.31～16.5	5.11～5.5	5 c	13.2～13.99		10 c	10.2～11.39				
3 b	14.5～15.3		6 b	14～15	3.7～4.09	10 d	9～10.19				
3 c	13.5～14.49		6 c	13.2～13.99		11 b	11.4～12	2.61～2.99			

- (2) 第6次・7次調査地点の南側に立つ医学部付属病院動物実験棟の建設に際して、1981年に岡山市教育委員会が行った立会調査において、多数の遺構が確認された。井戸状の落ち込みを含む比較的古い時期の遺物・遺構の広がりが確認されたことを、岡山市教育委員会からご教示頂いた。
- (3) 2006年度に鹿田遺跡第7次調査地点の西側に接して鹿田遺跡第17次調査が行われた。未整理のため不確定ではあるが、-2期と一期に含まれる可能性がある井戸が調査された。
- (4) 敷地の東西幅については、敷地の西側の状況が不明確であるため確定はできないが、第6次調査地点の南北溝ラインを起点に復元される微高地東端までは約324m前後が推定される。1町の3倍の数値である。大学敷地の西側では近年発掘調査が進んでおり、その成果が待たれる。
- (5) 参考として未報告調査区について、こうした区割りが合致する地点を確認してみると、区画線3と同4の間に位置する9次地点内では（山本2001）「遺構の集中域」、「溝群などが走る低位部」、「南側の微高地部」という性格の異なる空間にほぼ3分割される境にあたっており、矛盾しない。遺構差というよりは地形的な差として表われている。
- (6) 猿形木製品については、別項で考察している（岩崎2007）。猿回しの猿をかたどった操り人形で、「くぐつ廻し」に関する遺物である。縁起物として行われる芸能に強く関わるものであり、「市」などの人びとの集まる場とのつながりを示す。

参考・引用文献

- 石田寛1962「岡山市街地およびそに周辺の条里」『岡山市史』
岩崎志保2007「鹿田遺跡出土猿形木製品について」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
大橋かおり1990「鹿田遺跡」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊』
岡本寛久1996「中世の村落」『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
橋田正徳1991「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』
草原孝典2001「三手向原遺跡中世集落の様相」『三手向原遺跡』
高田貴太2006「鹿田遺跡第16次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』
広瀬和雄1986「中世への胎動」『岩波講座 日本考古学』6
広瀬和雄2006「領主居館の成立と展開」『鎌倉時代の考古学』
弘田和司2000「古代・中世における集落の変遷」『高塚遺跡・三手遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150
藤井駿1971「殿下渡領の備前国鹿田庄」『吉備地方史の研究』
正岡睦夫他1994「山陽自動車道建設に伴う発掘調査9」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』
松木武彦1993「鹿田遺跡における中世土師質小皿の検討」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
山本悦世1987a「試掘調査」「立会調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』3
山本悦世1987b「立会調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』4
山本悦世1990「鹿田遺跡における古代末～中世集落について」『鹿田遺跡』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
山本悦世2001「鹿田遺跡第12次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』18
山本悦世2007「鹿田遺跡における土師質土器椀の編年について」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊

鹿田遺跡第1次調査～第7次調査の文献・挿図出典

- 1 . 第1・2次調査：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編1988『鹿田遺跡』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
- 2 . 第3次調査：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編1990『鹿田遺跡』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
- 3 . 第5次調査：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編1993『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- 4 . 第6次調査：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
- 5 . 第7次調査：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊

3. 鹿田遺跡第7次発掘調査井戸3出土曲物の基礎的整理

(1) はじめに

曲物は、檜や杉などから作られた板材を円形、あるいは隅丸方形に曲げて桜の皮などで縫いとめたものである。底板をはめ込み容器とする場合が多い。その用途はきわめて広く、衣食住、運搬、儀礼、信仰など生活全般にわたって利用される。現在につながる曲物の形態や製作技法は古代に確立され、中近世にかけて普及する。そのため、古代～近世にいたる曲物の変遷を明らかにすることは、当時の木工技術は無論のこと、木製品の生産、流通そして消費のあり方を知る手がかりにもなる。

鹿田遺跡第7次調査地点でも井戸3の井筒として転用された大型曲物が出土している。側板の下部と最下段の籠の下部を一部欠失しているが、ほぼ完形品である。本稿ではこの資料の形態や製作技法、機能などを検討し、曲物研究の基礎資料を提供することを目指す。

(2) 形 態

曲物の形態については本文中に概略を示した（64頁：以下「W4曲物」と記す）が、今一度その特徴を掲げると、次のようになる。

最大口径50.8cm、器高31.6cmの円形曲物である。

側板内面全体には斜格子模様のケビキ線を入れる。

3つの籠と4つの添え木をはめこみ、側板を補強している。

樺を用いた返し縫いによって曲げた側板や籠を綴じている。

側板、底板そして最下段の籠を木釘で留める。釘穴は現状で30ヶ所確認できる。

側板最下端が窪んでおり、底板をはめ込んだ箇所と推定できる。

以下、～の順序で形態的特徴を詳細に検討する。まず、の大きさについては、古代～中世に製作された円形曲物のなかでも、大型の部類に属する資料である。このような大型の曲物は、井筒に転用された状態で確認されることが多い。口径と器高、そして縫い合わせの重なり部分を考慮して、側板の大きさを推定すると、長さ180cm内外、幅31.6cm、厚さ0.6cmの長大な板を用いていたことがわかる。これまで確認された各地域の大型曲物の中には8世紀末から9世紀頃に比定されるものがあり、このような長大な板を裂き割る技術が平安時代前半の段階で確立し、中世に受け継がれていたことがわかる。W4曲物もそのような技術を有する木工職人の手で製作されたのであろう。板を裂き割る技術についてはすでに検討が加えられており、後述する。

次にのケビキ線について検討する。W4曲物のケビキ線は、側板の上下縁に対して縦平行線を0.4～0.6m間隔で内面全体に刻み、その後、同じ間隔で斜め平行線を刻むことで斜格子模様に仕上げている。このようなケビキ線は側板を曲げやすくする効果を意図したものであり、おそらく縦平行線のみのケビキを刻んだ場合よりも、曲げるときの歪みや割れの危険性が少なかったと推定できる。特に大型曲物の場合、斜格子模様のケビキ線を刻む資料が多い。

続いての籠と添え木をみる。3つの籠は、最下段の籠と上・中段の籠で素材板の幅が異なり、それぞれ幅10.7cm、8.3cmとなる。素材板の長さは180cm内外、厚みは0.4m程である。最下段の籠には側板や底板を固定するための木釘が打つ必要があり、その分だけ幅広に仕上げている可能性もある。ほぼ完形品のため、内面の観察が難しかったが、側板が欠失した部分で観察したところ、斜格子状のケビキ線が確認できた。また、籠の緩みを防ぐ効果を意図した4つの添え木はそれぞれ円周を四分する位置で、側板と籠の間に挿入されていた。そのう

ち添え木 3 のみが現状で取り外し可能で、長さ33.2 cm、幅5.0 cmの笏状の薄板を用いていたことがわかる。添え木はいずれも側板上縁より2~3 cm突出している。もしも組み合わさる蓋があったとしても、添え木の突出部が邪魔になり閉じ合わすことはできず、もともと蓋がなかった可能性が高い。

8~10世紀には側板の上下縁に1つずつの箍をはめこむものが一般的であるが、一方でW4曲物のように3、4つの箍と添え木で側板を補強し側板外面の大部分が箍によって覆われてしまう大型曲物は、11世紀以後に増えようである。

については、側板が1ヶ所で縫い合わせ（1列8段綴じ）、箍はいずれも2ヶ所で縫い合わせている（2列前内3段後内1段綴じ、1列内3段綴じ）。縫い合わせには幅1 cm程の幅広の樺（山桜の樹皮）を用いている⁽¹⁾。

については、最下段の箍と側板、底板の固定には木釘を用いている。箍と側板に結合釘穴が現状で30ヶ所確認でき（内2ヶ所は接合しない箍破片でのみ確認）、木釘が残るものもある。釘穴の数が他の資料に比して多く、また釘穴の位置についても、それぞれの間隔が不均等で、上下の位置にばらつきが認められる。井筒への転用の際に底板が取り外され底板の状況が不明なため、詳細を明らかにできないが、釘穴には製作当初のものと補修時のものとが残った可能性が高い。

最後に、の側板最下端を見る。側板最下端は縦断面形が側板最下端に向かって先細りするように凹んでいる。この凹み部分に結合釘穴が穿たれていることから、底板がはめ込まれていた箇所と推定でき、その幅0.9 cmが底板の厚みをある程度反映すると考えられる。この範囲ではケビキ線がつぶれて非常に不明瞭となり、横方向にのびる擦痕も確認できる。これらは底板をはめ込む際に、叩き金のような工具で側板最下端を擦って圧縮させた痕跡と判断できそうである。

以上、W4曲物の形態を検討した。その結果、曲物の製作技法や機能を推定する糸口となる豊富な情報を抽出することができた。次に、それらに基づいて民具学や民俗学による研究成果を参考にしつつ、W4曲物の製作技法や機能について考えてみたい。

(3) 製作技法

曲物の製作については、現代に伝統的技法・道具を継承して製作している事例を詳細に観察した研究がある⁽²⁾。本稿でもその成果を参考にしつつ検討していきたい。W4曲物の製作には大きく、a. 原木の伐採から素材板（ヘギ板）への加工、b. 側板や箍板に仕上げる削り加工、c. 曲げ、d. 底板・箍・添え木のはめ込みという工程があったと推定できる。

まず、aで注目できる点は、上で推定したように180内外（長）×31.6（幅）×0.6 cm（厚）という長大かつ薄い素材板（ヘギ板）をどのように加工したのかということである。これには、大きく2つの方法があったことが指摘されている。すなわち、刀状の木製楔で割り裂いていく方法と、鉈状の鉄製工具で割り裂く方法である。例えば、江戸時代に成立した『和国諸職絵尽』では、刀状の木製楔を縦に置き頭と足で固定し、楔をかませた板を横方向に引くことで素材板を割り裂く様子が描かれており⁽³⁾（図151）。15世紀頃の状況を描いた『建保歌合絵』でも片方のつま先で板を支え、片手に握った何らかの工具を板に押し当てつつ、もう一方の手で板を引き込むことで、素材板を割り裂く様子が描かれている⁽⁴⁾。木製の楔を利用するにしろ、鉈状の鉄製工具を利用するにしろ、横方向に素材板を割り裂く方法は共



図151 ヘギ板を割り裂く様子
（『和国諸職絵尽』より）

通している。長大かつ薄い素材板を割り裂くには、理にかなった方法と考えられている。

おそらく、W4曲物の側板や箍板もおそらくこの方法で割り裂かれたようである。それを傍証するのが、W4曲物側板や箍板の表面に確認できる線状裂痕である（図152）。W4曲物の側板や箍板の表面を詳細に観察すると、やや深い数条の線状裂痕が確認できる。これはbの仕上げ削り加工によっても裂け目が深いために削りきれずに残ったものと判断でき⁽⁵⁾、素材板を割り裂いていたことを示す痕跡と評価できる。

次にbの仕上げの削り加工についてみてみたい。現在の曲物製作では平安時代以降に成立した銑（鎌・キサゲ）や室町時代に登場した台鉋が、ヘギ板を側板や箍板に仕上げる削り加工に用いられている。ただ、W4曲物の側板を注意深く観察すると多条の切削痕跡が認められる。その特徴は先学の指摘した槍鉋系工具によったと推定できる痕跡とよく類似する。すなわち、

1条の削り幅が1～3cm程であり、中央がわずかに凹む。

直線的ではなく、幅にムラがあり、たがいに切り合う箇所も観察できる。

という特徴を観察することができ、銑や台鉋などで加工したような平滑な面とは考えにくい。「少なくとも鎌倉時代には、普遍的な調整技法であった可能性が高い」⁽⁶⁾と指摘されている槍鉋系工具によって仕上げの削り加工がなされたと判断できる。

次の工程はc.曲げである。これに関わる造作は側板内面に格子条に刻まれたケビキ線であり、これは焚火などで焼って曲げる技法（矯め曲げ）によって曲げられたことを端的に示している。現在では、この技法は完全に廃れ、熱湯をかけたり煮たりして曲げる技法（湯曲げ）に全て置換されているそうである。

最後にd.底板・箍・添え木のはめ込みについてみてみよう。W4曲物は大型品の部類に入るため、3段の箍と4つの添え木をはめ込むことで曲物の耐久性を強めている。さらに、注目できるのは2点の木製楔の存在である。これらは保存処理前の観察では確認できず、保存処理の最中に新たに確認されたものである。保管状況から他の製品が混入した可能性はきわめて低く、W4曲物の付属品である可能性が高い。具体的な使用方法は不明で管見では類例も知らないが、箍や添え木のはめ込みの際に使用されたのかもしれない。今後の検討課題である。

以上、W4曲物に残された痕跡から、その製作技法について検討してきた。その結果、当時の一般的な技法によって製作された曲物であることをうかがいしることができた。最後に先学の研究を参考にW4曲物の機能について考えてみたい。

（4）機能

古代～中世の曲物の機能については、南博史の研究をあげることができる⁽⁷⁾。氏は平安末～中世の絵巻物に描かれた曲物を抽出し、同じ場面に描かれた人物の頭の大きさと比較することで曲物の大きさを分類し、それに基づいて機能を大きく、「水用」「運搬用」「食物用」に分けた。そして、実際に遺跡出土の曲物を

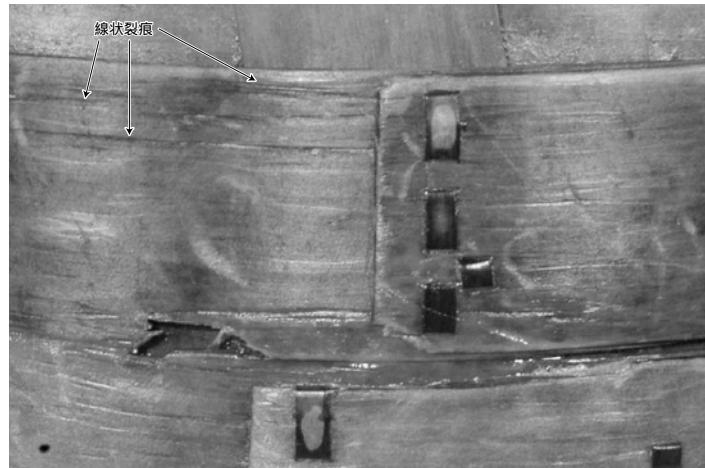


図152 箍1段目にみえる線上裂痕



図153 曲物を頭の上に担ぐ販女
（『年中行事絵巻』より）

考 察

平面形態と大きさによって細分し、絵巻物からうかがえる機能との対応関係を考察した。

絵巻物資料と実際の資料との比較によって機能を推定する方法自体は有効であることは間違いない。ただ、出土資料の機能を単一のものと限定することは難しく、曲物自体が多様な機能を併せ持つ道具である点を考慮すれば、いくつかの蓋然性の高い解釈を提示するにとどめざるを得ないこともまた確かである。W4曲物のような中大型品が、井筒に転用された状況での出土に限られることも元々の機能を推定することを難しくしている。

以上のような難しさもあるが、南博史の作業を参考にすると、W4曲物は人頭の2倍以上の大きさであり、南のL型（同じ場面に描かれた人の頭の2倍程の大きさの曲げ物）～LL型（大型品）にほぼ対応すると判断できそうである。絵巻物ではL～LL型の曲物は、水桶（水用容器）頭にのせて運ぶ運搬用容器（図153）などとして用いられる場合が多く、W4曲物も井筒に転用される以前は、そのような機能を有していた可能性を推定できそうである。上で見たように、箍や添え木などで強度を高めている点もこのような推定を傍証するといえよう。

(5) おわりに

以上、W4曲物の形態や製作技法、機能について整理してきた。今後、資料の集成や観察を積み重ねることによって、綴じ方や底板と側板の結合、箍や添木などについての時間的な変遷を型式学的に検討することは可能と考えるが、この点は今後の課題としておき、ここでは、W4曲物を曲物研究の基礎資料として提示することで満足したい。

（高田貴太）

註

- (1) 曲物の綴じ合わせの表記は下記の文献によった。
奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録 近畿古代編』
- (2) 主要なものとして下記の文献がある。
 - a 岩井宏實 1993「曲物の技術」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集
 - b 岩井宏實 1994『ものと人間の文化史75 曲物』
 - c 成田壽一郎 1996『木工諸職双書 曲物・箍物』
 - d 西村 歩 1994「天川村曲物考 奈良県吉野の事例を基礎とした曲物製作技法の研究」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』2
- (3) 註2のd文献
- (4) 遠藤元男 1991『ヴィジュアル史料 日本職人史〔〕職人の誕生 古代・中世編』
- (5) 註2のd文献
- (6) 註2のd文献218頁
- (7) 南 博史 1982「絵巻物にみる曲物の一考察」『平安博物館研究紀要』7
南 博史 1991「曲物研究と課題 形態と機能について」『考古学ジャーナル』335

図出典（各図は以下の文献より一部改変の上で転載した）

図151：遠藤元男 1991『ヴィジュアル史料 日本職人史〔〕職人の世紀 近世編 上』（註2のd文献の第39図より再引用）

図153：遠藤元男 1991『ヴィジュアル史料 日本職人史〔〕職人の誕生 古代・中世編』

4. 鹿田遺跡出土猿形木製品について

(1) はじめに

鹿田遺跡第7次調査地点溝21から出土した遺物中に、猿形木製品一点が含まれていた。これは全国的にも出土例が少ない、希有な遺物である。本稿では猿形木製品の特徴を整理し、その用途について考える。また類例の分布状況を参考に、中世社会の一部に迫ってみたい。

(2) 鹿田7次猿形木製品の特徴

まず本文中に記載しているが、もう一度、鹿田遺跡の猿形木製品について詳しくみていくこととしよう（第章95頁参照）。

カヤの木を材とし、削りだしによって鳥帽子を被るニホンザルの姿を精巧に表している木製品である。高さ9.2cm、最大幅2.7cm、厚さ1.4cmである。

顔面と尻は赤く塗られ、目・鼻・口は黒漆を用いて線で描かれる。鳥帽子は赤漆と黒漆により横縞模様の彩色が施される。またサルの背中には体毛の表現が、同じく黒漆で施されている。鳥帽子頂部のカーブ、サルの顔面、背中のカーブ等隨所の仕上げは丁寧で、作り慣れた手によるものと考えられる。腕にあたる部分に穿孔があり、腕を示す棒や紐など何らかのものが嵌められる構造であろう。また体部の底（脚の裏部分）にも径0.3cmほどの孔があり、棒を突き刺していたものと推測される。以上のような構造から、本木製品は底面に棒をさして動かす操り人形の一種としての用途が推定される⁽¹⁾。鳥帽子を被っている姿から、猿回しの猿を模しているもの、また「三番叟」を舞わせる人形とも考えられる。

この資料は溝21からの出土である。溝21は、溝22・23と重複・連続した溝群を構成しており、溝21～23が機能した時期は14世紀前半～近世と考えられる。第7次調査地点のほぼなかほど、構内座標BUラインに沿うように東西に走行し、57・58ライン間でほぼ直角に南方向へと走行方向を変える溝群である。数回の掘り返しを行いながらも長期にわたって機能している溝群の配置から、溝群の走行するラインが土地の区画にとって重要な意味を持つことを窺わせる。この出土位置を、猿形木製品の特徴を考えるうえでのポイントとして押さえておきたい。猿形木製品は溝群の中では古い段階の溝21の底面近くから出土し、共伴する遺物の時期から、14世紀前半に比定される。

このような猿形木製品の類例は、現在のところ2例である。また猿形ではないが、操り人形の類例もあわせて、次に記す。

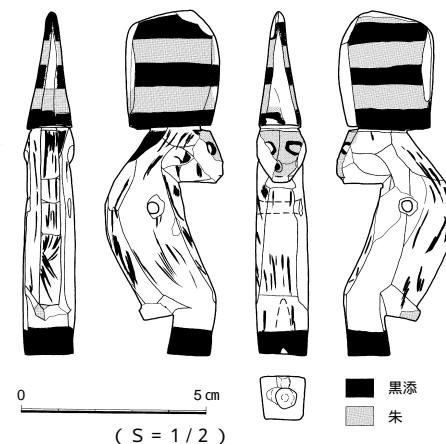


図154 鹿田遺跡猿形木製品

(3) 猿形木製品の出土例

これまでのところ、猿形木製品の類例としては以下の二遺跡の出土品がある。

1) 百間川米田遺跡⁽²⁾ 岡山市米田・右岸用水路調査区15区

百間川米田遺跡は、弥生時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が検出されている集落遺跡である。特に鎌倉時代・室町時代以降においては、「運河」状の大溝と建物群等から構成される港町的な海浜集落とみなされ、瀬戸内海を中心とする海運を基盤として発展した集落の状況が窺える。

猿形木製品（図155、156-2）は中世包含層の出土である。材質は不明で、長さ6.8cm、最大幅1.6cmを測る。

腕部と脚部の2ヶ所に径0.2cmの穿孔、腕の穿孔は四角、脚部の方は一部破損していることもあり、穿孔の形はよくわからない。目と鼻を墨書で表現しており、正面からの猿の顔をよく表している。時期としては中世後半と考えられる。

この木製品には、底面の穿孔はみられないが、腕・脚部の穿孔は、そこに棒状あるいは紐状のものを差し込んで、可動する手足を表すものと考えられる。

2) 豊後府内遺跡⁽³⁾ 大分市府内

豊後府内遺跡は鎌倉時代から戦国時代の終わりまで豊後地方を治めた大友氏の居館を中心とする集落遺跡である。平成8年度以降、大分市・大分県による発掘調査が行われ、現在も継続中である。東西0.7km、南北2.2kmの広大な範囲にわたり、随所で調査成果が積み上げられ、戦国時代の「府内」の様相が次第に明らかになりつつある。また特徴的なこととして、戦国時代に描かれたと伝えられる「府内古図」の存在がある。これについても、検証作業が行われ、現在3種類が確認されている「府内古図」は寛永年間に成立したものとみられ、絵図上と現在の地割り・発掘調査成果との間で再検討が行われている。

猿形木製品は万寿寺北側掘出土である。現在のところ概報で紹介されているのみで、詳細な時期の検討を経ていないが、出土構の内容は次の通りである。万寿寺は1306(徳治元)年に大友貞親により建立された禅寺で、少なくとも16世紀代には大友氏の迎賓館的施設となっていたことが知られている。木製品は万寿寺の北の境となる掘から出土している。この掘には16世紀前半のものと、16世紀後半のものが確認されている。この掘については大分川とつながっていること、小型の船の通行が可能な規模を有していること等から、様々な物資交易の重要な交通路をなしていたと考えられている⁽⁴⁾。そしてその見解を裏付けるように様々な遺物の出土が認められる。

木製品⁽⁵⁾は長さ約6cmで、顔と尻は朱塗り、ほかは黒塗りである。手と足は削りだしにより、体の前面に突き出したような形態をとっている。手の部分には上下方向の穿孔がみられることから、なにか棒状のものを手に持たせていたことが想定される。やや推測を重ねると、現代の人形にも例が見られるような、御幣をもっていたことも考えられよう。また鹿田木製品と同様、底面に穿孔が認められる。以上のことから、府内木製品についても、操り人形の一種と考えることができそうである。時期については、正式な報告をまたなければならないが、現段階では16世紀代とされている。

3) 円覚寺門前遺跡⁽⁶⁾ 鎌倉市山ノ内

猿形ではないが、操り人形の類例として、鎌倉市円覚寺門前遺跡の山猫形木製品(図156-3)がある。

円覚寺門前遺跡は1282(弘安5)年創建の円覚寺境内に所在する。鎌倉時代末期に描かれたとされる「円覚寺境内絵図」にある門前町一帯にあたり、発掘調査の結果、門前町を横切る馬道と側溝、その側溝に直交する溝が検出された。これらの馬道・溝の時期は13世紀末~14世紀代と考えられている。

山猫形木製品は上述の馬道側溝のひとつである溝1bから出土している。幅6.2cm、高さ4.8cm、厚み6.4cmを測る。山猫の頭部をかたどったもので、底面に穿孔がある。この点が鹿田木製品・府内木製品と同じ構造であり、棒状のものを差し込んで動かすものであろう。この木製品については報告書中に詳細な考察⁽⁷⁾が掲載されており、操り人形の一種であると考えられている。また時期は、14世紀後半と報告されている。

同じ溝からの山猫形木製品以外の出土遺物をみると、数多くの木製品の中に製作途中のものや、再加工品が多く見いだされるほか、機織り具や加工工具といった道具類が多い。このことから報告では、この門前町一帯に多くの職能民が住み着いていたものと述べている。



図155 百間川米田遺跡
猿形木製品 (S = 1 / 2)

(4) 人物・動物をかたどる木製品

以上、猿形木製品・操り人形の類例についてみてきたが、ここで人物・動物をかたどった木製品について概略をみておこう。出土例すべてに目を通すことができなかったが、『木器集成図録 近畿原始篇』・『木器集成図録 近畿古代篇』⁽⁸⁾掲載資料に拠ってその概要をみてみると、弥生～古代にかけての人物・動物をかたどった木製品は、祭祀具に分類されている。『木器集成図録 近畿・原始篇』では「祭祀具」中の動物形の項に31例があ

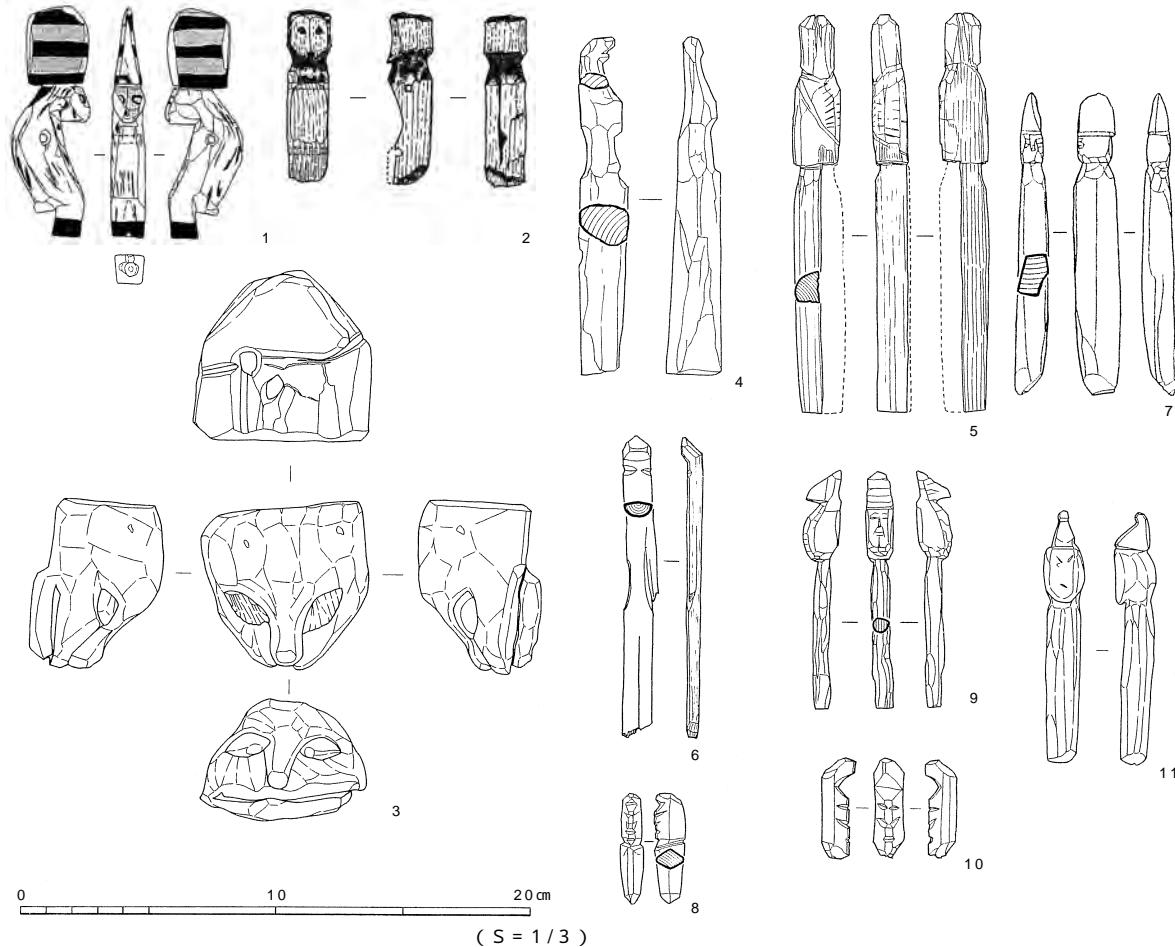


図156 猿形・山猫形・人形木製品

表18 猿形・山猫形・人形木製品一覧

図*	種類	時期	出 土 遺 跡	樹 種	長(高さ/cm)	幅(径/cm)	厚さ(cm)
1	猿形	14世紀前半	鹿田遺跡 7次調査溝21	カヤ	9.2	2.7	1.4
2	猿形	中世後半	百間川米田遺跡 右岸用水路	-	6.8	1.6	
3	山猫形	14世紀後半	円覚寺門前遺跡 溝1b	-	4.8	7.4	6.2
4	人形	694 - 709年	藤原宮跡 6 AJB 区 SD 2300	ヒノキ	13.3	1.9	1.6
5	人形	8世紀前葉	平城京 左京三条二坊六坪 SD 1525	ヒノキ	15.8	1.9	1.2
6	人形	730年頃	平城宮 6 AAY 区 SD 1250	シイ	12.0	1.1	0.6
7	人形	13世紀	鳥羽離宮跡 ND 84 - 3 - L - 12 SD 10	ヒノキ	12.2	1.7	1.0
8	人形	755年	平城宮 6 AAF 区 SK 3264	ヒノキ	4.3	1.2	0.9
9	人形	12 - 13世紀	尊勝寺推定地 ND 65 - 3 - A - 15 溝	ヒノキ	9.5	1.0	1.0
10	人形	694 - 709	藤原宮跡 6 AJE 区 SD 105	ヒノキ	4.0	1.1	
11	人形	14世紀後半	円覚寺門前遺跡 溝1b	-	10.0	0.85	-
	人形	8世紀後半	平城宮 6 AAC 区 SE 2600	マツ属	26.2	4.8	3.9
	人形	8世紀	平城宮 6 ACU 区 SD 1250	モミ	34.9	4.5	3.9
	人形	730年頃	平城宮 6 AAY 区 SD 1250	モミ	15.2	2.1	0.8
	人形	747年頃	平城宮 6 AAB 区 SK 820	未同定	6.3	1.1	0.9
	人形	9世紀	兵庫県/吉田遺跡 SD 11	ヒノキ	15.0	1.9	1.4
	人形	9世紀前半	平安京西寺跡 ND 74 - 3 - E - 34 SE 01	ヒノキ	15.3	1.8	1.0
	人形	9世紀前半	平安京 左京四条一坊五・六町 SE 07 A	ヒノキ	14.5	3.0	
	人形	8世紀	平城宮 6 AAI 区 SD 1250	ヒノキ	3.2	1.3	0.7
	人形	784 - 794	長岡京 左京二条二坊六町 SD 1301	ヒノキ	7.4	2.7	

図156掲載のものには番号を付した。

り、その内訳は鳥形16点・馬形7点・その他8点となっている。猿形の例は現在のところ知られていない。そこで近似する例として人形をみてみよう。人物をかたどる木製品としては、弥生時代の木偶として9点が掲載されており、いずれも神をかたどるものと理解されている。古墳時代には人形の出土例がない。古代以降となると、『木器集成図録 古代篇』にいくつかの例が見られる。分類としては祭祀具中の「形代」として馬形・鳥形・舟形などさまざまな器物・禽獸をかたどった遺物のひとつとして「人形」も挙げられる。これらの木製品は前述した弥生・古墳時代以来の伝統に基づくもの（鳥形・舟形・木偶など）と、7世紀以降新たに出現するもの（人形・馬形など）とに大別される。後者のうち、人形は正面全身人形・側面全身人形・顔形・立体人形の4種に大別されている。その4種のうち、正面全身人形・側面全身人形・顔型はいずれも板状であるという特徴がある。立体人形は、その名の表すとおり、立体的に人物を模したもので、他の3種とは全く異なるものである。鹿田遺跡の猿形木製品との関連でみると、形態的に最も近似するものは「立体人形」といえる。

「立体人形」についてもう少し細かくみることしよう。その多くは棒状の材の一端に人の頭部を粗く彫刻したもので、衣服までを表すものはほとんどない。『木器集成図録』掲載の16点は8世紀前葉～13世紀代のものであり、その詳細は表18に示した。長さ26cm～35cmを測る2点（3・4）を除くと、長さ15cm、幅3.0cmまでの法量におさまっている。全体の形状では頭部の表現のみのものと、被りものの表現のあるもの（図156-4～10）がみられ、それらには墨で描写するものと、彫刻・線刻で表現しているものがある。被りものは、鳥帽子あるいは、頭巾状のものの表現と推定される。鳥帽子かのように、横の線刻あるいは、横方向の加工痕のみられるもの（同8・9）もあるが、彩色されていたり、確定できるものはない。立体人形は、人形の中でもよりリアルに表現されるという点で、他の人形とは区別されるものの、その用途についてははっきりしたことは不明であり、現状では形代の一種としておくほかない。

猿形木製品との関連でみると、操り人形であるか否かの判断は、端的には下面の穿孔の有無に拠っている。鹿田木製品・府内木製品・山猫形木製品の三例については、この下面穿孔によって、棒状のものを差し込んで動かす「操り人形」と考えている。もう一点の猿形木製品である百間川米田遺跡例については、穿孔がみられないことから、現段階では立体人形の類に入るものとする。

ただ操り人形の形状については考古資料からの検討が不十分であり、立体人形のなかにも棒を差し込むものは別の動かし方で操るものがある可能性も考えられ、今後検討していくこととしたい。

(5) 古代・中世の「猿」を巡って

以上、鹿田遺跡猿形木製品について、類例を紹介してきた。これまで述べてきたように、本資料は操り人形の可能性が高いと考えられる。こういった操り人形の演じ手は「くぐつまわし、傀儡子（以下「くぐつまわし」と記す）」と呼ばれる人々であると言われている。ここでは、「猿」自体と、演じ手であるくぐつまわしに関して、文献史料に触れながら述べることとする。

1) 猿

猿は古来より馬の疫病を防ぐ守神として知られており、室町時代頃までは猿を厩で飼う習慣があったそうである。また農村では、猿の頭骨や猿回しの絵馬・札など猿にちなんだものを厩に取り付けるという風習が近年まで行われていたと言われている。また文献上に現れる猿回しの記録としては以下のものが挙げられる。

● 吾妻鏡寛元三年

四月二十一日乙酉 天舞

左馬の頭入道正義美作の国の領所将来の由を称し、猿を御所に献ず。彼の猿の舞踏人倫の如し。大殿並びに將軍家御前に召覽す。希有の事たるの旨御沙汰に及ぶ。教隆云く、これ直なる事のみに非ざるか。

寛元三年（1245年）に足利正義が美作の国より、御所に猿を献じ、將軍に猿回しの舞を見せ、大いに喜ばれた

とある。この記載が猿回しに関する最古の記録である。この記述に現れる猿は、美作国から奉ぜられたものとあり、猿形木製品の類例が少ない中で、二点が岡山県の出土例である点とあわせて興味深い点である⁽⁹⁾。

上記の文献にもあるように、猿回しはもともと縁起物として、「さる」が「去る」に通じることから祓いの意味も有しており、正月等に演じられるものであったようである。それが次第に大衆芸能として広まつていったとみられる。また猿回しに関する記述が「吾妻鏡」を初出として13世紀前半から認められるようになることから、猿回しの成立もおよそこの時期と考えられている。

一方、鹿田木製品は鳥帽子を被った姿が大変特徴的であり、その点は「三番叟」を想起させる。三番叟は能の「翁」と、それに続く狂言の「三番叟」を写したものと言われている。踊りとしてだけでなく、舞台の儀式としても古くから盛んに行われ、能では神聖な儀式曲として扱われているようである。三番叟は五穀豊穣を祈るという意味もあって、新年の初会や祝い、顔見せの序幕には必ず冒頭に舞われるものという。この三番叟の外観には、地域や時期によって様々な形態があるようであるが、「鳥帽子を被っている」点は共通している。また踊り手は猿の面をつける場合や、猿の動作を真似て滑稽に演じられる場合がみられる。三番叟自体は、江戸時代に入って完成された形態として演じられたものと考えられるが、起源としてはもっと古く、平安時代の猿楽の舞に求められるようである。すると、14世紀前半に廃棄された鹿田木製品も、こういった舞を舞わされたのかもしれない。

2) くぐつまわし

くぐつまわしの名称と人形まわしを生業としている点とは、元々は中国に起源があるとされる。ただ日本で芸能として発展してきた歴史は古く、11世紀中葉に成立したとされる『新猿楽記』中に「くぐつまはし」の記述が認められる。「くぐつ」自体は『日本書紀』中にも記載が見られ、木製の人形を指す言葉である。くぐつまわしは定住せず、水草のごとく漂泊し、田畠を耕作することなく、いかなる課役もないとする。平安時代の記述には、「主として狩猟生活を営みながら、幻術的な芸能を行うものたち」とある。こういった記述のなかに、くぐつまわしは、「東国・美濃・三河、遠江等から山陽播州・山陰馬州、さらに西国」と、おおむね海道筋に分布し、まず傀儡女が海道の宿を中心として、次第に定着していったのではないかとの指摘がある⁽¹⁰⁾。すでに多くの先学の指摘があるが、くぐつまわしや猿回し等は、乞食者と呼ばれるような被差別民の一種であり、古代・中世の社会においても、散所・河原などに住みつつ、芸能を生業とし、社会に関わっていた人々に含まれるといえる⁽¹¹⁾。

絵図に認められるくぐつまわしとして、数例の良好な資料が知られている。そのうちの一点『紙本著色洛中・洛外図屏風』(歴博甲本)中に描かれたくぐつまわしの姿を図157にあげた。この人物は首かけ箱回しといわれる体裁である。胸の前に掛けた箱の上に少なくとも5体のくぐつを確認できる。箱の下から手を入れて、これらのくぐつを操作するのであろう。このように手で操作する人形を扱うものに対して「手傀儡」との呼称も見られるようである。

(6) まとめ

以上、鹿田遺跡出土木製品について、類例・用途など、文献資料にも触れながら概要をみてきた。前述してき



図157 くぐつまわし
『紙本著色洛中・洛外図屏風(歴博甲本)』
(国立歴史民俗博物館蔵)

考 察

た木製品の時期は、鹿田木製品が14世紀前半、山猫形木製品が14世紀後半、百間川米田木製品が中世後半、府内木製品が16世紀代である。鹿田木製品が現在のところ、操り人形の例としても、猿形製品の例としても最古の事例と言える。

再度、出土状況を考えてみよう。鹿田遺跡第7次調査地点、溝21は屋敷地を巡る大型の区画溝として機能し、14世紀前半に埋まつた溝である。ここで述べてきた木製品は、中世において流通の拠点であつたり、門前町であつたり、人々が大勢集まる賑わいのある集落遺跡からの出土であることを一つの特徴ということができそうである。大型の屋敷地の周辺や、人の往来の頻繁な道路の近く、あるいは、海運を担う運河に沿つた町といった情景を、これらの木製品を出土する遺跡からは想定される。そういうにぎわつた町並みに、くぐつまわしや猿回しといった職能民らも集まつてきたのであろう。

残念ながらまだ類例が数少なく、これ以上の検討を進めるには甚だ材料不足ではあるが、鹿田木製品は、現在のところ最古の出土例であり、くぐつまわしの初期の様相に迫る実資料と言える。またさまざまな職能民が集まつてくるような場が、鹿田遺跡第7次調査地点付近に存在していたことの、具体的な証左のひとつともいえる。このことは鹿田遺跡全体の性格を考えいくうえでも重要な手がかりとなろう。

今後の課題山積ではあるが、考古資料の面からも、中世の芸能・職能といった面をひもといていく資料として、鹿田遺跡猿形木製品を評価することができよう。

(岩崎志保)

* 資料調査その他にあたり、下記の方々・機関に御協力・御教示頂きました（敬称略）

大橋雅也・加納克己・佐藤寛介・岡山県古代吉備文化財センター・大分県教育庁埋蔵文化財センター・鎌倉市教育委員会・吉備考古館・国立歴史民俗博物館・山本悦世

註

- (1) 加納克己氏の御教示による
- (2) 岡本寛久編 1989『百間川米田遺跡3(旧当麻遺跡)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74
- (3) 加藤美成子 2004「中世大友府内町跡 第20次C調査区」『大分県文化財年報12平成14(2002)年度版』
府内遺跡については下記報告書参照
坂本嘉宏ほか 2005『豊後府内1』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書1
坂本嘉宏ほか 2005『豊後府内2』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書2
坂本嘉宏ほか 2006『豊後府内3』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書3
高橋信武 2006『豊後府内5』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書10
- (4) 大分県教育委員会 2003『発掘された宗麟の城下町』vol.2
- (5) 以下の所見を含めて、資料を実見した山本悦世氏の御教示による
- (6) 鎌倉市教育委員会 2005「円覚寺門前遺跡(No.287)山ノ内字松岡1344番地地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21(第2分冊)
- (7) 加納克己 2005「第1面出土の操り人形「山猫」木偶について」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21
- (8) 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録 近畿原始編』奈良国立文化財研究所史料第36冊
同 1985『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所第27冊
- (9) 吉備考古館(岡山県総社市)に猿の頭部をかたどった土製品が展示されている。現在の赤磐市万富付近での採集品とのことである。須恵質で、目・鼻・口は、刺突により表現。この頭部は本来胴体部分に接合していたものが剥がれたものとみられ、操り人形の種類とは考えがたいが、「猿」の類例として興味深い。
- (10) 林屋辰三郎 1960『中性芸能史の研究』
- (11) 綱野善彦・横井 清 2003『都市と職能民の活動』(日本の中世6)
佐藤宗諱ほか編 1988『部落史史料選集 第1巻 古代・中世篇』

参考文献

- 永田衡吉 1983『生きている人形芝居』

第 章 結 語

第7次調査と第8次調査は、古墳時代初頭と古代末～中世前半の集落を中心とした発掘調査であった。各時代の成果をまとめて結語としたい。

古墳時代初頭

鹿田遺跡では、弥生時代の集落として第1次・第5次・第2次調査地点があげられる。古墳時代にはいると遺跡全体へと広がるが、集落の様相が具体的に判明しているのは第7次地点周辺だけである。

第7次調査地点では、集落構造を比較的単純化したかたちで抽出することができた。地形復元から導き出された幅の狭い微高地上に、一時期に、竪穴住居1～2棟・掘立柱建物1棟・井戸1基・土坑数基・土器溜まりで構成される集落が営まれ、溝による区画も想定される。その配置は、微高地端部に井戸、そして、住居と掘立柱建物が近接して居住域を形成し、その南側に作業域として土坑と土器溜まりが配され、加熱作業が行われるという集落構造が復元される。このように、中心的集落の周辺域に新たに展開する集落の状況が明らかとなった点、最小単位の集落構造が確認された点は、今後、同時期の遺跡を考える上で、良好な資料と評価されよう。

古代末～中世前半

集落 第7次調査地点では、区画溝に囲まれた屋敷地内に、井戸と大形の掘立柱建物を含む構造物そして作業空間的な場が配されるという中世前半における屋敷地の具体的な姿を示すことができた。屋敷地を巡る溝は堀ともいえそうな規模を有し、平面形もやや特異な形態を示す点で一般的とは言い難い。屋敷地の性格を考える上で、その機能については今後検討しなければならない。

区画溝は第8次調査地点でも確認される。調査区内は東西方向の溝で埋め尽くされる状況から、屋敷地の境界線にあたると評価され、集落の区画を考える上で重要な地点となった。こうした区画溝の推移を考察するなかで、古代末と中世前半の集落間には、前段階の区画溝の廃棄と再構築そして屋敷地の再編を経て、質的な変化が生まれる可能性を求めた。古代末の鹿田遺跡では、すでに1町単位を基準とした区画がなされ、複数の屋敷地が配される状況を描き出すことができる。集村化かどうかは今後検討する必要があるが、こうした状況が周辺遺跡に先駆けて成立している点は、「鹿田庄」との関連を考える上で注目される。

一方、中世前半に新たに形成される屋敷地では、それまでの均質的で開放的な区画から、堀を彷彿させる大形溝に囲まれた閉鎖性の高い空間へと向かう。こうした変化は、14世紀に進行する溝に囲まれた屋敷地の形成と集村化という社会的な動向に一致したものであるが、その中でも、その規模の大きさは鹿田遺跡の性格を考える上で重要であろう。

遺物 遺物で注目されるのは、第8次調査地点の2条の溝から出土した土器群である。両溝からは、吉備系土師質土器椀と和泉型瓦器椀・東播系須恵器椀そして備前産と考えられる椀がそれぞれ出土し、それらに1条の溝には東播系の片口鉢が加わる。いずれもほぼ完形であり、古代末における各土器の併行関係を示す良好な資料といえる。

その他に、特筆される遺物は猿形木製品である。中世における芸能史研究からも注目される希少価値の高い資料である。その使用形態の検討から、本地を訪れたであろう当時の職能民の存在が浮かび上がる。「鹿田庄」の賑わいを彷彿させると同時に、第7次調査地点に復元される屋敷地の性格を考える一助になる点でも重要である。

現在、鹿田遺跡では第17次調査までの発掘を終了し、新資料が蓄積されている。こうした資料を加え、本報告で検討した試論あるいは考察によればなかった問題を含め、さらに検証・深化させていきたい。

図版 1 古墳時代初頭の土師器（1）井戸 1



図版2 古墳時代初頭の土師器(2)土器溜まり1



4



27



49



36



40



29



42



6



52

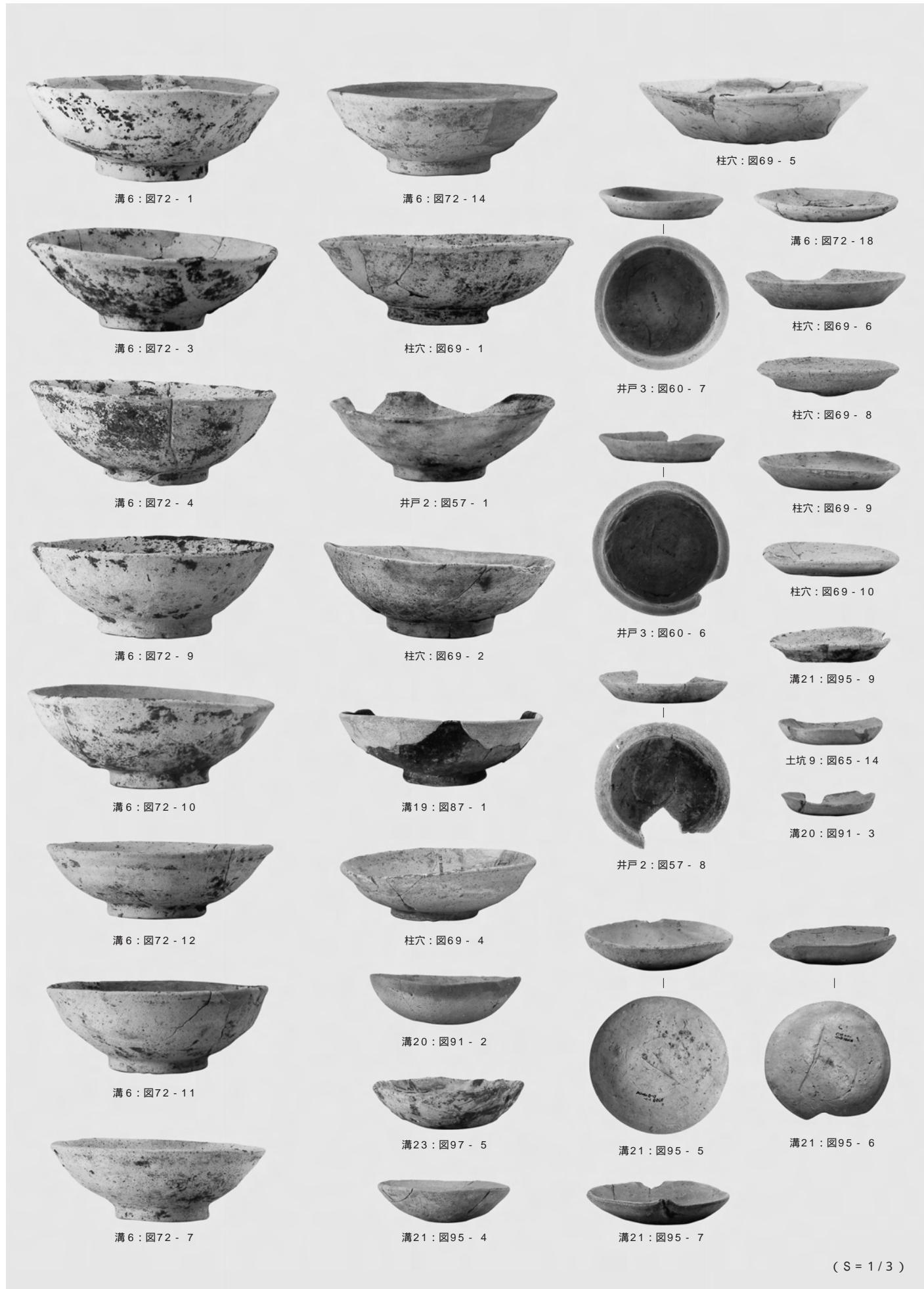
土器溜まり1 -
4・6・27・29・36・40・42
土器溜まり1 -
49・55

図49・50・52

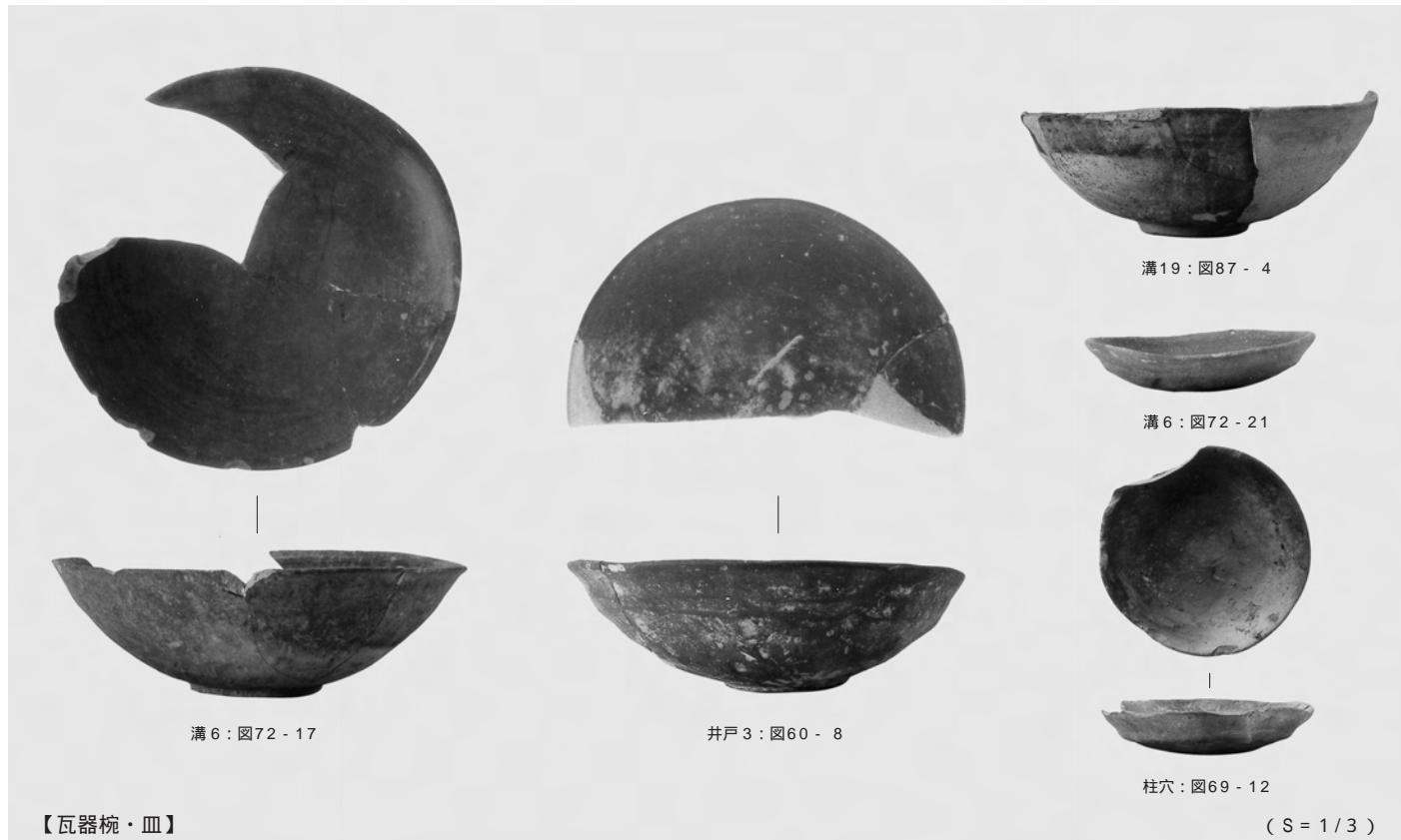
(S = 1/3)

55

図版3 古代末～中世の土器(1)：土師質土器



図版4 古代末～中世の土器(2)：瓦器・須恵器他



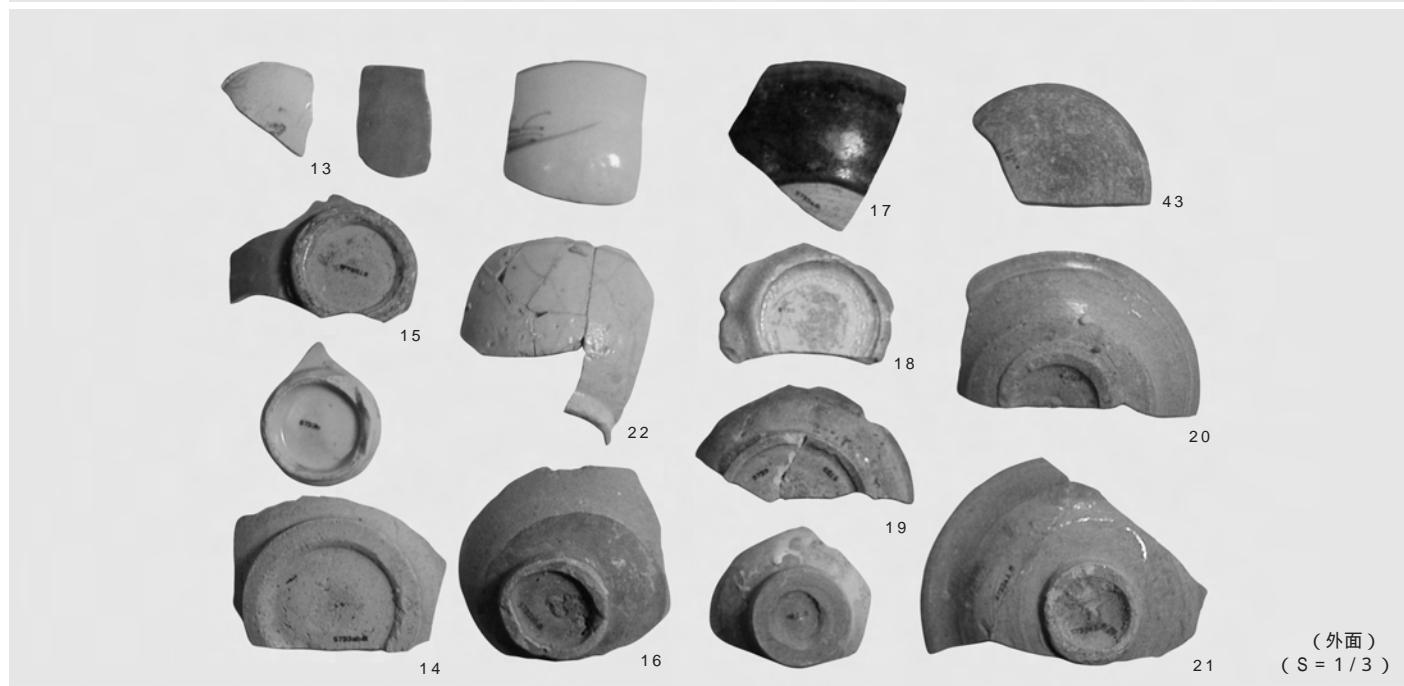
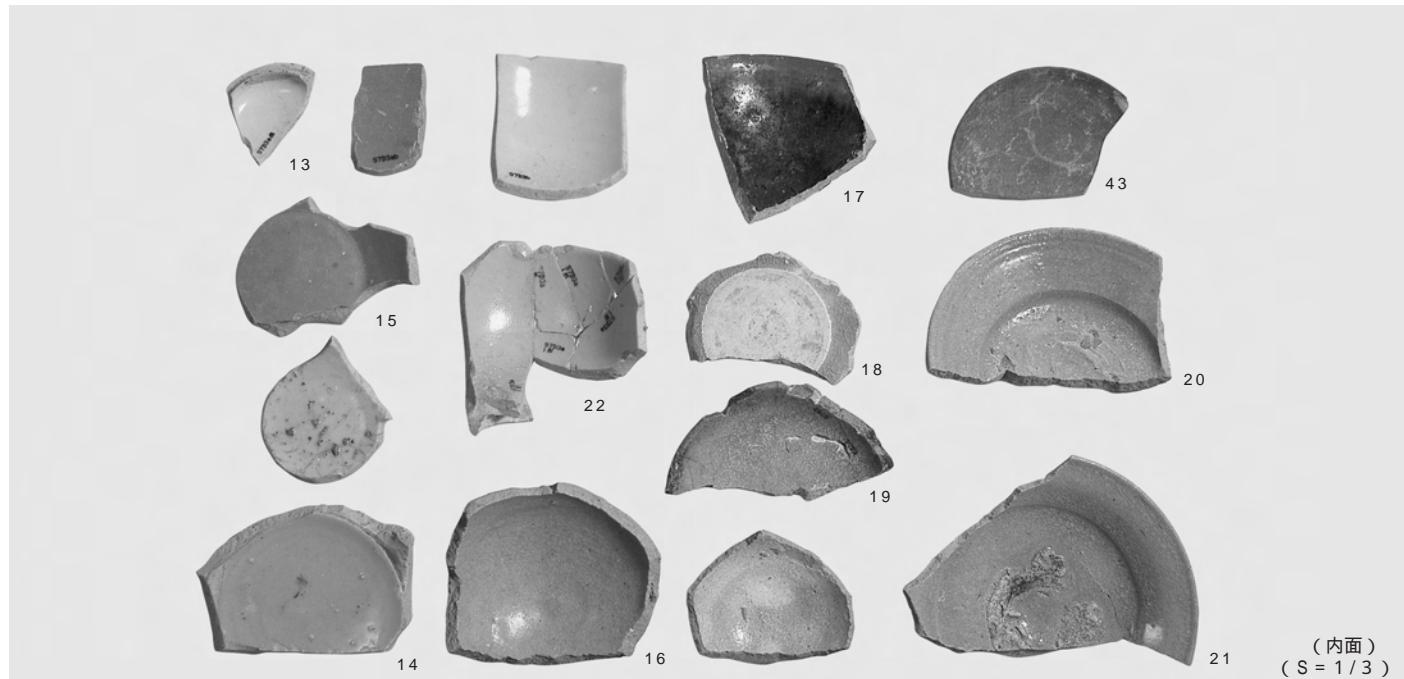
【須恵器すり鉢】井戸2:図57



【竈】井戸3:図61

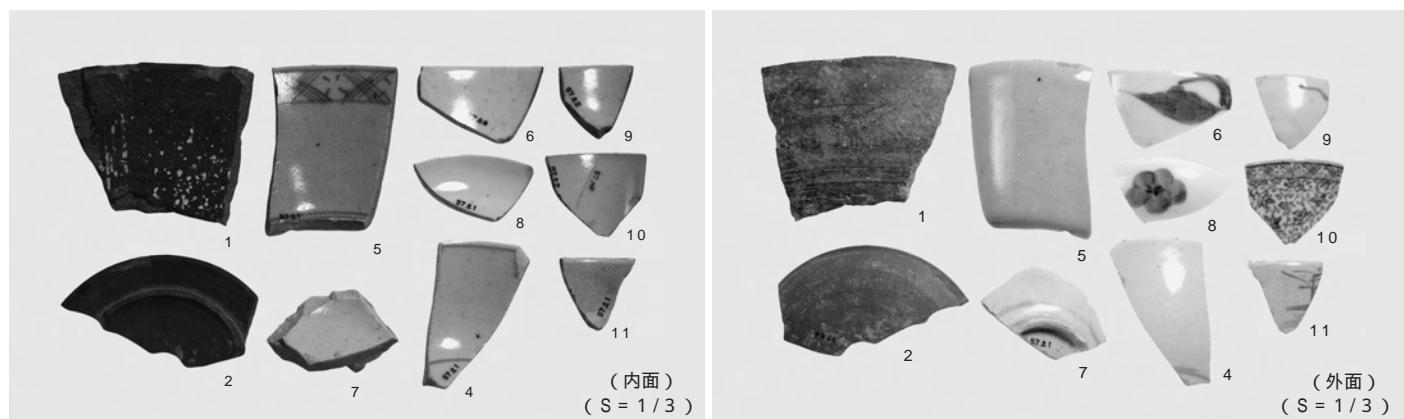
(S = 1/4)

図版5 中世・近世の陶磁器



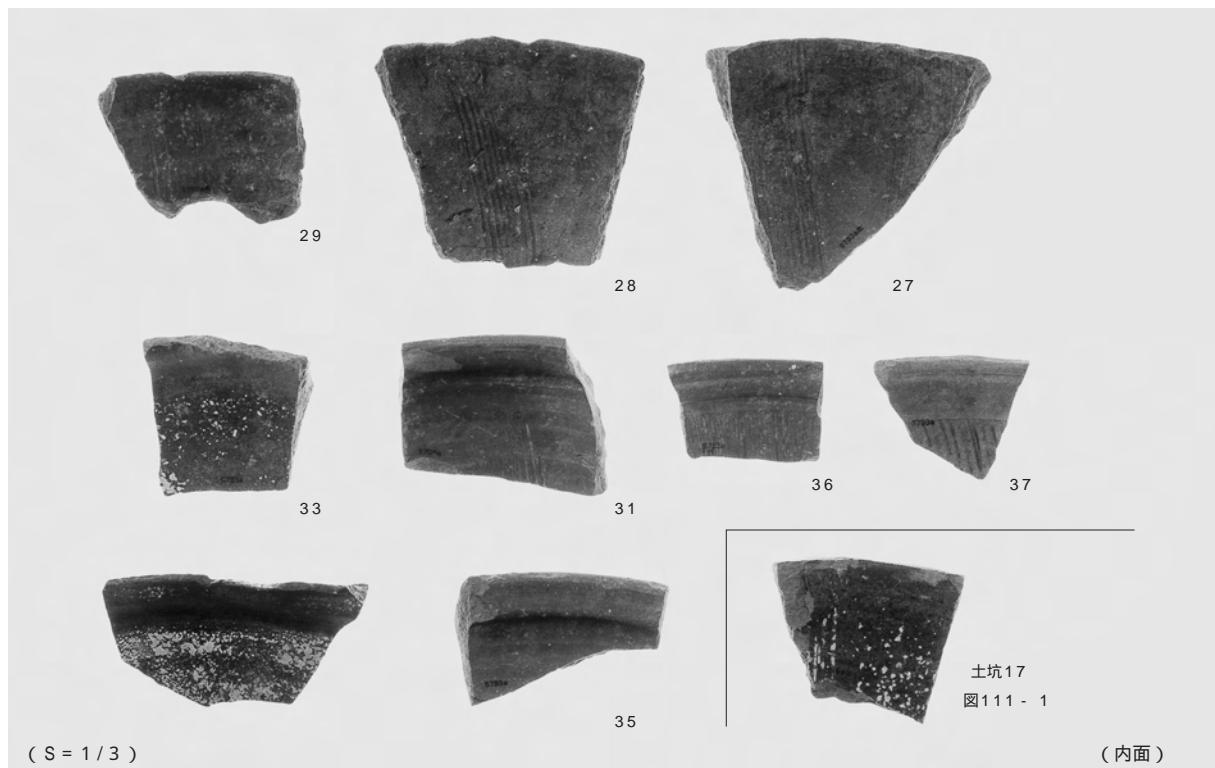
【中世～近世の陶磁器】溝23：図97・図98

番号なしは本文中未掲載

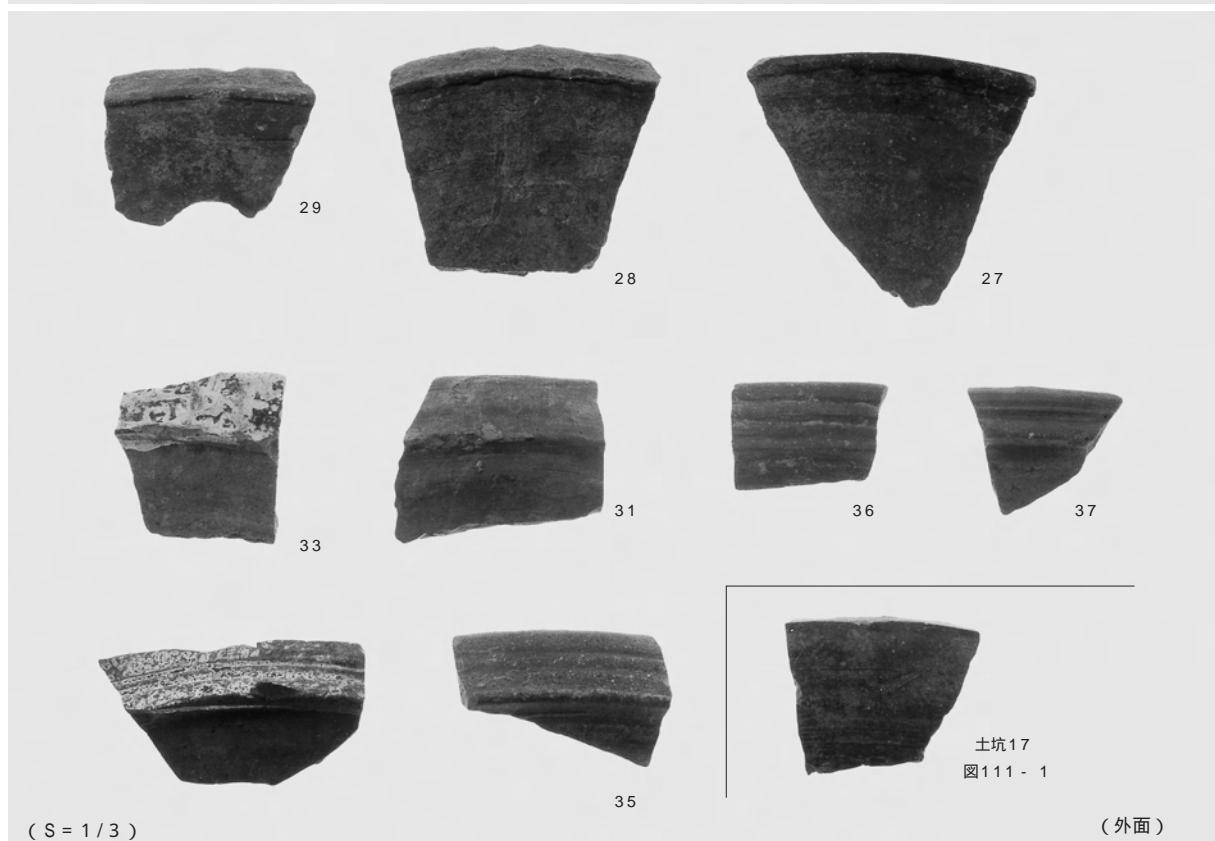


【近世の陶磁器】土坑10～13・15～17：図111

図版6 中世・近世の備前焼・瓦他



土坑17
図111-1



土坑17
図111-1

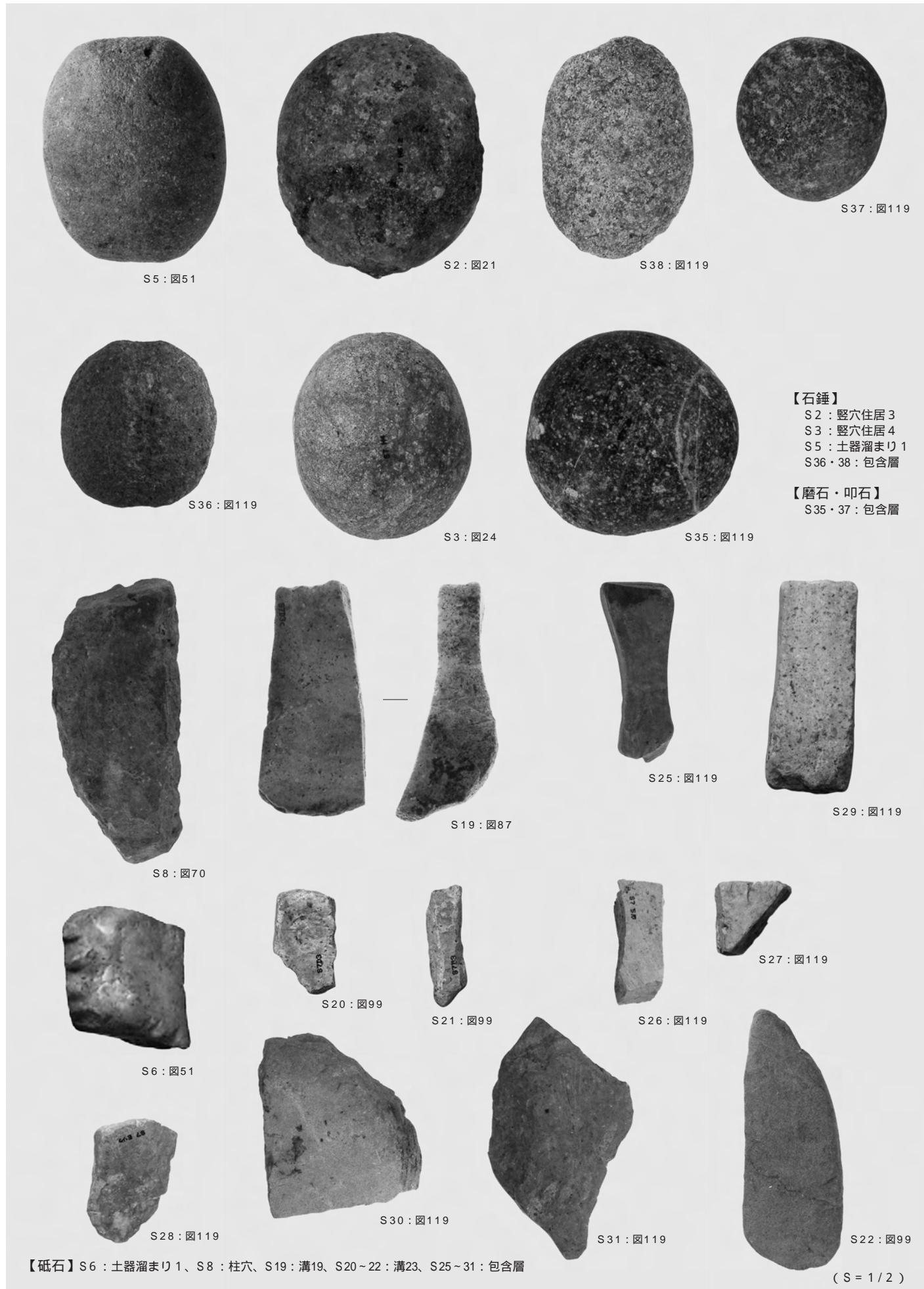
(S = 1 / 3)

【備前焼】溝23 : 図98

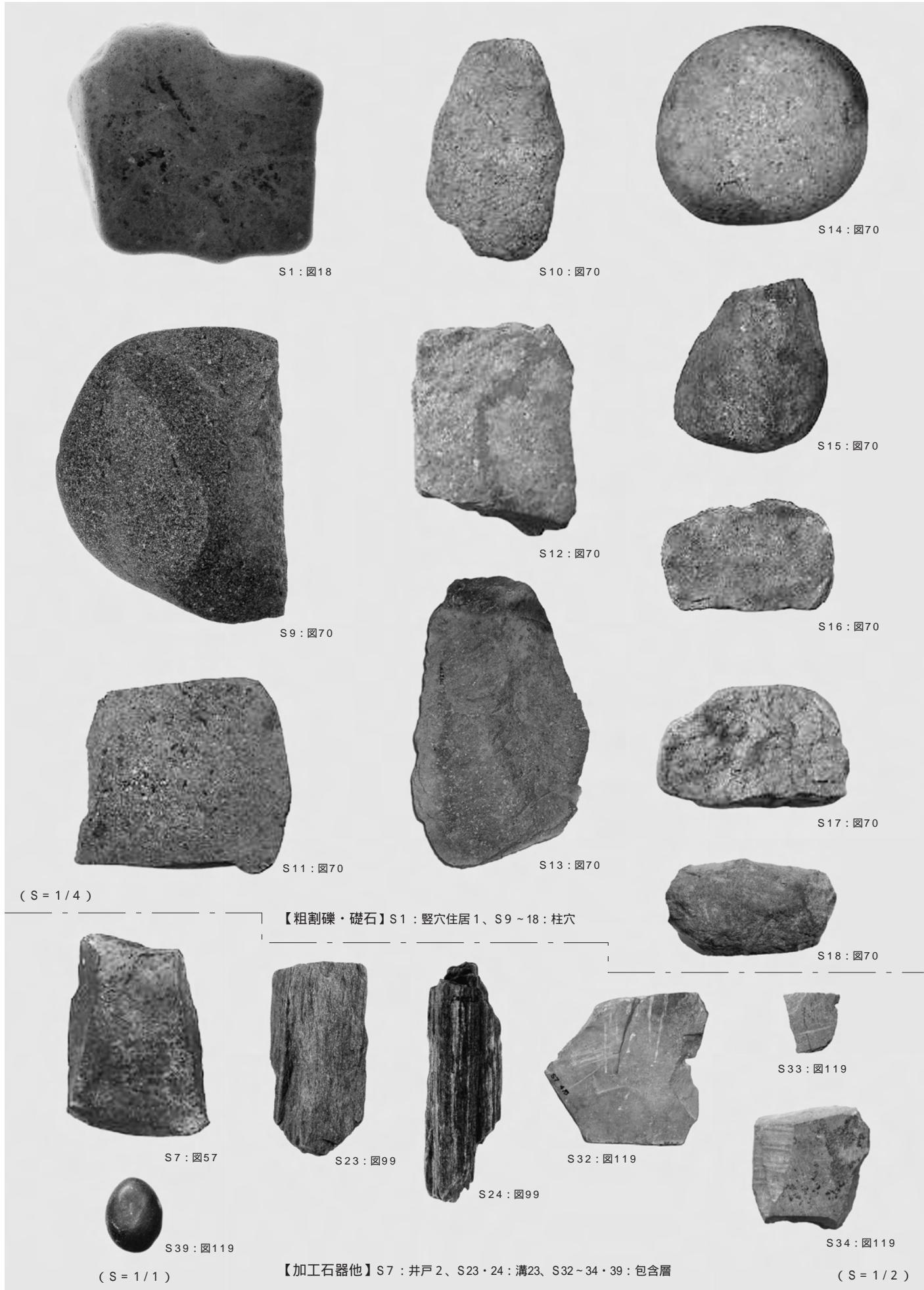
番号なしは本文中に未掲載



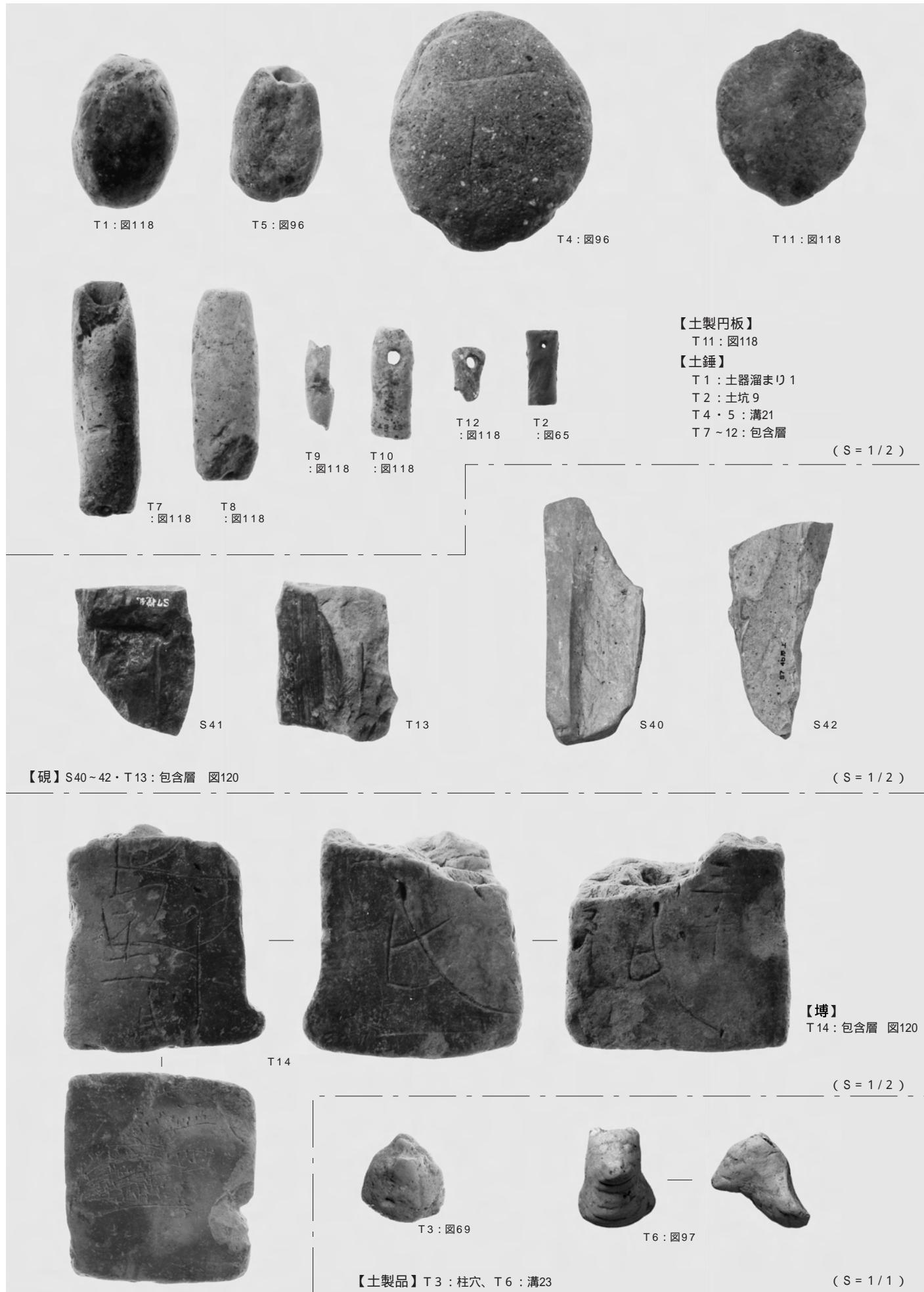
図版7 石器(1): 石錘・砥石他



図版8 石器(2): 粗割石・加工石器



図版9 石器(3)・土製品：土錘・硯他



図版10 木器 (1)：曲物他



W 4



側板綴じ部分（上半）



側板綴じ部分（下半）



W 4 - �edge 1



W 4 - edge 2

(S = 1 / 2)

【曲物】井戸 3 : 図62



W 1 : 図31



W 7 : 図91



W 8 : 図91



W 17 : 図108

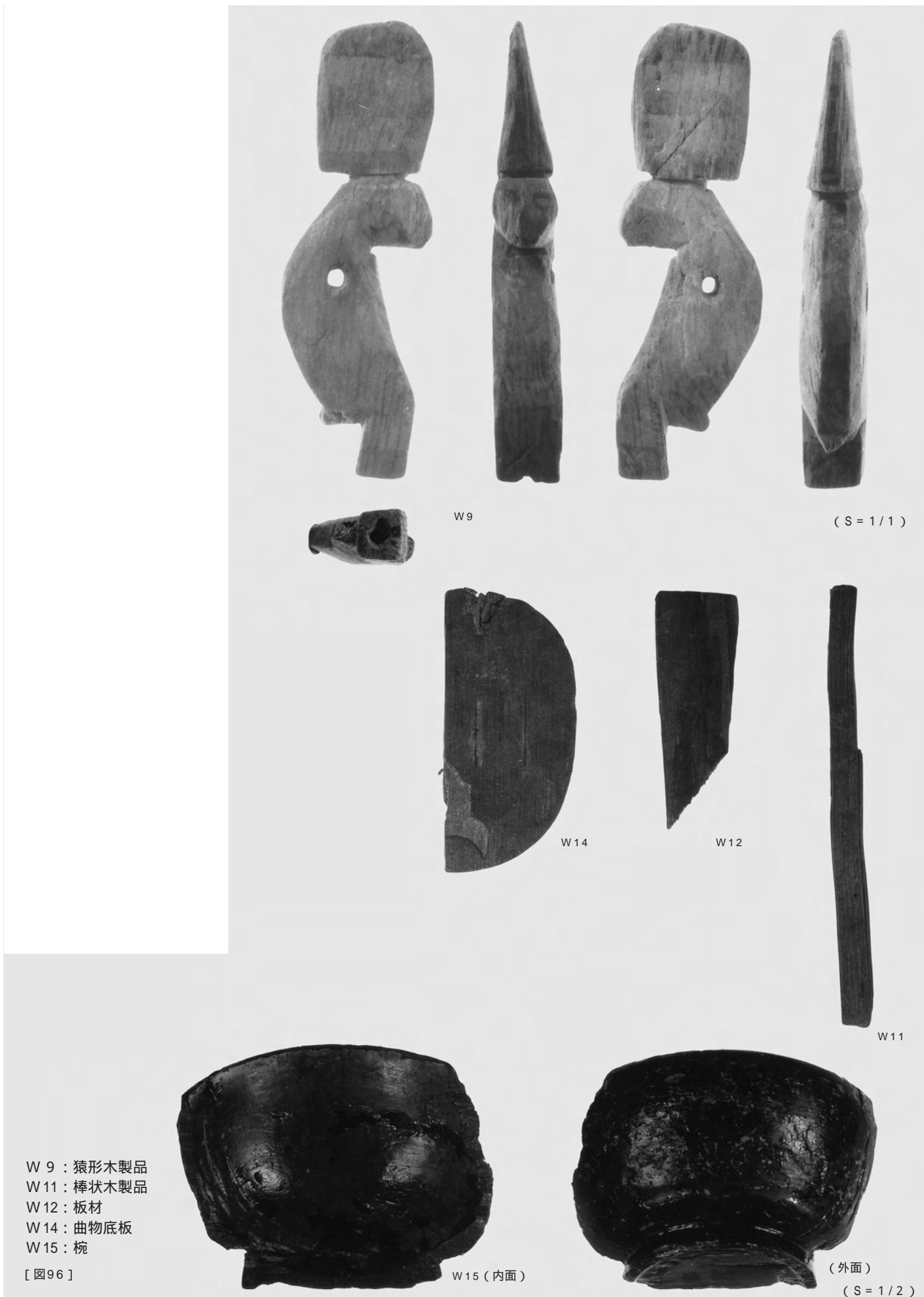
W 1 : 井戸 1

W 7・8 : 溝20

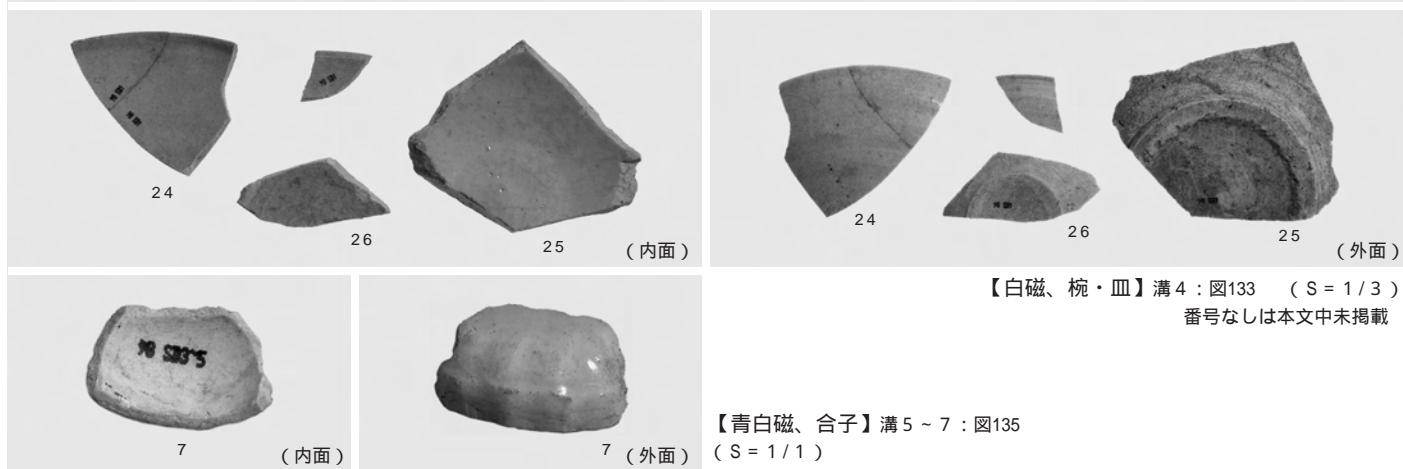
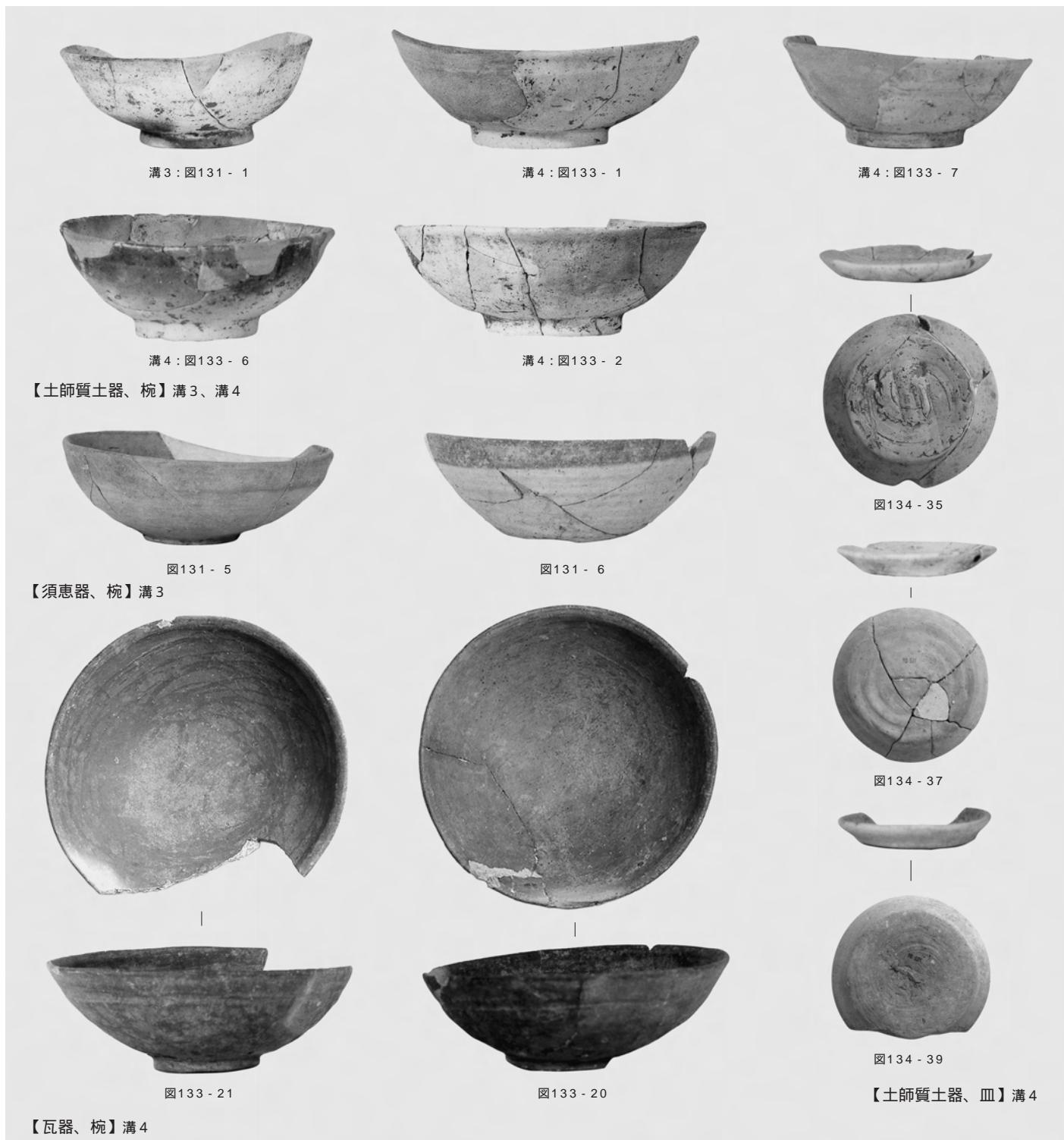
W 17 : 土坑12

(S = 1 / 2)

図版11 木器(2)溝21 : 猿形木製品他



図版12 古代末～中世の土器（1）・磁器



図版13 古代末～中世の土器（2）・土製品・石器



図134-40

【須恵器、鉢】溝4



図134-41



図134-42

【土師質土器、鍋】溝4

(S = 1 / 3)



T1:図126



T2:図126



T3:図134

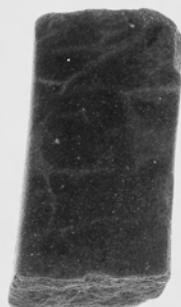


T4:図134



T5:図135

【土製支脚？】溝5～7



S1:図134



S2:図134

【砥石】溝4

(S = 1 / 2)